

荒砥上ノ坊遺跡 I

昭和57年度県営圃場整備事業荒砥北部
地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

縄文時代～古墳時代の調査

《本文・図版編》

1 9 9 5

群 馬 県 教 育 委 員 会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

荒砥上ノ坊遺跡 I

昭和57年度県営圃場整備事業荒砥北部
地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

縄文時代～古墳時代の調査

《本文・図版編》

1 9 9 5

群 馬 県 教 育 委 員 会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

前橋市の旧荒砥村では、県営荒砥南部圃場整備事業に続いて昭和56年度より一般国道50号線の北の地域を対象にした県営荒砥北部圃場整備事業が始まり、平成3年度まで行われました。圃場整備の対象となった地域は、県内でも有数の埋蔵文化財が分布しており、多くの埋蔵文化財が記録保存の発掘調査の対象となりました。

当事業団では、昭和56・57・58・59年度に対象となった事業地域の埋蔵文化財の発掘調査を行いました。諸般の事情により調査報告書の刊行が遅れていましたが、関係者の努力により先年度から荒砥北部圃場整備事業に伴い発掘調査された遺跡の報告書刊行のための整理作業を始めました。

既に、その成果として昭和56年度に調査した二之宮、荒口地区に所在する荒砥大日塚遺跡の調査報告書が、先年度刊行されました。今年度は、昭和57年度に調査した二之宮、荒子地区に所在する荒砥上ノ坊遺跡の整理作業に着手しました。荒砥上ノ坊遺跡は、縄文時代から中世までの複合集落遺跡で、しかも調査した面積は42,000㎡に及び、そこから出土した遺構・遺物は、膨大な量でした。そこで、整理作業は4年計画で行うこととし、まず第一年次の今年度は、縄文時代から古墳時代までを対象にして、作業を行いました。

この度、一年の年月をかけて整理作業が完了しましたので、ここに「荒砥上ノ坊遺跡Ⅰ」の調査報告書を上梓することになりました。本報告書には、二之宮、荒子地域の弥生時代末から古墳時代初頭にかけての農耕集落の始まり、古墳時代中・後期の居住域の占地の変化、農耕地拡大の様子が報告されています。

発掘調査から調査報告書刊行まで、群馬県農政部土地改良課、前橋土地改良事務所、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、地元関係者には、ご指導・ご協力を賜りました。これら関係者の皆様に衷心より感謝の意を表し、併せて本報告書が群馬県の歴史を解明するために大いに活用されることを願ひ序とします。

平成7年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長

小寺弘之

例 言

1. 本書は、県営ほ場整備事業荒砥北部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書「荒砥上ノ坊遺跡1」である。
荒砥上ノ坊遺跡は荒砥北部ほ場整備事業区域内の遺跡群のひとつで、昭和57年度に発掘調査された、縄文時代から中世の複合遺跡である。報告書は、時期別に全4分冊で構成した。本書第1分冊では、縄文時代から古墳時代の遺構・遺物を報告する。今後、第Ⅱ分冊・第Ⅲ分冊で歴史時代、第Ⅳ分冊で中世以降と時期不明の遺構・遺物等を順次報告する予定である。
なお、遺跡内に存在した「女壠」についても調査を実施したが、他の各調査地点とともに昭和59年3月に刊行された「県営ほ場整備事業荒砥南部・北部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 女壠」で既に報告している。
2. 荒砥上ノ坊遺跡は、群馬県前橋市二之宮町406・408・409番地他、荒子町750・758・1080番地他に所在する。遺跡名は、遺跡のある地域の旧村名である「荒砥(あらと)」に、発掘区内で最も広い小字である「上ノ坊(かみのほう)」を付した。発掘調査当時は、「うえのほう」と呼称していたが、その後の調査で「かみのほう」であることが判明したので、報告書刊行を契機に訂正したい。
3. 発掘調査は、群馬県農政部・前橋土地改良事務所・群馬県教育委員会の委託により、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。発掘調査の期間・体制は次の通りである。
期 間 昭和57年7月1日～昭和58年1月25日
(昭和57年度の発掘調査は昭和58年3月25日に終了した。)
事務担当 小林起久治、白石保三郎、松本浩一、細野雅男、近藤平志、関定 均、笠原秀樹、山本朋子、吉田有光、柳岡良宏(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団職員)
野島のふ江、吉田恵子、吉田笑子、並木綾子、今井もと子(同 補助員)
調査担当 鹿田雄三、小島敦子、斎藤利昭(同 調査研究員)
4. 発掘資料の整理および報告書の作成は、群馬県教育委員会の委託により、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。整理・報告書作成の期間・体制は次の通りである。
期 間 平成6年4月1日～平成7年3月31日
事 務 中村英一、近藤 功、蜂須 実、神保侑史、斎藤俊一、巾 隆之、関定 均、笠原秀樹、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏、高橋定義(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団職員)
大沢友治(同 非常勤嘱託員)、吉田恵子、松井美智代、杉山ひろみ、内山佳子、星野美智子、羽鳥京子、菅原淑子(同 補助員)
編 集 小島敦子(同 専門員)
本文執筆 小島敦子、能登 健(同 普及資料課長)
遺構写真 鹿田雄三、小島敦子、斎藤利昭
遺物写真 佐藤元彦(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団主任技師)
金属器保存処理 関邦一(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団主任技師)、土橋まり子(同 非常勤嘱託)
小村浩一、小沼恵子(同 整理補助員)
遺物および図面整理 平林照英、下境マサ江、光安文子、増田政子、羽鳥望東子、望月かおる、近藤信子、尾田正子、佐子昭子、中島千夏(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団整理補助員)

遺物観察 土器 原 雅信(縄文土器)、小島敦子

石器 岩崎泰一(縄文時代の石器)、小島敦子

遺構測量・図面トレース委託 株式会社測研

テフラ・植物珪酸体分析委託 株式会社古環境研究所

5. 遺物の石材同定については、飯島静雄氏(群馬県地質研究会会員)の手を煩わせた。
6. 発掘調査および本書の作成にあたり、下記の諸氏よりご助言、ご協力を得た。記して感謝の意を表したい。
(敬称略・五十音順)
青木一男、内田憲治、川村浩司、田嶋明人、田口一郎、滝沢規朗、前原豊、若狭徹、渡辺ますみ
7. 出土遺物は一括して群馬県埋蔵文化財センターおよび(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が保管している。

凡 例

1. 本調査の記録に用いたグリッドは5m四方で、北西交点をその呼称としている。グリッドはほ場整備工事に用いた杭を基準に設定した。グリッドの南北ラインは、1～10区が西へ1'4'16"、11区が西へ4'偏っている。なお、座標は第IX系にある。

2. 本書における遺構番号は、調査時に付されたものをそのまま使用している。このため欠番が生じている。

3. 遺構図中の北方位は座標北を示す。

4. 遺構図で使用したスクリーントーンは以下のとおりである。部分的に異なる場合があるが、その際はその旨凡例を示した。



6. 本書で使用した遺物の番号は、種類毎の通し番号であり、種類の略号は以下の通りである。平面図に付した番号は、遺物実測図に付した番号に対応している。

土器(略号無し) 石器 S 金属器 M

7. 遺構図・遺物図の縮尺は、原則として以下の通りである。縮尺の異なるものが併載される場合は、それぞれにスケールを付した。

遺構図 1:80

遺物図 1:3 (剝片石器に1:2、1:1のものがある。)

8. 遺物実測図中で使用したスクリーントーンは以下のとおりである。



9. 遺物写真図版の倍率は、土器・木器は原則として1/4、大型品は1/6に近づけるようにした。石器は、原則として礫は1/4、剝片石器は1/2、石鏃などの小型のものは1/1に近づけるようにした。また、部分的に特徴のある遺物については、近接写真を撮影・掲載した。

10. 本文は以下のような点に留意して記述した。

住居 位置は、その遺構が含まれるグリッドをすべて記載した。重複は、重複する遺構とその新旧関係を述べた。形状は、方形・長方形・隅丸方形・隅丸長方形にほぼ分類して記載した。規模は、遺構確認面での上場で計測した。なお、電付設住居では電の部分を含んでいない。面積は、床の面積と考え、住居の下場でプランメーターの3回平均値を計測した。方位は、北方向に最も近い壁の方向を計測した。床面は、傾斜や凹凸の有無、硬化面の残存状況を記述した。埋没土は、埋没土の全体的傾向や特徴的な埋没土について記述した。伊・竈は、それぞれの位置と規模を記載し、遺存状態を述べた。周溝・柱穴・貯蔵穴等の住居施設については、検出された位置・規模・遺存状態を記述した。遺物は、住居全体の遺物の出土状態と、特徴的な遺物について記述した。所見では、各住居の調査から考えられることがらがあれば記述した。所見は出土遺物・重複関係等から、遺構の時期を記載したが、表現は各時期不統一である。縄文時代は型式名、古墳時代中・後期は、坂口編年による西暦で表わした。弥生時代末から古墳時代にかけての遺構については、小形器台等の伴出を重視し、古墳時代初頭と表現した。このことについては第7章で詳述する。

土坑 住居に準じる。

目 次

序

例 言

凡 例

第1章 調査に至る経過 …………… 1

1. 県宮ほ場整備事業と発掘調査…………… 1
2. 遺跡分布調査と発掘区の確定…………… 3

第2章 遺跡の環境 …………… 6

1. 自然環境…………… 6
2. 歴史的環境…………… 9

第3章 発掘調査の方法と経過 ……………15

1. 発掘調査の方法……………15
2. 発掘調査の経過……………17

第4章 縄文時代の遺構と遺物 ……………19

1. 概要……………19
2. 1・2区の遺構……………19
3. 6区の遺構……………27

第5章 古墳時代初頭の遺構と遺物 ……………28

1. 概要……………28
2. 1・2区の遺構……………29
3. 4区の遺構……………83
4. 6区の遺構……………89
5. 9区の遺構……………94

第6章 古墳時代中・後期の遺構と遺物 ……97

1. 概要……………97
2. 1・2区の遺構……………99
3. 3区の遺構 ……………149
4. 5区の遺構 ……………153
5. 7区の遺構 ……………155
6. 8区の遺構 ……………156

第7章 調査の成果と課題 ……………163

1. 縄文時代前期の小形石棒について ……165
2. 古墳時代初頭の出土土器について ……169

報告書抄録

写真図版

続 刊 (予定)

荒砥上ノ坊遺跡II 歴史時代の調査(1)

荒砥上ノ坊遺跡III 歴史時代の調査(2)

荒砥上ノ坊遺跡IV 中世・その他の調査

挿 図 目 次

第 1 図	群馬県中央部の地勢と遺跡の位置	1	第 38 図	2 区33号住居遺物分布	48
第 2 図	県営ほ場整備事業荒砥北部地区と 昭和57年度工事区	2	第 39 図	2 区33号住居出土遺物(1)	49
第 3 図	発掘対象地区と遺跡分布	4	第 40 図	2 区33号住居出土遺物(2)	50
第 4 図	昭和57年度の埋蔵文化財発掘調査区	5	第 41 図	2 区33号住居出土遺物(3)	51
第 5 図	群馬県中央部の地形と荒砥上ノ坊遺跡	6	第 42 図	2 区33号住居出土遺物(4)	52
第 6 図	荒砥上ノ坊遺跡周辺の地形	8	第 43 図	2 区33号住居出土遺物(5)	53
第 7 図	縄文時代前期および 弥生時代～古墳時代の遺跡分布	10	第 44 図	2 区37号住居と出土遺物	54
第 8 図	古墳時代中・後期の遺跡分布	12	第 45 図	2 区48号住居と出土遺物	55
第 9 図	荒砥上ノ坊遺跡の発掘区	16	第 46 図	2 区49号・52号住居	56
第 10 図	遺跡の基本土層	17	第 47 図	2 区49号住居出土遺物	57
第 11 図	1 区72号住居と出土遺物(1)	20	第 48 図	2 区52号住居出土遺物	58
第 12 図	1 区72号住居出土遺物(2)	21	第 49 図	2 区55号住居出土遺物	59
第 13 図	1 区72号住居出土遺物(3)	22	第 50 図	2 区55号住居	60
第 14 図	2 区1号住居	23	第 51 図	2 区57号住居と出土遺物	61
第 15 図	2 区1号住居出土遺物(1)	24	第 52 図	2 区59号住居	62
第 16 図	2 区1号住居出土遺物(2)	25	第 53 図	2 区59号住居出土遺物	63
第 17 図	2 区1号住居出土遺物(3)	26	第 54 図	2 区60号住居	64
第 18 図	6 区16号住居と出土遺物	27	第 55 図	2 区60号住居出土遺物	65
第 19 図	古墳時代初頭の遺構分布	28	第 56 図	2 区64号住居と出土遺物	66
第 20 図	1 区41号住居	30	第 57 図	2 区65号住居	67
第 21 図	1 区41号住居出土遺物	31	第 58 図	2 区65号住居出土遺物	68
第 22 図	1 区43号住居	32	第 59 図	2 区67号住居	68
第 23 図	1 区43号住居出土遺物	33	第 60 図	2 区67号住居出土遺物	69
第 24 図	1 区50号住居と出土遺物(1)	35	第 61 図	2 区77号住居	70
第 25 図	1 区50号住居出土遺物(2)	36	第 62 図	2 区77号出土遺物	71
第 26 図	1 区16号・30号土坑と出土遺物	37	第 63 図	2 区83号住居と出土遺物	72
第 27 図	1 区60号住居と出土遺物	38	第 64 図	2 区84号住居と出土遺物	72
第 28 図	2 区7号住居出土遺物	39	第 65 図	2 区89号住居と出土遺物(1)	74
第 29 図	2 区7号住居	40	第 66 図	2 区89号住居出土遺物(2)	75
第 30 図	2 区4号住居	41	第 67 図	2 区89号住居出土遺物(3)	76
第 31 図	2 区4号住居出土遺物	42	第 68 図	2 区90号住居	77
第 32 図	2 区11号住居	43	第 69 図	2 区90号住居出土遺物	78
第 33 図	2 区11号住居出土遺物	44	第 70 図	2 区91号住居	79
第 34 図	2 区12号住居と出土遺物	45	第 71 図	2 区91号住居出土遺物	80
第 35 図	2 区19号住居と出土遺物	45	第 72 図	2 区26号土坑	80
第 36 図	2 区20号住居と出土遺物	46	第 73 図	2 区26号土坑出土遺物	81・82
第 37 図	2 区33号住居	47	第 74 図	2 区畠	81・82
			第 75 図	古墳時代初頭の遺構の位置	81・82
			第 76 図	4 区2号周溝墓	83

第77図	4区1号周溝墓と出土遺物	84	第119図	1区68号住居出土遺物(2)	126
第78図	4区3a号周溝墓出土遺物	85	第120図	1区70号住居	127
第79図	4区3号・4号・5号・6号周溝墓	86	第121図	1区70号住居出土遺物	128
第80図	4区3号・4号・5号・6号周溝墓断面	87	第122図	2区36号住居	128
第81図	4区4号・5号・6号周溝墓出土遺物	88	第123図	2区36号住居出土遺物(1)	129
第82図	6区2号住居	89	第124図	2区36号住居出土遺物(2)	130
第83図	6区2号住居出土遺物	90	第125図	2区50号住居	131
第84図	6区12号住居	90	第126図	2区50号住居出土遺物(1)	132
第85図	6区12号住居出土遺物	91	第127図	2区50号住居出土遺物(2)	133
第86図	6区14号住居	92	第128図	2区94号住居と出土遺物	134
第87図	6区14号住居出土遺物(1)	93	第129図	2区95号住居と出土遺物	135
第88図	6区14号住居出土遺物(2)	94	第130図	1区22号住居	136
第89図	9区畠	95・96	第131図	1区22号住居出土遺物	137
第90図	古墳時代中・後期の遺構分布	97	第132図	1区24号住居と出土遺物	138
第91図	1区42号住居遺物分布	99	第133図	1区26号住居	139
第92図	1区42号住居	100	第134図	1区26号住居出土遺物(1)	140
第93図	1区42号住居断面	101	第135図	1区26号住居出土遺物(2)	141
第94図	1区42号住居出土遺物(1)	102	第136図	2区85号住居と出土遺物	142
第95図	1区42号住居出土遺物(2)	103	第137図	2区102号住居	144
第96図	1区42号住居出土遺物(3)	104	第138図	2区102号住居出土遺物(1)	145
第97図	1区42号住居出土遺物(4)	105	第139図	2区102号住居出土遺物(2)	146
第98図	1区42号住居出土遺物(5)	106	第140図	1区10号住居	147
第99図	1区42号住居出土遺物(6)	107	第141図	2区32号住居	147
第100図	1区42号住居出土遺物(7)	108	第142図	2区73号住居と出土遺物	148
第101図	2区47号住居	109	第143図	3区9号住居と出土遺物	149
第102図	2区47号住居出土遺物	110	第144図	3区2号住居	150
第103図	2区109号住居出土遺物	111	第145図	3区2号住居断面	151
第104図	2区109号住居	112	第146図	3区2号住居出土遺物	152
第105図	2区68号土坑と出土遺物	112	第147図	3区4号住居と出土遺物	153
第106図	2区3号住居	113	第148図	5区7号住居	154
第107図	2区3号住居出土遺物	114	第149図	5区7号住居出土遺物	155
第108図	1区65号住居と出土遺物(1)	115	第150図	7区10号住居と出土遺物	156
第109図	1区65号住居出土遺物(2)	116	第151図	8区7号住居	157
第110図	1区65号住居出土遺物(3)	117	第152図	8区7号住居出土遺物(1)	158
第111図	1区8号住居と出土遺物	118	第153図	8区7号住居出土遺物(2)	159
第112図	1区48号住居	119	第154図	8区11号住居と出土遺物	160
第113図	1区48号住居出土遺物(1)	120	第155図	古墳時代中・後期の遺構の位置	161・162
第114図	1区48号住居出土遺物(2)	121	第156図	群馬県出土の縄文時代前期の石棒	166
第115図	1区66号住居	122	第157図	群馬県出土の縄文時代前期の石冠状石製品	168
第116図	1区66号住居出土遺物	123	第158図	荒砥上ノ坊遺跡出土の 赤井戸式壘形土器の型式組列	171
第117図	1区68号住居	124	第159図	荒砥上ノ坊遺跡出土の外糸系土器(1)	174
第118図	1区68号住居出土遺物(1)	125			

第160図 荒砥上ノ坊遺跡出土の外來系土器(2)……175
 第161図 荒砥上ノ坊遺跡の古墳時代初期の

土器変化………178

表 目 次

第1表 県営ほ場整備荒砥北部地区における 昭和57年度埋蔵文化財発掘調査一覧表……… 3	第4表 群馬県出土の縄文時代前期の石棒一覧 ……165
第2表 荒砥上ノ坊遺跡の発掘区と検出遺構………18	第5表 群馬県出土の石冠状石製品一覧 ……165
第3表 荒砥上ノ坊遺跡の古墳時代の遺構 ……163	第6表 荒砥上ノ坊遺跡の古墳時代初期土器の 共存関係 ……172

写真図版目次

PL 1. 1. 調査前の1区(東から) 2. 発掘区周辺の谷地(南から) 3. 調査前の2区(南から) 4. 調査前の4区の台地(東から) 5. 調査中の1区と南東の台地(北西から)	PL 7. 1. 1区41号住居全景(南東から) 2. 同 土層断面A-A'(南東から) 3. 同 貯蔵穴土層断面B-B'(南西から) 4. 同 土層断面A-A'(南から) 5. 同 遺物出土状態(東から)
PL 2 1. 1区72号住居全景(西から) 2. 同 遺物出土状態全景(西から)	PL 8. 1. 1区41号住居遺物出土状態(87) 2. 同 遺物出土状態(北から) 3. 同 出土遺物 4. 1区調査状況(北から) 5. 1区43号住居北西隅の浅間C軽石
PL 3. 1. 1区72号住居土層断面A-A'(南から) 2. 同 遺物出土状態(1) 3. 同 遺物出土状態(S 8) 4. 同 遺物出土状態(2) 5. 同 遺物出土状態(S 1) 6. 同 遺物出土状態(S 2) 7. 同 遺物出土状態(S 5) 8. 同 遺物出土状態(S 4・6)	PL 9. 1. 1区43号住居全景(東から) 2. 同 遺物出土状態(南から) 3. 同 出土遺物
PL 4. 1. 1区72号住居出土遺物	PL 10. 1. 1区50号・51号住居全景(西から) 2. 同 遺物出土状態(南東から) 3. 同 遺物出土状態(西から) 4. 同 遺物出土状態(南から) 5. 同 貯蔵穴遺物出土状態
PL 5. 1. 2区1号住居全景(北西から) 2. 同 遺物出土状態(4) 3. 同 遺物出土状態(3・S 9) 4. 2区1号住居から1区を望む。 5. 同 出土遺物	PL 11. 1. 1区50号住居出土遺物 2. 1区60号住居全景(西から) 3. 同 土層断面A-A'(南から) 4. 同 遺物出土状態(西から)
PL 6. 1. 2区1号住居出土遺物 2. 6区16号住居全景(東から) 3. 同 遺物出土状態(82) 4. 同 出土遺物 5. 6区1号土坑全景(北から)	PL 12. 1. 1区16号・30号土坑全景(南から) 2. 同 出土遺物 3. 1区59号土坑土層断面(南から)
	PL 13. 1. 2区4号住居全景(北西から)

2. 同 遺物出土状態(145・東から)
 3. 同 遺物出土状態(150・南から)
 4. 同 遺物出土状態(152)
 5. 同 遺物出土状態(146・西から)
- P L 14. 1. 2区4号住居出土遺物
 2. 2区7号住居全景(南西から)
 3. 同 土層断面A-A'(南西から)
 4. 同 土層断面A-A'(南から)
 5. 同 出土遺物
- P L 15. 1. 2区11号住居全景(北東から)
 2. 同 土層断面A-A'(南西から)
 3. 同 土層断面A-A'(南東から)
 4. 同 遺物出土状態(西から)
 5. 2区11号・19号住居出土遺物
 6. 2区19号住居全景(東から)
- P L 16. 1. 2区12号住居全景(西から)
 2. 2区20号住居全景(北東から)
 3. 同 遺物出土状態(169・東から)
 4. 同 出土遺物
 5. 2区37号住居全景(東から)
 6. 同 遺物出土状態
 7. 同 出土遺物
- P L 17. 1. 2区33号住居全景(南西から)
 2. 同 遺物出土状態(南から)
 3. 同 遺物出土状態
 4. 同 遺物出土状態
 5. 同 遺物出土状態
- P L 18. 1. 2区33号住居遺物出土状態
 2. 同 遺物出土状態
 3. 同 遺物出土状態
 4. 同 遺物出土状態
 5. 同 遺物出土状態
 6. 同 遺物出土状態(171)
 7. 同 遺物出土状態(195)
 8. 同 遺物出土状態
- P L 19. 1. 2区33号住居出土遺物
- P L 20. 1. 2区33号住居出土遺物
- P L 21. 1. 2区48号住居全景(東から)
 2. 2区49号住居全景(南西から)
 3. 同 遺物出土状態
 4. 同 遺物出土状態(南西から)
 5. 2区49号・52号住居出土遺物
6. 2区52号住居全景(南西から)
 7. 同 遺物出土状態(西から)
- P L 22. 1. 2区55号住居全景(北西から)
 2. 同 土層断面A-A'(北西から)
 3. 同 土層断面A-A'(北東から)
 4. 同 遺物出土状態(東から)
 5. 同 出土遺物
- P L 23. 1. 2区57号住居全景(北西から)
 2. 同 土層断面A-A'(北西から)
 3. 同 土層断面A-A'(西から)
 4. 2区60号住居全景(北東から)
 5. 同 土層断面A-A'(北西から)
 6. 同 土層断面A-A'(西から)
 7. 同 遺物出土状態
 8. 2区57号・60号住居出土遺物
- P L 24. 1. 2区59号住居全景(北西から)
 2. 同 遺物出土状態(西から)
 3. 同 遺物出土状態(251・北東から)
 4. 同 遺物出土状態(252・253・西から)
 5. 同 遺物出土状態(252)
 6. 同 出土遺物
- P L 25. 1. 2区64号住居全景(北西から)
 2. 2区65号住居全景(北から)
 3. 同 出土遺物
 4. 2区67号住居全景(東から)
 5. 同 遺物出土状態(286・南から)
 6. 同 出土遺物
- P L 26. 1. 2区77号住居全景(西から)
 2. 同 遺物出土状態
 3. 同 遺物出土状態(299)
 4. 同 出土遺物
 5. 2区83号住居遺物出土状態(300)
 6. 同 全景(西から)
 7. 2区84号住居全景(西から)
- P L 27. 1. 2区89号住居全景(西から)
 2. 同 土層断面A-A'(南西から)
 3. 同 遺物出土状態
 4. 同 遺物出土状態(北から)
 5. 同 遺物出土状態
- P L 28. 1. 2区89号住居遺物出土状態(869)
 2. 同 遺物出土状態(873・東から)
 3. 同 遺物出土状態(870・874・南西から)

4. 同 遺物出土状態(東から)
5. 同 出土遺物
- P L 29. 1. 2区90号住居全景(北東から)
2. 同 出土遺物
3. 2区91号住居全景(南西から)
4. 同 遺物出土状態(南西から)
5. 同 遺物出土状態(309)
6. 同 遺物出土状態(306)
7. 同 遺物出土状態(305)
8. 同 遺物出土状態(304)
- P L 30. 1. 2区91号住居遺物出土状態(312)
2. 同 出土遺物
3. 2区26号土坑土層断面A-A'(西から)
4. 2区Hj-12~15G畠跡全景(北西から)
5. 同 土層断面A-A'(東から)
6. 同 土層断面A-A'(南東から)
- P L 31. 1. 4区北半周溝墓群全景(北西から)
2. 同 南東半周溝墓群全景(東から)
- P L 32. 1. 4区1号周溝墓全景(北西から)
2. 同 主体部全景(東から)
3. 同 遺物出土状態(316)
4. 同 土層断面B-B'(南から)
5. 同 出土遺物
6. 4区2号周溝墓全景(北西から)
7. 同 土層断面D-D'(南東から)
8. 4区3号周溝墓全景(北西から)
- P L 33. 1. 4区3a号周溝墓土層断面A-A'
2. 4区3b・4号周溝墓土層断面C-C'
3. 同 出土遺物
4. 同 遺物出土状態
5. 4区5号・4号周溝墓土層断面E-E'
6. 同 出土遺物
7. 4区6号・4号周溝墓土層断面F-F'
8. 同 出土遺物
- P L 34. 1. 4区5号周溝墓全景(北から)
2. 4区3号・5号周溝墓全景(北から)
3. 4区5号周溝墓土層断面D-D'
4. 同 土層断面G-G'(東から)
5. 同 遺物出土状態(321・324・北東から)
6. 同 遺物出土状態(323)
7. 同 出土遺物
- P L 35. 1. 6区14号住居全景(南東から)
2. 同 全景(南東から)
3. 同 遺物出土状態(339・336・344・341)
4. 同 出土遺物
- P L 36. 1. 6区2号住居全景(北東から)
2. 同 出土遺物
3. 6区12号住居全景(西から)
4. 同 土層断面A-A'(西から)
5. 同 出土遺物
6. 9区畠跡サク溝(東から)
7. 同 検出状況(北から)
8. 同 全景(北から)
- P L 37. 1. 1区42号住居全景(東から)
2. 同 遺物出土状態(北から)
3. 同 遺物出土状態(北から)
4. 同 遺物出土状態(南西から)
5. 同 遺物出土状態(南西から)
- P L 38. 1. 1区42号住居出土遺物
- P L 39. 1. 1区42号住居出土遺物
- P L 40. 1. 1区42号住居出土遺物
2. 2区47号住居全景(東から)
3. 同 土層断面A-A'(南から)
4. 同 出土遺物
- P L 41. 1. 2区109号住居全景(東から)
2. 同 遺物出土状態(746・749・751)
3. 同 出土遺物
4. 2区68号土坑全景(東から)
5. 2区68号土坑・2区3号住居出土遺物
6. 2区3号住居全景(南東から)
- P L 42. 1. 1区65号住居全景(西から)
2. 同 竈周辺遺物出土状態(南から)
- P L 43. 1. 1区65号住居竈全景(西から)
2. 同 遺物出土状態(575・584・586)
3. 同 遺物出土状態(585・西から)
4. 同 出土遺物
- P L 44. 1. 1区8号住居全景(西から)
2. 同 出土遺物
3. 1区48号住居全景(西から)
4. 同 竈全景(西から)
5. 同 出土遺物
- P L 45. 1. 1区66号住居全景(西から)
2. 1区66号・67号・73号住居重複状況
3. 1区66号住居出土遺物

4. 1区68号住居全景(南西から)
- P L 46. 1. 1区68号住居遺物出土状態
2. 同 遺物出土状態(東から)
3. 1区68号・70号住居出土遺物
- P L 47. 1. 1区70号住居全景(西から)
2. 同 遺物出土状態(840・北西から)
3. 2区36号住居全景(西から)
4. 同 遺物出土状態(637・638・西から)
5. 同 出土遺物
- P L 48. 1. 2区50号住居全景(南西から)
2. 同 土層断面A-A'(南西から)
3. 同 竈全景(南西から)
4. 同 遺物出土状態(西から)
5. 2区調査風景(東から・左方は女堀)
- P L 49. 1. 2区50号住居出土遺物
2. 2区94号住居全景(南西から)
3. 同 竈全景(南西から)
- P L 50. 1. 2区95号住居全景(西から)
2. 同 土層断面A-A'(西から)
3. 1区22号住居全景(西から)
4. 同 土層断面A-A'(西から)
5. 2区95号・1区22号住居出土遺物
6. 1区22号住居竈全景(西から)
7. 1区24号住居全景(西から)
- P L 51. 1. 1区24号住居出土遺物
2. 1区26号住居全景(南西から)
3. 同 竈全景(南西から)
4. 1区26号・2区85号住居出土遺物
5. 2区85号住居全景(南西から)
6. 同 竈全景(南西から)
- P L 52. 1. 2区102号住居全景(西から)
2. 同 竈全景(西から)
3. 同 竈遺物出土状態(720・西から)
4. 同 遺物出土状態(732・南西から)
5. 同 竈遺物出土状態(728・731・西から)
- P L 53. 1. 2区102号住居遺物出土状態(719)
2. 同 遺物出土状態
3. 同 出土遺物
- P L 54. 1. 1区10号住居全景(西から)
2. 同 竈全景(西から)
3. 2区32号住居全景(南西から)
4. 2区73号住居全景(西から)
5. 同 土層断面A-A'(西から)
6. 2区73号住居・3区9号住居出土遺物
7. 3区9号住居全景(西から)
8. 同 竈全景(西から)
- P L 55. 1. 3区2号住居全景(南から)
2. 同 竈全景(南から)
3. 3区1号・2号住居土層断面A-A'
4. 3区2号住居貯蔵穴(南から)
5. 同 出土遺物
- P L 56. 1. 3区4号住居全景(西から)
2. 同 竈全景(西から)
3. 同 遺物出土状態(382・南西から)
4. 5区7号住居全景(西から)
5. 同 竈全景(西から)
6. 3区4号住居・5区7号住居出土遺物
- P L 57. 1. 7区10号住居全景(西から)
2. 同 出土遺物
3. 8区11号住居全景(西から)
4. 同 竈全景(西から)
5. 8区7号住居全景(南西から)
- P L 58. 1. 8区7号住居竈全景(南西から)
2. 同 遺物出土状態(南西から)
3. 同 遺物出土状態(406・409・411)
4. 同 出土遺物

第1章 調査に至る経過

1. 県営ほ場整備事業と発掘調査

荒砥上ノ坊遺跡は、県営ほ場整備事業荒砥北部地区に伴って発掘調査された遺跡群の1つである。

この県営ほ場整備事業は昭和49年から56年にかけて荒砥南部地区、昭和56年から平成3年にかけて荒砥北部地区で実施され、工事対象面積は南部900ha、北部821haに及んだ。この大規模なほ場整備事業が実施されたのは、群馬県前橋市の東端部の旧荒砥村域で、現在の笈井町・今井町・二之宮町・飯土井町・東大室町・荒子町・下大屋町・泉沢町にまたがる広大な地域である。

この地域は、赤城山南麓の丘陵性台地の末端にあたり、山麓を流下する荒砥川と神沢川にほぼ挟まれた地域である。これらの主要河川以外にも山麓を開

析する帯状沖積地が発達していて、起伏に富んだ地形である。このような地域の中で実施するほ場整備事業では、土砂の切り盛りが著しく、多量の土砂を移動する工事計画となった。

しかし、この地域には、群馬県内でも有数の大形前方後円墳が集中する大室古墳群をはじめとして、原始・古代の多くの遺跡が分布する。したがって、ほ場整備事業が開始されるにあたっては、埋蔵文化財の保護が大きな課題となった。そこで、群馬県農政部と群馬県教育委員会は、埋蔵文化財の保護を前提にした協議をおこない、工事によって破壊される切り土部分と道水路部分について、事前に埋蔵文化財の発掘調査を実施することが確認されたのである。

発掘調査は、昭和49年から52年まで県教育委員会



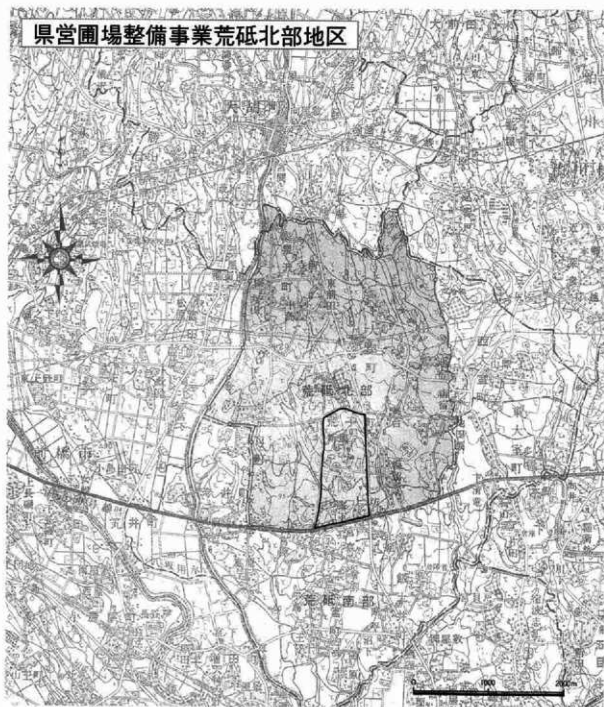
第1図 群馬県中央部の地勢と遺跡の位置

第1章 調査に至る経過

の直営で実施されたが、昭和53年7月の(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団の設立に伴って、昭和53年度から(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査を受託することとなった。(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団は、県農政部の委託を受けて、荒砥南部地区のほか整備事業が終了する昭和59年度までの7年間

に13遺跡を調査した。また、県教育委員会の委託事業として昭和57年から平成4年度までに9冊の発掘調査報告書を刊行した。

継続して(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団は、昭和56年度から荒砥北部地区の発掘調査を受託し、昭和59年度まで調査を実施した。相前後して昭和59年



第2図 県営圃場整備事業荒砥北部地区と昭和57年度工事区

度以降の発掘調査は、県教育委員会と荒砥北部遺跡群調査会に引き継がれ、平成3年度で終了した。荒砥北部地区の報告書についても、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が県教育委員会の委託を受けて、平成5年度から出土品の整理事業を実施し、刊行している。本年度はその第2年次にあたる。

荒砥上ノ坊遺跡を調査した昭和57年度は、県営ほ場整備事業荒砥北部地区の六工区が、事業対象地域であった。(第2図) 次項に述べるように、この年には荒砥上ノ坊遺跡のほかに、荒砥中屋敷遺跡・荒砥下押切遺跡・荒砥舞台西遺跡・荒砥新屋遺跡が発掘調査されている。本書で報告する荒砥上ノ坊遺跡は、縄文時代から中世までの複合集落遺跡である。切り土部分・道水路部分あわせて42000㎡を調査し、調査区は11区にわたった。

2. 遺跡分布調査と発掘区の確定

昭和57年度の発掘調査を開始するにあたり、工事計画との調整から発掘調査面積を確定するため、昭和57年5・6月に遺跡分布調査を実施した。分布調査は、調査担当者3名が、工事対象地域全域を踏査し、地表面に落ちている遺物分布の密度・遺物の種類と時期を記録した。調査では、家屋等のほ場整備除外地と沖積地部分を除いて、遺物分布の密度を濃密・普通・希薄・無し の4段階に分類した。(第3図)

この遺物の分布域を遺構のあるところと仮定し、土砂の切り盛りや道水路の新設等の工事計画との比較検討をおこなった。発掘調査区の確定については6月以降、ほ場整備工事を行う前橋土地改良事務所と協議を重ねた。道水路部分には極力試掘トレンチ

を設定し、遺構のある部分は広げるように努めた。また切り土部分は設計高と遺構確認面との高さを比較し、設計高が低く、遺構確認面を壊すことが予想される地点を発掘調査区とした。(第4図) しかし、農作物の収穫時期と関連して調査期間が限られていたことや、分布調査によって発掘調査対象地が増加したため、特に道水路部分の調査が完全に実施できなかったことは否めない。

発掘調査は、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が委託を受けて実施したが、この遺跡分布調査の結果、調査対象地域が増加するに伴って、事業団の体制だけでは終了できない状況が生まれた。そこで、一部の調査区を県教育委員会が担当して調査を実施した。調査分担と経過は下記の通りである。

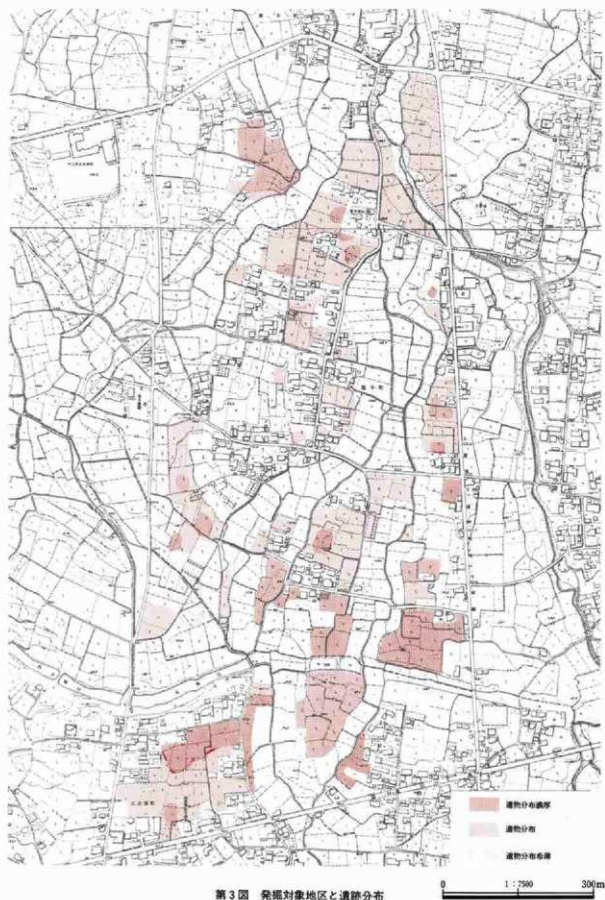
昭和57年度ほ場整備事業が実施された六工区は、南からH・I・J・Kの4区の各工事に分かれている。H工区の区域には、最も大きな遺構である女堀があって調査期間が必要であるので、最初に着手することにし、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が荒砥上ノ坊遺跡として発掘調査を実施した。また、隣接するI工区の区域は、H工区区域内の遺構の連続があることから、H工区区域と同一の遺跡として、荒砥上ノ坊遺跡に含めた。

次に、工事工程の関連からK工区区域の調査を(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団の体制で実施し、西側の台地を下押切II遺跡、中央の台地を中屋敷II遺跡として調査した。東側の台地は県教育委員会が舞台西遺跡として調査した。

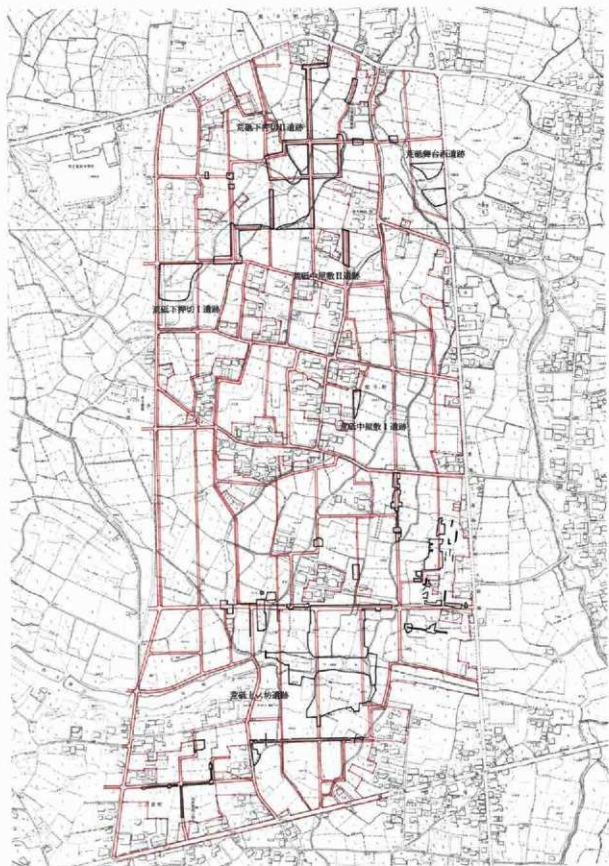
残るJ工事は、台地の切り土部分2カ所(下押切I遺跡・中屋敷I遺跡)を県教育委員会が担当して調査した。

第1表 県営ほ場整備荒砥北部地区における昭和57年度埋蔵文化財発掘調査一覧表

工事	遺跡名	発掘分担	発掘担当者	面積	期間
H・I・K	荒砥上ノ坊遺跡 荒砥下押切遺跡 (低地部)	群馬県埋蔵文化財調査事業団	廣田雄三・小島敦子・斉藤利昭・岩崎泰一	42,000㎡	昭和57年7月1日～昭和58年3月25日
J	荒砥中屋敷I遺跡 荒砥下押切I遺跡	群馬県教育委員会	神保信史・秋池武・西田健彦・松田 猛	6,900㎡	昭和57年12月6日～昭和57年12月23日
K	荒砥舞台西遺跡				
K	荒砥中屋敷II遺跡 荒砥下押切II遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団	相原建史・中沢 悟・菊池 実	9,245㎡	昭和57年12月13日～昭和58年2月18日



第3図 発掘対象地区と遺跡分布



第4図 昭和57年度の埋蔵文化財発掘調査区

第2章 遺跡の環境

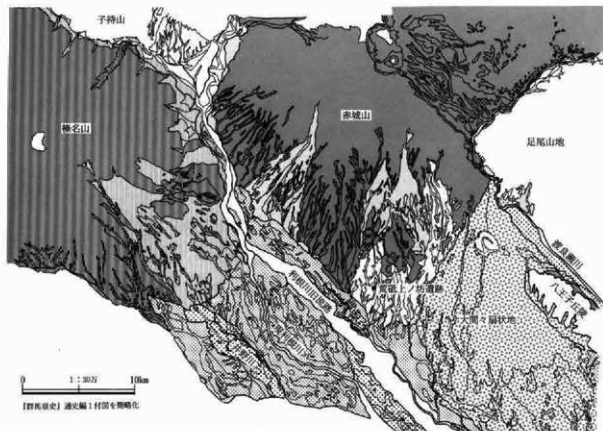
1. 自然環境

群馬県中央部の地形 荒砥上ノ坊遺跡がある地域は、県北の山地と南東部の平野部が接する群馬県中央部に位置する。この県央地域には、西に榛名火山、北に赤城火山があり、その裾野には台地が広がっている。その台地上は小河川によって谷地が開析され、平野部は自然堤防・後背湿地が発達している。このように県央部は様々な地形が入り組んでおり、遺跡の立地にも大きく関係していると考えられる。

群馬県では、各地の発掘調査から、火山災害が人間生活に大きな影響を与えたことが判明している。周辺の火山のうち、県西部の榛名山や浅間山は完新世にも大噴火し、その時のテフラが山麓の家を壊し、遠く県央部の田畠を埋没させた。しかし、人々は火

山災害に立ち向かい、田畠を復旧して、生活を継続させてきたのである。

一方、県央部にある赤城山は40～50万年前から活動を始めた複合成層火山であるが、3.1～3.2万年前に大規模な軽石噴火をおこして中央火口丘群を形成した後は、現在まで目立った火山活動はなく、火山山麓扇状地の形成期となっている。山麓には、山体を流下する小河川による開析作用によって、帯状に谷地が刻まれている。また、赤城白川・荒砥川・神沢川・粕川等の小河川沿いには、土砂が堆積して扇状地が形成されている。これらの河川作用は数万年の間繰り返されてきた。扇状地はさらに開析されて、複雑な起伏の多い地形となっている。この間安定した時期には、関東ローム層が堆積して、台地地形を形成している。



第5図 群馬県中央部の地形と荒砥上ノ坊遺跡

このように群馬県は、広大な関東平野の北西部を囲むように山地が取り巻いている。そこから流下する河川は、谷地や微高地が複雑に分布する地形を形成してきた。そして、これらの山地にはいくつかの火山が分布し、群馬県の地形環境や、人間生活に大きな影響を与えてきたのである。また、平野部に広がる丘陵や台地は、旧石器時代以来、人間生活の舞台となり、谷地や微高地が展開する低地には農耕適地が広がっている。古代、「毛の国」として栄えた基盤は、そこにあったのであろう。

遺跡周辺の地形 荒砥上ノ坊遺跡は、赤城山の南麓末端に近い、標高95～103mの緩斜面にある。遺跡周辺の地形は後期更新世前半に形成された山麓扇状地で、山麓に谷頭をもつ細長い低地とその支谷が樹枝状に入り込んだ様相を呈している。(第6図)

これらの低地は、内部に河川が流れていて比較的長いものと、主要河川がなく小規模なものに分けられる。遺跡周辺に流れる主な河川は、西から荒砥川・宮川・江竜川・神沢川・桂川等があるが、このうち荒砥川・神沢川・桂川は標高200m以上に水源をもつ流域長の長い河川である。一方、宮川・江竜川は、他の河川の無い低地の多くと同様で、標高150m以下に水源をもつ、比較的流域長の短い小河川である。

荒砥川は、標高920m前後の山頂近くに水源をもち、流長23km余りの主要河川である。谷の幅も赤城山末端部で600mで、荒砥地域最大の沖積地を伴っている。神沢川は標高400m付近に水源をもち、西大室町地内で東神沢川をあわせる小河川である。現在の流路は、一部で台地を横断する地点もあり、ある時点で流路変化があったものとも考えられる河川である。合流地点の北側や東側は、現在広い水田地帯となっているが、ここは微高地を開田したところと考えられる。本来の沖積地はもう少し狭かったと推定される。また、西大室町中遺跡で浅間Bテフラ下水田が検出されていることから、合流点北部の微高地上には埋没低地が存在する可能性が高い。桂川は、標高250m付近に水源をもち、粕川に入る小河川であ

る。東大室町を流れる地点では、付随する沖積地は幅160mほどあり、周辺の低地の中では比較的広い沖積地となっている。

以上の主要河川の他の多くの低地は、宮川・江竜川の低地を含め、樹枝状に広がった支谷の小流水を集めながら、主要三河川につながっている。これらの低地の原形は地下水の湧出および侵食によって形成されたと考えられる。湧水地点の谷頭は、山麓の等高線に沿ってほぼ並んでおり、標高150m・130m・115m・105m・95mの概ね5列の谷頭ラインが看取できる。このラインの間隔は直線距離で800mほどである。

これらの低地に広がる沖積地は小規模で、それぞれは幅も狭く短い。しかし、合流地点では複数の沖積地が合わさって、幅が広がっている。宮川の中流域では幅が200m近くになる地点があり、主要河川に伴う沖積地と変わらない広さの沖積地が広がっている。

また、荒砥地域には溜池・溜井が多く分布し、農業用水源として使われている。溜池は谷頭に堤をつくり湧水を堰止めた池であるが、いつ頃造られたものかは不明である。溜井は、人工的に掘った井戸で、これに水路を付設して農業用水として利用したものである。宮川下流域の荒砥天の宮遺跡では、古墳時代後期以降の溜井が検出されている。

このように、荒砥上ノ坊遺跡の周辺は山麓扇状地であり、欠水性の地域であるが、樹枝状に発達した低地をうまく利用し、農耕集落を営む風土が生まれたものと考えられる。

荒砥上ノ坊遺跡の地形 荒砥上ノ坊遺跡は、このような樹枝状の低地に区切られた低台地のひとつに立地する。標高105m前後に谷頭のある2本の低地が遺跡の南側で合流する。発掘調査では、この合流点の北にある中央の低台地と、その東西の台地上に発掘区を設定した。東西の沖積地の一部もトレンチ調査をおこなった。

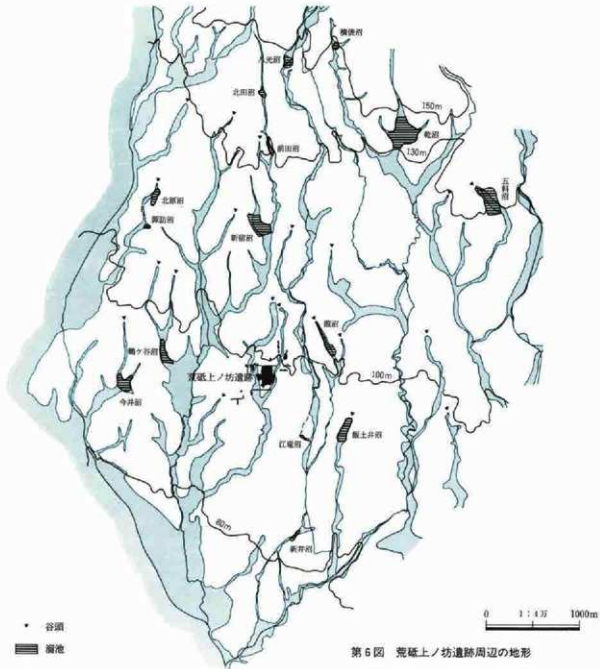
この中央の低台地は、ローム層の堆積が無く、黄灰褐色の砂壤土が厚く堆積している。この土層上面

第2章 遺跡の環境

で、縄文時代前期諸磯期の住居が確認できるので、それ以前に堆積した地層と考えられる。この土層については、発掘調査時にテフラ等の検出による層位の確認および地層の分布について調査をしていないので、関東ローム層との関係等は不明である。東側台地の一部も、この砂壤土の堆積が見られた。西側台地は関東ローム層の堆積する台地である。

赤城山南麓地域では、河川作用による砂壤土性の

微高地がローム台地に付随して形成されている地点が多い。これらの微高地は赤城山の山体崩落土砂が山麓端部に再堆積することにより形成されたと考えられている。周辺でも類似する土層堆積があり、飯土井二木松遺跡では砂壤土下で縄文時代早期の遺物包含層が検出されている。これらの調査から、この砂壤土・砂層の堆積は縄文時代早期から前期の中で漸次進行したと考えられている。



東西両側の低地には、地表下60～80cmのところ
に浅間Bテフラが、地表下2mのところ
に浅間C軽石がほぼ水平堆積していた。
浅間C軽石の下層には一部で灰白色砂の堆積があるが、それ以降は、安定した沖積土が堆積する環境であったと考えられる。

2. 歴史的環境

荒砥地域の風土と遺跡分布 荒砥上ノ坊遺跡がある地域は、前橋市街地の東方に広がる農村地帯である。前述したように、ここは赤城火山の山麓扇状地で、湧水と地表面の侵食によって刻まれた帯状低地が発達しており、水量は少ないながらも小河川が流下している。この地域には農耕集落を成立させる基盤が整っていたと考えられる。

しかし、本地域は火山性の地形特有の保水性の乏しい地質で、流下する小河川の水量も少なく大量の水確保は困難である。農耕地拡大が不可欠であった古墳時代中期以降の農耕社会発展過程にあつては、人々の生活は、用水確保の歴史であった。そして、農業用水確保の歴史は近年まで続き、大正用水や群馬用水の掘削によって農村として安定した発展を遂げたのである。

本項では、西・南は荒砥川、東は神沢川・桂川で区切られた地域（旧村名から荒砥地域と呼ぶ）について、遺跡の分布を概観しておきたい。資料は、主に前橋市域の発掘調査成果であるので、遺跡のすべてを網羅しているものではないが、傾向は把握できるものとする。なお、本書ではその対象である縄文時代～古墳時代の様相を述べ、奈良時代以降は続刊に譲りたい。

遺跡分布図（第7・8図）のスクリーン・トーン部分は、実体視鏡による空中写真判読によって「本来の沖積地」を示したもので、地形改変を受けない原地形を推定したものである。白抜き部分は、微高地・台地を含んでいる。「本来の沖積地」は水田可耕地であり、条件が整えば、白抜きにした微高地部分にも水田耕作地が及ぶ可能性がある。河川は、現河道を示した。

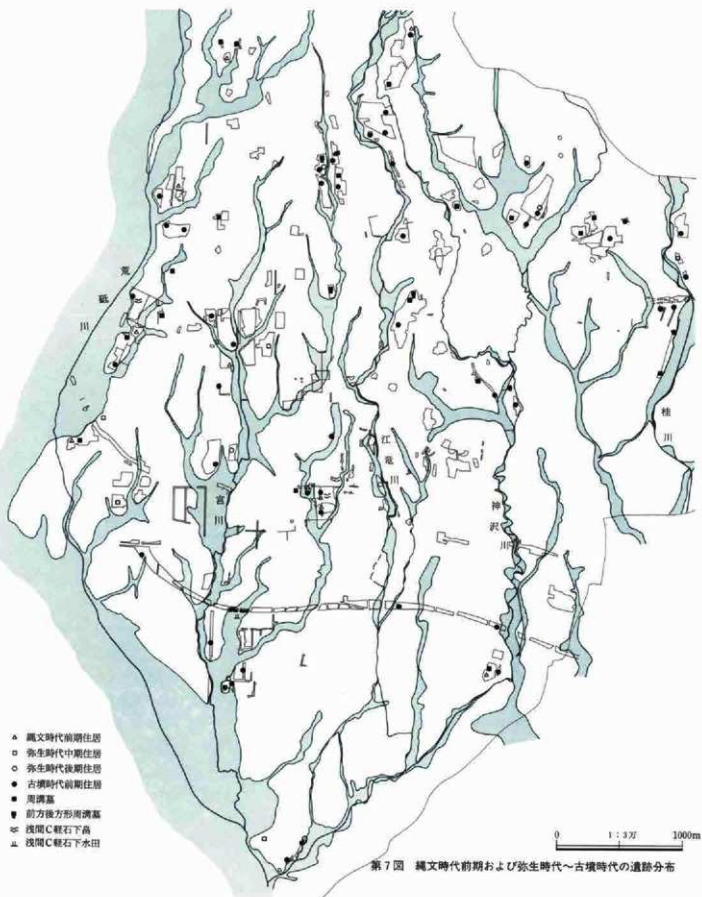
縄文時代前期の遺跡分布 群馬県では標高250～400mの丘陵性の地形のところに縄文時代前期の遺跡が卓越する傾向がある。標高80～150mの荒砥地域は、この丘陵性地形の末端部分にあたり、中期の遺跡が多くなる台地地形も広がっている。したがって縄文時代前期とともに、比較的大きな中期・後期の集落も調査されている。

荒砥上ノ坊遺跡周辺の前期の遺跡は、荒砥宮田遺跡・荒砥北原遺跡・柳久保遺跡群下鶴谷遺跡・荒砥上諏訪遺跡・荒砥二之堰遺跡・熊の穴遺跡等で調査されている。これらの遺跡で前期の住居や土坑を検出しているが、検出された住居は1～数軒である。このような傾向は、前期遺跡が卓越する高標高の地域と同様である。

荒砥宮田遺跡、荒砥北原遺跡、下鶴谷遺跡は荒砥川や江竜川の支流の台地縁辺に、荒砥二之堰遺跡は神沢川右岸の台地縁辺に、熊の穴遺跡・荒砥上諏訪遺跡・荒砥上ノ坊遺跡は谷頭周辺に立地している。

弥生時代の遺跡分布 弥生時代の遺跡の調査例はあまり多くない。特に前期の遺跡は今のところ検出されていない。弥生時代前期の遺跡の立地は、先行する縄文時代晩期後半の遺跡立地に制約される狭い谷地沿いの台地縁辺の場合と、広い沖積地に望みながらも現在の水田下に埋もれている場合がある。荒砥地域では縄文時代晩期後半の遺跡は未検出であり、後者の場合も含めて、今後の調査成果に期待したい。

弥生時代中期の遺跡は、竜見町式期の住居が5遺跡で検出されている。荒砥地域を含めた赤城南麓地域の、この時期の住居では在地の竜見町式土器とともに南東北系土器が出土することが注目されている。頭無遺跡は、江竜川と東側支流の合流点に近い一支谷の谷頭周辺に立地する。この遺跡は台地中央を発掘調査したが弥生時代中期の住居が3軒、東縁辺に偏って分布していた。荒砥三木堂遺跡は荒砥川の支谷で3本の谷頭が合流する低地を望む台地縁辺に、住居が5軒検出されている。荒口前原遺跡では荒砥川の左岸台地縁辺にあり、1軒の住居が調査さ



れている。荒砥島原遺跡は宮川を望む東側台地の縁辺に2軒が検出された。この遺跡の北方では、宮川の沖積地と比較的大きな2つの支谷の合流点がある。荒砥前原遺跡では荒砥川左岸台地の北縁で南東北系の土器を出土する住居が3軒検出されている。

弥生時代後期の遺跡は、公表されている資料ではあまり多くない。今のところ荒砥前原遺跡・鶴谷遺跡群B区・梅木遺跡・北山遺跡・久保皆戸遺跡の5遺跡で住居が確認されていると報告がある。

荒砥前原遺跡では中期の住居と異なり、台地南縁の神沢川右岸に、十王台式土器を出土する住居が3軒検出されている。鶴谷遺跡群B区では宮川とその支流と小さな谷瀬からの低地が合流する地点に張り出した狭い台地上に2軒の住居が検出された。出土遺物が公表されていないので時期は不明である。北山遺跡では神沢川右岸の台地縁辺に15軒の住居が検出されたと報告されている。梅木遺跡でも桂川右岸の台地縁辺に2軒の住居が報告されている。久保皆戸遺跡では桂川右岸の台地縁辺の2つの発掘区で住居が1軒ずつ検出されたと報告されている。

しかし、本地域の弥生土器は、古墳時代初頭まで残存する例が多い。検出された住居も住居形態等や新しい様相を示すものがあり、出土遺物の分析を通して、遺構の時期の再検討が必要な部分も残されている。また、発掘調査区には限界がありすべての地表面を調査しているわけではない。特に荒砥地域の発掘調査はほ場整備事業が中心であり、ある特定の地形面の調査に偏っている可能性も否定できない。弥生時代の遺跡の少なさは今後慎重に検討し、決論づける必要がある。

古墳時代前期の遺跡分布 荒砥地域の古墳時代前期の遺跡は、弥生時代の後期に比べると激増し、発掘調査されただけでも57遺跡を数える。これらの遺跡は、出土土器の様相から3～4時期に分けられると考えるが、分布図では一括して図示した。荒砥上ノ坊遺跡や荒砥中屋敷遺跡等、庄内式後半期に併行すると考えられる北陸系の土器が出土した遺跡も確認

されているが、時期的な分布の偏在性の確認は今後の課題である。

また、遺跡の立地をみると、谷頭周辺や小河川の縁辺に立地する遺跡と、小河川とその支流の合流点に面した台地縁辺に立地する遺跡がある。遺構が検出された遺跡のうち、谷頭周辺は3遺跡、小河川縁辺は10遺跡、合流点が44遺跡で、合流点が圧倒的に多い。

各遺跡の遺構は住居や周溝墓で、それぞれの水系沿いに500～1000mほどの間隔をおいて検出されている。住居と周溝墓がともに検出されている遺跡では、墓は住居群から明確に分離して、住居群に隣接して検出されている。特に前方後方形の周溝墓が江竜川中流域の阿久山遺跡に1基、宮川の最も長い支谷の上流域の東原B遺跡・中山A遺跡・堤東遺跡に合計6基が集中している。一方、荒砥地域周辺では前期の大形古墳が確認されていない。神沢川と荒砥川の合流点の東方3kmに存在したといわれている華蔵寺裏山古墳(前方後方墳・墳長推定40m)が最も至近の前期古墳である。

この時期の生産域が検出された遺跡は今のところわずかである。二ノ宮千足遺跡で水田が、荒砥上ノ坊遺跡・荒砥諏訪西遺跡・荒砥宮川遺跡で畠が検出された。いずれも浅間C軽石で埋没していた。

古墳時代中・後期の遺跡分布 古墳時代中・後期の遺跡は、前期の遺跡に継続しているものが多く、遺跡の分布は重なっている。遺跡が立地する地点はほとんど変化はないが、各地点での遺構の分布はやや台地内部に変化する傾向がある。

また中・後期になると、前期に遺跡のなかった地点に遺跡が分布するようになる。荒砥天之宮遺跡では、溜井掘削によって農業用水を得た古墳時代中期からの集落遺跡が調査されている。この「新開集落」は、耕地拡大を背景として考えられている。

また荒砥地域には、古墳時代中期の環濠居館とされる遺構が3基検出されている。江竜川右岸の微高地にある荒砥荒子遺跡、荒砥川の一支谷の右岸台

地縁辺に検出された丸山遺跡、桂川右岸の台地縁辺の櫛木遺跡である。いずれも小形のものであるが、県内で調査されたもののうち5世紀にはいる環濠居館は、今のところ本地域に集中している。

さらに、西大室丸山遺跡で、5世紀からの祭祀遺構が火山性泥流丘上に検出されている。この遺跡は、周辺の産泰神社や石山観音と同様の地形が残っていることから、赤城神の依代としての巨石信仰へつながると考えられている。

荒砥地域の古墳の分布は、群馬県の中でも多く、450基を超える。図には発掘された古墳の他に「上毛古墳総覧」掲載の古墳も合わせて図示した。古墳の分布の特色は、5世紀前半の古墳が未確認であること、江竜川をほぼ境に西側より東側に多くの古墳が築かれていること等があげられる。

5世紀前半の古墳は、周辺には伊勢崎市御富士山古墳・赤堀茶臼山古墳等があるが、本地域では4世紀の古墳と同様に未確認である。5世紀後半の前方後円墳では、全長74.5mの今井神社古墳と、42mの舞台1号墳が確認されている。舞台西3号墳(22m)も出土遺物から5世紀後半の可能性がある。この時期には小円墳が各所に築かれ、初期群集墳の形成が開始される。二之宮町荒砥宮川遺跡・下増田町荒砥宮原遺跡・泉沢町新山遺跡・西大室町七ツ石古墳群・上綱引遺跡等で1～数基の小円墳が調査されている。この小円墳群の分布に顕著な偏在性は今のところ見られない。

6世紀になると、多くの古墳が確認・調査されているが、その分布は偏在性をみせるようになる。特に前方後円墳は12基確認されているが、これらは東大室町の五料沼の低地周辺に集中する一群と、現在の乾沼周辺から江竜川中流域の台地上に集中する一群の二地点に分布が偏る。荒砥川左岸に荒口権現山古墳・宮川左岸に荒砥村286号墳があるが、不確実な面もあり、本稿の資料からは除外した。

大室の古墳群は首長墓と考えられる大形の3基の古墳と小形の2基の帆立貝式の古墳が、谷頰の西縁に並んでいる。首長墓は墳長93.7mの前二子古墳・

111.1mの中二子古墳・85.0mの後二子古墳で、県内でも屈指の大形古墳である。その北側の谷頭周辺に小二子古墳(36m)・内堀M-1号墳(35.2m)がある。これらは上綱引遺跡の墳墓群を含め、大室古墳群を形成している。

一方、乾沼西縁には大稲荷古墳(44m)・大稲荷2号墳(48m)、熊の穴を谷頭とする低地の右岸台地に水口山3号墳(帆立貝式・推定38m)、現西神沢川右岸に伊勢山古墳(67m)・大黒塚古墳(46m)、江竜川中流域右岸に阿久山古墳(44m)がまとめて分布している。これらの一群からやや離れて神沢川の支谷の南側に荒砥天神23号墳(24m)がある。これらの方後円墳は、それぞれ複数の低地をまたいで分布しており、各台地ごとに大稲荷古墳群・水口山古墳群・伊勢山古墳群・明神山古墳群・阿久山古墳群・荒砥天神古墳群が形成されている。

これらの古墳群には、5世紀後半から形成が開始されるものや、6・7世紀を通じて古墳が築造されるもの、7世紀から古墳が作られるもの等、バラエティーがあり、地域支配の一側面を表わしているものと考えられる。古墳群は、前方後円墳の分布が希薄な江竜川以西の地域にも形成されるが、やはり分布の密度は少ない。その中で今井神社古墳周辺には、22基を数える円墳からなる今井神社古墳群が形成されている。

荒砥地域の6世紀以降の古墳のありかたは、江竜川以東に偏在していることに特徴があるように思われる。この地域は、地形的には、火山性の泥流丘が多く残る地域であり、地表面の起伏は西半分より著しい。古墳分布の偏在性を、後世の削平の進捗状況の差と考えるか、地域成長の差あるいは土地利用の差と考えるかは、さらに今後の検討が必要である。それには生産域や居住域を含めた分析や、西方の荒砥川右岸地域や東方の赤砥地域との関連も視野に入れる必要があろう。

参考文献

- 二之宮遺跡緊急発掘調査概報（茨城県南部土地改良事業に伴う第2次調査） 1976 群馬県教委・総研理文
- 茨城上川久保遺跡 昭和50・51年度県営開墾整備事業茨城南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 1982 群馬県教委・総研理文
- 茨城前原遺跡・赤石城址 昭和51年度県営開墾整備事業茨城南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 1985 群馬県教委・総研理文
- 茨城東原遺跡 昭和53年度県営開墾整備事業茨城南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 1979 総研理文
- 茨城息原遺跡 昭和55年度県営開墾整備事業茨城南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 1984 総研理文
- 茨城二之宮遺跡 昭和55年度県営開墾整備事業茨城南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 1984 総研理文
- 茨城天ノ宮遺跡 昭和55年度県営開墾整備事業茨城南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 1988 群馬県教委・総研理文
- 茨城洗馬遺跡・瓦葺宮西遺跡 昭和55年度県営開墾整備事業茨城南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 1989 群馬県教委・総研理文
- 茨城北三木堂遺跡Ⅰ 昭和56年度県営開墾整備事業茨城南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 1991 群馬県教委・総研理文
- 茨城北三木堂遺跡Ⅱ 昭和56年度県営開墾整備事業茨城南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 1994 群馬県教委・総研理文
- 昭和56年度県営開墾整備事業茨城北部地区埋蔵文化財発掘調査概報 茨城大日塚遺跡 1982 総研理文
- 昭和58年度事業概要県営開墾整備事業茨城北部地区埋蔵文化財発掘調査 瓦葺瓦子遺跡・瓦葺瓦田遺跡・瓦葺田宮遺跡・瓦葺田宮遺跡 1984 群馬県教委
- 昭和58年度茨城北部遺跡群発掘調査概報 1984 群馬県教委
- 昭和59年度事業概要県営開墾整備事業茨城北部地区埋蔵文化財発掘調査 試掘・泉沢谷津遺跡・茨城上高原遺跡 1985 総研理文
- 昭和59年度茨城北部遺跡群発掘調査概報 1984 群馬県教委
- 昭和60年度茨城北部遺跡群発掘調査概報 1986 群馬県教委・調査会
- 上原宮・内原・谷津 昭和60年度茨城北部遺跡群発掘調査報告 1986 群馬県教委
- 昭和61年度茨城北部遺跡群発掘調査概報 1986 調査会・群馬県教委
- 丸山・北原 昭和61年度茨城北部遺跡群発掘調査報告 1986 調査会・群馬県教委
- 昭和62年度茨城北部遺跡群発掘調査概報 1988 調査会・群馬県教委
- 丸山・北田下・中郷・村主・中山丘 昭和62年度茨城北部遺跡群発掘調査報告 1988 群馬県教委
- 阿陀野井土道上・伊勢山・大道・山王・明神山 昭和63年度茨城北部遺跡群発掘調査報告 1989 群馬県教委
- 下郷Ⅰ・天神 平成元年度茨城北部遺跡群発掘調査報告 1991 群馬県教委
- 舞台・西大宮丸山 平成2年度茨城北部遺跡群発掘調査報告 1990 群馬県教委
- 富士山Ⅰ遺跡Ⅰ号古墳 平成3年度茨城北部遺跡群発掘調査報告 1992 群馬県教委
- 昭和57年度発掘概報 県営開墾整備事業茨城北部地区埋蔵文化財発掘調査 1983 総研理文
- 集土井・二本松遺跡 下江田遺跡 一般国道17号線（上式道路）改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1991 建設省・群馬県教委・総研理文
- 二之宮東原遺跡 一般国道17号線（上式道路）改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1994 建設省・群馬県教委・総研理文
- 集土井中央遺跡 一般国道17号線（上式道路）改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1991 建設省・群馬県教委・総研理文
- 二之宮千足遺跡 一般国道17号線（上式道路）改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1992 建設省・群馬県教委・総研理文
- 都久保遺跡群Ⅰ 茨城市埋蔵文化財発掘調査 1985 茨城市埋蔵文化財発掘調査課
- 都久保遺跡群Ⅱ 山武考古学研究所 1986 茨城市埋蔵文化財発掘調査課
- 都久保遺跡群Ⅲ 茨城市埋蔵文化財発掘調査課 1987 茨城市埋蔵文化財発掘調査課
- 都久保遺跡群Ⅳ 茨城市埋蔵文化財発掘調査課 1988 茨城市埋蔵文化財発掘調査課
- 都久保遺跡群Ⅴ 茨城市埋蔵文化財発掘調査課 1990 茨城市埋蔵文化財発掘調査課
- 都久保遺跡群Ⅵ 茨城市埋蔵文化財発掘調査課 1991 茨城市埋蔵文化財発掘調査課
- 都久保遺跡群Ⅶ 茨城市埋蔵文化財発掘調査課 1992 茨城市埋蔵文化財発掘調査課
- 横俣遺跡群Ⅰ 茨城市埋蔵文化財発掘調査課 1993 茨城市埋蔵文化財発掘調査課
- 横俣遺跡群Ⅱ 茨城市埋蔵文化財発掘調査課 1988 茨城市埋蔵文化財発掘調査課
- 横俣遺跡群Ⅲ 茨城市埋蔵文化財発掘調査課 1989 茨城市埋蔵文化財発掘調査課
- 横俣遺跡群Ⅳ 茨城市埋蔵文化財発掘調査課 1990 茨城市埋蔵文化財発掘調査課
- 横俣遺跡群Ⅴ 茨城市埋蔵文化財発掘調査課 1991 茨城市埋蔵文化財発掘調査課
- 横俣遺跡群Ⅵ 茨城市埋蔵文化財発掘調査課 1992 茨城市埋蔵文化財発掘調査課
- 内原遺跡群 茨城市埋蔵文化財発掘調査課 1993 茨城市埋蔵文化財発掘調査課
- 内原遺跡群Ⅱ 茨城市埋蔵文化財発掘調査課 1989 茨城市埋蔵文化財発掘調査課
- 内原遺跡群Ⅲ 茨城市埋蔵文化財発掘調査課 1990 茨城市埋蔵文化財発掘調査課
- 内原遺跡群Ⅳ 茨城市埋蔵文化財発掘調査課 1991 茨城市埋蔵文化財発掘調査課
- 内原遺跡群Ⅴ 茨城市埋蔵文化財発掘調査課 1993 茨城市埋蔵文化財発掘調査課
- 富田遺跡群・西大宮遺跡群・清原南部遺跡群 土地改良事業実施地区内埋蔵文化財発掘調査概報 1980 茨城市教委
- 西大宮遺跡群Ⅰ 土地改良事業実施地区内埋蔵文化財発掘調査概報 1981 茨城市教委
- 富田遺跡群・西大宮遺跡群 土地改良事業実施地区内埋蔵文化財発掘調査概報 1983 茨城市教委
- 西大宮遺跡群 土地改良事業実施地区内埋蔵文化財発掘調査概報 1983 茨城市教委
- 富田遺跡群 土地改良事業実施地区内埋蔵文化財発掘調査概報 1984 茨城市教委
- 富田遺跡群 土地改良事業実施地区内埋蔵文化財発掘調査概報 1985 茨城市教委
- 一般国道50号（東原橋区画）改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査 整理事業 1973 総研理文
- 県道今井原橋跡域内埋蔵文化財発掘調査報告書 茨城上原田遺跡 1993 群馬県教委
- 県道今井原橋跡域内埋蔵文化財発掘調査報告書 茨城互反田遺跡 1978 群馬県教委
- 地田原田遺跡 市道246号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1994 群馬県埋蔵文化財発掘調査課
- 群馬県前橋市英子小学校校庭Ⅱ、Ⅲ遺跡発掘調査報告書 1990 茨城市埋蔵文化財発掘調査課
- 鶴谷遺跡群 前橋総合運動公園事業地区内埋蔵文化財発掘調査概報 1981 茨城市教委
- 鶴谷遺跡群 前橋総合運動公園事業地区内埋蔵文化財発掘調査概報 1982 茨城市教委
- 群馬県前橋市小高宮遺跡発掘調査報告書 1987 茨城市埋蔵文化財発掘調査課
- 女屋一中沢初期、農業用水址の発掘調査 1984 総研理文

第3章 発掘調査の方法と経過

1. 発掘調査の方法

発掘区的位置 荒砥上ノ坊遺跡の発掘調査では、発掘調査に先立って実施した遺跡分布調査結果と工事設計とを照合し、遺構面を破壊する切り土部分をまず、発掘区とした。また、分布調査に基づいて道水路部分に大形掘削重機(バックホー)による試掘トレンチを適宜設置し、遺構の有無の確認をおこなった。その結果、11区の発掘区を調査することとなった。

1・2区は、遺跡のほぼ中央を横断する「女堀」と、その南北に広がる中央の低台地の大部分である。工事工程との調整から、南側を1区、北側を2区とした。3区は西側の沖積地を隔てた対岸の台地の縁辺で切り土になる部分である。3区から東へは、中央低台地を貫いて道路が新設されるので、その部分へも試掘トレンチを設定した。4区も西の対岸の台地縁辺で、道路の試掘トレンチで遺構が検出されて広げた発掘区である。5区は東側沖積地を隔てた対岸の台地で、これも道路の試掘トレンチで遺構が検出された。6区は中央低台地の突出部で、切り土部分である。7区は東側台地の縁辺で切り土部分と、周辺の道水路部分の試掘トレンチおよびその拡張区である。8～10区は中央台地の北部であるが、いずれも道路の試掘トレンチで遺構が検出されて広げた発掘区である。11区は西側台地のやや内部に位置している。こゝも道水路部分の試掘トレンチと拡張部分である。

以上のように、発掘区は最終的に11区となり、当初発掘調査を開始した中央台地から、沖積地を隔てた対岸の台地にも広がることとなった。このように、発掘区が地形単位を越えた分布となったが、作業の効率化を図るために一つの遺跡名で調査を継続した。

グリッドの設定 発掘区内には記録用の一辺5mのグリッドを設定した。グリッドの基準は、ほ場整備の工事用の杭を利用し、国家座標との偏角を測定した。

ほ場整備6工区の道水路の設計は一定の方向性をもっておこなわれていた。したがって、それぞれ最も至近の工事用杭を基準に個別にグリッド杭を打設したにもかかわらず、1～10区は同じ傾きをもったグリッドになった。1～10区のグリッド南北ラインの国家座標との偏角は西へ1°04'16"である。11区は付近の道水路の方向が他と異なっているために、同様の偏角は西へ4"である。

すべての区の一辺5mの小グリッドは、北から南へアルファベット(a～u)、西から東へ数字(0～19)を付した。また、女堀を含めた1・2区、4区、7区では、それぞれ個別の100m四方の大グリッドを設定し、杭の呼称を大グリッド(アルファベット)ー小グリッド(アルファベットー数字)で表している。グリッドの呼称は、すべての区で北西隅の杭を用いている。

基本土層と遺構確認面 遺跡のある赤城山南麓は開析谷が発達しており、起伏のある地形である。荒砥上ノ坊遺跡の周辺にも、前述のように帯状沖積地が東西に2条、低台地を取り巻くようにある。中央の低台地と東側の台地は、いわゆるローム台地ではなく、砂壤土性の微高地であり、西側の台地はローム台地である。発掘区はこれらの地形のなかに点在している。以下発掘区ごとに、土層の堆積状況と遺構確認面を記す。

1・2・8・9・10区のある低台地は、現耕作土下に、20cmほどの暗褐色土、5～20cmの軽石混じりの黒色土が堆積している。この黒色土は地点によっては、削られて残っていないところもある。これらを除去した暗灰褐色土上面で遺構が検出され

第3章 発掘調査の方法と経過

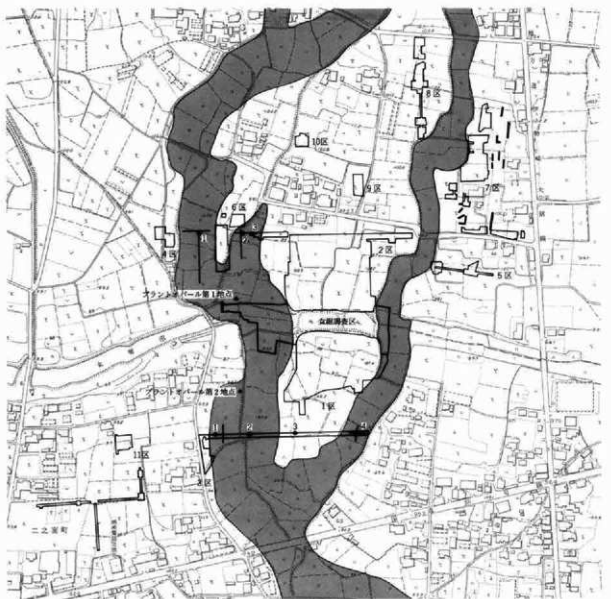
た。6区も基本的に同様の土層堆積を示していた。

3・4・11区のある西側台地と5・8区のある東側台地は、現耕作土下の暗褐色土を除去すると、ローム層上面となり遺構が確認される。

低地部の土層は、沖積地を横断して新設される道水路部分に設定した試掘トレンチで観察した。西側の沖積地では、現水田耕作土と暗茶褐色土の下、地表から60~80cmのところに浅間山起源の浅間Bテフラがほぼ水平に堆積している。設定したトレンチのほぼ全域で確認されたので、沖積地全域にテフラが

堆積しているものと考えられる。浅間Bテフラの下層はやや粘質の黒褐色土で、下層にいくにしたがって植物遺存体が多く含まれるようになる。浅間C軽石はトレンチの一部で深掘りした地点で確認できた。そこは沖積地の中央部で、浅間C軽石を確認したのは地表下2mのところである。

浅間Bテフラ・浅間C軽石両テフラ直下の水田の有無については、調査時には確定できなかった。沖積地に設定したトレンチは、調査工程上重機のバケット幅に限られたし、浅間C軽石まで全面的に掘



第9図 発掘上/妨遺跡の発掘区

り下げることが期間的に困難であった。そこで本年度の整理事業において、特殊検土杖によるテフラ下の土壌採取とそのプラントオパール分析を実施した。

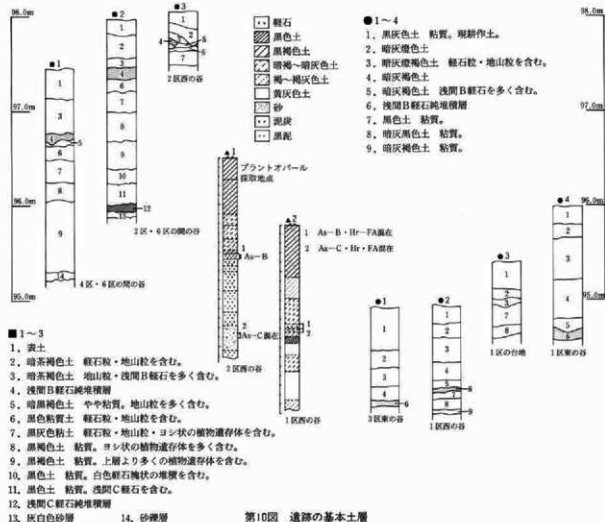
その結果浅間Bテフラの直下層からは8600個/g、その下層からは6200~9100個/gのイネのプラントオパールが検出され、浅間Bテフラ下の土層では稲作が行われていたと考えられる。しかし、浅間C軽石直下の層からはイネのプラントオパールが全く検出されなかった。今回の分析では、試料を2地点で採取したが、第2地点ではテフラの純堆積層が検出できず、検討できる試料は第1地点1点のみである。プラントオパールが皆無であったことは、その試料が不整合の地層を採取した可能性も考え得る。

したがって浅間C軽石直下でプラントオパールが

検出されなかったことをもって、この地点で稲作が行われていなかったと結論することは早計であろう。この分析は、1・2・4・6区に展開する弥生時代末から古墳時代初頭の集落を考える上で重要な分析である。試料の採取地点の選定や、採取方法をさらに検討して、今後に継続したいと考えている。

2. 発掘調査の経過

荒砥上ノ坊遺跡の調査は、はじめに最も大きな遺構である女堀の発掘から始まった。昭和57年6月19日~30日に現場事務所準備や器材の搬入および女堀の試掘トレンチの設定を行ない、7月1日から実際の発掘作業に入った。女堀の調査は、多量の湧水と困難な排水・排土作業を行いながら、10月25日にすべての調査・記録を終了した。女堀の発掘経過お



第10図 遺跡の基本土層

第3章 発掘調査の方法と経過

よび成果については発掘調査報告書「女堀」を参照されたい。

1～11区の発掘調査は、当初女堀の調査と平行しながら進めた。まず9月17日から女堀の兩岸の微高地にある1・2区の表土掘削作業をおこなった。工事が南部から実施されるので、それに伴い発掘調査も女堀の南側を1区として、9月30日から発掘作業を開始した。1区は東部の溝群および東西に1区を横断する1号溝の発掘から始めて、その後東から西へ住居や土坑などの遺構の調査を進めた。1区の調査は11月6日に終了した。

2区は11月8日に調査を開始した。10月中の土地改良事務所との協議で、南側からの明け渡しが必要されていたので、女堀の北岸から遺構の調査に入り、順次北へ調査を進めた。2区の調査は、12月15日に終了し、12月18日に明け渡した。

3区の調査は10月29日に調査を開始した。3区は西側台地の東縁辺に新設される道路と狭い切り土部分である。2区と並行して調査を実施し、11月12日に終了した。

道水路部分の試掘調査は、9月中旬以降順次実施され、H工事の4～11区の調査区が確定していった。また、同様にJ・K工事の発掘調査区も確定していった。その試掘調査結果に基づき、本発掘調査の調査体制全体の増強が図られた。12月以降の荒砥上ノ坊遺跡の調査体制も、担当者4名となった。

この体制強化により、4区が12月9日、5区が12

月10日から相次いで調査を開始し、さらに6区の表土掘削および調査を12月13日から開始した。したがって、2区の発掘調査が終了する12月15日まで、4カ所の調査が同時進行したことになる。4区は2区の明け渡しと同じ12月18日に、5区は12月20日に調査を終了した。6区は調査開始後2日目に中断したが、1月13日に再開して1月22日に終了した。

思いがけず大規模な堀が検出された7区の調査は12月15日に、6区を中断して開始した。予想に反した作業量のため、表土掘削と平行して調査を進めた。8区の調査を開始した1月6日まで、全体制を7区に集中して作業を進めた。7区の調査は1月13日に終了した。

1月に入って、調査体制は3名にもどった。6日に8区、11日に9区、13日に10区の調査を開始した。3地点とも新設道水路に沿った狭い発掘区で、分散した短期間の調査となった。8区は18日に、9区は21日に、10区は14日に終了した。11区は東側台地の南部に位置する道路部分の狭い発掘区である。1月20日に調査を開始して、25日の実測作業で終了した。

前年の6月から開始した荒砥上ノ坊遺跡の発掘調査は1月25日に完全に終了した。24日には一部の体制で、K工事の下押切遺跡の低地部分の調査に移行し、25日には全体制が下押切遺跡に移った。なお、荒砥上ノ坊遺跡の調査で記録した図面・写真の基本整理・遺物の洗浄・注記作業は、下押切遺跡の調査が終了した2月5日から3月5日まで実施した。

第2表 荒砥上ノ坊遺跡の発掘区と検出遺構

区	調査期間	用水路	住居	土坑	掘立柱建物	溝	火葬墓	サク溝	周溝墓	井戸
女堀	7.1～10.25	1								
1	9.30～11.6		75	58	4	9	1			
2	11.8～12.8		111	69	6	9	1	1		4
3	10.29～11.12		9	4		4				
4	12.9～12.8								6	
5	12.10～12.20		11	3		1				
6	12.13～1.22		16	2		2				
7	12.15～1.13		10	70		14				21
8	1.6～1.18		13	10	5	4				
9	1.9～1.21		6					1		1
10	1.13～1.14		3	3						1
11	1.20～1.25		3	1		1				1
合計		1	257	220	15	44	2	2	6	28

第4章 縄文時代の遺構と遺物

1. 概 要

縄文時代の遺構は、諸磯b式期の住居が3軒検出された。1区72号住居・2区1号住居は遺跡中央の低台地の西縁辺に、6区16号住居はこの台地から半島状に突出した幅の狭い台地上に立地する。3軒の住居は、低台地の西側にある帯状低地を囲むように点在している。第19図) 帯状低地北端には谷頭があり、縄文時代集落の水場となっていたと考えられる。

群馬県の縄文時代の遺跡の分布には、地形別偏差がある(注1)といわれている。赤城山南麓のような丘陵性の地形には縄文時代前期の小規模な遺跡が多い。本遺跡の北方にある宮城村・粕川村・新里村の標高250m前後の地域には、多くの縄文時代前期の遺構が丘陵の狭い尾根地形や傾斜地に検出されているが、いずれも1〜数軒の住居による小規模な集落である。荒砥上ノ坊遺跡は、この赤城山南麓という丘陵性の地形の末端部分にあり、縄文時代前期の遺跡が卓越する地域の縁辺部に当たる。

また、本遺跡で検出されたような、少数の住居が散在するあり方は、群馬県の縄文時代前期集落の一般的な様相であることが近年の発掘調査等で明らかになってきている。(注2)本遺跡で検出された住居の時期は、1区72号住居の出土土器が少なく断定できないが、他の2軒は諸磯b式でも新しい段階とみられる。したがって本遺跡では一時期2〜3軒の住居が散在する集落景観を想定できる。荒砥上ノ坊遺跡の住居のあり方は、丘陵性地域における諸磯b式期の一般的傾向を示しているといえよう。

出土した土器や石器のあり方も、諸磯b式期の一般的な様相を示している。特筆されるのは、1区72号住居で出土した小形の石棒である。県内でこの種の石棒が9例ほど出土しており、前期の石棒を型式としてとらえることが可能である。これについては、第7章で詳述した。

2. 1・2区の遺構

1区72号住居

位置 I₀-8グリッド 写真 PL2~4
形状 隅丸正方形に近似するが、東西方向にやや長い。四隅は丸く、周壁は直線的に掘られている。北東隅がやや膨らむ。規模は、長軸3.25m、短軸3.0mである。

面積 8.4㎡ 東壁方位 N-28°-E
床面 遺構確認面から36cm掘り込んで、床面としている。床面のうち、柱を結んだ線より内側の部分は硬化していた。

埋没土 細かい白色バミスや炭化物粒を含む褐色土で埋まっていた。埋没土は堅くしまっていた。

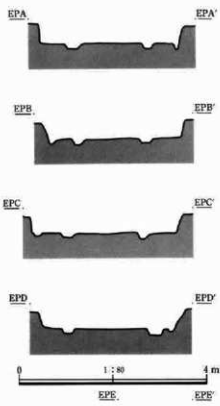
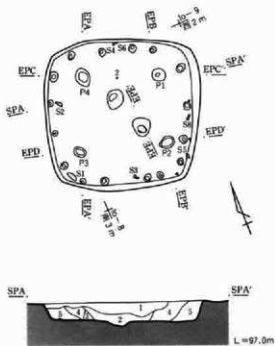
炉 住居中央よりP2に寄った地点に炉と考えられる埋設土器が検出された。埋設土には焼土粒を含むが、土器を埋めた坑壁が顕著に焼けて赤化したような痕跡は見られなかった。

柱穴 4本の主柱穴と考えられるピットと、16本の壁柱穴が検出された。また住居中央よりP4寄りに不定形なピットが検出された。各主柱穴の規模(短径×長径×深さ)は、P1:28×26×14cm、P2:29×26×9cm、P3:25×20×9cm、P4:35×31×10cmである。主柱穴を結んだ形は台形を呈する。16本の壁柱穴は、ほぼ直径15~18cm、深さ7~11cmで、各辺の中央部がやや広くなるような間隔で、一辺に4本ずつ掘られている。

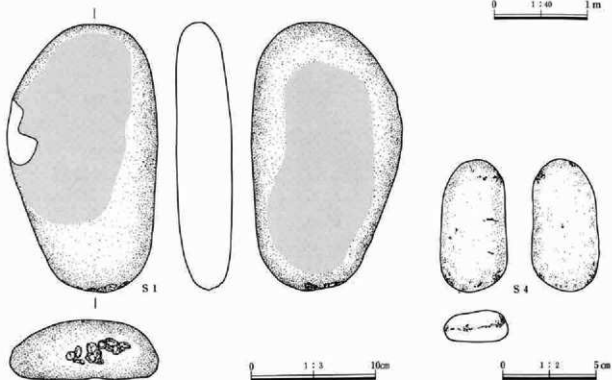
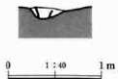
遺物 土器は埋設土器(1)の他、埋没土から1点出土したのみであるが、石器は8点出土した。石器は石棒・磨製石斧・石匙・石錘・敲石・剥片石器等の各機能をもつ石器が1点ずつ、いずれも床面から1~10cmほど浮いた状態で、壁に沿って点々と出土した。(遺物観察表:1頁)

所見 出土遺物から諸磯b式期住居と考えられる。

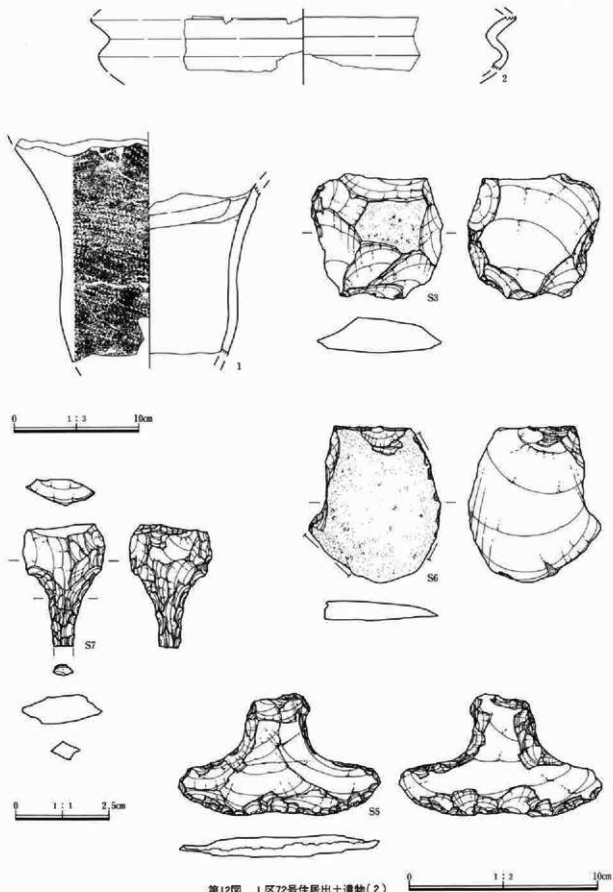
第4章 縄文時代の遺構と遺物



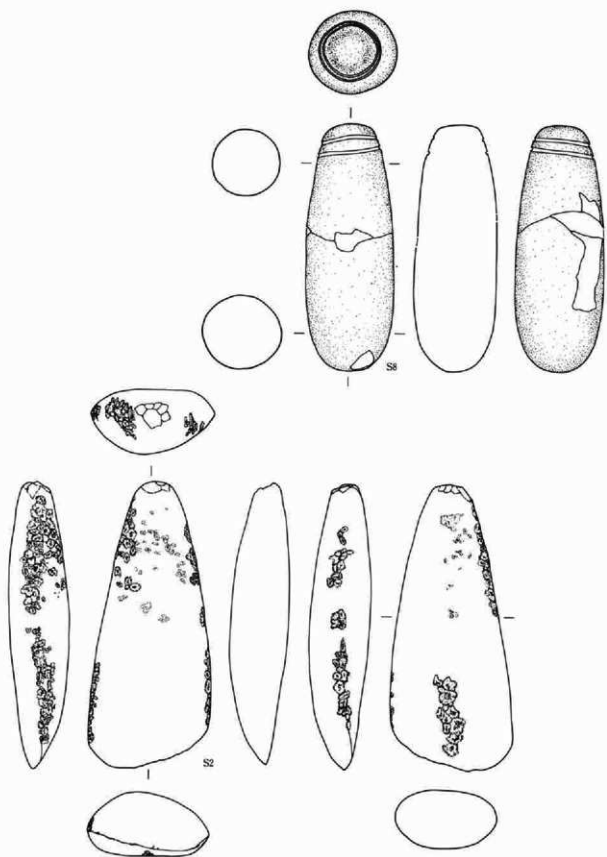
1. 黒褐色土 細かい白色軽石・炭化物粒を含む。
2. 灰褐色土 細かい白色軽石・炭化物粒・黄褐色土粒を含む。
3. 灰黄褐色土 夾雑物は2層に似る。
4. 灰褐色土 斑状の黄褐色土塊と白色軽石・炭化物粒を含む。
5. 黄褐色土塊 灰褐色土塊と炭化物粒を含む。



第11図 1区72号住居と出土遺物(1)



第12図 1区72号住居出土遺物(2)



第13図 I区72号住居出土遺物(3)

0 1:2 10cm

2 区 1 号 住 居

位置 Ib-4グリッド 写真 PL5・6
重複 重複遺構はないが、南西隅を攪乱によって削られている。

形状 隅の丸い長方形を呈すると考えられるが、南部が女堀によって破壊されているので、全形は不明である。南北方向の長さは3.5mである。東西方向は不明。

面積 測定不可 方位 N-36°-W

床面 遺構確認面から30cmほど掘り下げて床面としている。床面は黄色砂壤土で、柱穴を結んだ線より内部は硬化している。

埋没土 下層は、黄色や灰褐色土で埋まっており、白色バミスや炭化物粒・砂粒を多く含んでいる。上層は黒褐色土で埋まっている。

炉 炉と確定できる施設は検出できなかった。P4の南には長さ30cmほどの白石があり、周辺はやや凹んでいるので、炉の可能性もあるが、顕著な赤

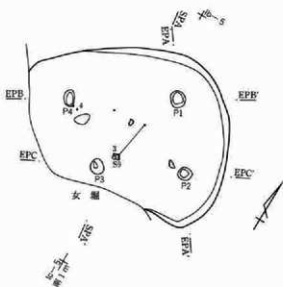
化はみられなかった。

柱穴 主柱穴と考えられる柱穴が4本検出された。それらを結んだ形は台形を呈する。P3が内側に大きく偏っており、不自然であるので、P3が主柱穴でない可能性もある。柱穴の規模(短径×長径×深さ)は、P1:37×32×13cm、P2:29×27×20cm、P3:31×29×22cm、P4:35×25×27cmである。

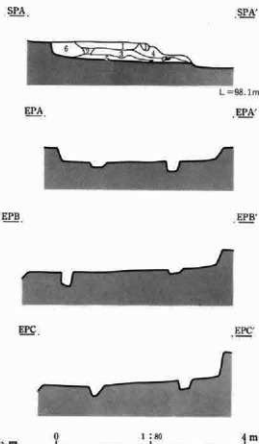
遺物 床面直上の遺物は、3・4の深鉢がP3・P4の周辺で、凹み石(S9)が3の深鉢の上から出土している。埋没土中からは、多くの沈線文系・浮線文系の諸磯b式土器片と、少量の浮島式土器の破片が出土している。また、打製石斧(S11・S17)・敲石(S14)・石核(S18)等が出土している。

(遺物観察表:1~3頁)

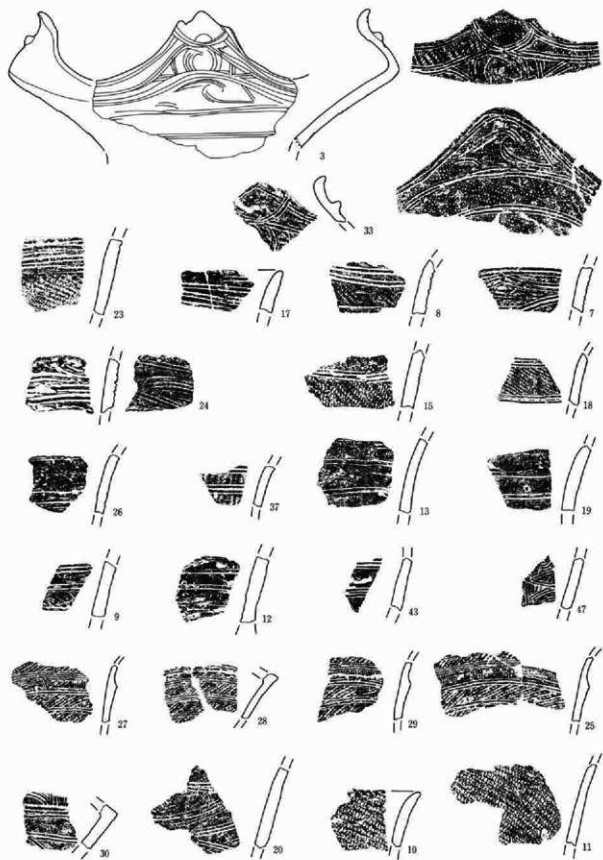
所見 出土遺物から諸磯b式期の住居と考えられる。南東隅の平面形が中へ丸く入り込んでおり、不自然である。女堀によって壊されている部分であり、住居の形状が失われている可能性もある。



1. 黒褐色土 白色軽石・黄褐色土粒・小砂利を含む。
2. 1層と3層の混土。
3. 黄褐色土 粘質。白色軽石・炭化物粒・小砂利を含む。
4. 黄色土 白色軽石・炭化物粒・小砂利を含む。
5. 黄白色土 粘質。炭化物粒を含む。
6. 灰黄褐色土 小砂利を多く含む。

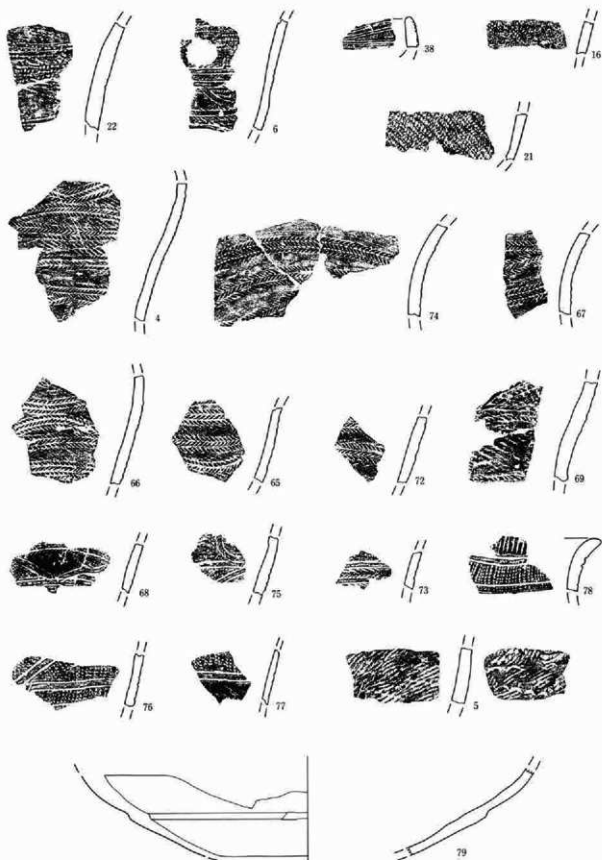


第14図 2区1号住居

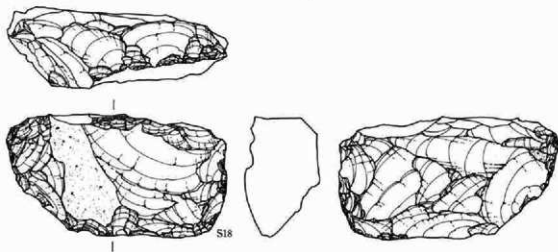
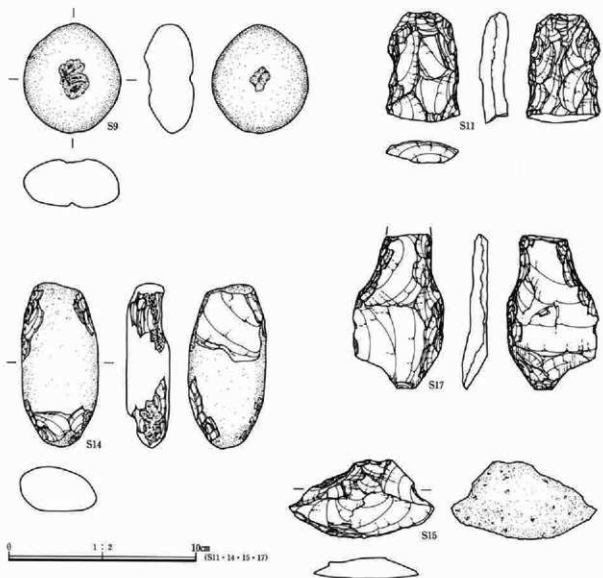


第15図 2区1号住居出土遺物(1)

0 1:3 10cm



第16図 2区1号住居出土遺物(2)



第17図 2区1号住居出土遺物(3)

(S9・S18) 0 1:3 10cm

3. 6区の遺構

6区16号住居

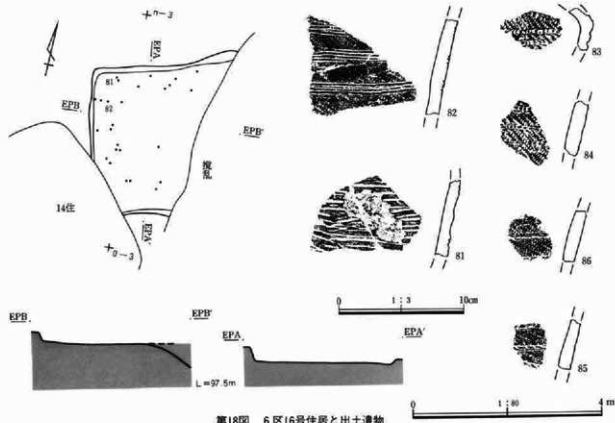
位置 n-3グリッド 写真 PL 6
 重複 南西隅を古墳時代初頭の14号住居に切られている。また、東半分は擾乱によって削られている。
 形状 方形を呈するが、東半分が失われているので、長方形か正方形かは判断できない。隅は北西隅しか残っていないが、比較的角張っている。周壁は直線的に掘られている。南北方向の規模は3.06mである。
 面積 測定不可 方位 N-11'-W
 床面 遺構確認面から30cmほど掘り込んで床面としている。床面は硬化した面は確認できなかった。
 伊 検出されなかった。
 柱 穴 検出されなかった。
 遺物 埋没土中から、諸磯b式土器片が出土している。また、ほぼ床面直上の状態で23点の剥片石器

が出土しているが、所在不明で掲載できなかった。
 (遺物観察表：3頁)

所見 出土遺物から諸磯b式期の住居と考えられる。

この他、6区にはj-1グリッドに土坑状の落ち込みがあり、縄文土器が出土した。(写真PL6)この部分は、1号溝・2号溝の交点に位置し、遺構が重複している部分である。縄文時代の遺構とは考えにくい。調査所見を記録しておく。

土坑の形状は、隅丸長方形を呈し、規模は長軸70cm、短軸42cmである。中央に30×20cm、深さ11cmのピットがある。長軸方位はN-43'-Wであった。埋没土は縄文時代の遺構を埋めていたものとは異なっていた。遺物は、埋没土中から諸磯式土器片2点、底面から石器3点が出土している。



第18図 6区16号住居と出土遺物

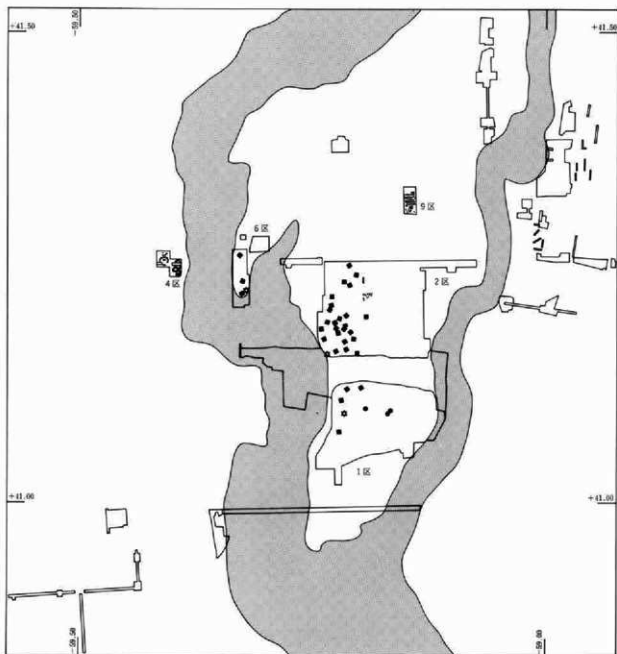
第5章 古墳時代初頭の遺構と遺物

1. 概 要

荒砥上ノ坊遺跡では、弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけての遺構は、住居32軒、土坑3基、方形周溝基6基、畠の耕作痕跡と考えられるサク状の

溝群4カ所を調査した。

これらの遺構は、縄文時代前期の住居と同様の分布を示し、1・2・6・9区に限定されている。第19図のように、これらの発掘区は遺跡中央の低台地に展開する。住居や土坑はこの低台地の西側にある



第19図 古墳時代初頭の遺構分布

帯状低地を意識して囲むように、台地（1・2・6区）縁辺に集中しており、その対岸（4区）には住居群と同時期と考えられる周溝墓群が検出された。また、サク条の溝群は住居群外縁から低台地中央部（9区）に位置している。このような遺構の分布状況から、本遺跡は、低台地縁辺を居住域、西側帯状低地と低台地中央部を生産域、対岸を墓域とする農耕集落と推定できよう。

検出された32軒の住居のうち、1区には5軒、6区には3軒の住居が散在し、2区には24軒の住居がやや集中している。1区と2区は平安時代末期に掘られた女堀で区切った便宜的な発掘区で、地形的には連続する低台地である。したがって、検出された住居群は、居住域として一体のものと考えられる。1区の住居の位置からすれば、居住域の南限はとらえられたものと考えられるが、2区の遺構の密度は高くなっているため、9区の島の位置からも居住域は北側へ広がる可能性が大きい。

これらの住居群には1回の重複が3カ所あり、最低2期の遺構を含む。また、2区では近接した住居の配置が見られ、一時期に存在した住居の数はかなり少なくなると考えられる。出土土器からみると、住居の時期は弥生時代後期末から古墳時代前期であるが、弥生土器の残存状況といった土器組成の面から見ると、3時期ほどに分けられると考えられる。また、住居形態はほとんどが隅丸正方形もしくは正方形に近い長方形を呈しており、炉・主柱穴・柱穴等の位置に若干の規格性がみられる。

方形周溝墓は、6区と帯状沖積地を隔てた西側の台地縁辺（4区）に検出された。調査区が切り土部分に限られたため、全体はつかめなかったが、群をなすものと推定される。

畠跡は、2区の住居群の東縁に3カ所、2区の北50mのところにある9区に1カ所の合計4カ所で検出された。サク状の溝の走向は各地点で異なっている。また、これらのサク溝群は浅間C軽石あるいは浅間C軽石のブロックで埋まっており、浅間C軽石降下以前から直後にかけて、耕作が継続された重層

的な畠の痕跡と考えられる。耕作面は消失しているため、形態的な分析は困難である。また、土壌分析は実施していないので、畠の作物については、不明である。

遺構から出土した土器は、この時期に特徴的な外来系の土器が多数含まれていたことが特筆される。従来、問題にされることが多かったS字状口縁台付壘形土器に代表される東海西部地域の土器ばかりでなく、近年県内で類例の増えている北陸系の土器が多く出土していることが特徴である。また、数は少ないが近江系の土器も混在している。これらは搬入品ではなく、故地の土器の形態・製作技術を模倣しているものである。忠実に模倣しているものもあれば、在来の弥生土器の形態や整形技法を残した土器も少なくない。新しい土器文化受容期に、折衷的要素の強い土器群が作られているのであろう。

出土土器については第7章で詳述した。

2. 1・2区の遺構

1区41号住居

位置 II-j-8・9グリッド 写真 PL7・8
形状 対角線を南北方向にする、隅の丸い長方形を呈する。周壁は直線的に掘られている。規模は長軸6.05m、短軸4.98mである。

面積 26.2㎡ 方位 N-39°-W
床面 遺構確認面から35cmほど掘り込んで床面としている。床面はやや硬化している。

埋没土 下半部は軽石が含まれない黒褐色土で埋まっている。上半部の黒色土には軽石等が含まれている。

炉 明確に炉と断定できる部分は、検出できなかった。

周溝 北西壁・南西壁沿いにのみ上幅10～16cmの周溝が検出された。

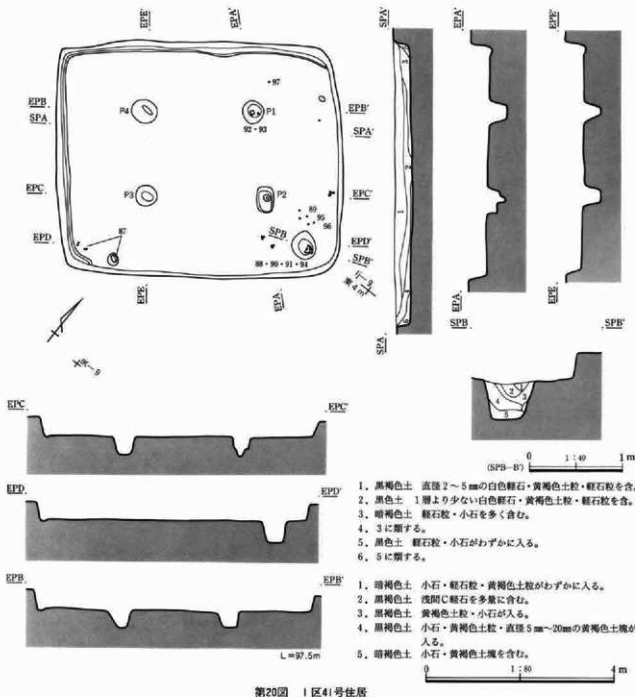
柱穴 4本の主柱穴が検出された。各主柱穴の規模(短径×長径×深さ)は、P1:46×49×39cm、P2:35×53×38cm、P3:44×45×37cm、P4:49×

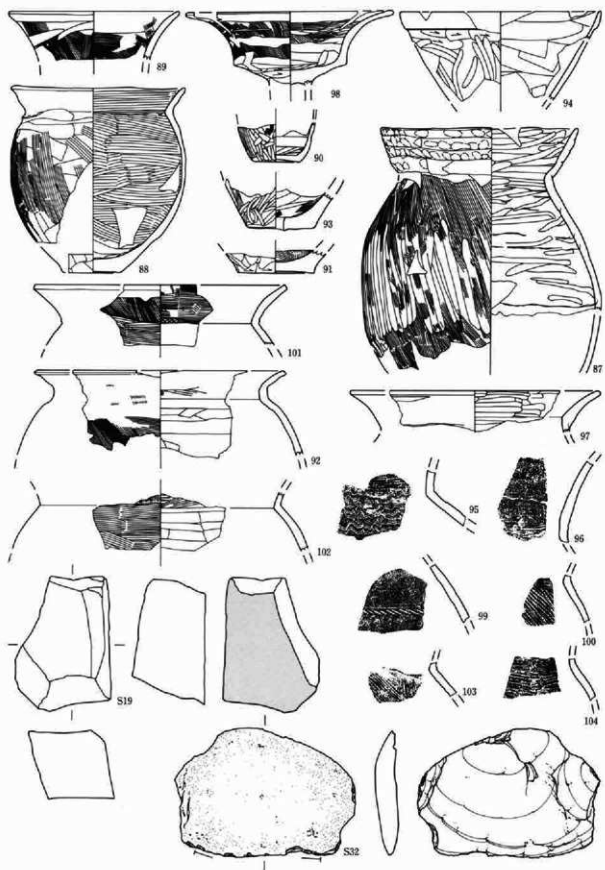
第5章 古墳時代初頭の遺構と遺物

54×35cmである。主柱穴のうち、P1・P3・P4はほぼ対角線上に位置するが、P2のみやや東側にずれており、各主柱穴を結んだ形は台形を呈する。貯蔵穴 東隅に短軸62cm、長軸48cm、深さ30～40cmのピットが検出された。やや小形と思われるが、検出された位置から考えると、貯蔵穴の可能性はある。貯蔵穴からは、底面から15cmほど浮いた状態で小形壘形土器(88)等が出土している。

遺物 土器は、南隅の床面直上で壘形土器(87)が、南東部床面直上で壘形土器(89)が出土している。図示した他の土器は前述した88等を除いて埋没土中からの出土である。石器も、S19・S32ともに埋没土中からの出土である。(遺物観察表：4・5頁)

所見 出土遺物等から、古墳時代初頭の住居と考えられる。





第21図 1区41号住居出土遺物

0 1:3 10cm

第5章 古墳時代初頭の遺構と遺物

I 区 43号 住居

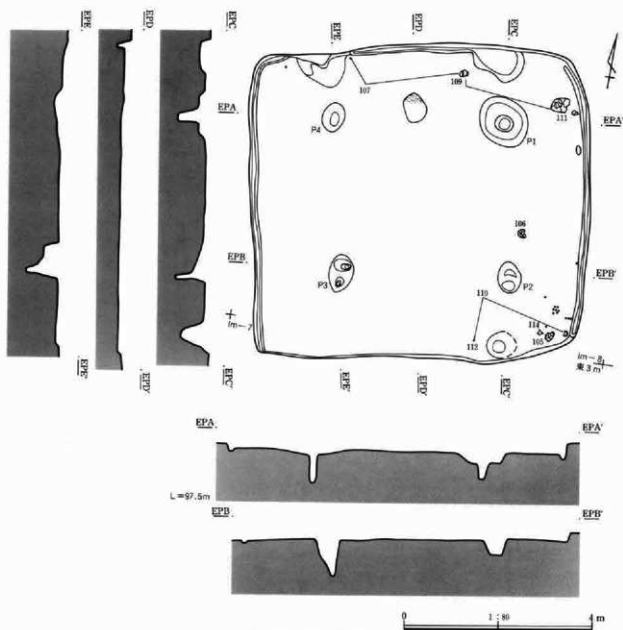
位置 II-7グリッド 写真 PL 8・9
 形状 やや隅の丸い、正方形に近い長方形を呈する。周壁は直線的に掘られているが、東壁のみはやや膨らんでいる傾向がある。規模は長軸7.20m、短軸6.80mである。

面積 42.9m² 方位 N-9°-W
 床面 遺構確認面から深いほう(南東隅)で10cm、浅い北西隅で1cm前後掘り込んで、床面が検出された。やや中央部はへこんでおり、硬化していた。北

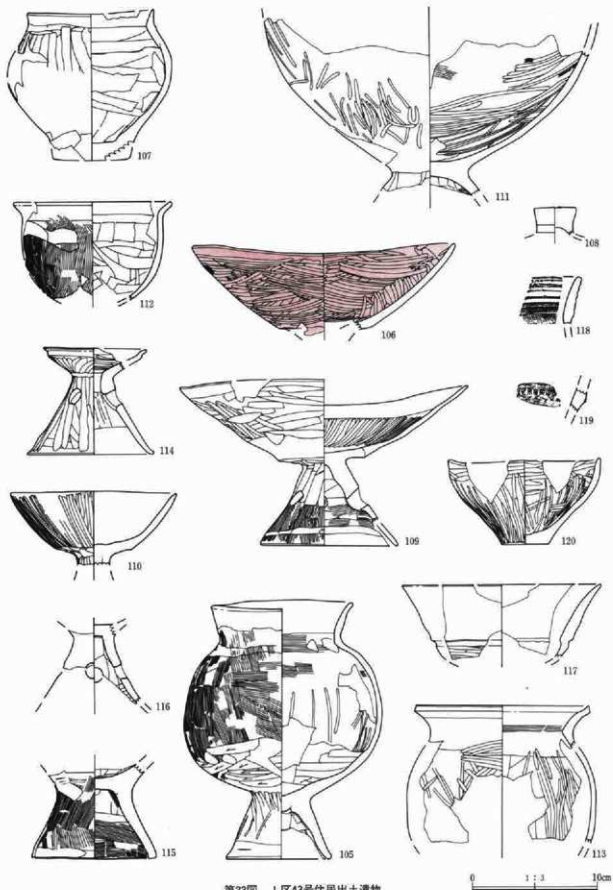
壁沿いには、主柱穴P4の北側で半円状の高まりが検出された。また、P1の北側では半円状に凹んだ部分を検出したが、床面を掘り過ぎた可能性もある。周溝 東壁沿いを除く三辺の壁沿いに上幅15~20cmの周溝が検出された。

埋没土 埋没土の中で浅間C軽石のブロック状の堆積が検出された。下層の床面直上の褐色の埋没土には軽石は含まれない。

炉 住居北部、主柱穴P1とP4の中央に長軸60cm、短軸40cmの地床炉を検出した。中央は1cmほ



第22図 I区43号住居



第23図 I区43号住居出土遺物

0 1:3 10cm

第5章 古墳時代初頭の遺構と遺物

どくばみ、北側に焼土がたまっていた。炉に施設された土器等はない。

柱 穴 主柱穴が4本検出された。各主柱穴の規模(短径×長径×深さ)は、P1:100×102×56cm、P2:50×65×62cm、P3:53×77×77cm、P4:46×62×64cmである。4本とも住居の対角線上にあり、各主柱穴を結んだ形は長方形を呈する。また、P2の南に直径60cm、深さ45cm程のピットが検出された。
遺 物 土器は、107の小形甕形土器が北部、炉の周辺で床面直上から出土した。また、高杯形土器(106・109・110)や、台付甕形土器(105)や小形器台形土器(114)が床面から数cm浮いた状態で出土している。(遺物観察表:5頁)

所 見 出土遺物等から、古墳時代初頭の住居と考えられる。

I 区 50号 住居

位 置 Ii-11グリッド **写 真** P.L10・11
重 複 東壁で51号住居を切り、北西隅で38号住居に切られている。

形 状 南西隅がやや広がる隅の丸い平行四辺形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られている。規模は、長軸5.28m、短軸5.05mである。

面 積 23.6㎡ **方 位** N-15°-W

床 面 遺構確認面から20cmほど掘り込んで床面としている。床面の硬化は著しくない。南壁沿いの中央よりやや東側に馬蹄形に床面が盛り上がった部分を検出された。その北側には直径1.4m、深さ0.4mの楕円形の土坑が床面積差の段階で検出された。前述の馬蹄形の高まりと接するように掘られているが、住居に伴うものかどうかは厳密には明らかでない。

埋没土 浅間C軽石を含む黒色土・黒褐色土で埋まっている。下層ほど軽石の含有量が多い。

炉 主柱穴P1とP4を結んだ線よりやや内側に炉が検出された。焼土等の残存状態が良くなかったため、炉の範囲は明確でない。棒状礫が2個並ん

で出土しているため、これが炉の北端とも考えられる。礫の隣には壺形土器(139)が倒立して出土している。

柱 穴 4本の主柱穴が検出された。各主柱穴の規模(短径×長径×深さ)は、P1:23×44×75cm、P2:21×22×76cm、P3:20×24×66cm、P4:20×26×72cmである。主柱穴は対角線上にのらず、主柱穴4本を結んだ形は長方形になるが、位置が東側にやや偏っている。また、東・西両壁沿いの中央よりやや南側に、直径20cm、深さ10cmほどの小さなピットが、東に2カ所、西に1カ所検出されている。

遺 物 遺物は、床面に近い状態で多量に出土している。土器は、鉢形土器(132・133)、小形器台形土器(135・137)、壺形土器(124・126)、壺形土器(128)等が床面直上で出土した。その他は床面から数cm浮いた状態で出土した。石は9点が床面から数cm浮いて出土しているが、所在が不明で報告できない。(遺物観察表:6頁)

所 見 出土遺物から古墳時代初頭の住居と考えられる。

I 区 51号 住居

位 置 Ii-12グリッド **写 真** P.L10
重 複 西半分を50号住居に切られている。

形 状 残された周壁は直線的に掘られている。方形を呈すると考えられるが、ほぼ半分を50号住居に壊されているので形態や規模は不明である。

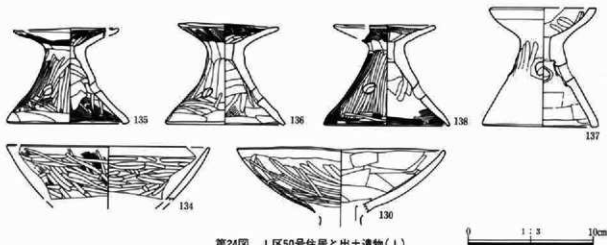
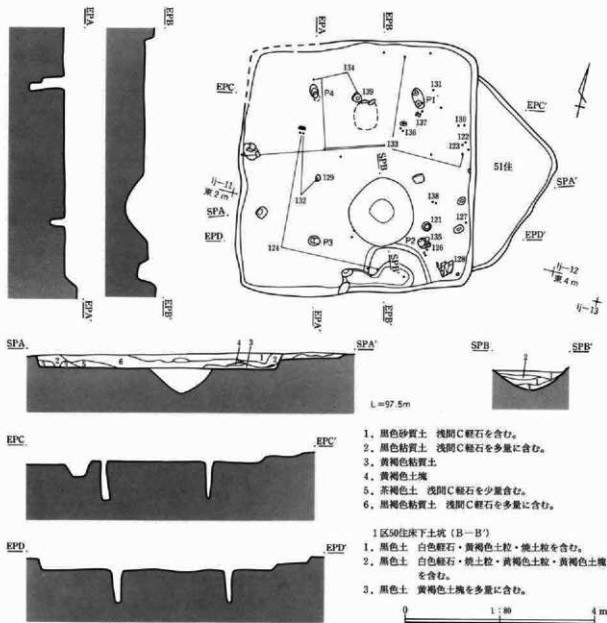
面 積 計測不可 **方 位** N-21°-E
床 面 遺構確認面から10cmほど掘り込んで床面としている。あまり硬化していない。

炉 残存している範囲からは検出されなかった。

柱 穴 残存している範囲からは検出されなかった。

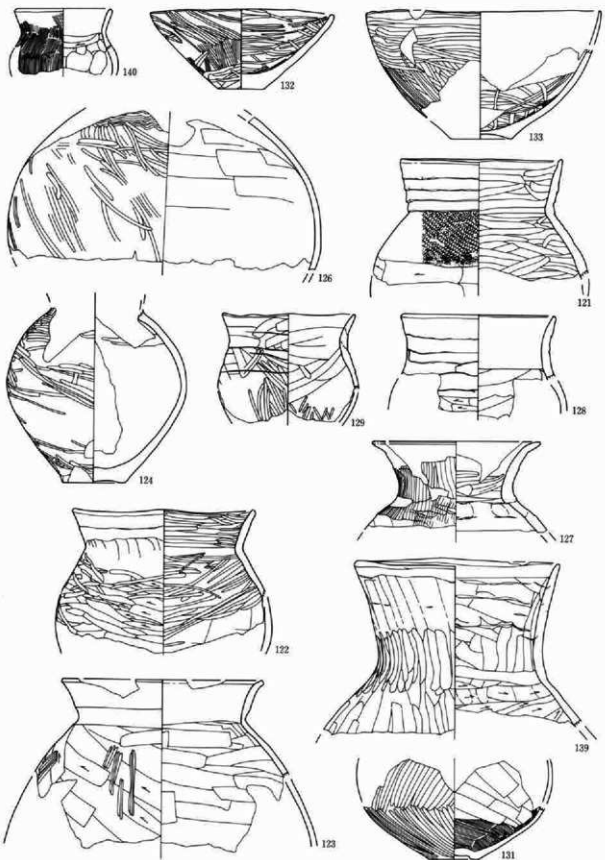
遺 物 出土遺物はなかった。

所 見 出土遺物がなく、時期は不明であるが、50号住居より古い住居である。



第24図 1区50号住居と出土遺物(1)

第5章 古墳時代初頭の遺構と遺物



第25図 I区50号住居出土遺物(2)

0 1 2 10cm

I区16・30号土坑

位置 In・0-18グリッド 写真 PL12

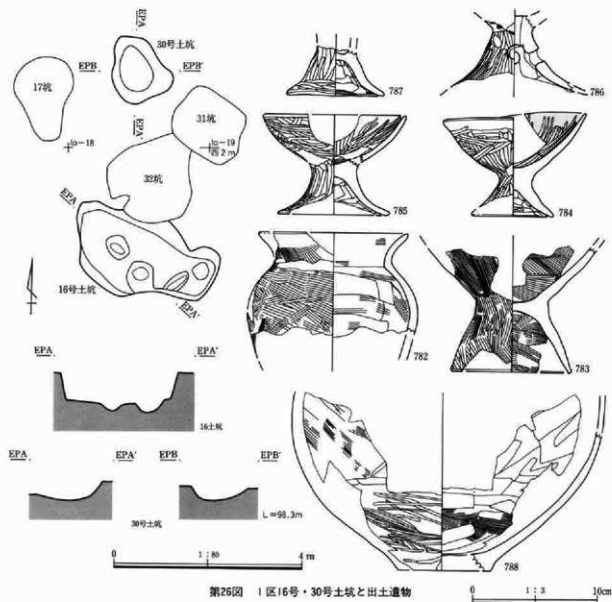
重複 32号土坑に切れ、17号・31号土坑とも併在する。17号・32号土坑には遺物が出土しており、ほとんど8世紀初頭のものである。

形状 16号・30号土坑いずれも不定形を呈する。16号土坑は、長軸3.2m、短軸1.9mの不定楕円形で、深さは20cmほどである。30号土坑は、長軸1.4m、短軸1.0mの楕円形で、北東側が膨らんでいる。深さは30cmほどである。

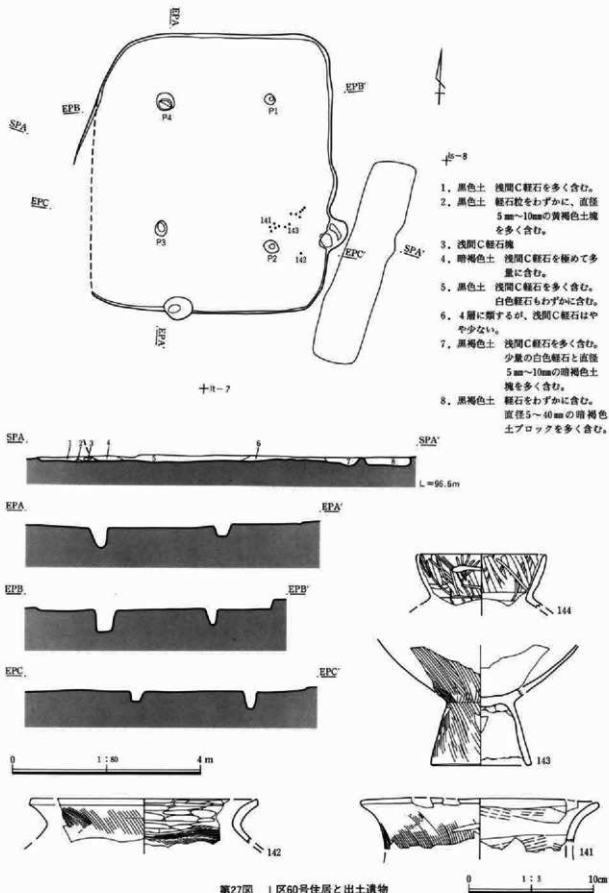
底面 いずれの土坑も定形的に掘られたものではないので、底面も凹凸が著しい。特に16号土坑の底面には直径40cm、深さ15cmほどのピットがあいている。遺物 図示した遺物は、いずれも埋没土中から出土したもので、時期的にまとまっているので、当該期の遺構として報告したが、確証はない。

(遺物観察表：7頁)

所見 形態が不定形で、底面の形状も不安定であるので遺構としては考えにくい面もあるが、遺物の出土状態はまとまっている。



第26図 I区16号・30号土坑と出土遺物



第27図 1区60号住居と出土遺物

1区59号土坑

位置 In-12グリッド 写真 PL12
 形状 隅丸のほぼ正方形を呈する。規模は長軸23cm、短軸21cm、深さ23cmである。
 埋没土 上層に浅間C軽石の純堆積層がある。
 遺物 遺物の出土はない。
 所見 出土遺物がなく、浅間C軽石降下以前という以外は、時期は不明である。

1区60号住居

位置 Ir-s-6・7グリッド 写真 PL11
 重複 重複遺構はないが、西壁の掘り込みは極めて浅く、平面形は不明確となっている。
 形状 前述のように西壁は不明確であるが、隅の丸い長方形を呈すると考えられる。北壁・南壁は直線的に掘られているが、東壁は小さく蛇行している部分もある。
 面積 計測不可 方位 N-1°-W
 床面 遺構確認面から0~18cm掘り込んで床面となる。床面は中央部がややへこみ、硬化している。
 埋没土 浅間C軽石を含む黒褐色土で埋まっている。西壁付近には軽石のブロックも堆積していた。
 炉 明確な炉は検出できなかった。

柱穴 4本の主柱穴が検出された。各主柱穴の規模(短径×長径×深さ)は、P1:22×23×33cm、P2:26×28×36cm、P3:26×32×21cm、P4:37×38×43cmである。主柱穴は、ほぼ対角線上に位置しているがP2がやや南に偏っており、各主柱穴を結んだ形は台形を呈する。なお、東壁・南壁の一部にピットがあるが、これが住居に伴うものかどうかは明らかでない。

遺物 144の壺形土器は埋没土中から、甕形土器(141・142・143)は床面直上で出土した。

(遺物観察表:7頁)

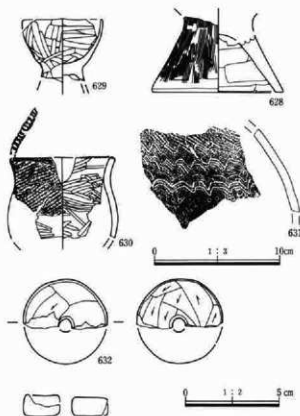
所見 出土遺物から、古墳時代初頭の住居と考えられる。

2区7号住居

位置 Ia-8・9グリッド 写真 PL14
 重複 北西隅を5号住居に、南東隅を6号住居に切られている。
 形状 対角線を南北方向にする、隅の丸い長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られている。規模は、長軸5.87m、短軸5.4mである。
 面積 計測不可 方位 N-40°-W
 床面 遺構確認面から31cmほど掘り込んで床面となる。主柱穴を結んだ線の内側はやや硬化している。
 埋没土 軽石粒を含む黒色土で埋まっている。

炉 住居中央やや北西寄りに、直径40cmほどの円形の範囲に床面が焼土化している部分があり、炉と考えられる。

柱穴 4本の主柱穴と6本のピットが検出された。各主柱穴の規模(短径×長径×深さ)は、P1:86×87×71cm、P2:28×30×24cm、P3:47×60×60cm、P4:66×78×56cmである。P2の深さが浅



第28図 2区7号住居出土遺物

第5章 古墳時代初頭の遺構と遺物

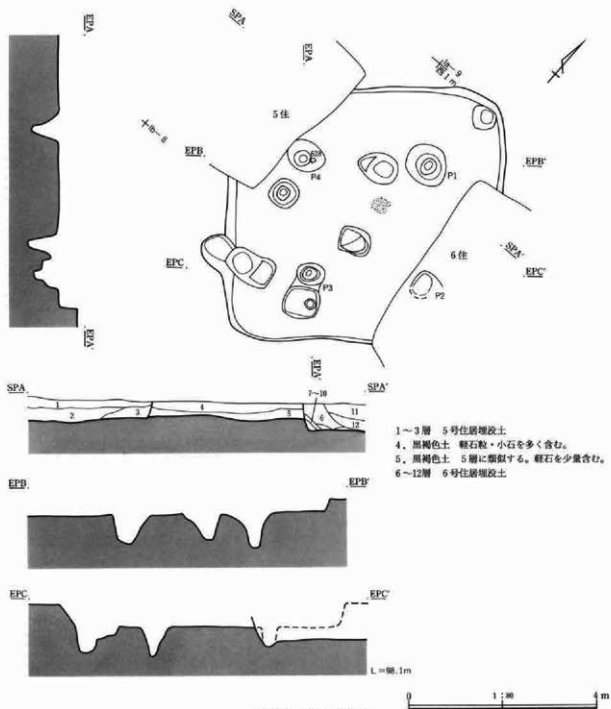
くなっているが、これは南隅を切った6号住居床面で検出したものである。各主柱穴を結んだ形はほぼ長方形を呈する。主柱穴のほかに6カ所のピットを検出したが、いずれも住居に伴うかどうかは明確でない。

遺物 遺物の出土量はあまり多くない。主柱穴P

4から台付変形土器の台部(628)が出土している。図示した鉢形土器(629)、変形土器(630)、壺形土器の破片(631)は埋没土中の出土である。

(遺物観察表：7頁)

所見 出土遺物から、古墳時代初頭の住居と考えられる。



第29図 2区7号住居

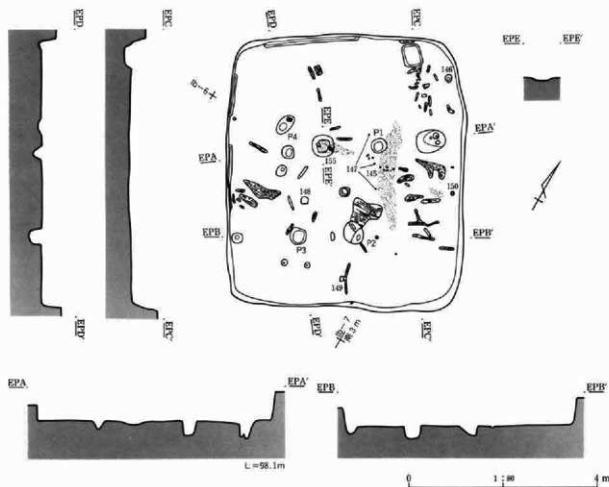
2区4号住居

位置 Ia・b-6グリッド 写真 PL13・14
 形状 対角線を南北方向にする、隅の丸い長方形を呈する。周壁は各壁の中央がわずかに膨らむように掘られている。規模は長軸5.81m、短軸5.10mである。

面積 26.3㎡ 方位 N-33°-W
 床面 遺構確認面から30cmほど掘り込んで床面となる。床面は、主柱穴を結んだ線の内側は硬化している。床面には焼土や炭化材が多く遺存している。特に北東壁沿いには壁と直交する方向に並んでいる炭化材が6列検出された。完全な形で残されていないので、構造物を復元するまでには至っていない。周溝 北西壁と南西壁の一部に上幅10～15cmの周溝が検出された。

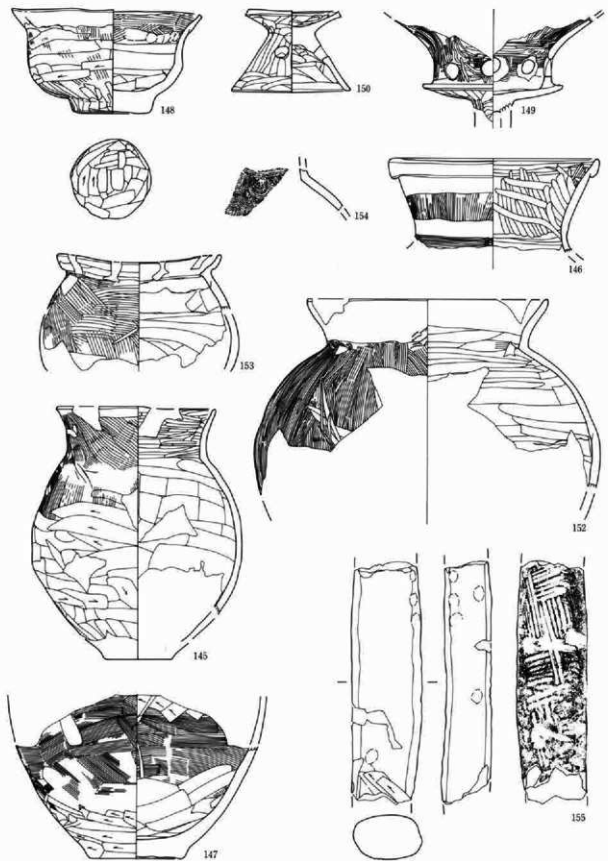
炉 主柱穴P1・P4の間、ややP4寄り

径48cmほどの円形の炉が検出された。焼土層までの深さは5cmで、炉床は堅く焼けている。炉内から両端が欠損している棒状土製品(155)が出土している。柱穴 4本の主柱穴と、7本のピットが検出された。各主柱穴の規模(短径×長径×深さ)は、P1:32×33×29cm、P2:41×46×27cm、P3:35×36×7cm、P4:28×28×8cmである。主柱穴のうちP1とP3は、対角線上にのっているが、P2・P4は対角線より南西側にずれている。さらにP2は他の主柱穴を結んだ形が長方形になるのに対してP3側にずれており、主柱穴を結んだ形を台形にしている。7本のピットのうちP5・P6・P7は、それぞれP1・P3・P4の外側にあり、主柱穴を結ぶ直線上にのる位置にある。P8はごく小さなピットであるが主柱穴を結んだ形が長方形になるときP2があるべき位置である。他の3本は規格的な位置には掘



第30図 2区4号住居

第5章 古墳時代初期の遺構と遺物



第31図 2区4号住居出土遺物

られていない。

遺物 遺物は129点が出土している。床面にも多くの土器が残されていた。変形土器(146)は住居北東壁際の床面直上で出土した。ハケメ整形の変形土器(145・147)は住居中央部で床面近くから出土した。鉢形土器(148)は中央部西寄り、小形器台形土器(150)は東壁際で、特殊器台形土器(149)は南壁寄り、それぞれ床面近くから出土した。変形土器(152・153)、壺形土器(154)破片は埋没土中から出土した。炉から出土した棒状土製品(155)はP2付近の破片とも接合した。(遺物観察表：8頁)

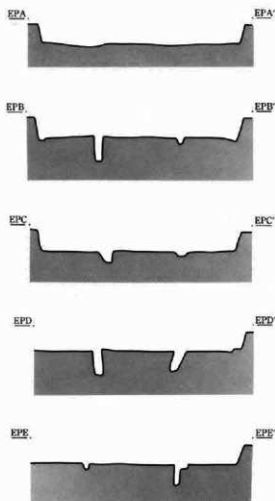
所見 出土遺物から、古墳時代初頭の住居と考えられる。

2区11号住居

位置 Hs・t-8グリッド 写真 P L15
重複 南西壁を9号・10号住居に切られている。
形状 南西壁のほとんどが壊されているが、他の三壁の形状からすれば、隅の丸い正方形を呈すると考えられる。周壁は直線的に掘られている。
面積 17.2m² 方位 N-30°-W
床面 遺構確認面から48cmほど掘り込んで床面となる。支柱穴に囲まれた範囲は硬化していた。
周溝 北西壁の南半分、南東壁の南半分の壁沿いに、幅10~15cmの周溝が検出された。
埋没土 浅間C軽石を多く含む黒色土・黒褐色土で埋まっていた。最上層部には二次堆積と考えられる浅間C軽石のブロックが堆積していた。



- 1~3層 9号・10号住居埋没土
4. 黒色土 浅間C軽石を多量に含む。
5. 黒褐色土 浅間C軽石と褐色土壌を含む。
6. 黒褐色土 浅間C軽石を含む。
7. 黒色土 浅間C軽石と黄褐色土壌を含む。



第32図 2区11号住居

0 1:80 4m

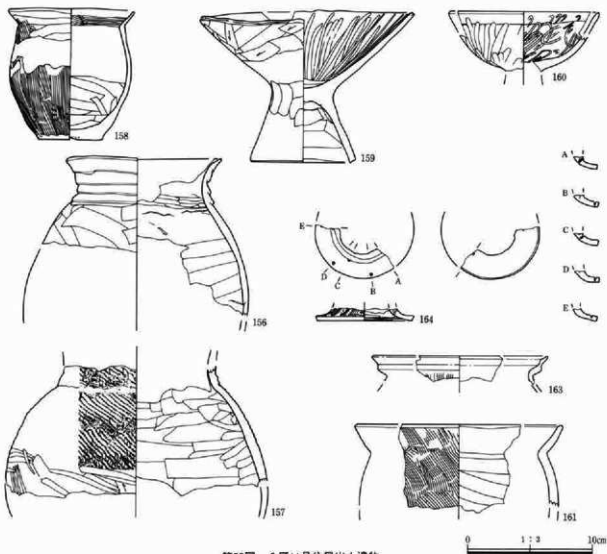
第5章 古墳時代初頭の遺構と遺物

炉 主柱穴P1・P4を結んだ線のすぐ外側に炉が検出された。炉は住居壁と直交する方向に長い楕円形で、長軸66cm、短軸46cm、中央部の深さ1.5cmほどである。住居内側の端部には、長さ23cmの棒状跡が炉を区切るように据えられていた。顯著に赤土化した部分はなかった。

柱穴 4本の主柱穴が検出された。各主柱穴の規模(短径×長径×深さ)は、P1:31×32×24cm、P2:25×28×8cm、P3:18×18×18cm、P4:19×20×51cmである。主柱穴のうち、P1・P2・P4は住居の対角線上に位置しているが、P3だけはやや西にずれている。したがって各主柱穴を結んだかたちは台形を呈する。P3の南側にあるP5は、外

側ではあるが、対角線上にあるピットである。P5の規模は18×20×18cmである。

遺物 土器は、156~159の甕形土器・160の高杯形土器が床面直上から出土している。160が中央部から出土した以外は、住居東隅にまとまって出土した。159は台付甕形土器であるが、上半部の破片はなく、破損後の再利用と考えられる。埋没土中からは80片余りの土器片が出土しているが、20片ほどの縄文施文・磨き調整の弥生土器の他は、ハケメ・寛削り整形の破片であった。164は小さい台状の形態を呈するが、詳細は不明である。(遺物観察表:8・9頁)
所見 出土遺物から、古墳時代初頭の住居と考えられる。



第33図 2区11号住居出土遺物

2区12号住居

位置 Ib-11グリッド 写真 P.L16

重複 女堀によって南側の大半を切られている。

形状 残存する北隅の形状からすれば、方形を呈すると考えられるが、規模は不明である。

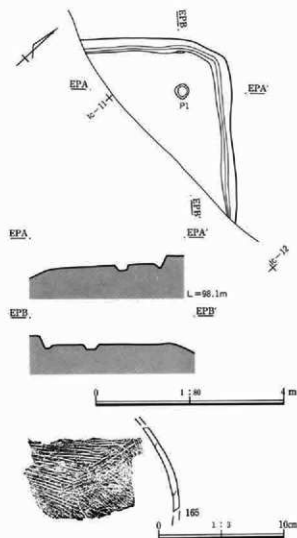
面積 計測不可 北西壁方位 N-51'-W

床面 遺構確認面から33cmほど掘り込んで床面となる。床面はやや硬化している。

炉 残存する範囲には検出されなかった。

柱穴 1本の主柱穴が検出された。規模(短径×長径×深さ)は、P1:28×28×85cmである。

遺物 15片ほどの土器が出土しているが、すべて埋設土中の出土で、小破片である。図示したのはハ



第34図 2区12号住居と出土遺物

ケメ整形の甕形土器の破片である。

(遺物観察表:9頁)

所見 出土遺物から、古墳時代初頭の住居と考えられる。

2区19号住居

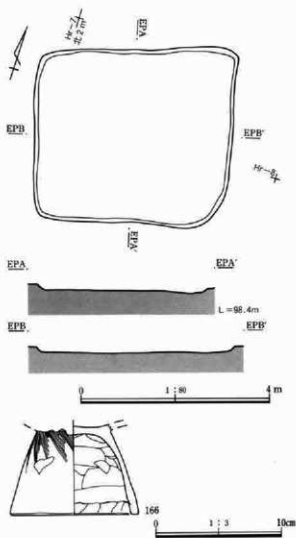
位置 Hq-7グリッド 写真 P.L15

重複 重複遺構はないが、20号住居と近接する。

形状 北東隅がやや膨らんだ隅丸の台形を呈する。周壁は直線的に掘られているが、隅になるとやや膨らむ。規模は長軸4.22m、短軸3.63mである。

面積 13.8㎡ 方位 N-74'-E

床面 遺構確認面から10~15cm掘り込んで床面と



第35図 2区19号住居と出土遺物

第5章 古墳時代初頭の遺構と遺物

なる。床面はあまり硬化していない。

遺物 東壁際床面直上でハケメ・磨き整形の土器片が出土しているが、図示できなかった。図示した台付甕形土器(166)は埋没土中の出土である。

(遺物観察表：9頁)

所見 出土遺物から、古墳時代初頭の住居と考えられる。

2区20号住居

位置 Hq-6 グリッド 写真 PL16

重複 重複遺構はないが19号住居と近接している。

形状 隅丸の正方形に近い長方形を呈する。周壁は直線的に掘られているが、隅や南西壁は膨らんでいる。規模は長軸4.05m、短軸3.75mである。

面積 12.1m² 方位 N-39'-W

床面 遺構確認面から15~20cmほど掘り込んで床

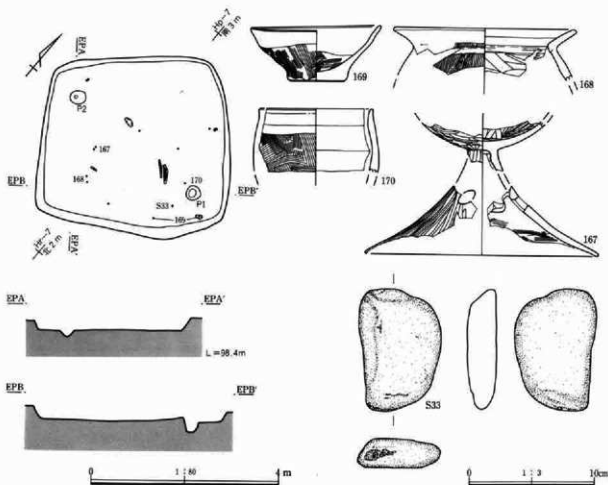
面となる。中央部は硬化している。P1付近には床面直上に炭化材が残っていた。

柱穴 2本の主柱穴と思われる柱穴が検出された。この2本の柱穴は対角の位置にある。各主柱穴の規模(短径×長径×深さ)は、P1：30×31×21cm、P2：27×33×12cmである。

遺物 110点ほどの遺物が出土した。図示した土器は、168の甕形土器が床面から7cm浮いた状態で出土した他は、床面直上の出土である。住居ほぼ中央部に出土した際は、長さ21.4cm、幅8.6cm、重さ1860gのひん岩で、使用痕は不明確であるが、床面に据えられたような状態で出土している。鉢形土器(169・170)、敲石(S33)は柱穴P1の周辺から出土。

(遺物観察表：9頁)

所見 出土遺物から、古墳時代初頭の住居と考えられる。



第36図 2区20号住居と出土遺物

2区33号住居

位置 Hs-4グリッド 写真 PL17~20
 形状 対角線を南北方向にする長方形を呈する。
 隅は比較的丸くない。やや東隅が北に寄っている。
 周壁は直線的に掘られている。規模は長軸7.1m、短
 軸6.2mで、本遺跡で検出された住居の中では大形の
 住居である。

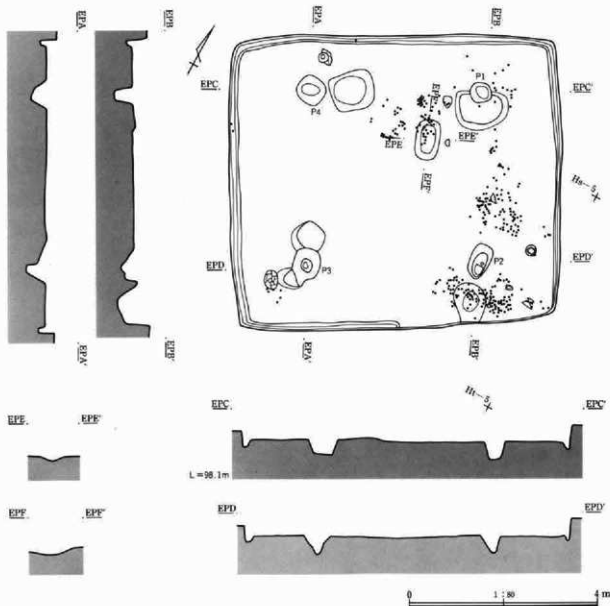
面積 39.6㎡ 方位 N-30°-W
 床面 遺構確認面から40cmほど掘り込んで床面と
 なる。床は硬化している。主柱穴のうちP1・P3・
 P4の周囲には、ほぼ円形に5cmほど床面が高まっ

ている部分があった。

周溝 南東壁の北半分を除いて、幅16~20cmほど
 の周溝が検出された。周溝が途切れる南東壁北半
 には、後述するP5がある。

炉 主柱穴P1・P4を結んだ線の内側で、中
 央からややP1寄りに炉が検出された。

柱穴 4本の主柱穴が検出された。各主柱穴の規
 模(短径×長径×深さ)は、P1:42×44×40cm、P
 2:45×75×27cm、P3:61×65×45cm、P4:63×
 65×30cmである。P1・P3は対角線上に位置する
 が、P2は南へ、P4は北へそれぞれずれている。



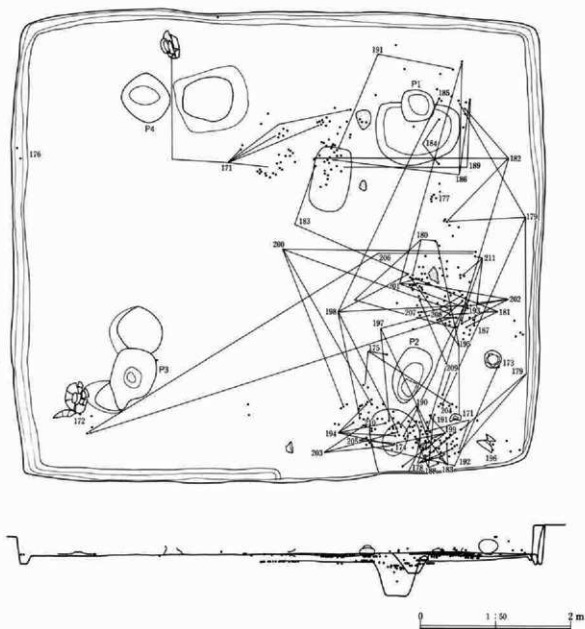
第37図 2区33号住居

第5章 古墳時代初頭の遺構と遺物

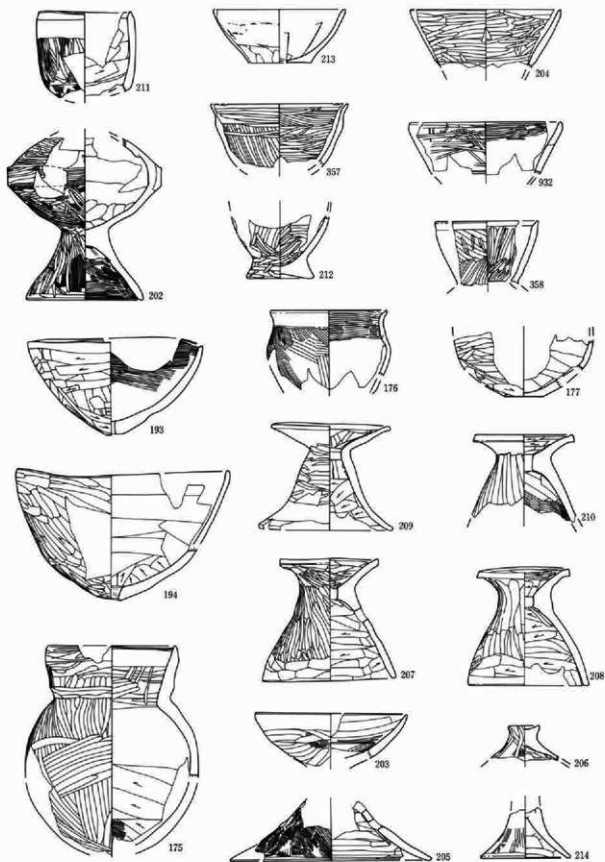
各支柱穴を結んだ形はほぼ正方形を呈する。また、支柱穴P2と壁との間にP5が検出された。P5は長径86cm、短径64cm、深さ47cmの楕円形のピットで、多くの土器が底面に貼りつくように出土している。P5の位置は、周溝が途切れる部分であり、何等かの施設があったものと考えられる。

遺物 多量の遺物が出土している。図示できたものだけでも51点を数え、他に700点余りの土器が埋没

土中から出土した。図示した遺物のうち、ほとんどが床面直上から出土している。遺物は住居の東半部にその多くが出土しているが、特にP1の南西部、P1とP2の間、P5の周囲の3カ所に集中地点がある。これを器種ごとにもみると、壺形土器や高杯形土器、鉢形土器等の小形土器がP2・P5周辺に集まる傾向があるのに対して、壺形土器はP1からP5周辺の遺物集中地点の全体に及んでいる。さら

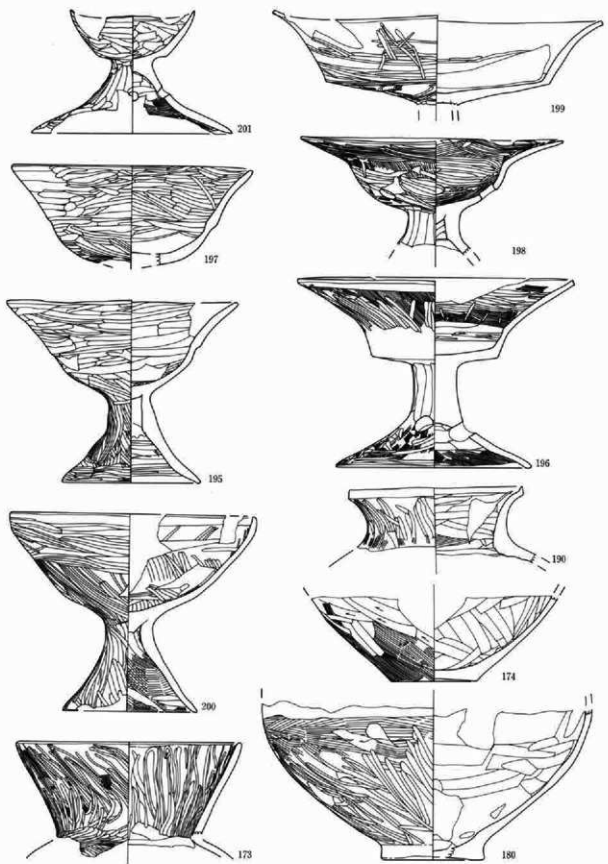


第38図 2区33号住居遺物分布



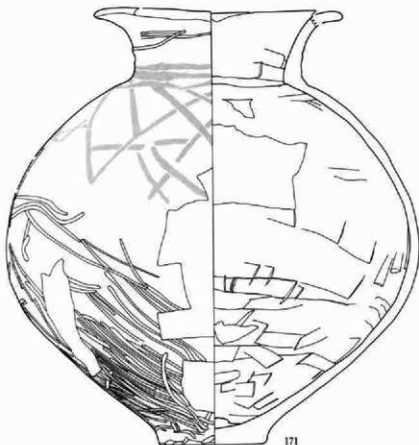
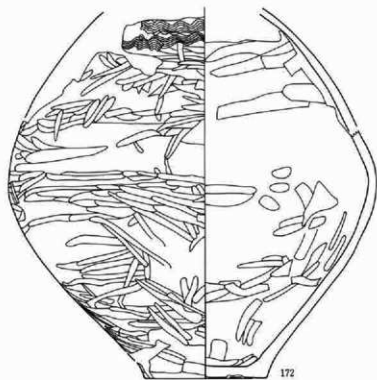
第39図 2区33号住居出土遺物(1)

0 1:3 10cm



第40図 2区33号住居出土遺物(2)

0 1:3 10cm



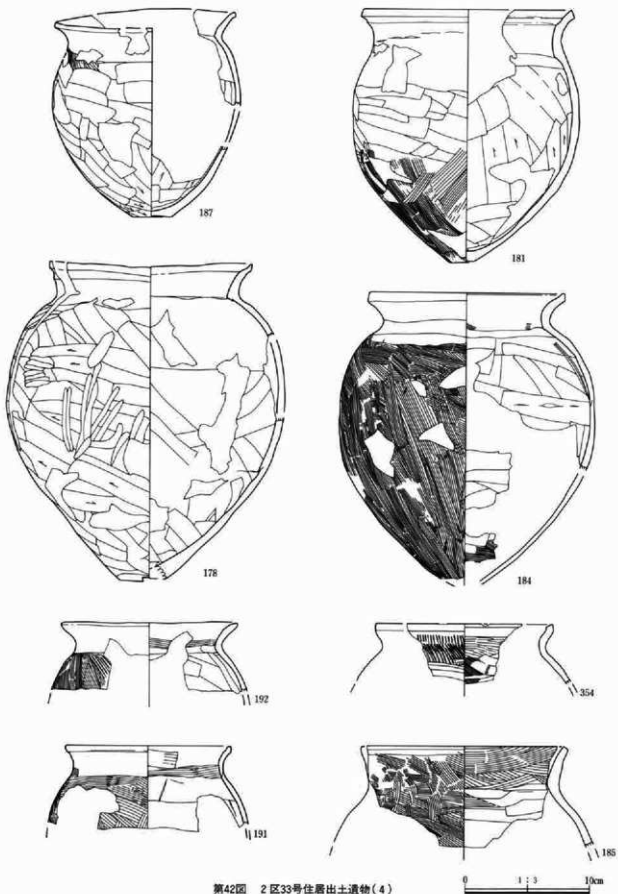
に、これらの土器には出土地点の離れた土器間に接合関係があるが、时期的には一括性のあるものと考えられ、住居廃絶時の特殊な状態を想定させる。大形の壺形土器はこれらの集中地点から離れ、172がP 3の西側、171がP 4の北側の床面直上で出土している。なお、鉢形土器(212・213・357)、壺形土器(358・932)、甕形土器(214・354・355・356)、紡錘車(215)は埋没土中の出土であるが、床面近くからのもので、床面直上出土遺物と一括の遺物と判断した。

(遺物観察表：9～12頁)

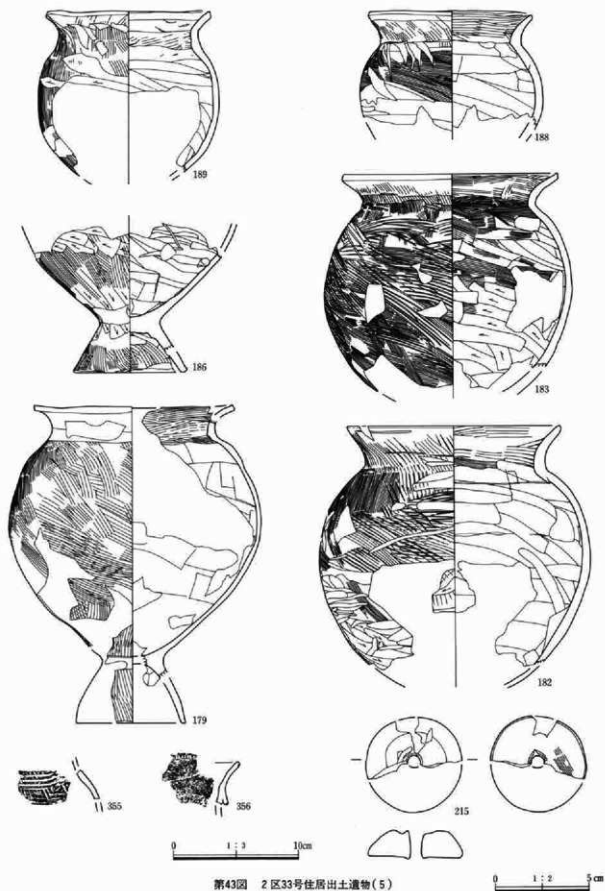
所見 北陸東北部系の土器が多量に出土している住居である。出土遺物から古墳時代初頭の住居と考えられる。

第41図 2区33号住居出土遺物(3)

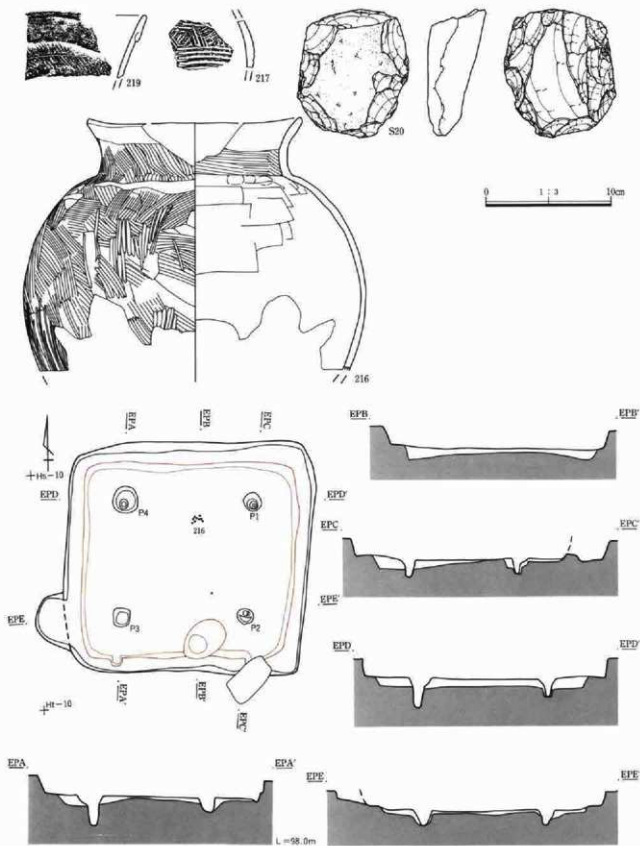




第42図 2区33号住居出土遺物(4)



第43図 2区33号住居出土遺物(5)



第44図 2区37号住居と出土遺物

2区37号住居

位置 Hs-10グリッド 写真 P L16

形状 一辺を南北方向とする、隅の丸い長方形を呈する。周壁は直線的に掘られているが、隅の丸みは大きい。規模は長軸5.19m、短軸4.37mである。南西隅の円形の張り出し部分は、住居に伴うものではない。

面積 16.6m² 方位 N-2°-E

床面 遺構確認面から50cmほど掘り込んで床面となる。床面は掘り方を埋めてつくられている。床面の外周幅30cmほどは地山のまま床面となっているが、中央部分は、外形よりも一回り小さい方形の掘り方が掘られている。掘り方の底面は平らでなく、北部・中央部がやや高まる傾向がある。

炉 確実に炉と断定できる部分は検出できなかった。

柱穴 4本の支柱穴が検出された。各支柱穴の規模(短径×長径×深さ)は、P1:18×21×18cm、P2:55×63×28cm、P3:42×49×21cm、P4:24×24×41cmである。支柱穴は対角線上に位置し、各支柱穴を結ぶ形は長方形を呈する。南壁沿い、P2の南西側のP5は、掘り方調査段階に検出されたピットであるが、床面では明確にとらえられなかった。

遺物 100点余りの遺物が出土している。図示した菱形土器(216)は、中央部やや北寄りて4.5cm床面から浮いた状態で出土した。他の3点は埋没土中からの出土である。(遺物観察表:12頁)

所見 本住居の調査当初は、柱穴を共有する拡張住居の二面の床面とも考えたが、下面は凹凸があり平らでないことや、遺物が上の面近くで出土している状態等から、上の面を床面、下の面を掘り方と考えたい。出土遺物から、古墳時代初頭の住居と考えられる。

2区48号住居

位置 Hq-3グリッド 写真 P L21

重複 47号住居に南側半分を切られている。

形状 残存する部分からみると、一辺をほぼ南北方向にする隅丸の方形を呈するが、南北方向の長さは不明である。東西方向は5.10mである。

面積 計画不可 方位 N-7°-W
炉 検出できなかった。

床面 遺構確認面から26cmほど掘り込んで床面となる。床面はほぼ平らでやや硬化していた。

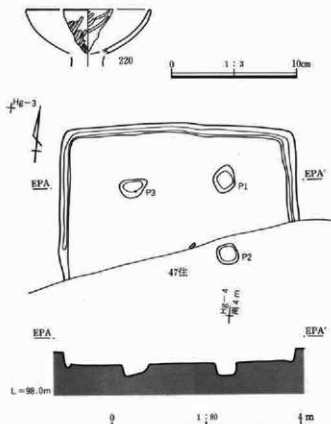
周溝 検出された東壁・北壁・西壁の北半部に幅16~20cmの周溝が検出された。

柱穴 3本の支柱穴を検出した。各支柱穴の規模(短径×長径×深さ)は、P1:46×57×32cm、P2:42×45×15cm、P3:37×59×22cmである。南西隅の支柱穴は痕跡らしいものは検出されたが、柱穴と確認できなかった。

遺物 遺物は20点余り出土したのみである。図示した高杆形土器(220)は埋没土中から出土した。

(遺物観察表:13頁)

所見 出土遺物から、古墳時代初頭の住居と考えられる。



第45図 2区48号住居と出土遺物

2区49号住居

位置 Hq-8グリッド 写真 PL21

重複 南東壁を40号住居に、北東壁を41号住居に切られている。また、北隅で52号住居を切っている。

形状 対角線を南北方向とする隅丸長方形を呈する。周壁は直線的に掘られているが、隅は緩やかに丸い。東隅は明確にとらえられなかった。規模は長軸4.87m、短軸推定4.00mである。

面積 計画不可 方位 N-49°-E

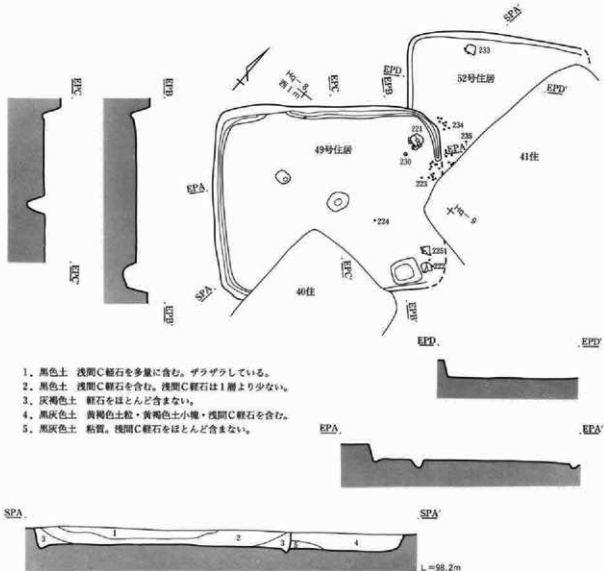
床面 遺構確認面から35cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平らで、全体が硬化している。

周溝 北隅から北西壁にかけてと、西隅から南西

壁・南隅にかけての二カ所に幅10~15cmの周溝が検出された。東隅の部分は明確にとらえられなかった。埋没土 第一次埋没土は、軽石を含まない灰褐色土であり、上層に浅間C軽石を多量に含む黒色土が堆積している。

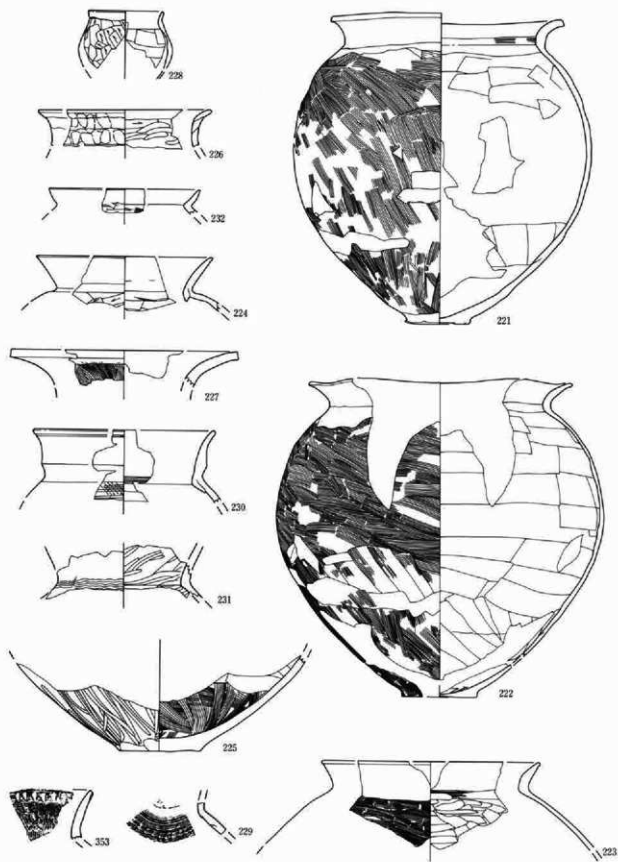
炉 確実に炉と断定できる施設は検出できなかった。住居ほぼ中央に短径38cm、長径48cm、深さ36cmほどの楕円形のピットがあるが、特別に焼土の出土がめだった様相はなかった。

柱穴 主柱穴は検出できなかった。前述のピットの他にピットが1本西部に検出されているが、位置からすると主柱穴とも考えられるが、断定できない。



1. 黒色土 浅間C軽石を多量に含む。ザラザラしている。
2. 黒色土 浅間C軽石を含む。浅間C軽石は1層より少ない。
3. 灰褐色土 軽石をほとんど含まない。
4. 黒灰色土 黄褐色土粒・黄褐色土小塊・浅間C軽石を含む。
5. 黒灰色土 粘質。浅間C軽石をほとんど含まない。

第46図 2区49号・52号住居



第47図 2区49号住居出土遺物

第5章 古墳時代初頭の遺構と遺物

規模は短径26cm、長径30cm、深さ17cmの小さいものである。

貯蔵穴 南東壁沿いの東端に貯蔵穴と考えられる隅丸方形のビットが検出された。長軸60cm、短軸52cmのやや台形で、底面はほぼ平らである。

遺物 遺物は170点余りが出土している。床面直上出土の遺物は、北東壁沿いに集中して出土している。北隅ではハケメ整形の甕形土器(221)が横になって出土した。南隅でも同様の甕形土器(222)が床面直上で出土している。(遺物観察表：13頁)

所見 出土遺物から、古墳時代初頭の住居と考えられる。

2区52号住居

位置 Hp-8グリッド 写真 PL21

重複 東半分を41号住居に、南西壁を49号住居に

切られている。

形状 残存した部分から推すと、方形と考えられるが、規模は不明である。周壁は直線的に掘られている。西隅は小さく丸い。

面積 計測不可 方位 N-49°-E
床面 遺構確認面から35cmほど掘り込んで床面としている。床面はほぼ平らで、硬化している。

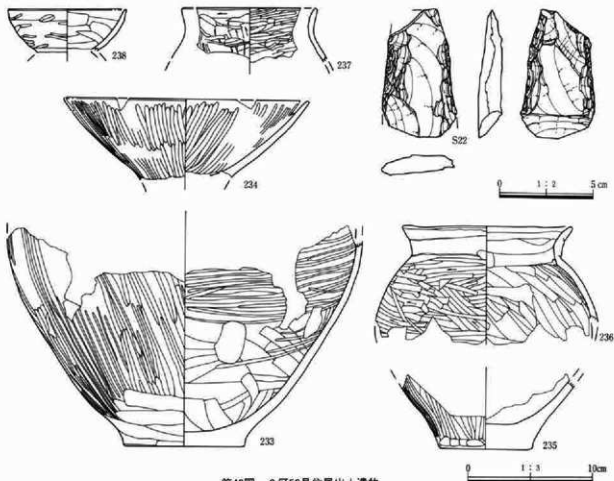
埋没土 第一次埋没土は浅間C軽石を含まない黒色土で上層は浅間C軽石を含む黒色土が堆積している。

炉 残存している範囲には検出されなかった。

柱穴 残存している範囲には検出されなかった。

遺物 70点余りの遺物が出土している。図示した遺物のうち、壺形土器(233・235)、高杯形土器(234)、壺形土器(235)は床面直上から出土した。他は埋没土中の出土遺物である。(遺物観察表：13・14頁)

所見 古墳時代初頭の住居と考えられる。



第48図 2区52号住居出土遺物

2区55号住居

位置 Ho-4・5グリッド 写真 PL22

重複 北隅に54号住居が後出して重複するが、55号住居の方が深く、北隅周辺の壁・床面は残存する。
 形状 対角線を南北方向にする。隅丸のほぼ正方形を呈する。周壁は直線的に掘られ、隅の丸みは比較的少ない。規模は長軸5.35cm、短軸5.10cmである。
 面積 22.7㎡ 方位 N-23-E

床面 遺構確認面から37cmほど掘り込んで床面となる。床面はほぼ平らで、中央部が硬化している。埋没土 床面直上の第一次埋没土は軽石を含まない褐色土や黒色土で、その上に一部で浅間C軽石の純堆積層が残っている。さらに上層には軽石を含む黒色土と、地山ブロックを多く含む土が入り込んでいる。地山ブロックの入る土層は東側に顕著である。

炉 主柱穴P1とP4を結んだ線よりやや北東壁寄りに、炉が検出された。長軸52cm、短軸39cmの楕円形に床面が焼土化しており、住居内部側の端に棒状礎が2個縦列に据えられていた。他に出土遺物はない。

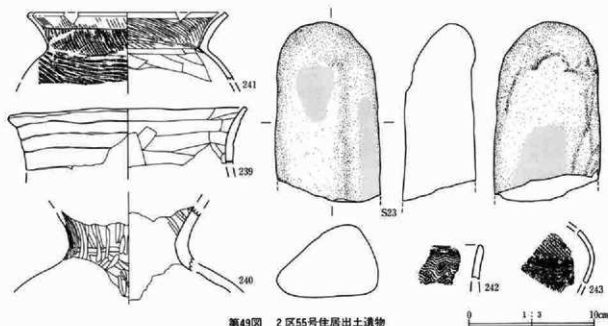
柱穴 4本2組、合計8本の主柱穴と、3カ所4本のピットが検出された。各主柱穴は住居の対角線上にあり、P1～P4は内側、P5～P8はその外

側40cm(対角線方向)の位置に掘られている。各主柱穴の規模(短径×長径×深さ)は、P1:29×29×49cm、P2:20×22×50cm、P3:15×20×37cm、P4:22×25×41cm、P5:22×23×48cm、P6:15×16×56cm、P7:18×19×46cm、P8:14×16×40cmである。内側のP1～P4より、外側のP5～P8の方が細い傾向がある。P9(26×27×27cm)とP10(31×37×28cm)は、それぞれP5とP8の外側で、住居対角線より南西側にある。南東壁、北西壁からの距離はそれぞれ異なり、P9は壁に近く、P10は壁からやや離れている。P11・P12は南西壁の中央の壁沿いにある。P11は32×40×39cmで、底面の形が幅4cm、長さ16cmの長方形をしている。P12はP11の南側に隣接している45×53×14.5cmの楕円形の浅いピットである。P11・P12は、炉と対峙する位置にあり、入り口施設と考えられる。

遺物 150点余りの遺物が出土している。床面直上に残された遺物は破片が多く、図示し得たものは少ない。壘形土器(239)、壺形土器(240)が床面直上で出土したもので、他は埋没土中の出土である。

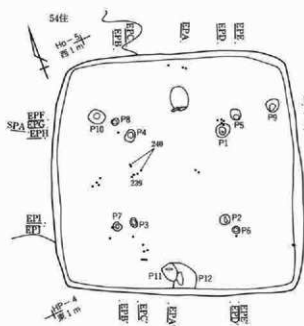
(遺物観察表:14頁)

所見 出土遺物から、古墳時代初頭の住居と考えられる。

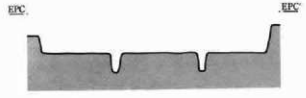
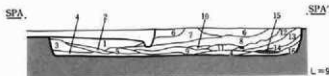


第49図 2区55号住居出土遺物

第5章 古墳時代初頭の遺構と遺物



1. 黒褐色土 浅間C軽石を多量に含む。
2. 黒色土
3. 褐色土 黄褐色土粒を少量含む。
4. 褐色土 黄褐色土粒を少量含む。
5. 暗褐色土 浅間C軽石を1層よりやや少なく含む。
6. 黄褐色土 浅間C軽石・黄褐色土粒を含む。
7. 黒褐色土 浅間C軽石・黄褐色土粒を含む。
8. 褐色土 浅間C軽石・黄褐色土塊を含む。
9. 黒色土 浅間C軽石を多く含む。
10. 黄褐色土塊
11. 褐色土 黄褐色土塊・浅間C軽石を含む。
12. 黒色土 浅間C軽石を含む。
13. 灰褐色土 粘質
14. 黒褐色土 浅間C軽石を少量含む。
15. 浅間C軽石純堆積層
16. 黒色土 上部に浅間C軽石を若干含む。



第50図 2区55号住居



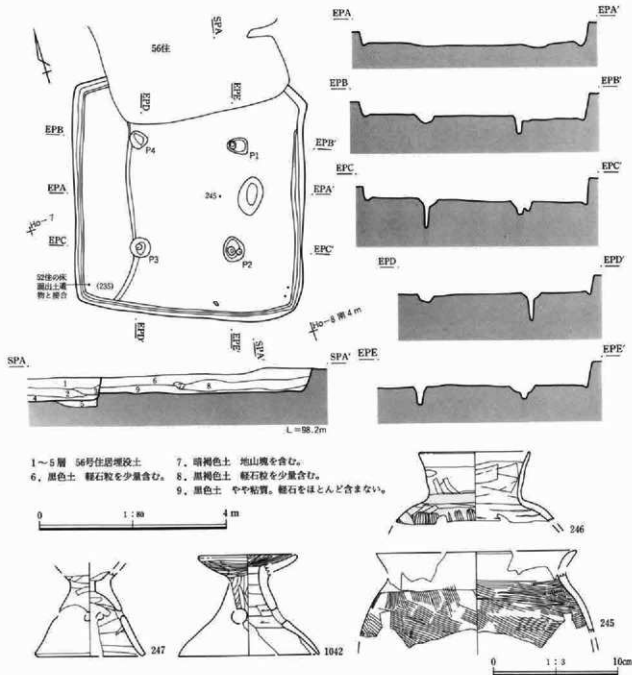
2区57号住居

位置 Hn・0-7グリッド 写真 PL23
 重複 北東壁が56号住居に切られている。
 形状 対角線を南北方向にする正方形を呈する。
 北東壁はやや膨らむが、他の周壁は直線的に掘られている。規模は長軸4.85m、短軸4.82mである。
 面積 21.1m² 方位 N-109°-E
 床面 遺構確認面から50cmほど掘り込んで床面と

なる。北西壁沿いには幅0.9~1.0mのいわゆるベッド状遺構が検出された。高くなっているのは、支柱穴P3とP4を結んだ線の外側で、東側の低いほうの床面との比高は3~4.5cmである。東側の床面の方が硬化している。

周溝 北東隅を除いた周壁沿いに幅10~16cmの周溝が検出された。

埋没土 第一次埋没土の黒色土には軽石をほとんど



第51図 2区57号住居と出土遺物

第5章 古墳時代初頭の遺構と遺物

含まない。上層の褐色土に軽石を少量含んでいた。

炉 主柱穴P1とP2を結んだ線のすぐ外側、中央に炉が検出された。長軸80cm、短軸51cmの楕円形で、深さは6cmである。長軸は東壁に平行する。

柱穴 4本の主柱穴が検出された。各主柱穴の規模(短径×長径×深さ)は、P1:33×43×37cm、P2:45×53×27cm、P3:42×43×58cm、P4:38×45×14cmである。主柱穴のうち、P2・P3は対角線上にのるが、P1・P4はややずれている。各主柱穴を結んだ形は平行四辺形を呈する。

遺物 90点余りの遺物が出土している。床面直上の遺物は少なく、図示できた遺物のうち壺形土器(245)は、炉の西側で床面から16cmほど浮いて出土している。器台形土器(247)や壺形土器(246)は埋没土中の遺物である。また、南西隅の床面直上から出土した破片が52号住居の床面直上出土遺物(235・壺形土器)と接合している。(遺物観察表:14頁)

所見 出土遺物から、古墳時代初頭の住居と考えられる。

2区59号住居

位置 Hp-6グリッド 写真 PL24

重複 北西部が58号住居に切られている。また、西部は後世の擾乱で削られて、床面は残っていない。
形状 対角線を南北方向にする、隅の丸い長方形を呈すると推定されるが、長軸の長さは不明である。短軸は4.30mである。

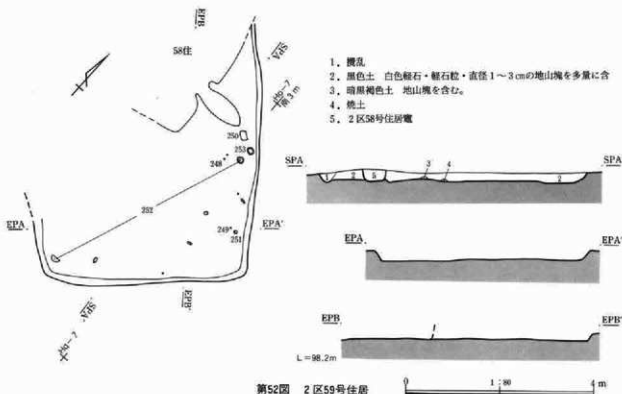
面積 計測不可 方位 N-47°-E

床面 遺構確認面から18cm掘り込んで床面となる。床面は中央部にやや凹凸がある。

埋没土 軽石を含む黒色土でうまっている。

炉 残存する範囲の中で検出されなかった。
柱穴 検出されなかった。

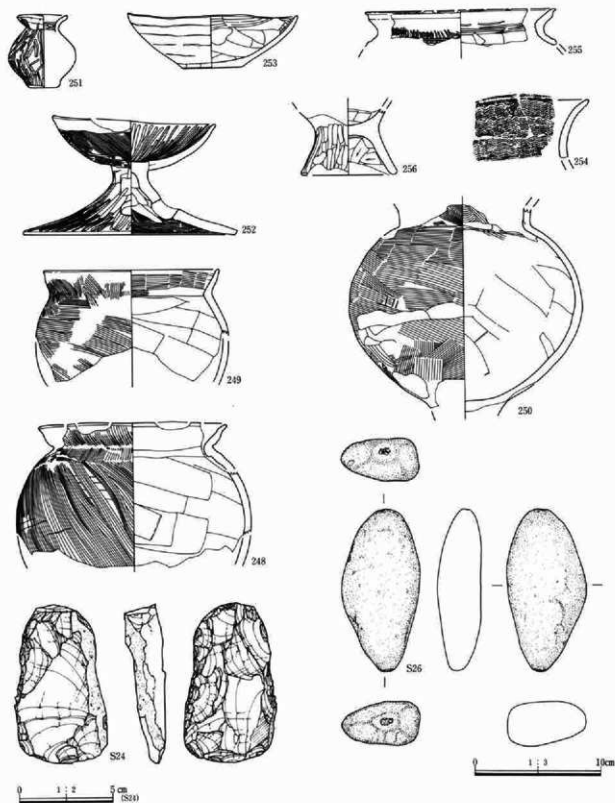
遺物 180点余りの遺物が出土した。床面直上の遺物は住居北東壁に集中している。小形壺形土器(251)、壺形土器(249)は北東壁の南端で出土した。鉢形土器(253)、壺形土器(248・250)は北東中央部で出土した。高杯形土器(252)は南隅で床面から12cm浮いて出土した脚部と、鉢形土器(253)の脚で床面直上で出土した杯部の破片が接合したものである。図示



第52図 2区59号住居

した他の遺物は埋没土中から出土した。
(遺物観察表：14・15頁)

所見 出土遺物から、古墳時代初頭の住居と考えられる。



第53図 2区59号住居出土遺物

2区60号住居

位置 Hq・r-9・10グリッド 写真 P L 23

重複 北西部に後出する46号住居が重複するが、60号住居の方が深いので、60号住居の壁・床面は残っている。

形状 対角線を南北方向にする、隅の丸い長方形を呈する。周壁は直線的に掘られている。規模は長軸5.55m、短軸5.03mである。

面積 24.2㎡ 方位 N-33°-W

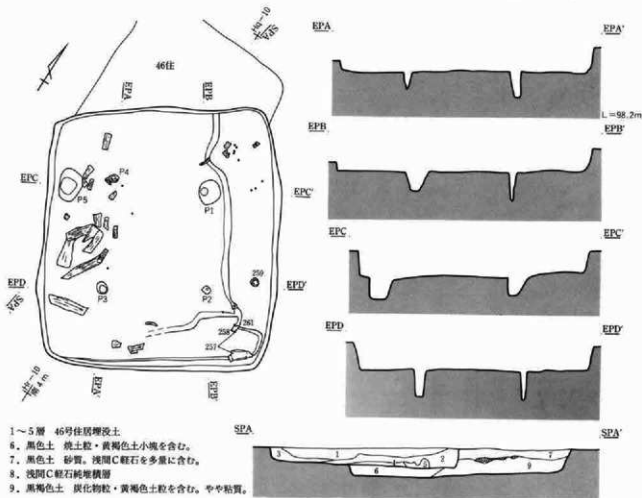
床面 遺構確認面から20cmほど掘り込んで床面となる。北東壁と南東壁沿いは0.9~1.0mの幅でやや床面が高くなっている。南隅付近になると幅は0.5mほどになって、高まりが消失する。高くなっているのは、主柱穴P1とP2を結んだ線の外側で、西側の低いほうの床面との比高は5cmである。南西壁沿

いには炭化材が多量に遺存していた。

埋没土 下半部は焼土粒や炭化物粒を含んだ黒褐色土・黒色土で埋まっている。中位に浅間C軽石のブロックが堆積し、上半部には浅間C軽石を多量に含む黒色土が堆積していた。

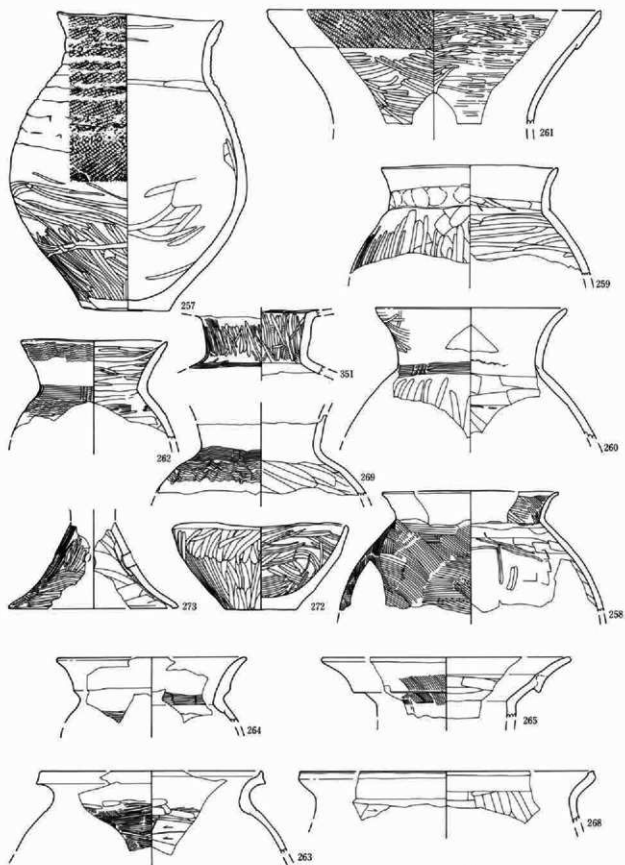
炉 確実に炉と断定できる施設を検出できなかった。主柱穴P3とP4の間には炭化材や炭化物が多量に出土したが、炉とは断定できなかった。

柱穴 4本の主柱穴が検出された。各主柱穴の規模(短径×長径×深さ)は、P1:45×51×38cm、P2:17×17×57cm、P3:23×24×45cm、P4:14×21×35cmである。主柱穴のうちP1とP3は対角線上にほぼのるが、P2・P4は北側にややずれている。各主柱穴を結んだ形は台形を呈する。南西壁中央やや北側でP4の外側に楕円形のピット(P5)が



- 1~5層 46号住居埋没土
 6. 黒色土 焼土粒・黄褐色土小塊を含む。
 7. 黒色土 砂質。浅間C軽石を多量に含む。
 8. 浅間C軽石純堆積層
 9. 黒褐色土 炭化物粒・黄褐色土粒を含む。やや粘質。

第54図 2区60号住居



第55図 2区60号住居出土遺物

0 1:3 10cm

第5章 古墳時代初頭の遺構と遺物

検出された。規模は50×70×44cmで、長軸は南西壁に平行する。

遺物 540点余りの遺物が出土している。床面直上出土遺物は北東壁沿いの一段高い床面の部分に集中する傾向がある。壺形土器(259)は北東壁中央やや南寄りで、壺形土器(261)、壺形土器(257-258)が東隅で出土している。(遺物観察表：15・16頁)

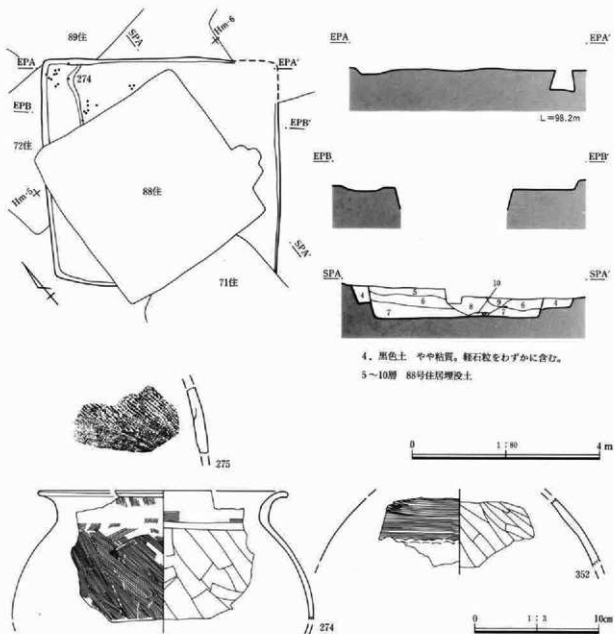
所見 出土遺物から、古墳時代初頭の住居と考えられる。

2区64号住居

位置 Hm-5グリッド 写真 PL25

重複 北西壁を後出する72号住居が重複しているが、64号住居の方が深いので、64号住居の壁・床面は残っている。また東隅・南隅及び中央が、それぞれ70号住居・71号住居・88号住居に切られている。さらに北隅が同時期の89号住居と重複しているが、64号住居の方が後出する。

形状 対角線を南北方向にする長方形を呈する。



4. 黒色土 やや粘質、軽石殻をわずかに含む。
5-10層 88号住居埋没土

第56図 2区64号住居と出土遺物

周壁は直線的に掘られ、隅は丸くない。規模は長軸5.04m、短軸4.85mである。

面積 計測不可 方位 N-39°-E
床面 遺構確認面から15cm掘り下げて床面となる。住居中央部は88号住居に壊されていて、床面のようすは不明である。周辺部は硬化していなかった。北隅は、幅70cm、深さ6cmほどくぼんでいるが、床面は平らだった可能性もある。

埋没土 軽石を少量含む黒色土で埋まっていた。

炉 残存している範囲では検出できなかった。

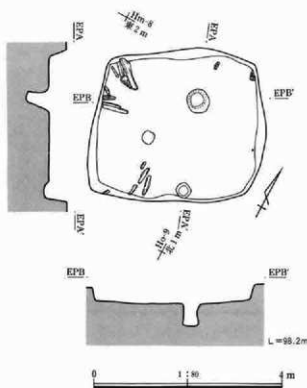
柱 穴 残存している範囲では検出できなかった。

東隅に直径36cm深さ41cmの円形フラスコ状のピットが検出されたが、住居に伴うかどうかは不明である。

遺物 100点余りの遺物が出土した。床面近くから出土した遺物は、北隅に集中する傾向があるが、床面から10cm前後浮いて出土している。壺形土器(274)は床面から13cm浮いて出土した。

(遺物観察表：16頁)

所見 出土遺物から、古墳時代初頭の住居と考えられる。



第57図 2区65号住居

2区65号住居

位置 Hn-8グリッド 写真 PL25

形状 対角線を南北方向とする台形を呈する。周壁は湾曲し、やや膨らんで掘られている。隅は丸い。規模は長軸3.69m、短軸3.12mである。

面積 9.2㎡ 方位 N-28.5°-W

床面 遺構確認面から37cmほど掘り込んで床面となる。床面はやや凹凸しているが、硬化している。南壁・西壁北半には壁から住居中央部に向かう方向の炭化材が遺存している。

炉 明確に炉と判断できる施設は検出されなかった。

柱 穴 2本のピットが検出されたが、一般的な竪穴住居と異なる形態の遺構であるので、これが支柱穴であるかどうかは不明である。P1は住居中央やや北よりある、底面の広がる形態のピットである。P2は南壁ほぼ中央の壁沿いにある円形のピットである。各ピットの規模(短径×長径×深さ)は、P1:46×49×49cm、P2:29×32×10cmである。

遺物 100点余りの遺物が出土している。床面近くから出土した遺物は少ないが、図示した高杯形土器(277)が住居中央部床面直上で出土している。鉢形土器(276)は東壁沿いで床面から8cm浮いて出土した。図示した他の遺物は埋没土中からの出土である。

(遺物観察表：16頁)

所見 出土遺物から、古墳時代初頭の住居と考えられる。

2区67号住居

位置 Hn-13グリッド 写真 PL25

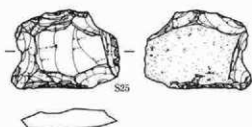
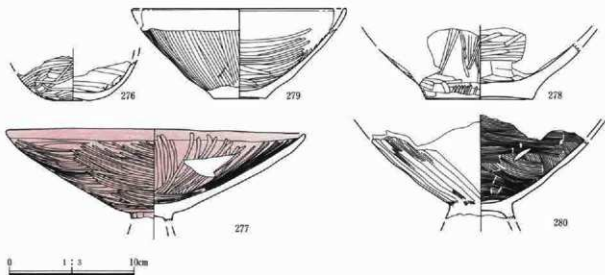
重複 北西隅を長方形土坑に、南東隅を53号住居に切られている。

形状 一辺を南北方向にする、正方形に近い平行四辺形を呈する。周壁は直線的に掘られ、隅は角張っている。規模は長軸2.26m、短軸2.11mである。

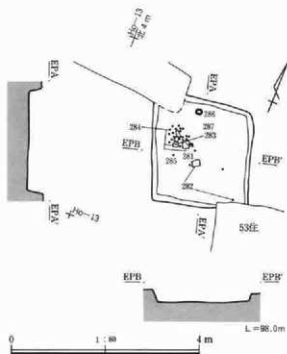
面積 3.8㎡ 方位 N-18°-W

床面 遺構確認面から25cmほど掘り込んで床面と

第5章 古墳時代初頭の遺構と遺物



第58図 2区65号住居出土遺物



第59図 2区67号住居

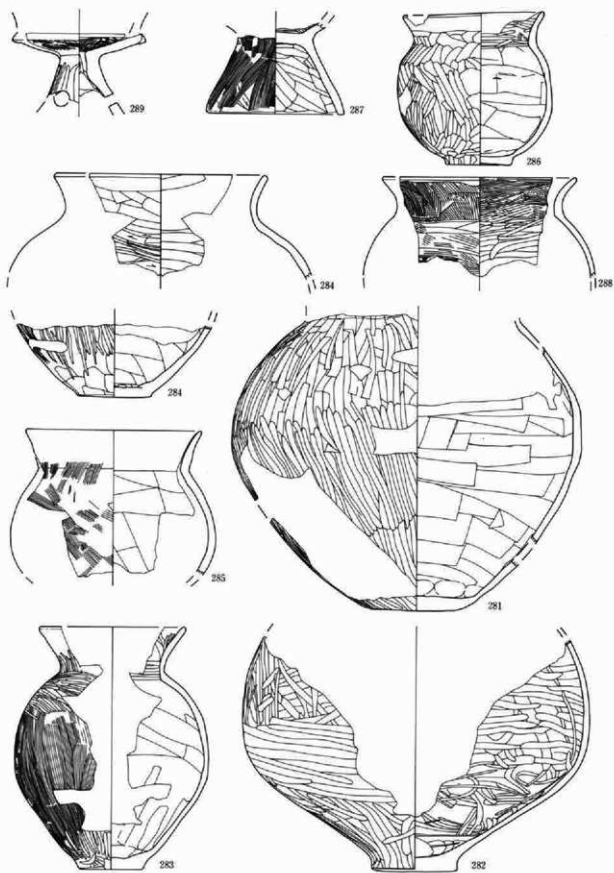
なる。床面は平らで焼土粒や炭化物片が床面に散っていた。

炉 明確に炉と判断できる施設は検出できなかった。

柱 穴 検出されなかった。

遺物 40点余りの遺物が出土したが、床面直上の遺物は小形変形土器(286)だけで、北壁ほぼ中央壁寄りに据えられていた。他の遺物は床面から25~30cm浮いた状態で出土しており、西壁沿いに集中している。(遺物観察表：17頁)

所見 小形変形土器(286)以外は遺物の出土位置は埋没土の最上層にあたり、本遺構埋没時に一括廃棄されたものと考えられる。住居の時期は小形変形土器(286)から古墳時代前期と考えられる。



第60図 2区67号住居出土遺物

2区77号住居

位置 Hj-6グリッド 写真 PL26

形状 一辺を南北方向にする隅丸長方形を呈する。周壁は直線的に掘られているが、隅は比較的丸く、特に南西隅はやや膨らんでいる。規模は長軸5.26m、短軸4.32mである。

面積 21.9㎡ 方位 N-10'-W

床面 遺構確認面から21cmほど掘り込んで床面となる。床面は平らで、やや硬化している。

周溝 南壁中央やや東の1.1mを除いて、幅12~20cmの周溝が検出された。周溝の検出されなかった部分は、主柱穴P1・P2列の延長にあるピット(P5)が検出された所である。

炉 P1とP2を結んだ線より外側で、中央に長軸80cm、短軸60cm、深さ6cmの楕円形の落ち込みが検出されている。顕著な焼土面は確認できなかったが、位置等から考えて炉と判断した。壺形土器(294)の破片が出土している。

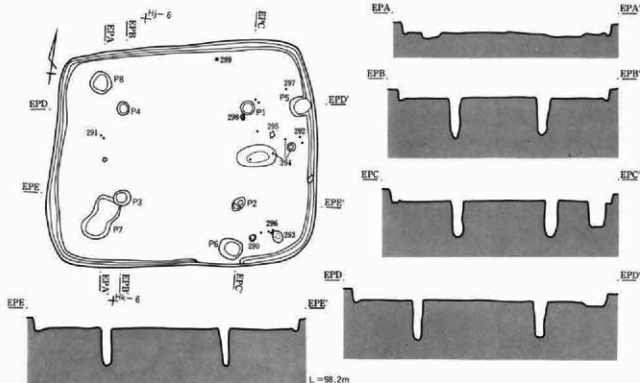
柱穴 4本の主柱穴と、4本のピットが検出された。各主柱穴の規模(短径×長径×深さ)は、P1:

26×29×77cm、P2:25×25×78cm、P3:31×34×79cm、P4:24×29×86cmである。主柱穴のうち、P2・P3・P4は対角線上にのるが、P1はやや東側にずれている。各主柱穴を結んだ形は長方形を呈する。主柱穴以外の4本のピットの位置は主柱穴と関連がある。P5はP1・P4を結んだ線と東壁との交点に、P6はP1・P2を結んだ線と南壁との交点に位置する。また、P7はP3を通る対角線上で南西隅とP3の中間に、P8はP2・P4を通る対角線上で北西隅とP4の中間にそれぞれ位置している。これらの規模(短径×長径×深さ)は、P5:40×46×9cm、P6:43×50×58cm、P7:(58)×60×5cm、P8:43×47×10cmである。

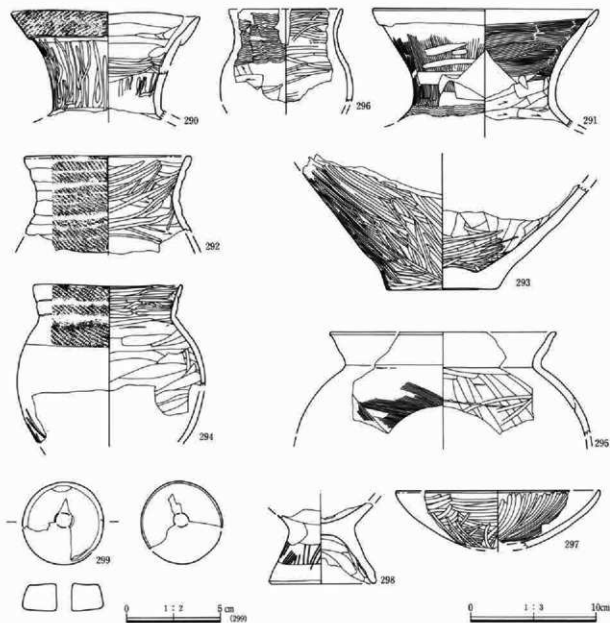
遺物 35点余りの遺物が出土した。ほとんどが床面出土遺物で、壺形土器(291)が西壁寄りに出土している以外は、ほとんど主柱穴P1・P2を結んだ線より東側、炉周辺に集中している。

(遺物観察表:17・18頁)

所見 出土遺物から、古墳時代初頭の住居と考えられる。



第61図 2区77号住居



第62図 2区77号住居出土遺物

2区83号住居

位置 Hg-8グリッド 写真 PL26

重複 東壁南半が82号住居に切られている。

形状 一边を南北方向にする隅丸の台形を呈する。南壁は直線的に掘られているが、他の三壁は膨らんでおり、北東隅・北西隅は南西隅に比べて丸み大きい。規模は長軸2.88m、短軸2.68mである。

面積 6.3㎡ 方位 N-3°-E

床面 遺構確認面から20cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平らであるが、あまり硬化していない。

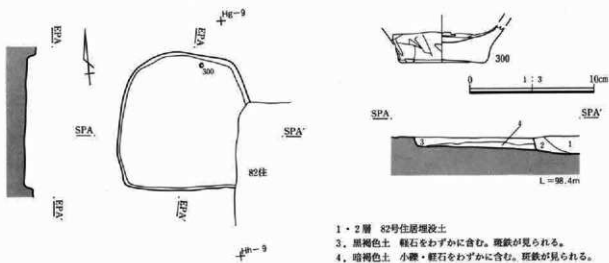
埋没土 軽石を少量含む暗褐色土・黒褐色土で埋まっていた。

炉 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

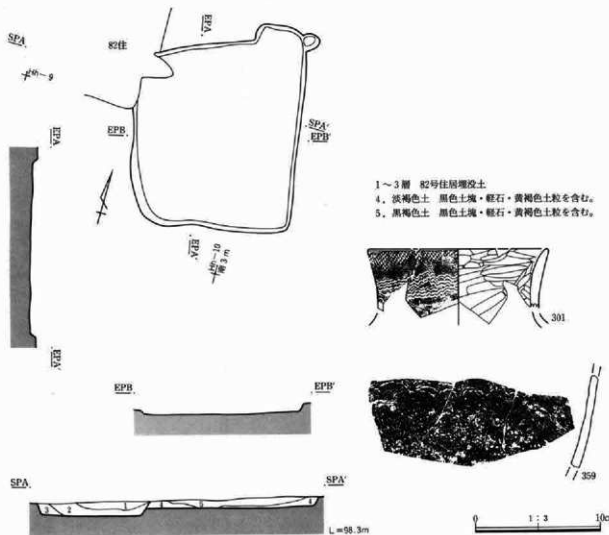
遺物 4点の遺物が出土している。図示した壺形

第5章 古墳時代初頭の遺構と遺物



- 1・2層 82号住居埋没土
- 3. 黒褐色土 軽石をわずかに含む。斑紋が見られる。
- 4. 暗褐色土 小礫・軽石をわずかに含む。斑紋が見られる。

第63図 2区83号住居と出土遺物



- 1～3層 82号住居埋没土
- 4. 淡褐色土 黒色土塊・軽石・黄褐色土粒を含む。
- 5. 黒褐色土 黒色土塊・軽石・黄褐色土粒を含む。

第64図 2区84号住居と出土遺物

土器(300)は、北壁際で床面から9.5cm浮いた状態で出土した。他は埋没土中の出土である。

(遺物観察表：18頁)

所見 出土遺物から、古墳時代初頭の住居と考えられる。

2区84号住居

位置 Hg・h-9グリッド 写真 PL26
重複 北西隅が82号住居に切られている。

形状 一边を南北方向にする隅丸台形を呈する。北壁・東壁は直線的に掘られているが、南壁・西壁は南西隅が大きく湾曲している。規模は長軸3.81m、短軸3.55mである。北東隅に幅30cmの張り出し部と小ピットがあるが、住居に伴うものかどうかは不明。面積 12.2m² 方位 N-9.5°-W
床面 遺構確認面から10cmほど掘り込んで床面となる。南西部はやや凹凸があるが、他の床面はほぼ平らである。

埋没土 軽石と黄褐色土粒を含む黒褐色土で埋まっていた。

炉 検出されなかった。

柱穴 主柱穴と考えられるピットは検出されなかった。前述した北東隅のピットの規模(短径×長径×深さ)は、34×39×27cmである。

遺物 16点の遺物が出土しているが、すべて埋没土中の遺物である。(遺物観察表：18頁)

所見 出土遺物から、古墳時代初頭の住居と考えられる。

2区89号住居

位置 H1-5グリッド 写真 PL27・28
重複 南西隅が64号住居で切られている。

形状 一边をほぼ南北方向にする長方形を呈する。周壁は直線的に掘られており、四隅も丸くない。

規模は長軸5.85m、短軸4.76mである。

面積 25.2m² 方位 N-11°-W
床面 遺構確認面から29cmほど掘り込んで床面となる。床面は東壁沿いでやや凹凸があるが、他はほぼ平らである。床面直上には、焼土や炭化物・灰が薄く覆っていた。中央部の床面は硬化していた。埋没土 上層は浅間C軽石を多量に含む黒褐色土で埋まっている。下層は軽石をわずかに含む黒褐色土で埋まっている。

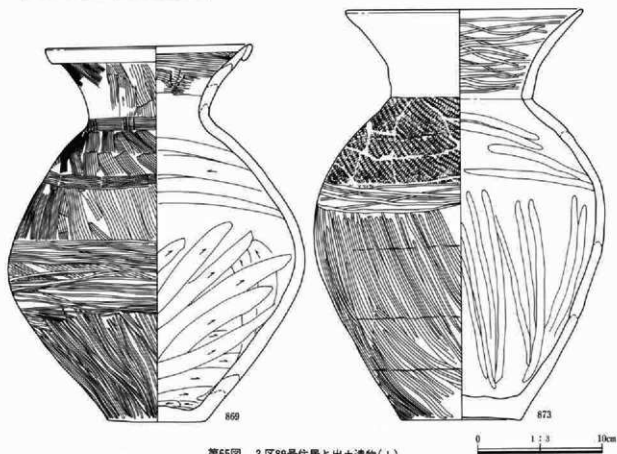
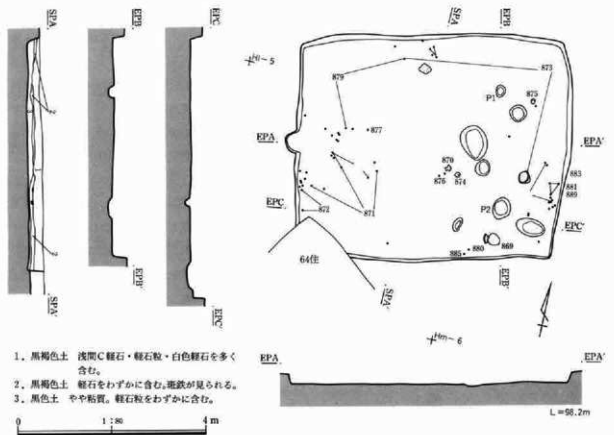
炉 主柱穴P1とP2を結んだ線の中央、すぐ内側に炉が検出された。長軸74cm、短軸53cm、深さ5.5cmの楕円形で、長軸が東壁と平行する。炉の南北両端はよく焼けて焼土化している。特に北端は著しい。炉の底面には一面に灰が残っていた。

柱穴 主柱穴と見られる2本のピットと、4本の小ピットが検出された。各主柱穴の規模(短径×長径×深さ)は、P1：19×25×12cm、P2：35×45×7cmである。P1・P2とも対角線上の上になっているが、これに対応する西壁に平行する二柱穴は検出されなかった。また、P2と南東隅の間に、48×64×11.5cmの楕円形のピットが検出された。この長軸は南壁に平行している。その他3本のピットが検出されているが、主柱穴や住居形状と関連のある位置でなく、むしろこの3本が一直線上の上になっている。また、そのうちの1本が炉の焼土を切っているような状況から、これらは住居より新しいピット列と判断した。

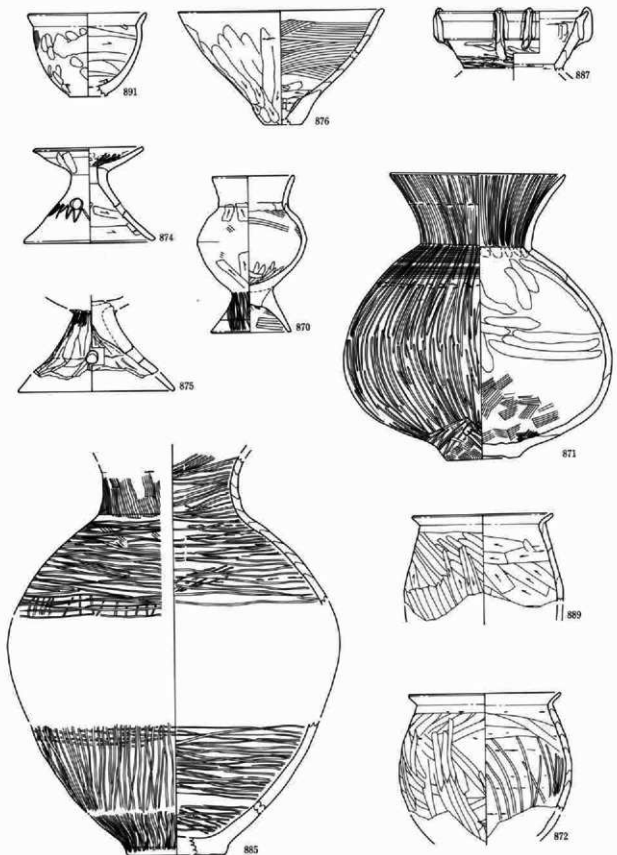
遺物 多くの遺物が出土している。特に南西隅と西壁沿いに床面に近い遺物は集中している。壺形土器(869)は主柱穴P2の南側で、床面直上に倒れて出土した。壺形土器(873)はP2の北側で下半部が床面に立っており、北壁沿いに出土した破片と接合した。また、ほぼ完形の小形器台形土器(874)・鉢形土器(876)、台付鉢形土器(870)は、住居中央部炉の南西側で床面から3～8cm浮いた状態で出土している。(遺物観察表：18・19頁)

所見 外来系の土器が多く出土した住居である。出土遺物から古墳時代初頭の住居と考えられる。

第5章 古墳時代初頭の遺構と遺物

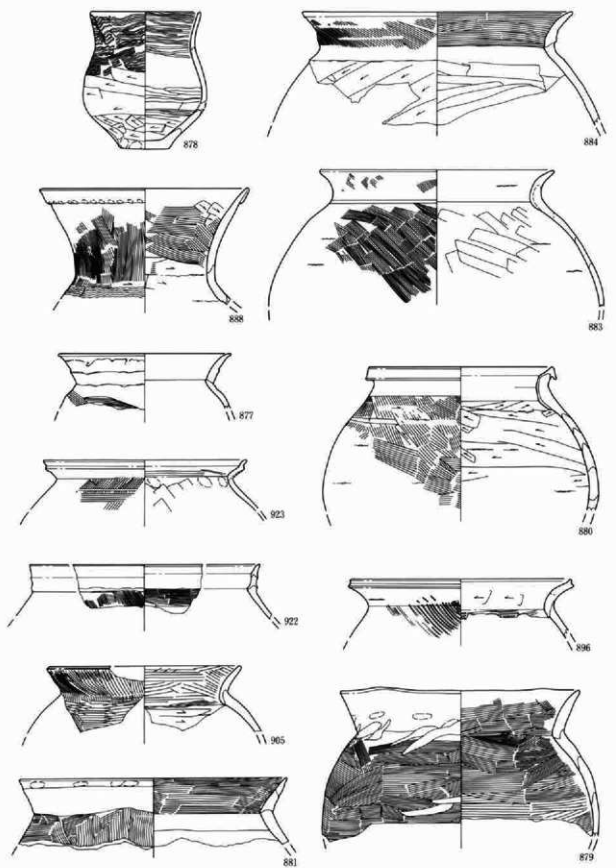


第65図 2区89号住居と出土遺物(1)



第66図 2区89号住居出土遺物(2)

0 1:3 10cm



第67図 2区89号住居出土遺物(3)

0 1:3 10cm

2区90号住居

位置 Hc-9グリッド 写真 PL29

形状 対角線を南北方向にする長方形を呈する。周壁は直線的に掘られており、四隅も比較的丸くない。規模は長軸5.64m、短軸5.18mである。

面積 24.8㎡ 方位 N-36°W

床面 遺構確認面から37cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平らで、やや硬化している。

周溝 東壁と、北壁・南壁の東端、南壁の西端を除いて、幅10~12cmの周溝が検出された。周溝が切れる部分は、北壁ではP1・P2を結んだ線との交点と一致し、南壁では交点より東側へ伸びている。

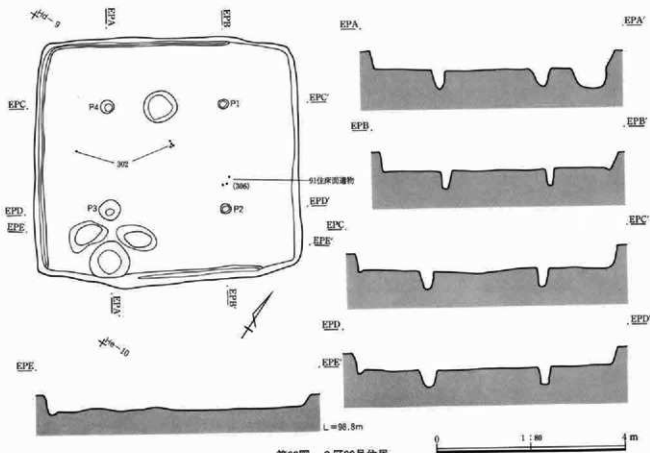
炉 主柱穴P1とP4を結んだ線上のややP4寄りに炉が検出された。直径70cm、深さ8cmのほぼ円形の地床炉である。

柱穴 4本の主柱穴が検出された。各主柱穴の規模(短径×長径×深さ)は、P1:19×21×37cm、P2:21×23×35cm、P3:45×46×36cm、P4:27×

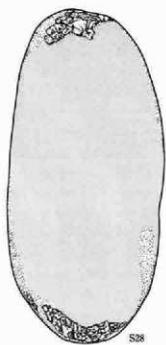
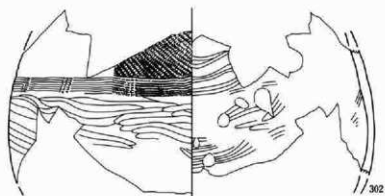
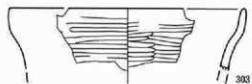
37×37cmである。主柱穴のうちP1・P3は対角線上にのるが、P2・P4はやや南西側にずれている。各主柱穴を結んだ形は長方形を呈する。また、南壁に接してP5が検出されたが、これはP3とP4を結んだ線と南壁との交点にあたる。P5の規模は80×88×41cmである。P5の周囲は幅30cmほどの馬蹄形に4.5~5.5cm高まっている。P5は大きさからすると、いわゆる貯蔵穴等の施設とも考えられる。遺物 100点ほどの遺物が出土している。床面直上出土の遺物は少なく、壺形土器(302)が住居中央部で出土しているのみである。敲石(S28)は磨り面もあり、多目的に用いられたものと見られるが、埋没土中の出土である。また、P2の北側で床面から16cm浮いて出土した破片が隣接する91号住居の床面直上から出土した壺形土器(306)と接合した。

(遺物観察表:19・20頁)

所見 出土遺物から、古墳時代初頭の住居と考えられる。



第68図 2区90号住居



第69図 2区90号住居出土遺物

2区91号住居

位置 He-11グリッド 写真 PL29・30
 形状 一辺を南北方向にする平行四辺形を呈する。周壁は直線的に掘られている。四隅は丸くない。規模は長軸5.59m、短軸4.96mである。

面積 20.0㎡ 方位 N-2°-E
 床面 遺構確認面から72cm掘り込んで床面となる。床面は中央部がやや低くなっている。

周溝 南壁の中央やや東側を除いて、幅16~22cmの周溝が検出された。周溝が途切れているのは南壁沿いに土坑が掘られているためで、周溝はこの土坑につながっている。

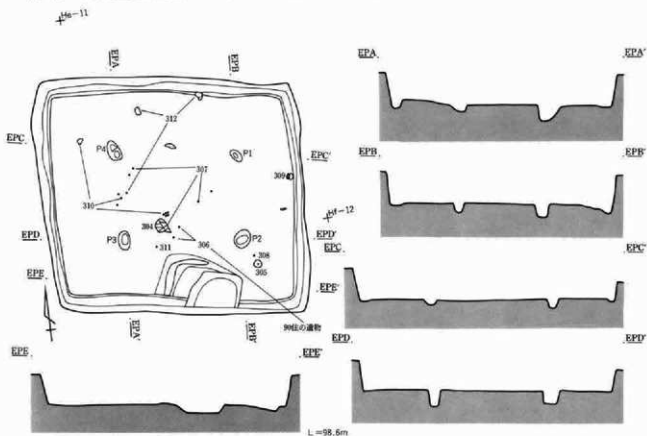
炉 確実に炉と判断できるものは検出できなかった。しかし、主柱穴P1・P4の間に長さ20cmほどの棒状跡が床面直上に出土しており、これが炉の端の施設と推定される。ただ、炉床が竈の北側なのか、南側なのかは明確でない。

柱穴 4本の主柱穴が検出された。各主柱穴の規

模(短径×長径×深さ)は、P1:20×24×18cm、P2:34×35×26cm、P3:26×40×31cm、P4:29×40×13cmである。主柱穴のうちP3・P4は対角線上に位置するが、P1・P2は内側にずれている。各主柱穴を結んだ形は平行四辺形を呈する。

貯蔵穴 南壁の中央やや東側に、壁に接して長軸1.07m、短軸0.73m、深さ19cmの土坑が検出された。土坑の北側・西側は、幅20cmほどの「くの字状」に高まりが回っている。周溝は土坑とつながっている。
 遺物 40点余りの遺物が出土している。床面近くから出土した遺物が多い。図示した遺物は、壺形土器(304)を除いて、他は床面直上から出土した。壺形土器(305・308)は南東隅で、小形壺形土器(309)が東壁沿いで床面直上で出土した。また住居中央部で出土した壺形土器(306)は、隣接する90号住居の埋没土中の遺物と接合した。(遺物観察表:20頁)

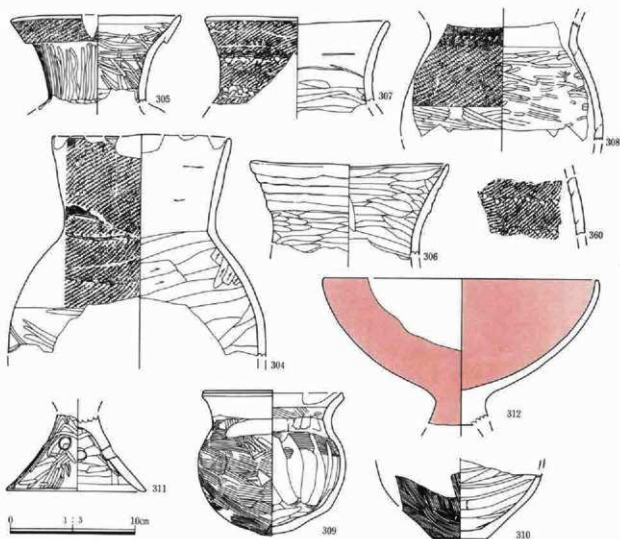
所見 出土遺物から、古墳時代初頭の住居と考えられる。



第70図 2区91号住居

0 1:80 4m

第5章 古墳時代初期の遺構と遺物



第71図 2区91号住居出土遺物

2区26号土坑

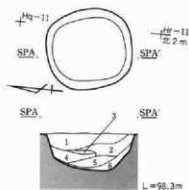
位置 Hq-10グリッド 写真 PL30

形状 隅の丸い方形を呈する。規模は長軸1.84m、短軸1.71m、深さ0.7mである。

埋没土 最下層には浅間C軽石を含まない暗黄褐色土が、大部分には浅間C軽石を含む暗褐色土が堆積している。またどの部分にも焼土粒や地山の黄色土粒が含まれている。

遺物 60点余りの遺物が出土している。いずれも埋没土中の遺物である。(遺物観察表：20頁)

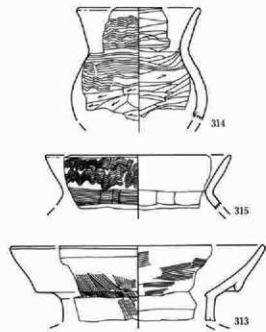
所見 土坑の時期は確定的でないが、出土遺物の大部分は古墳時代前期の土器である。



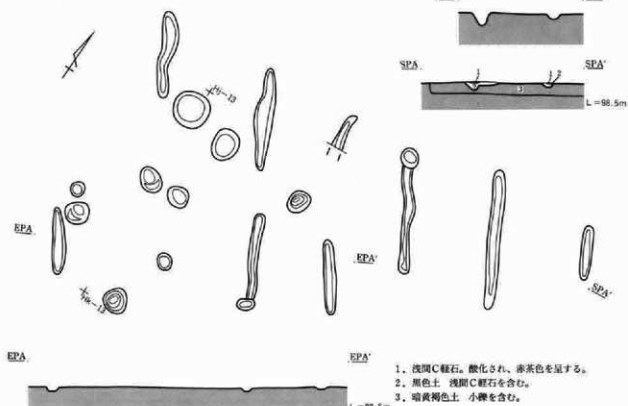
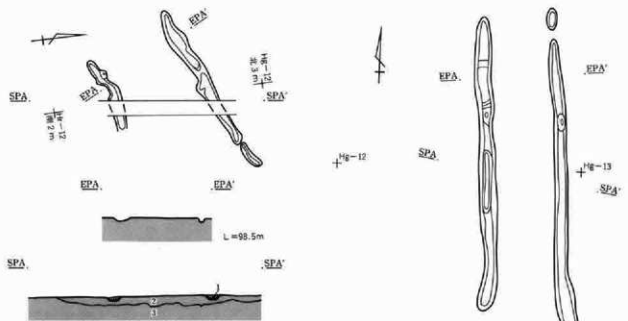
1. 暗褐色土 浅間C軽石・焼土粒・黄褐色土粒を含む。
2. 暗褐色土 浅間C軽石がやや少ない。焼土粒・黄褐色土粒を含む。
3. 暗褐色土 浅間C軽石・黄褐色土粒を含む。固くしまっている。
4. 暗褐色土 浅間C軽石・黄褐色土粒を含む。
5. 暗褐色土 浅間C軽石・黄褐色土粒・炭を含む。
6. 暗褐色土 黄褐色土粒・炭を含む。

第72図 2区26号土坑





第73図 2区26号土坑出土遺物



1. 浅間C軽石。酸化され、赤茶色を呈する。
2. 黒色土。浅間C軽石を含む。
3. 暗黄褐色土。小礫を含む。

第74図 2区畠

2区畠
写真 P.L.30

2区の住居群の東側で、畠跡とみられるサク溝の列が3カ所検出された。それぞれの方向は異なるが、みな浅間C軽石で埋まっていた。

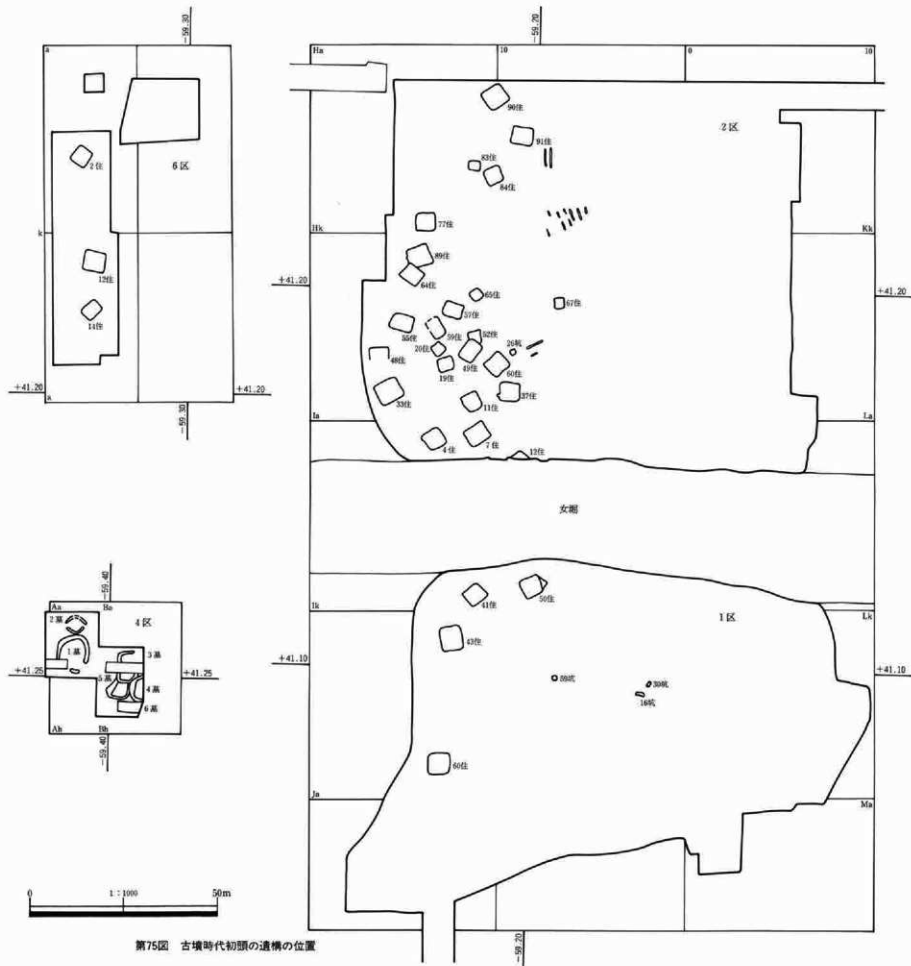
2区は中央の台地で、住居群は西側の縁辺に集中している。その東側に検出されたサク溝は、居住域の外縁部に広がる畠作耕地の痕跡と考えられる。

作付けが行われた旧地表面が残っていないので、畠作耕地の範囲については確定的に述べられないが、遺構確認面の標高が東側のほうが若干下がっていること、畠作耕地は平らではないこと等から、畠作耕地は中央台地に広がっていたが、削平されて残っていないものと考えたい。

なお作物等については不明である。

それぞれの地点のサク溝の形態・規模は以下の通りである。

地点	列数	幅cm	深さcm	方位
H 9-12-15G	2	18~30	6~8	N-96-E
H 8-11-12G	2	28~36	5~8	N-6-W
H 1-12-15G	7	34~40	5~9	N-27-W



第75図 古墳時代初期の遺構の位置

3. 4区の遺構

4区2号周溝墓

位置 Aa-b-19グリッド 写真 P L31-32
 形状 対角線を南北方向にする丸い方形を呈する。周溝は東隅・西隅は途切れているが、北隅は後世の擾乱土があり、途切れていたかどうかは不明である。南東側の周溝は直線的に掘られているが、他はやや外側に膨らんで弧を描いている。方台部は4.0×4.12mのほぼ正方形で、盛土は残存していない。中央に主体部とも考えられる土坑が位置している。周溝は0.7~0.9m幅で、深さは最も深い南西周溝で遺構確認面から30cm、他は10~15cmであった。

南西周溝方位 N-26°-E

埋没土 南側の周溝は軽石を含まない黒褐色土で埋まっていた。北側の周溝も下層は南側と同様に軽石を含まない黒褐色土であったが、上層に浅間C軽石を含む黒色土が堆積していた。

主体部 方台部のほぼ中央に、主体部の可能性のある楕円形の土坑が検出された。規模は長軸1.44m、短軸0.92m、深さ5cmで、出土遺物はない。

遺物 出土遺物はない。

所見 古墳時代初頭の遺構と考えられる。

4区1号周溝墓

位置 Ac-d-18-19グリッド 写真 P L31-32
 形状 南東隅・南西隅が途切れるほぼ円形を呈する。南西部には試験調査のトレンチがあり、どのくらいの長さが途切れるのかは不明である。周溝の内側の直径は南北6.5m、東西6.7mである。盛土は残存していない。周溝は幅1~2mで、北西隅が最も広い。深さも最も深い北西隅で0.63m、他は0.15~0.4mである。

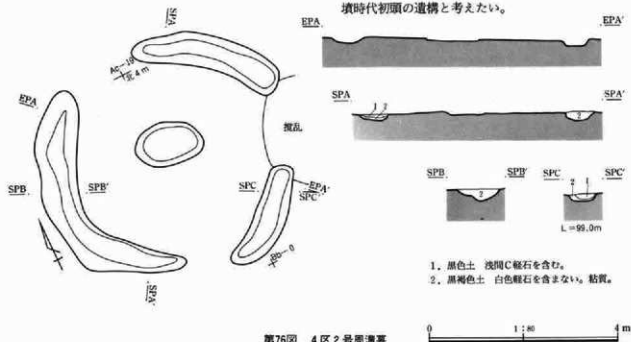
埋没土 下層は地山の黄褐色土粒を含む暗褐色土で、上層は浅間C軽石と2~4cm大の暗褐色土ブロックを含む黒褐色土で埋まっていた。

主体部 周溝に囲まれた円形のやや北寄りに主体部跡と考えられる土坑が検出された。土坑は長さ2.02m、幅0.5m、深さ6.5~9cmの長楕円形で、長軸方位はN-89°-Eである。軽石と暗黄褐色土ブロックを含む暗褐色土で埋まっていた。

遺物 遺物は10点余りが出土した。遺物は、ハケメ整形のものを含む土師器破片である。図示した壺形土器(316)口縁部は周溝北西隅の底面から47cm浮いて出土した。これは周溝中位の高さである。

(遺物観察表: 20頁)

所見 中央の土坑が主体部かどうかは未確定。古墳時代初頭の遺構と考えたい。



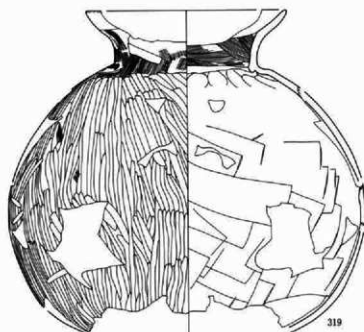
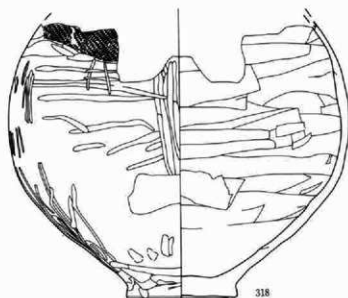
第76図 4区2号周溝墓

1. 黒色土 浅間C軽石を含む。
2. 黒褐色土 白色軽石を含まない。粘質。

4区3a号周溝墓

位置 Bc・d-1・2グリッド 写真 PL33

重複 南側で3b号周溝墓と重複していると考え



第78図 4区3a号周溝墓出土遺物

られるが、試掘調査のトレンチをいれた位置にあたり、詳細は不明である。

形状 鎌の手に90度に曲がった北周溝と西周溝の一部を検出したのみである。東周溝はなく、南周溝は前述の試掘トレンチによって不明であるので、方台部の規模も不明である。

西周溝方位 N-1'-W

埋没土 最上部に浅間C軽石の純層が堆積している。下層は浅間C軽石を含まない暗褐色土や黒色土で埋まっていた。

主体部 検出できなかった。

遺物 a号・b号併せて20点余りの遺物が出土している。北周溝の底面直上で壺形土器(318・319)が出土した。また壺形土器口縁部破片(317)が底面から18cm浮いて出土している。(遺物観察表:21頁)

所見 出土遺物から、古墳時代初頭の遺構と考えられる。

4区3b号周溝墓

位置 Bd・e-8・9グリッド

写真 PL33

重複 北側で3a号周溝墓と重複していると考えられるが、試掘調査のトレンチをいれた位置にあたり、詳細は不明である。

形状 コの字状の、南周溝と東西周溝の一部が検出されているのみである。

南溝方位 N-76'-W

埋没土 浅間C軽石を多く含む黒色土・褐色土で埋まっている。

主体部 検出されなかった。

遺物 a号・b号併せて20点余りの遺物が出土された。b号には図示し得る遺物は出土していない。

所見 古墳時代初頭の遺構と考えたい。

4区4号周溝墓

位置 Be・f-2グリッド 写真 PL33

重複 北西隅が3号周溝墓と、西周溝が5号周溝墓と、南西隅が6号周溝墓と重複している。土層断面の観察によると、それぞれの新旧関係は5号周溝墓→4号周溝墓→3号・6号周溝墓となる。

形状 コの字状の、西周溝と南北周溝の西端が検出されているのみである。西周溝はやや西に膨らんで掘られている。方台部南北長は5.5m前後である。西壁方位 N-4°-E

埋没土 最下層に浅間C軽石を含まない暗褐色土、中位に浅間C軽石の純堆積塊、その上の層に浅間C軽石が多く含まれる黒色土・暗褐色土が堆積している。

遺物 出土遺物は少ない。北西隅で壺形土器(320)が底面から5cm浮いた状態で出土している。

(遺物観察表: 21頁)

所見 古墳時代初頭の遺構と考えたい。

4区5号周溝墓

位置 Be-1・2グリッド 写真 PL33・34

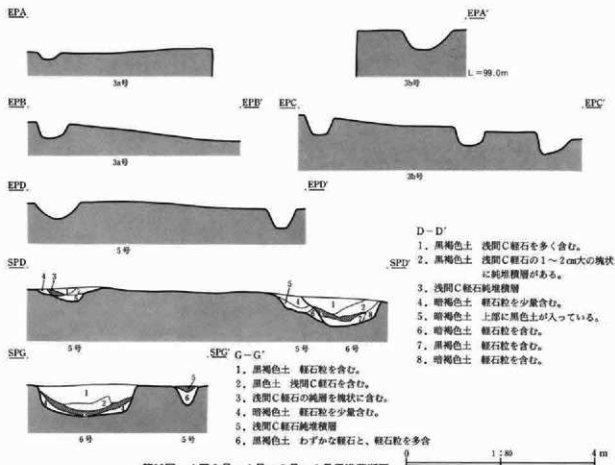
重複 北壁が3号周溝墓と、東壁が4号周溝墓と重複している。土層断面の観察からみると、5号周溝墓がいずれの周溝墓にも先行する。

形状 東西周溝の北半部の周溝が膨らんで、方台部の形状を乱しているが、方形を意図していると推定される。方台部の東西長は、最も広いところで4.45mである。南北長は北周溝が3号周溝墓に切られているので測定できないが、方台部は正方形と考えられる。周溝の規模は、南溝で幅0.67m、深さ43cm、西周溝の広い地点で幅1.07m、深さ29cmである。南周溝方位 N-9°-E

埋没土 軽石を含まない暗褐色土で埋まっていた。西周溝では浅間C軽石が部分的に混入している。

主体部 方台部に何の施設も検出できなかった。

遺物 遺物の出土量は少ないが、完形や完形に近



第80図 4区3号・4号・5号・6号周溝墓断面

第5章 古墳時代初頭の遺構と遺物

いものが出土している。壺形土器(321・322)は柳描文の同巧の土器で、321は南周溝中央部、底面上9cmで、322は西周溝中央よりやや南側で底面直上で出土した。もうひとつの壺形土器(323)は西周溝中央部、底面直上で出土した。器台形土器(324)は18cm浮いて南周溝中央部で出土した。

(遺物観察表：21頁)

所見 出土遺物から、古墳時代初頭の遺構と考えられる。

4区6号周溝墓

位置 Bf-1・2グリッド 写真 PL33

重複 北周溝が、4号周溝墓南周溝を切っている。

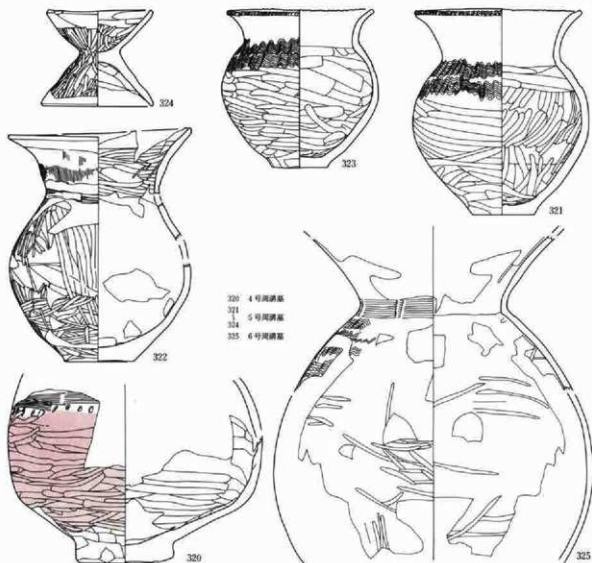
形状 北周溝の一部が検出されたのみで全体形状は不明である。周溝は幅2.40m、深さ0.55mである。

北周溝方位 N-91°-W

埋没土 最下層に暗褐色土が堆積し、中位に浅間C軽石の純堆積ブロックがあり、上層には浅間C軽石を含む黒色土がのっている。

遺物 20点余りの遺物が出土している。壺形土器(325)は底面直上で出土した。(遺物観察表：21頁)

所見 古墳時代初頭の遺構と考えられる。



第81図 4区4号・5号・6号周溝墓出土遺物

4. 6区の遺構

6区2号住居

位置 f・g-1・2グリッド 写真 PL36
重複 後出する1号溝と重複するが、2号住居の方が深いので、住居の壁や床面は残っている。

形状 対角線を南北方向にする隅丸のほぼ正方形を呈する。規模は長軸4.65m、短軸4.40mである。周壁はほぼ直線的に掘られているが、北東壁の中央がやや突出し、北西壁の北部がやや膨らんだりしている。隅は北隅・西隅の丸みが比較的小さいのに対して、南隅・東隅が丸い。

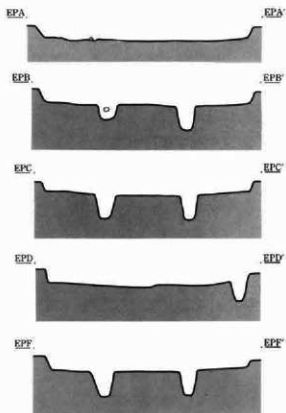
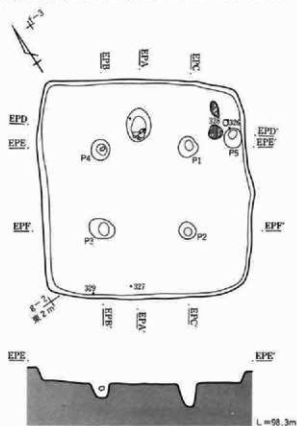
面積 18.1m² 方位 N-33°-E
床面 遺構確認面から26cmほど掘り込んで床面となる。床面はほぼ平らで、中央部は硬化していた。
炉 主柱穴P1とP4を結んだ線のすぐ外側で、ややP4寄り位置に炉が検出された。長径72cm、短径55cm、深さ3cmの楕円形の地床炉で、内側の端

に礎が3個かたまって据えられていた。炉床は固く焼土化していた。

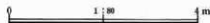
柱穴 4本の主柱穴と、1本のピットが検出された。各主柱穴の規模(短径×長径×深さ)は、P1:42×45×49cm、P2:34×35×50cm、P3:43×51×53cm、P4:42×44×30cmである。主柱穴のうちP3は対角線上にのるが、他は少しずつずれている。しかし4本の主柱穴を結んだ形はほぼ正方形になる。また、P1とP4を結んだ線と北東壁の交点の壁際にP5が検出された。P5は36×40×36.5cmで、柱の芯心は北に偏っていて、P1・P4と一直線にはならない。

遺物 20点ほどの遺物が出土している。図示した遺物は、すべて床面直上で出土したものである。土製紡錘車(329)は南西壁際で、壘形土器(326・328)は東隅P5周辺で出土した。また、P5の北側に粘土塊が2カ所検出された。(遺物観察表:21頁)

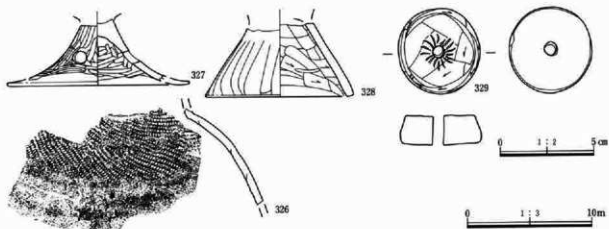
所見 古墳時代初頭の住居と考えられる。



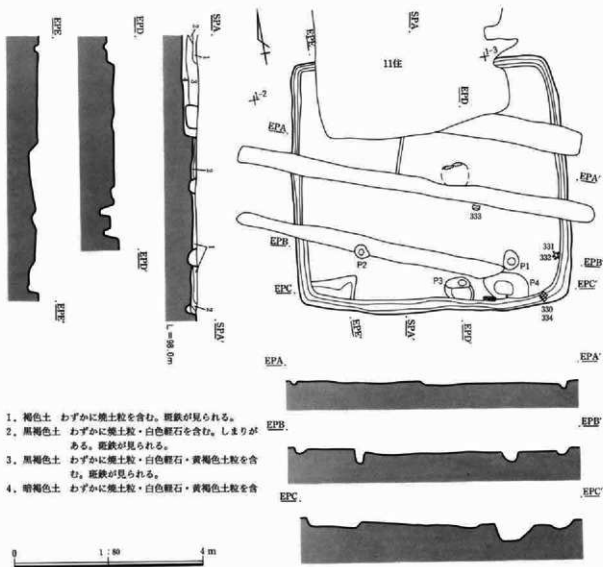
第82図 6区2号住居



第5章 古墳時代初頭の遺構と遺物



第83図 6区2号住居出土遺物



1. 褐色土 わずかに焼土粒を含む。斑紋が見られる。
2. 黒褐色土 わずかに焼土粒・白色軽石を含む。しまりがある。斑紋が見られる。
3. 黒褐色土 わずかに焼土粒・白色軽石・黄褐色土粒を含む。斑紋が見られる。
4. 暗褐色土 わずかに焼土粒・白色軽石・黄褐色土粒を含む。

第84図 6区12号住居

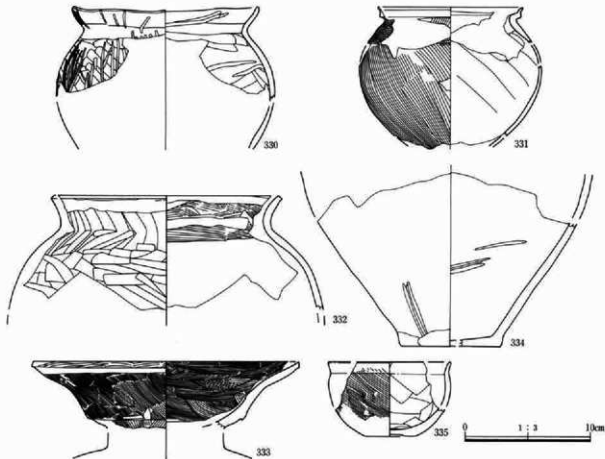
6区12号住居

位置 e-2グリッド 写真 PL36
 重複 北壁が11号住居に切られている。
 形状 一边を南北方向にする正方形に近い長方形を呈する。周壁は東壁がやや膨らんで掘られている他は、直線的である。四隅は比較的角張っている。規模は長軸5.90m、短軸5.32mである。
 面積 25.9m² 方位 N-98°-E
 床面 遺構確認面から12cm掘り込んで床面となる。床面には3条の太い耕作痕がはいる、床面の一部は壊されている。床面はほぼ平らで、中央部は硬化していた。また、北西すみに床面のやや高いところがある。比高は2~5cmである。
 周溝 残存している部分では、幅13~20cmの周溝が検出されている。

埋没土 軽石を含む褐色・黒褐色土で埋まっていた。

炉 確実に炉と断定できる施設は検出できなかった。しかし、住居ほぼ中央に棒状礫が2本縦列に並んで床面直上から出土している。周辺の床面が焼土化していないことから断定はできないが、炉である可能性もある。

柱穴 2本の支柱穴と、2本のピットが検出された。支柱穴は他の住居と同じように本来4本あったと考えられるが、11号住居の掘り込みによって消失したものと推定される。各支柱穴の規模(短径×長径×深さ)は、P1:35×39×19cm、P2:24×30×28cmである。P1・P2ともに対角線からやや内側に入った位置にずれている。またP3は前述した炉の可能性のある礫を通り東壁と平行の線と、南壁との交点の壁際に検出された。長径60cm、短径42cmの



第85図 6区12号住居出土遺物

第5章 古墳時代初頭の遺構と遺物

楕円形で、最深部は北側にずれていて、長径57cm、短径23cm、深さ32cmの南壁に平行する長楕円形になっている。P3の東側にP4が検出された。P4の位置もP1を通り東壁と平行の線と、南壁との交点の壁際にある。長径97cm、短径58cm、深さ37cmの南壁に平行する楕円形である。P4は柱穴ではなく、いわゆる貯蔵穴の可能性もある。

遺物 遺物は120点余りが出土している。図示した遺物のうち、壺形土器(333)、鉢形土器(335)は床面から浮いて出土したが、他は床面直上から出土した。壺形土器(331・332)は南東隅から、壺形土器(330)・壺形土器(334)は南東隅の周溝内から出土している。(遺物観察表：22頁)

所見 出土遺物から、古墳時代初頭の住居と考えられる。

6区14号住居

位置 n・o-2グリッド 写真 PL35

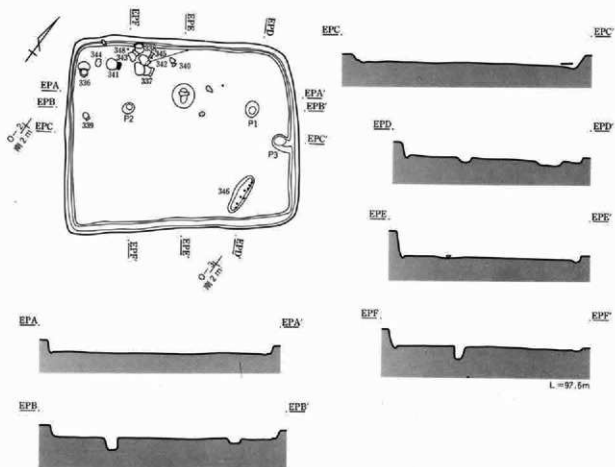
重複 北東壁が16号住居を切っている。

形状 対角線を南北方向にする隅丸長方形を呈する。周壁は直線的に掘られている。隅は比較的丸みが小さいが、北隅は丸くなっている。規模は長軸4.96m、短軸3.96mである。

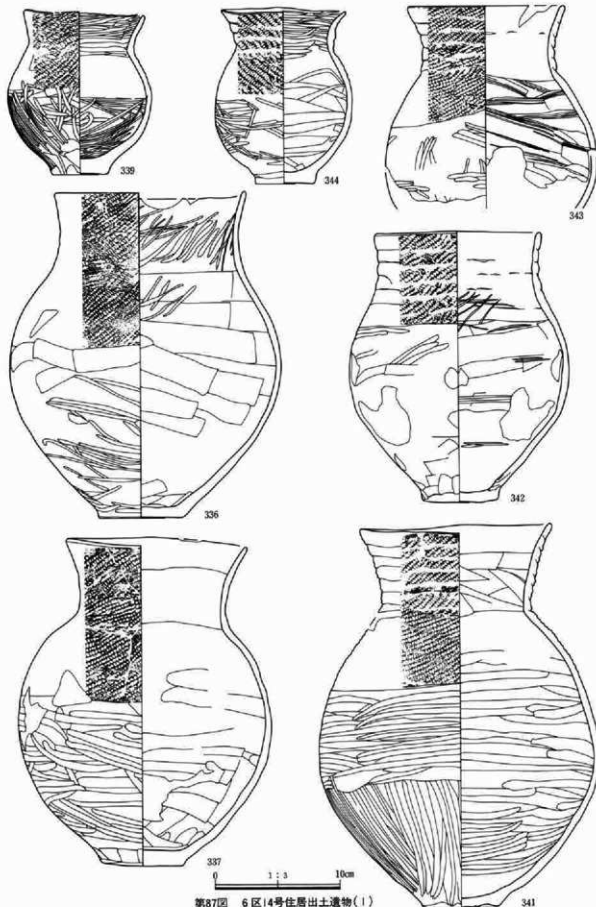
面積 16.6m² 方位 N-37°-W

床面 遺構確認面から36cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平らであるが、南隅の方は耕作痕が入り床面が切られている部分がある。また、東隅付近に長さ90cm、幅30cm、深さ8cmの溝状の掘り込みがある。これは耕作痕と方向を異にしており、遺物も多く出土することから、住居に伴うと判断した。

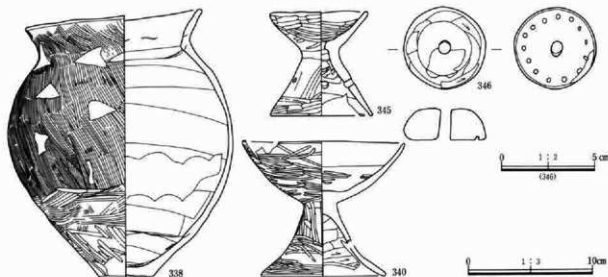
炉 支柱穴P1とP2を結んだすぐ外側、ややP



第86図 6区14号住居



第87図 6区14号住居出土遺物(1)



第88図 6区14号住居出土遺物(2)

2に寄った位置に炉が検出された。長径52cm、短径47cm、深さ1~2.5cmの地床炉である。炉のほぼ中央に棒状跡が認められている。

柱 穴 2本の支柱穴と、1本のビットを検出した。各支柱穴の規模(短径×長径×深さ)は、P1:29×34×9cm、P2:22×26×24cmである。P1・P2とも住居対角線からそれぞれ東に20cm、南に15cmずれている。P1とP2を結んだ線は北西壁に平行している。P3は北東壁ほぼ中央の壁際に検出された。規模は28×30×6cmで、上面から壺形土器破片が出土している。

遺 物 160点余りの遺物が出土している。床面近くから出土した遺物は、西隅と東隅の溝状の掘り込み内に集中している。特に西隅の遺物はほとんど完形で出土した。小形器台形土器(345)、高杯形土器(340)が1個体ずつに、縄文の施文方法の異なる2種の壺形土器(337・341・343)、甕形土器(336・342)、小形甕形土器(339・344)と、全く系統の異なるハケメ調整の甕形土器(338)が伴っている。紡錘車(346)は東隅の溝状掘り込みの中から底面から2cm浮いた状態で出土した。(遺物観察表:22・23頁)

所 見 出土遺物から、古墳時代初頭の住居と考えられる。

5. 9区の遺構

9区 畠

写 真 P.L.36

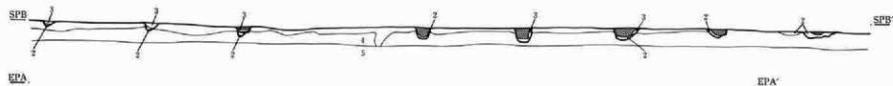
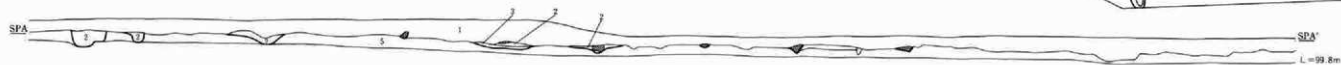
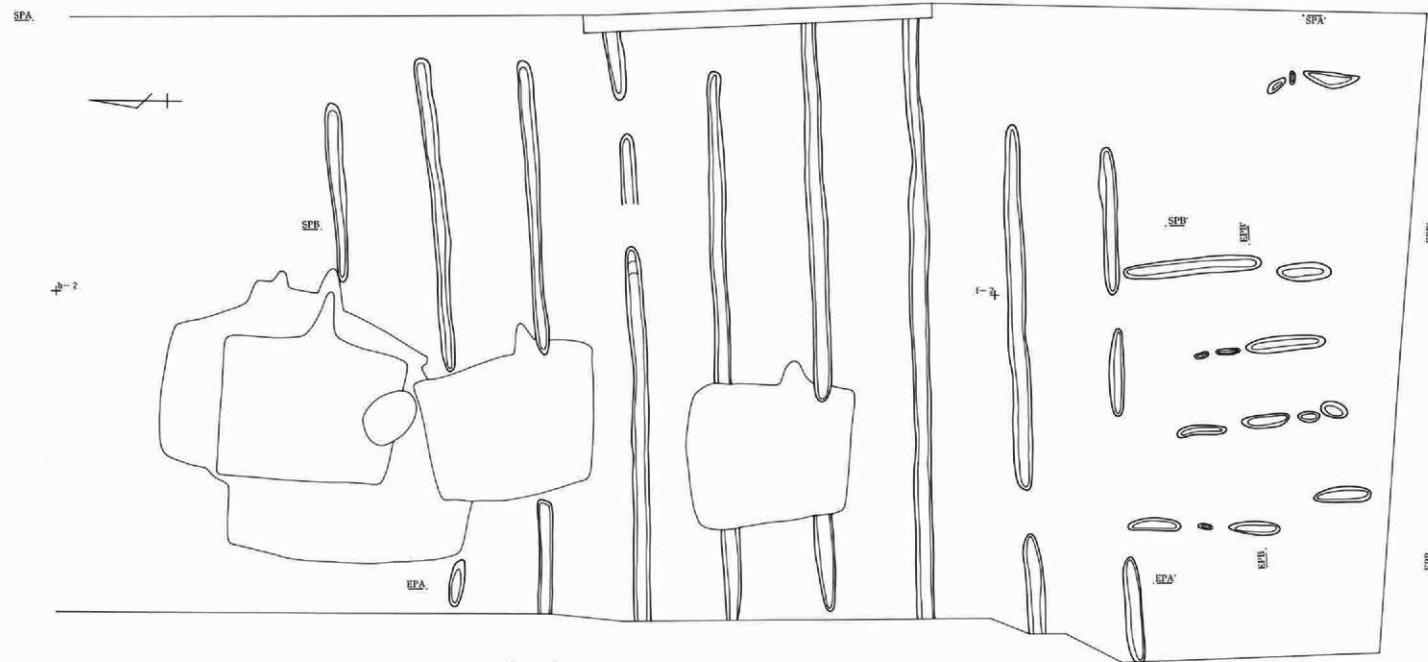
9区のほぼ全域に、畠跡とみられるサク溝の列が検出された。北部では2~5号住居に切られている。畠跡は、ほぼ東西方向のサク溝9列と、それに直交する南北方向のサク溝5列が浅間C経石で埋まっていた。耕作面は削平されており、畠の形状は不明である。

このサク溝も埋没時期が浅間C経石降下時と考えられ、2区で検出された畠と同時期のものである。9区は、2区と同じ台地上で北方50mにある。したがって、畠耕作地がさらに北方に広がっていたことが判明するとともに、集落の範囲が北側へ伸びると、推定される。

なお作物等については不明である。

それぞれのサク溝の形態・規模は以下の通りである。

地 点	サク溝m	列数	幅cm	深さcm	方位
東西サク	1.6	9	32~40	12~40	N-86°E
南北サク	1.4	5	20~40	12~20	N-7°W



1. 表土
2. 黒褐色土 軽石・小石・黄褐色砂質土を含む。
3. 黒褐色土 浅層C軽石を多く含む。
4. 黒褐色土 軽石をわずかに含む。
5. 暗黄褐色土 直径5～10mmの小石を多く含む。

第89図 9区画

0 1:80 4m

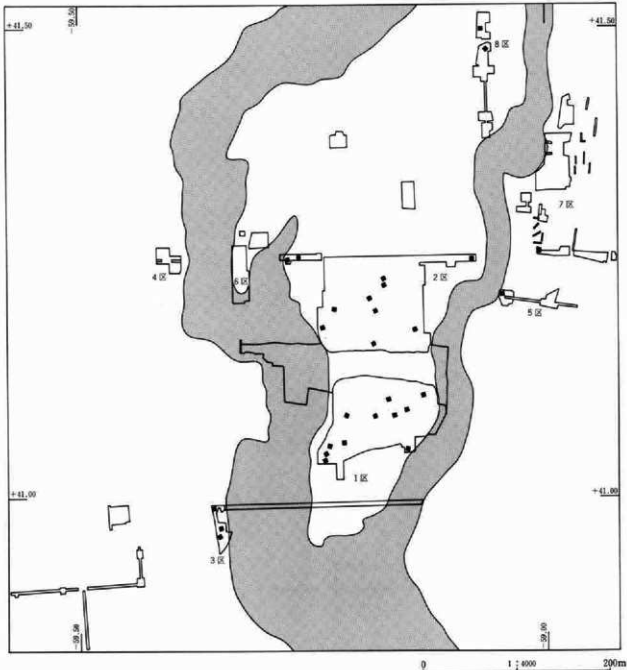
第6章 古墳時代中期・後期の遺構と遺物

1. 概 要

荒砥上ノ坊遺跡では、古墳時代中・後期の遺構は、住居29軒、土坑1基を調査した。

これらの遺構は、古墳時代前期までの遺構の分布

と異なり、新たな展開が見てとれる。それまで遺構が分布していた4区・6区には遺構がなくなり、西側沖積地沿いではやや下流側の3区に遺構の分布がみられるようになる。また、それまで遺構がみられなかった東側の沖積地に面した5区・7区・8区に



第90図 古墳時代中・後期の遺構分布

遺構が分布するようになる。さらに中央の低台地の内部(1・2区)に住居の分布が広がっている。

時期別の遺構分布の変化(第155図)をみると、5世紀の住居は1区・2区の西縁辺部にあり、それまでの遺構分布と変化していないことがわかる。6世紀代になると、調査では後半段階の住居しか検出されていないが、西側沖積地の下流(3区)と、東側沖積地の上流部(8区)に住居が検出されるようになる。7世紀になると、中央低台地全体に住居が検出される。

これらの住居の分布は、一地点に集中するものではなく、散在している。このようなあり方は、古墳時代の集落として著名な群馬県宇都宮市黒井峯遺跡の住居分布に共通している。黒井峯遺跡では、6世紀初頭の榛名山の火山灰に埋もれて、生産域も含めた形で、集落全体が発見された遺跡である。ここでは住居の周囲は畠として土地利用されていた。荒砥上ノ坊遺跡の住居の周囲の空白地も畠作耕地であった可能性が高いと考えられる。

一方、この時期の沖積地の土地利用については不明である。低地部のトレンチ調査では、群馬県西部の沖積地に堆積している6世紀の榛名山の火山灰の純堆積層は、荒砥上ノ坊遺跡周辺では確認できない。今回の調査でも、6世紀段階の火山灰下水田の発見はできなかった。また、古墳時代の層位に水田を埋没させるような洪水層はないので、洪水層埋没水田も検出できなかった。

したがって沖積地の水田耕作については推定の域を出ないが、沖積地を望む集落立地は水田耕作が行われていたことを示していると考えられる。特に、西側の沖積地は、弥生時代末の集落成立を考えると、この時期に開田されたと考えられる。また、3区への住居の広がりは、遅くとも6世紀段階に水田が拡大していることを意味していると考えられる。また、東側沖積地周辺に6・7世紀の住居が分布するようになるのは、この時期になって東側沖積地でも水田耕作が開始されたことを示しているだろう。

住居の形態は、大きさや柱穴配置にバラエティー

がある。5・6世紀は検出例が少ないので資料の提示にとどまるが、7世紀の住居は数が多くなり、検討の余地があると思われる。8世紀以降の住居とも考えあわせて比較・分析をしたい。

出土遺物で特徴的なのは、1区42号住居である。この住居は5世紀前半の、炉が付設された大形の住居である。火災住居で、壁際には炭化材が規則的に並んでいた。遺物は、壁沿いの部分に多くの土器がほぼ完形で出土した。図化した遺物は、床面出土遺物が62点、埋没土出土遺物が19点に及ぶ。6・7世紀の他の住居は杯形土器・甕形土器を中心に土師器・須恵器が一般的な様相で出土している。

また、5世紀前半以降の住居の壁際に棒状礫が出土している例が多い。5・6世紀の出土例は2区47号住居のみであるが、7世紀になると、21軒中7軒の住居から棒状礫が複数個ずつ出土している。これらの石器については、従来コモ編み石として考えられてきたが、小口や側面に磨り面や敲打痕のあるものもあり、多機能の石器としても考えられる。本遺跡では8世紀以降の住居にもこれらの石器が出土しており、今後の遺物整理を通して、この石器について考えてみたい。

2. 1・2区の遺構

1区42号住居

位置 Ip-8グリッド 写真 PL37~40

重複 1号溝が北部を切っている。

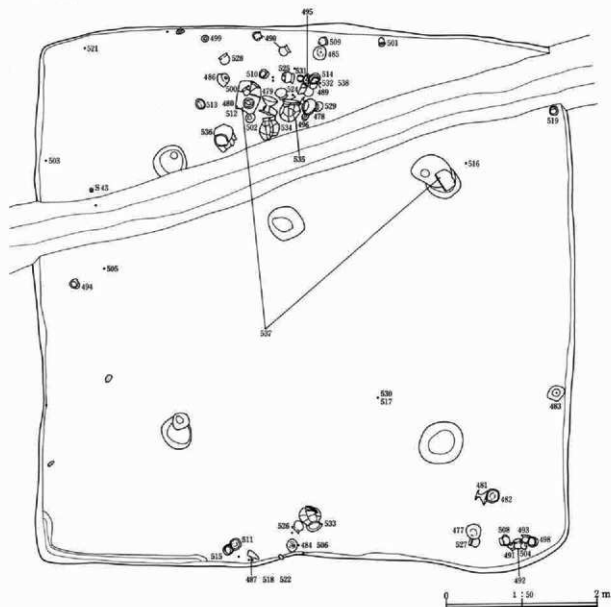
形状 対角線をほぼ南北方向にする、正方形を呈する。周壁は直線的に掘られている。四隅のうち、南東隅はやや丸いが、他は角張っている。規模は、長軸7.15m、短軸7.11mである。

面積 47.2㎡ 方位 N-17-E

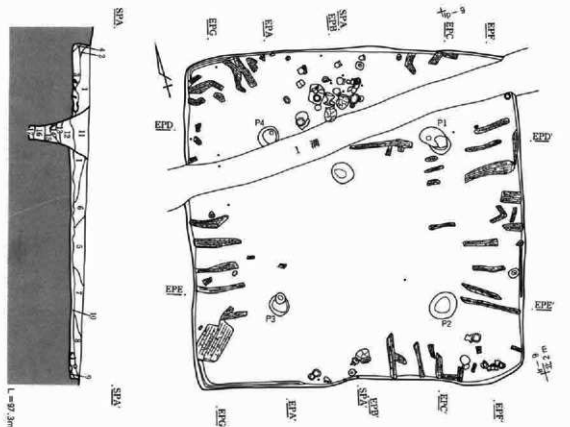
床面 遺構確認面から40cmほど掘り込んで床面と

している。床面はほぼ平らで、中央部は硬化している。床面には、支柱穴を結んだ線の外側に炭化材が壁と直交する方向に、各辺ともに遺存していた。炭化材は、幅6~12cm、長さ0.9~1.2mの棒状で20~40cm間隔に並んでいた。壁に沿って立っていたものか、床に根太状に並べられていたものか、確定はできなかった。また、支柱穴P1とP4を結んだ線よりやや内側に幅10cm、長さ1.34mの炭化材が検出された。住居の構造材と考えられる。炭化材はいずれも床面直上で遺存していた。

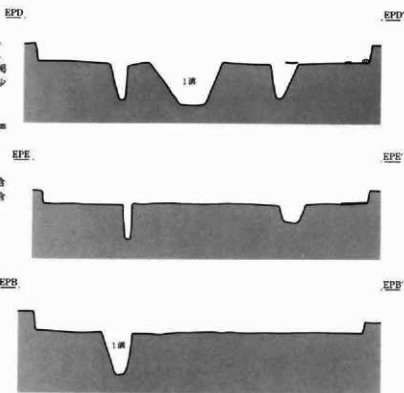
周溝 南東壁の一部と、西隅・北隅に幅6~8cm



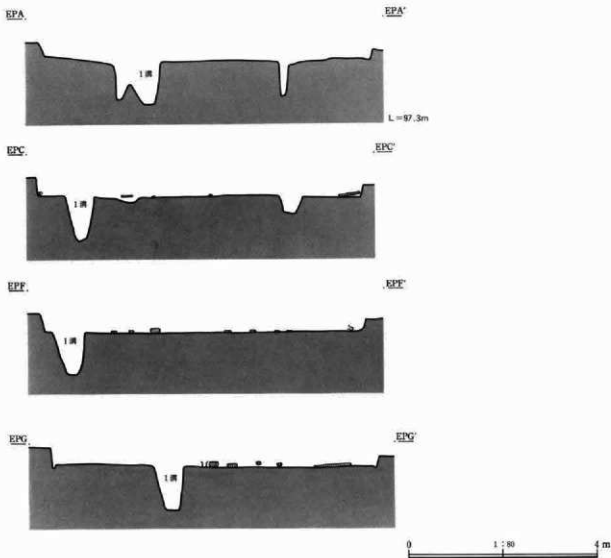
第91図 1区42号住居遺物分布



1. 黒色土 小石と多量の浅間C軽石を含む。
2. 黒褐色土 黄褐色土粒と軽石粒を含む。
3. 暗褐色土 1~4cm大の暗褐色土・黒褐色土塊を多く含み、焼土も少量含む。
4. 黒褐色土 炭化物粒・焼土粒を含む。
5. 黒褐色土 浅間C軽石を含む、0.5~3cm大のFPを含む。
6. 5層に似るが、軽石の量が多い。
7. 6層に類する。
8. 暗褐色土 浅間C軽石・軽石粒を多く含む。
9. 暗黄褐色土 1~2cm大の黒色土塊を含む。
10. 暗褐色土 3層に類する。
- 11~17層 1号溝埋没土



第92図 I区42号住居



第93図 1区42号住居断面

の狭い周溝が検出されている。

埋没土 浅間C軽石やその他の軽石を含む黒褐色土・暗褐色土で埋まっていた。

炉 主柱穴P1とP4を結んだ線の内側で、ややP4寄りの位置に炉が検出された。長径0.5m、短径0.44m、深さ3cmの楕円形の地床炉で、炉床面は固く焼土化していた。

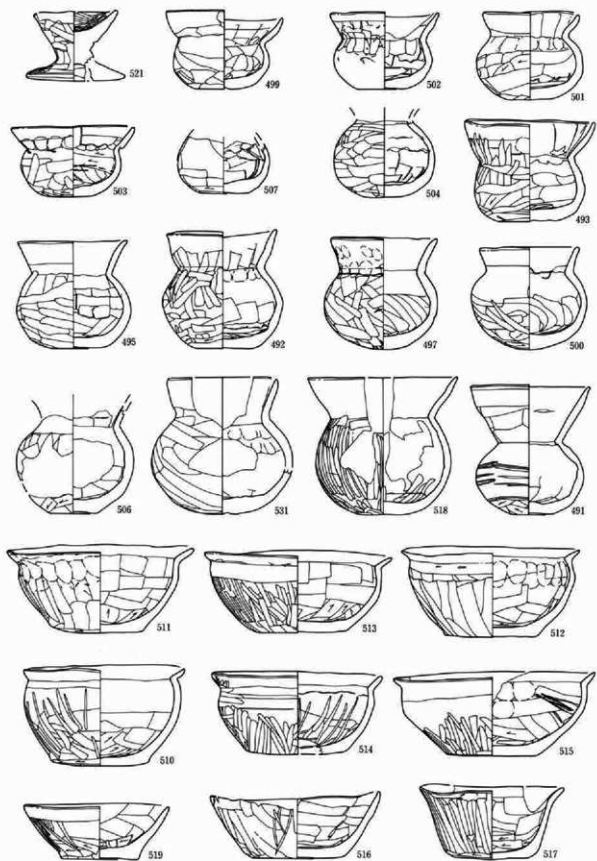
柱 穴 4本の主柱穴が検出された。各主柱穴の規模(短径×長径×深さ)は、P1:44×(46)×11cm、P2:55×57×39cm、P3:39×(45)×10cm、P4:(43)×45×72cmである。主柱穴は対角線上にのる位置にあり、各主柱穴を結んだ形は正方形を呈する。

遺 物 750点余りの遺物が出土している。床面近く

から出土した遺物は、完形あるいは完形に近いものが多く、59点固化した。

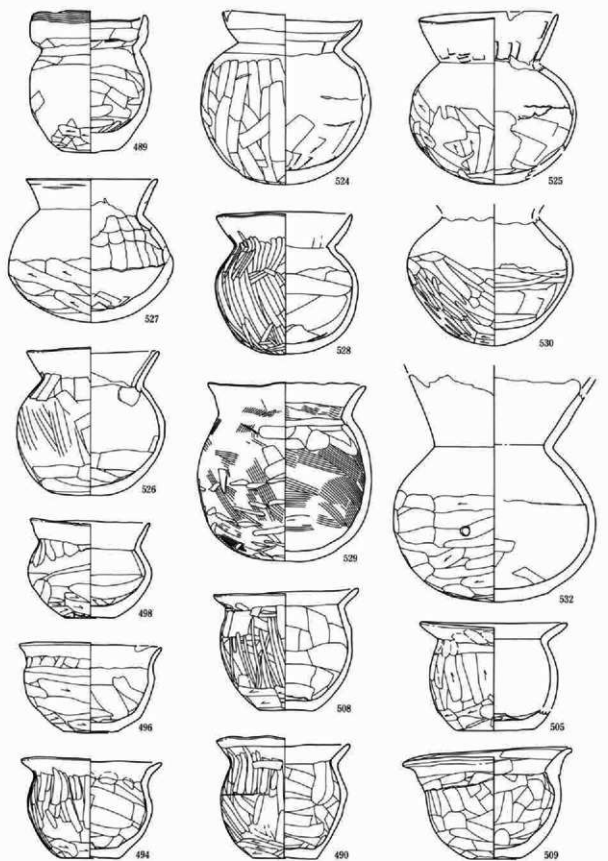
遺物は、炉の北側壁際と、南壁中央部壁沿い、南東隅の3カ所に集中して出土している。器種による偏在性はほとんどなく、特に小形の土器は3カ所に一部を除いて各器種が増えている。一部の例外は南東隅の集中地点に、鉢形土器と大形の変形土器が含まれていないことである。

固化した遺物のうち、小形の埴形土器や杯形土器・甕形土器は、各器種が4～6個揃っている。小形甕形土器の中にはやや広口のもの(498・496・494・508・490・505・509)がある。これらは鉢形土器と呼ばれるものかもしれないが、体部にススが附着してい



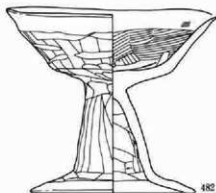
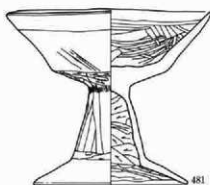
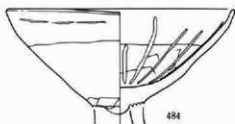
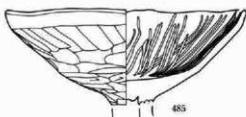
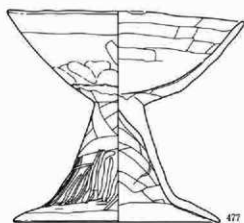
第94図 I区42号住居出土遺物(1)

0 1:3 10cm



新95図 | 区42号住居出土遺物(2)

0 1 3 10cm

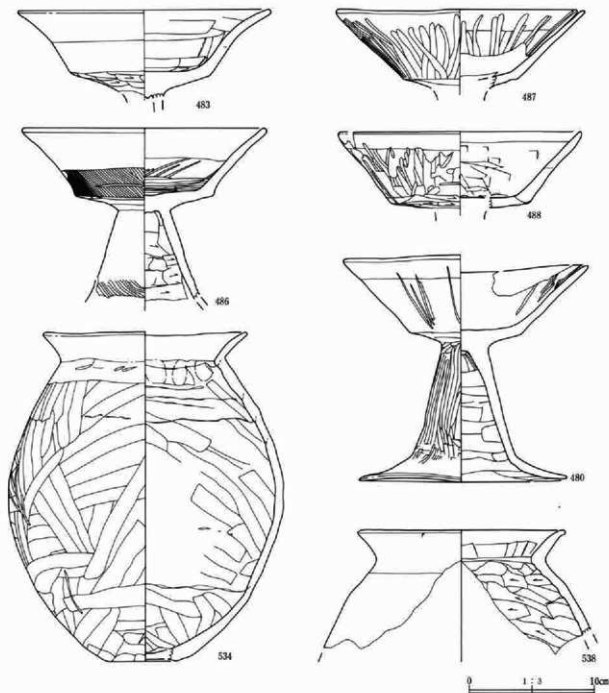


第96図 I区42号住居出土遺物(3)

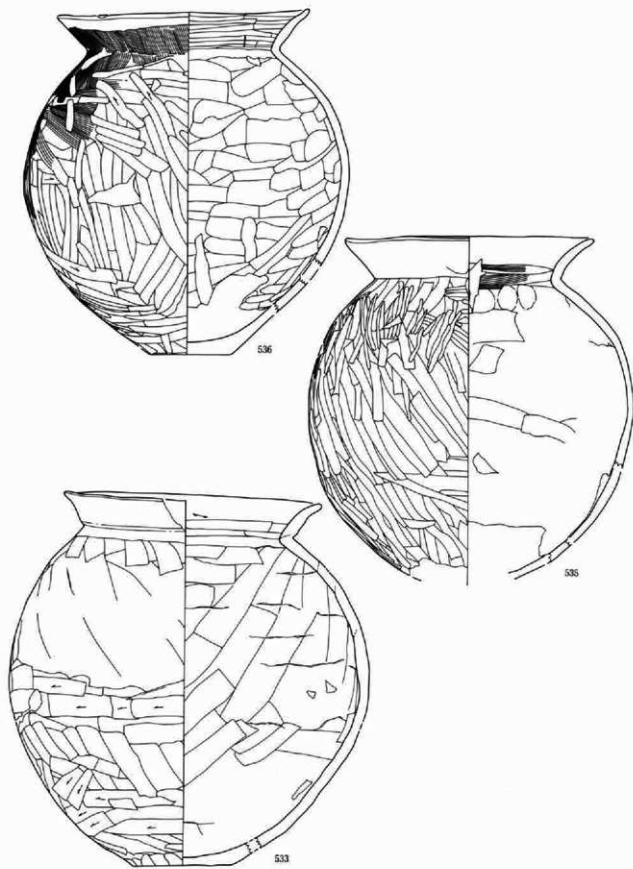


るので、ここでは壘形土器とした。浅い鉢形土器は各器種が1個ずつある。高杯形土器も少なくとも12個体は確認できたが、杯部の稜が緩いものと鋭いものの2種がある。壘形土器も5個体が確認できたが、体部の丸いものと長いものの2種がある。石器は、ひん岩製の紡錘車がP4西の床面直上から出土した。敲石・磨石は埋没土中の出土である。埋没土中

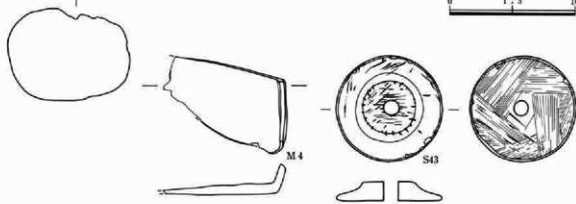
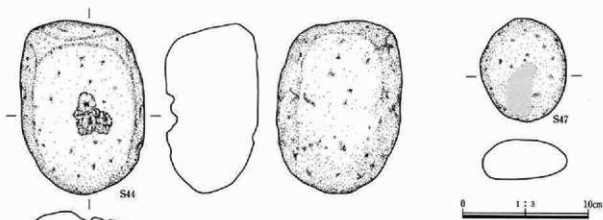
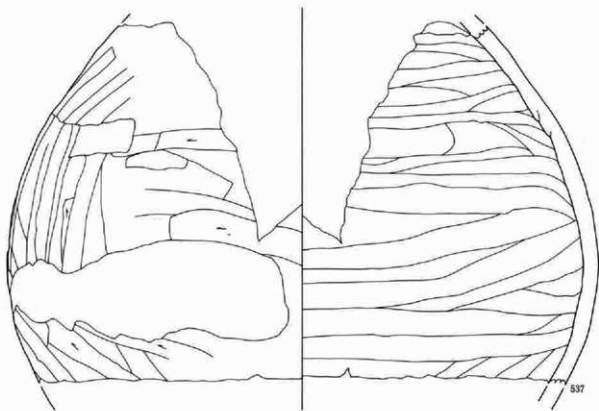
の土器は第100図に掲載したが、これらは7世紀後半以降の遺物がほとんどで、42号住居埋没過程で捨てられた土器と考えられる。また、埋没土中から鉄鏝の破片(M4)が出土しているが、どちらの土器群に伴うかは不明である。(遺物観察表:24~28頁) 所見出土遺物から5世紀前半の住居と考える。



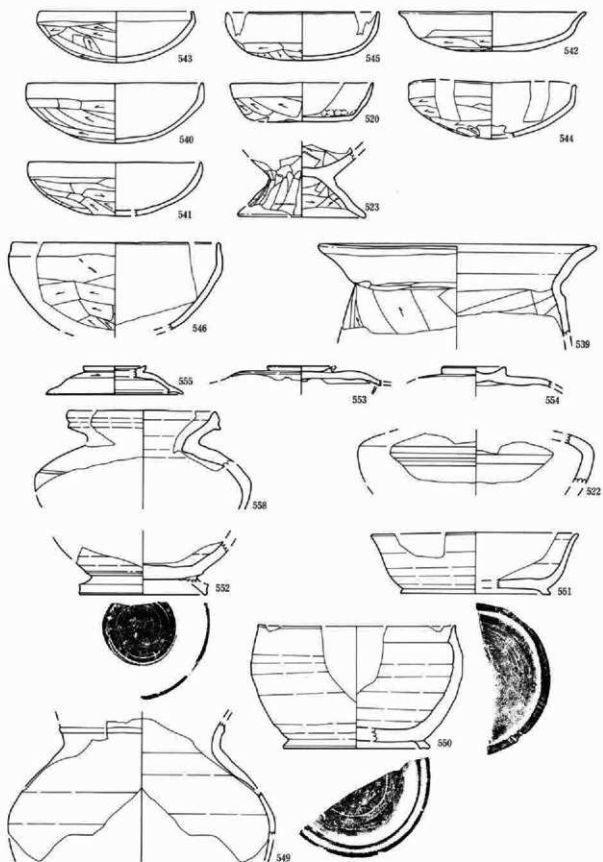
第97図 1区42号住居出土遺物(4)



第98図 I区42号住居出土遺物(5)



第99図 1区42号住居出土遺物(6)



第100図 1区42号住居出土遺物(7)



2区47号住居

位置 Hq・r-3グリッド 写真 PL40

重複 東壁を8号土坑に切られている。

形状 対角線を南北方向にする長方形を呈する。周壁は直線的に掘られており、隅は北隅がやや不明瞭で丸くなっているが、他の隅は角張っている。規模は長軸推定5m、短軸4.86mである。

面積 24.3㎡ 方位 N-23°-W

床面 遺構確認面から15cm掘り込んで床面となる。床面はあまり硬化していない。北壁沿いと西壁沿いに炭化材が床面直上で出土している。西壁沿いのものは断片が多く、壁際に寄って出土している。これに対して北壁沿いの炭化材は、幅5~10cm、長さ30~50cmで、北壁に直交またはやや斜交する方向

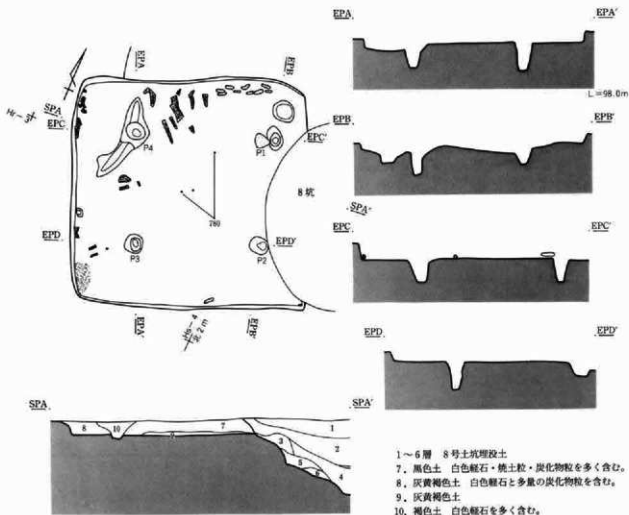
に出土している。この炭化材の出土状態は、1区42号住居の炭化材の出土状態とよく似ている。

埋没土 軽石と炭化物粒を含む黒色土・灰黄褐色土・褐色土で埋まっていた。

炉 確実に炉と断定できる施設は検出できなかった。

柱穴 4本の主柱穴が検出された。各主柱穴の規模(短径×長径×深さ)は、P1:30×50×48cm、P2:36×40×29cm、P3:39×40×61cm、P4:34×39×39cmである。P3・P4は住居対角線上にのっているが、P1・P2は対角線から壁方向に内側に40cmほどずれている。各主柱穴を結んだ形はやや台形を呈する。

貯蔵穴 主柱穴P1の北側に、長軸0.45m、短軸0.



第101図 2区47号住居

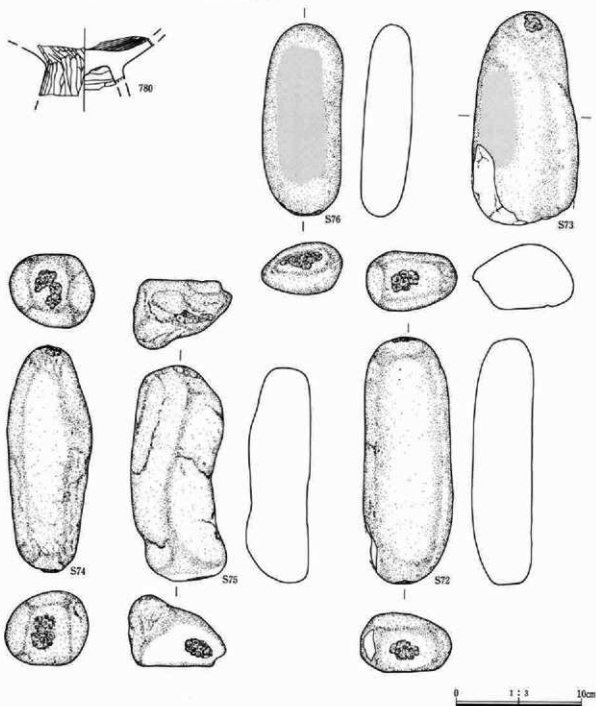
第6章 古墳時代中期・後期の遺構と遺物

43m、深さ0.11mの円形の土坑が検出された。この土坑は断面形が箱形で、柱穴はいえないし、位置等を考慮すれば、いわゆる貯蔵穴としておきたい。坑内からは遺物は出土していない。

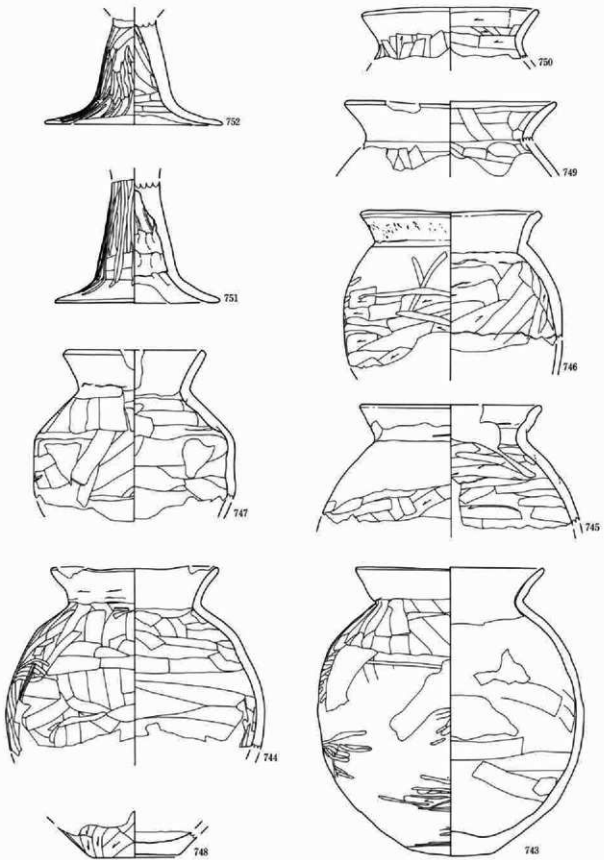
遺物 30点余りの遺物が出土している。住居ほぼ中央で台付壺形土器の台部が床面直上で出土している。また、北西壁北半壁沿いに9点、南東壁中央壁

沿いに1点の棒状礫が床面直上で出土した。これら10点の礫のうち9点は使用痕が認められたので、図示した。他の礫については大きさと石材を遺物観察表に示した。(遺物観察表：28頁)

所見 出土遺物から、5世紀前半の住居と考えられる。



第102図 2区47号住居出土遺物



第103図 2区109号住居出土遺物

2区 109号住居

位置 Ec-17グリッド 写真 PL41

重複 重複遺構はないが、北部・西部が攪乱によって切られている。

形状 方形を呈すると考えられるが、南東隅のみの残存のため、全体の形状は不明である。

面積 計測不可 北東壁方位 N-25°-E

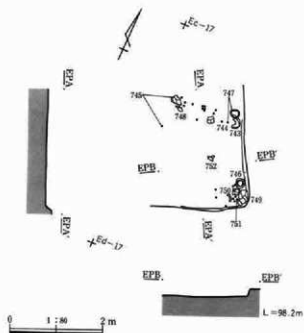
床面 遺構確認面から15cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平らで、やや硬化している。

炉 残存している範囲では検出されなかった。

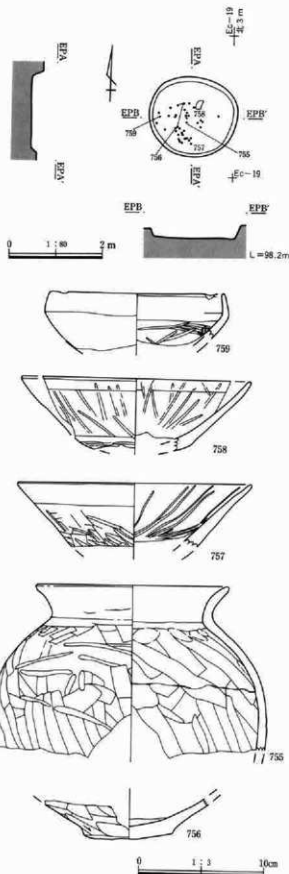
柱穴 残存している範囲では検出されなかった。

遺物 90点余りの遺物が出土している。床面近くの遺物は完形に近いものが多いが、高杯形土器の杯部がなかったり、甕形土器の下半部がない例が多い。746の甕形土器も南東隅に直立しているが、下半部は欠損している。743の甕形土器は北東壁沿いに床面から5cm浮いて出土したが、辛うじて全形をとることができた。(遺物観察表：28・29頁)

所見 遺物は床面からやや浮いて出土しているが、一括性はあると考えられる。5世紀前半の住居と考えられる。



第104図 2区109号住居



第105図 2区68号土坑と出土遺物

2区68号土坑

位置 E c-18グリッド 写真 PL41

形状 長軸1.89m、短軸1.70mの楕円形を呈する。
深さは19cmで、断面形は皿状である。

長軸方位 N-90°-E

底面 ほぼ平らである。柱穴等は検出されなかった。

遺物 60点余りの遺物が出土している。図示した遺物のうち、変形土器(755・756)と高杯形土器(756)は底面直上から出土している。他は6~10cm底面から浮いて出土している。(遺物観察表：29頁)

所見 出土遺物から、5世紀後半の遺構と考えられる。

2区3号住居

位置 1b-6グリッド 写真 PL41

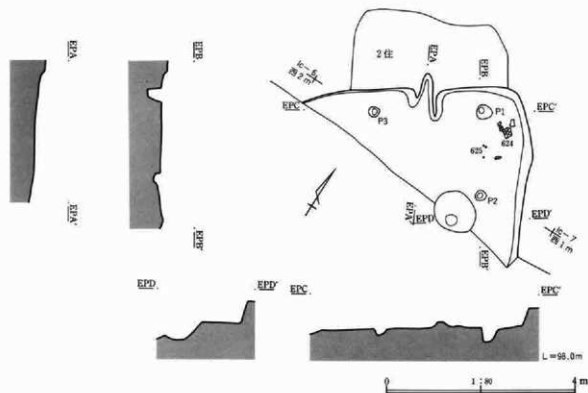
重複 南半部を女堀に切られている。また、住居全体が2号住居と重複しているが、3号住居のほうが深いので、3号住居の壁や床面は残っている。

形状 対角線を南北方向とする方形を呈するが、女堀に大半を切られているために、長軸・短軸ともに規模は不明である。

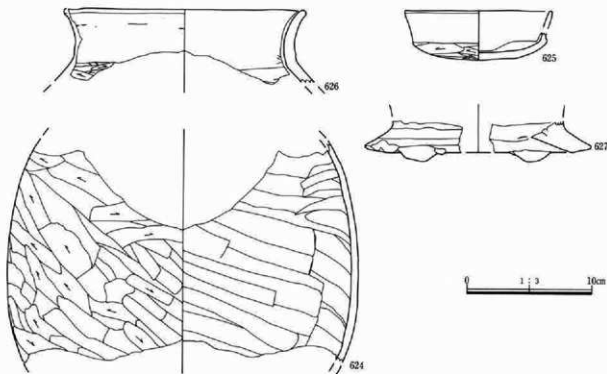
面積 計測不可 方位 N-31°-W

床面 遺構確認面から19cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平らであるが、あまり硬化していない。

竈 北西壁に付設されていた。支柱穴P1・P3を結んだ線の中央よりややP3寄りの位置である。両袖が壁から住居内部に張り出す形態の竈である。向かって右袖は56cm、左袖36cm張り出し部が残っていた。煙道部は遺構確認面で34cm壁から外へ突出していた。燃焼部はなだらかに煙道部に向かって傾斜している。



第106図 2区3号住居



第107図 2区3号住居出土遺物

柱 穴 3本の主柱穴が検出された。各主柱穴の規模(短径×長径×深さ)は、P1:31×34×30cm、P2:22×22×14cm、P3:21×23×13cmである。P1は対角線上にのっていると思われるが、P2・P3を結んだ線は対角線より北にずれている。住居の西隅・東隅が女堀によって切られているので不明瞭であることもあり、住居の全形はもう少し小さいことも考えられる。各主柱穴を結んだ形は長方形を呈すると推定できる。

貯蔵穴 貯蔵穴と断定できないが、主柱穴P2の南側に長径0.9m、短径0.8m、深さ0.38mの楕円形の土坑が検出された。底面は南側に偏っている。

遺 物 20点余りの遺物が出土している。壘形土器(624)、杯形土器(625)は、住居北部で床面から4cmほど浮いて出土した。(遺物観察表:29頁)

所 見 出土遺物から、6世紀後半の住居と考えられる。

1区65号住居

位置 Jc-4グリッド 写真 PL42・43
形状 長軸をほぼ南北方向にする台形を呈する。周壁は西壁の一部と東壁の北部の一部が凹凸に掘られている他は、ほぼ直線的に掘られている。四隅は丸くなっているが、特に南東隅がやや膨らんで丸くなっているために全体の形状が台形になっている。規模は長軸4.14m、短軸3.75mである。

面積 13.5m² **方位** N-102.5°-E
床面 遺構確認面から34cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平らでやや硬化している。

竈 東壁の中央より南側に、竈が付設されていた。竈は袖が住居内部に張り出しており、向かって右は64cm、左は40cmの袖が残存していた。特に右袖には先端に倒立した壘形土器(577)が据えられており、袖端部の芯に使われていた。左袖には赤化した粘土のみが先端部に残っている。煙道部は遺構確認面で壁より15cm外側に突出していた。燃焼部の焚き口はやや平らで、燃焼部中央から煙道部に向かって

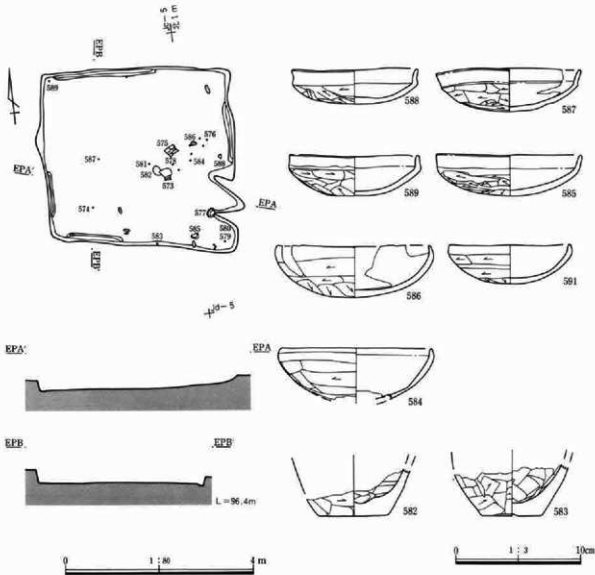
なだらかに傾斜している。

周溝 北壁の西半分・東壁の北半分・南壁の西端・西壁の南端の4カ所に幅7～11cmの比較的狭い周溝が検出された。

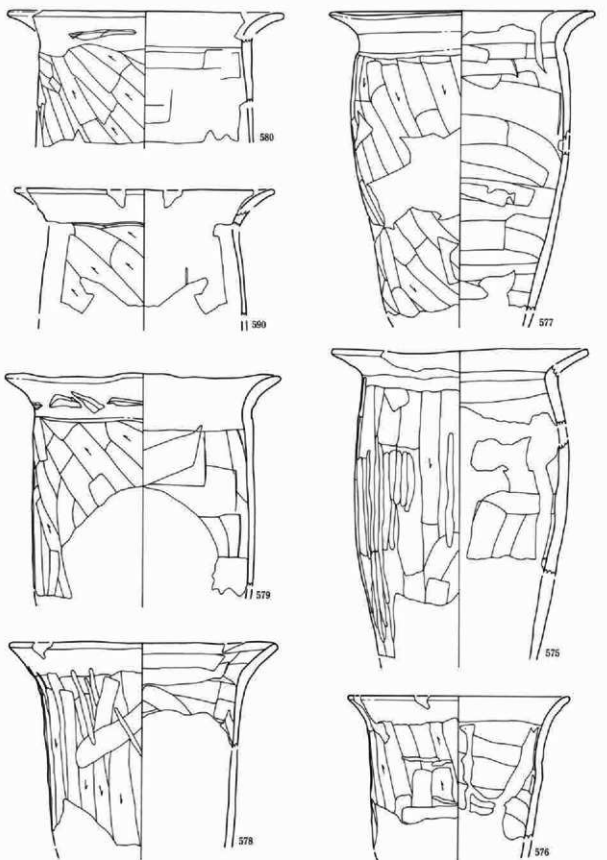
柱穴 柱穴は検出されなかった。

遺物 270点余りの遺物が出土している。床面近くの遺物は少ない。杯形土器(585・587・588)は床面直上で出土している。また住居中央部やや東で出土した甕形土器(573・575)や杯形土器(586・584)等は床面から5～14cm浮いて出土した。敲石は埋没土中から出土した。(遺物観察表：30頁)

所見 出土遺物から、7世紀中葉の住居と考えられる。

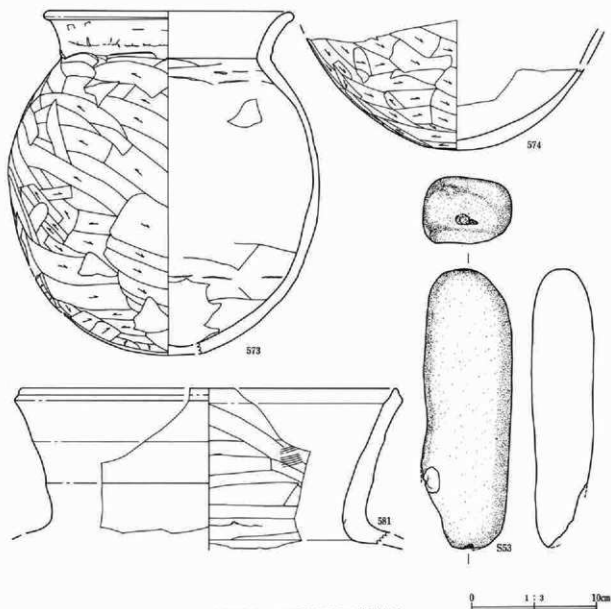


第108図 1区65号住居と出土遺物(1)



第109図 Ⅰ区65号住居出土遺物(2)

0 1:3 10cm



第110図 1区65号住居出土遺物(3)

1区8号住居

位置 Lo-1グリッド 写真 PL44

形状 短軸を南北方向にする隅丸長方形を呈する。規模は長軸3.80m、短軸3.53mである。周壁はほぼ直線的に掘られている。

面積 10.7m² 方位 N-80°-E

床面 遺構確認面から44cm掘り込んで床面となる。床面には、竈右横の土坑とは別に、2基の土坑が検出された。掘り下げ時の埋没土の観察からは、住居に伴う標相が見られたが、確証はない。北側の

ものは長径1.64m、短径1.30m、深さ0.1mの楕円形で、断面形は皿状を呈している。南西部のものは直径1.1m、深さ0.34mの円形の土坑である。土坑以外の部分の床面はほぼ平らで、硬化している部分もある。

竈 東壁のほぼ中央よりやや南側に竈が付設されていた。両側が壁より住居内側に張り出す竈で、向かって右側は38cm、左側は34cmの袖の基部が残存していた。煙道部は遺構確認面で47cm住居の外側へ突出していた。袖の内面側はよく焼けて焼土化して

第6章 古墳時代中期・後期の遺構と遺物

いる。燃焼面は、竈手前の床面から煙道部までなだらかに傾斜していた。

柱 穴 検出されなかった。

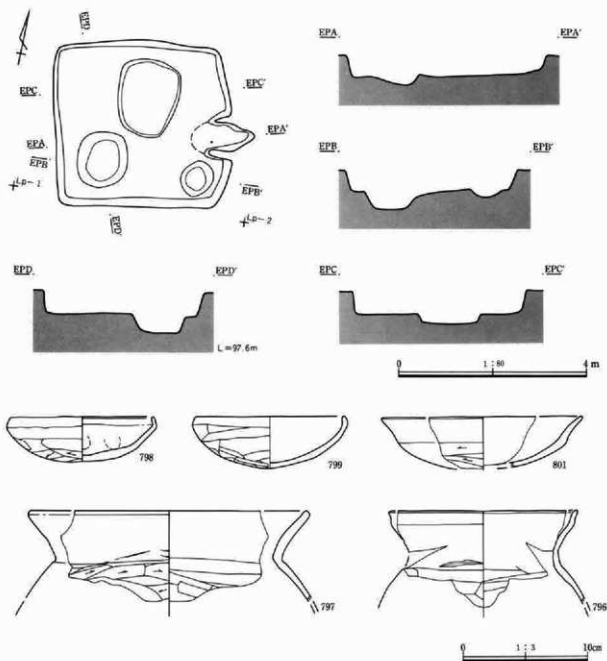
貯蔵穴 竈の向かって右側、住居南東隅に、いわゆる貯蔵穴が検出された。直径0.7m、深さ0.14mの断面形が弧を描く円形の土坑である。出土遺物はなかった。

遺 物 130点余りの遺物が出土している。床面直上

遺物はほとんど無く、竈燃焼部に土器が出土しているが、固化できない破片であった。図示した遺物は埋没土中の出土遺物である。

(遺物観察表：31頁)

所 見 埋没土中の出土遺物からであるが、7世紀代の住居と考えたい。



第1111図 Ⅰ区8号住居と出土遺物

1区48号住居

位置 Ip・q-14グリッド 写真 PL44

重複 北隅を1号溝で切られている。

形状 対角線をほぼ南北方向にする台形を呈する。1号溝で切られた北隅を除いた三隅ともやや丸くなっている。南隅がやや南側に広がっている。周壁はほぼ直線的に掘られているが、北壁の一部が不明瞭であった。規模は長軸推定4.78m、短軸4.68mである。

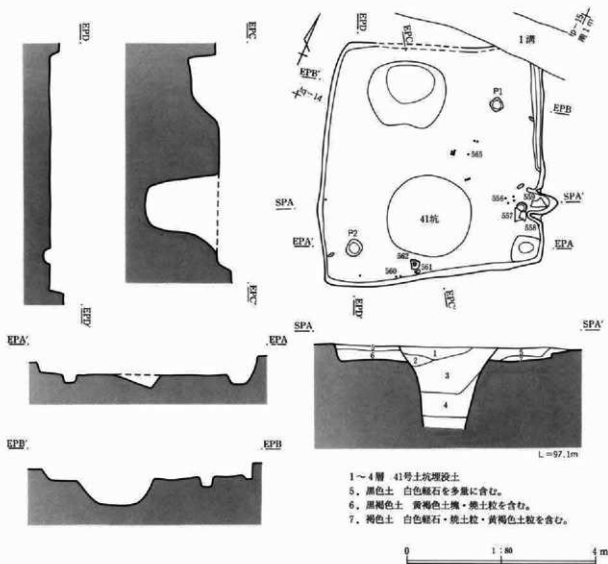
面積 計測不可 方位 N-63.5°-E

床面 遺構確認面から26cm掘り込んで床面となる。床面には、ほぼ中央部に2基の土坑が掘り込ま

れ、床面が壊されている。南東部のものは井戸と考えられる。北西部のものは、住居との新旧関係が明確にできなかったが、床面や北壁を壊しているところからすれば、住居より新しいと判断したい。

埋没土 白色軽石や黄褐色土粒・焼土粒を含む黒褐色土で埋まっている。

竈 北西壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。竈の両袖が壁よりも住居内部に張り出す形態の竈で、向かって右側は22cm、左側は20cm袖の基部が残存していた。また煙道部は壁から外へ30cm突出していた。右袖の先端には壺形土器(557)の上半部が倒立して出土し、右側に胸部中位が横になって出土



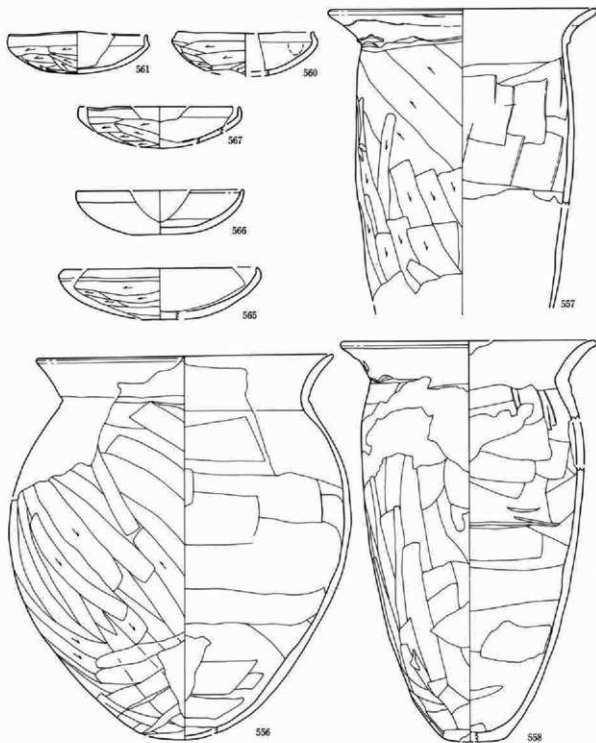
第112図 1区48号住居

第6章 古墳時代中期・後期の遺構と遺物

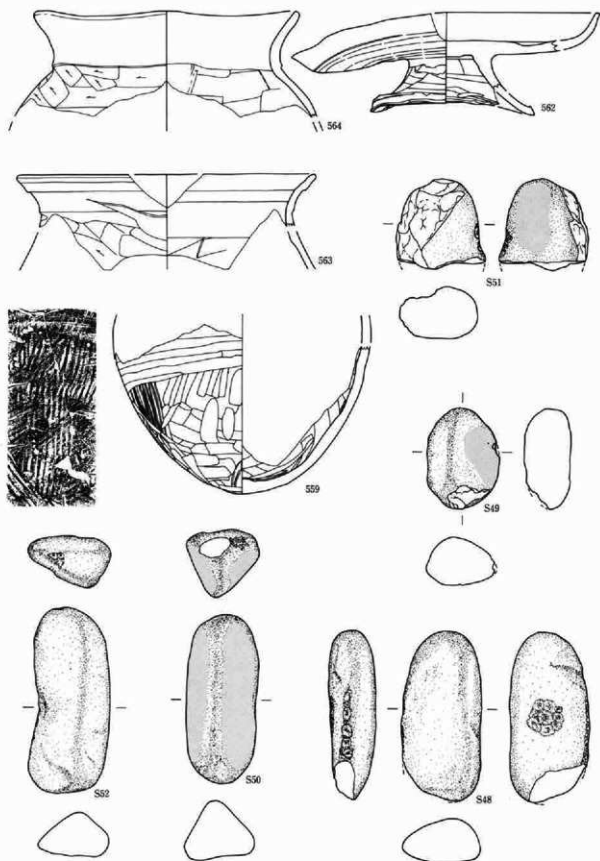
した。しかし、甕の崩落が著しく、この壺形土器が甕の袖芯材であったかどうかは確定できなかった。燃焼部にはほぼ中央部に須恵器壺形土器の底部(559)が2cmほど灰面から浮いて出土した。

周溝 北東壁の北半にのみ、幅15~18cmの周溝が検出された。

柱穴 2本の支柱穴が検出された。各支柱穴の規模(短径×長径×深さ)は、P1:26×28×19cm、



第113図 Ⅰ区48号住居出土遺物(1)



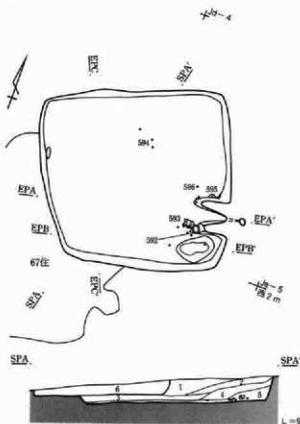
第114図 1区48号住居出土遺物(2)

第6章 古墳時代中期・後期の遺構と遺物

P 2 : 31×34×16cmである。P 1・P 2 は住居の東西南方向の対角線上で相対する主柱穴で、P 2 は対角線にのる位置に掘られているが、P 1 はやや北側にずれている。また南北方向の対角線上の主柱穴 2 本は前述した土坑と重複しないが、検出されなかった。貯蔵穴 竈の向かって右側の住居東隅に、長軸0.57m、短軸0.50m、深さ0.23mの方形の貯蔵穴が検出された。断面形は椀形を呈する。出土遺物はない。遺物 180点余りの遺物が出土している。床面近くの出土遺物は竈周辺と、南東壁沿いに集中しているが、後者の土器器杯形土器(560・561)・須恵器高盤形土器は床面から10cm浮いて出土している。一方竈の周辺から出土した土器壘形土器(556・557・558)や杯形土器(565)等は床面直上から出土した。敲石や磨石は埋没土中からの出土である。

(遺物観察表：31・32頁)

所見 出土遺物から、7世紀後半の住居と考えられる。



第115図 1区66号住居

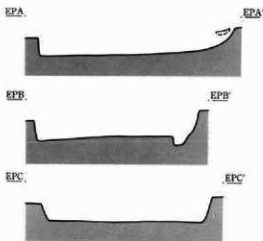
1区66号住居

位置 Jd-3グリッド 写真 PL45
重複 南隅で67号住居と重複しているが、66号住居の方が深いので66号住居の壁・床面は残っている。
形状 対角線をほぼ南北方向にする隅丸長方形を呈する。周壁は直線的に掘られている。規模は長軸3.78m、短軸4.0mである。

面積 12.3m² 方位 N-70°-E
床面 遺構確認面から47cm掘り込んで床面となる。床面は凹凸がなく、平らであるが、竈の周辺はやや床面が高くなっており、竈前の床面には灰や焼土が広がっていた。

埋没土 白色軽石・浅間C軽石・焼土粒・炭化物粒を含む黄褐色土で埋まっていた。

竈 北東壁中央よりやや南に竈が付設されていた。住居壁より内部に電袖が張り出す形態の竈で、向かって右側は50cm、左側は59cm袖の基部が残存していた。右袖の先端には土器壘形土器(592)が倒立



1. 暗褐色土 白色軽石・浅間C軽石・焼土粒・炭化物粒を含む。
2. 黄褐色土 白色軽石・浅間C軽石・焼土粒・2~3cm大の黄褐色土塊を含む。
3. 黄褐色砂質土 浅間C軽石を含む。
4. 黄褐色土 2層に似るが、白色軽石が少なく、焼土粒・黄褐色土塊が増える。
5. 黄褐色土 わずかに黒色土・焼土粒を含む。
6. 1区67号住居埋没土



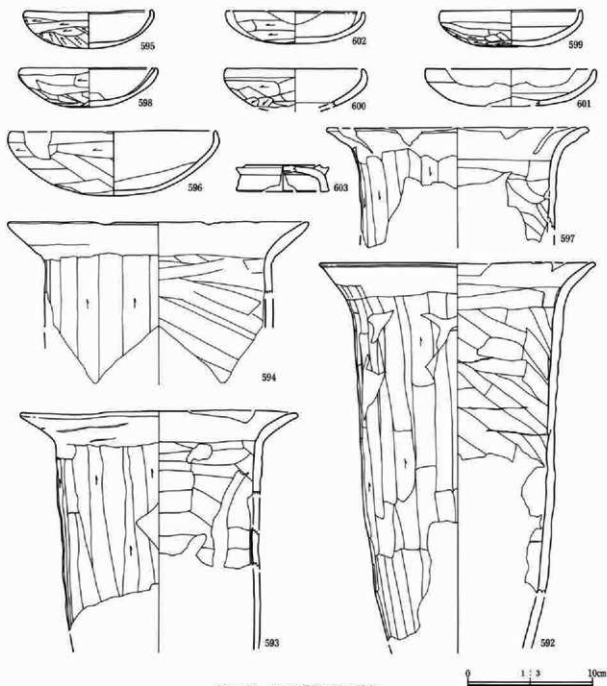
して出土しており、袖芯材として使われたものであろう。また壺形土器(593)も隣接して床面直上で出土している。煙道部は壁から外へ34cm突出しており、燃焼部の天井の一部が残存していた。

柱 穴 柱穴は検出されなかった。

貯蔵穴 竈右側住居南東隅に、長径0.8m、短径0.49m、深さ0.18mの不正楕円形の貯蔵穴が検出された。

遺物 560点余りの遺物が出土している。床面近くで出土した遺物はあまり多くない。竈以外では、土師器杯形土器(595・596)が、壺形土器(594)が床面直上あるいは数cm浮いた状態で出土している。他は埋没土中の出土である。(遺物観察表：32頁)

所見 出土遺物から、7世紀後半の住居と考えられる。



第116図 1区66号住居出土遺物

Ⅰ区 68号住居

位置 J1-3グリッド 写真 PL45・46

形状 対角線をほぼ南北方向とする隅丸長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られているが、西壁と北壁の全体がやや膨らんでいる。また南壁の西隅に25cmほど突出している部分があり、不整形である。規模は、長軸4.78m、短軸4.55mである。

面積 18.7㎡ 方位 N-71.5°-E

床面 遺構確認面から27cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平らで、中央部は硬化している。

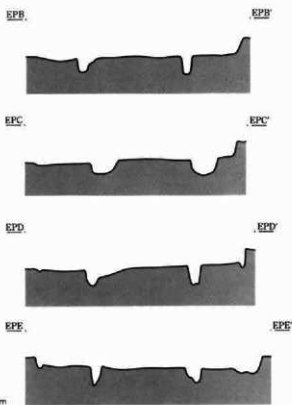
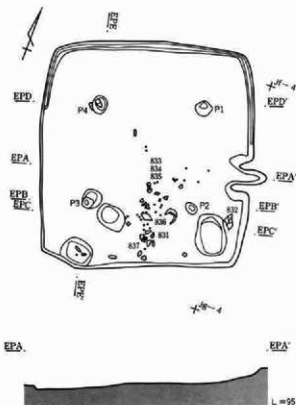
竈 東壁中央わずかに南寄りに竈が付設されていた。竈は両袖が住居壁から内部に張り出しており、向かって右側は41cm、左側は36cm袖の基部が残っていた。煙道部は壁から外へ30cm突出していた。焚き口から燃焼部まではほぼ平らで、煙道部は住居壁付近で斜め上方に立ち上がる。竈内部および周辺から遺物は出土しなかった。

周溝 北壁と東・西壁の北1/3ほどのところまで、

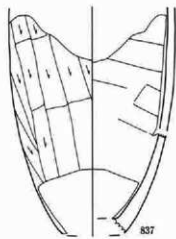
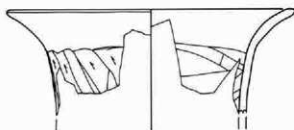
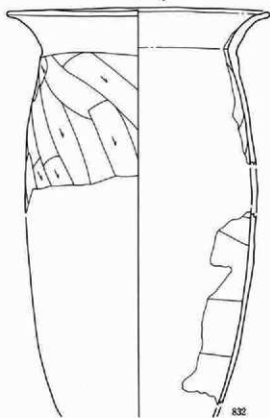
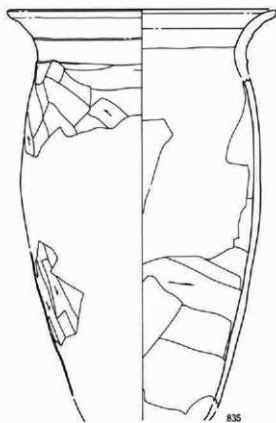
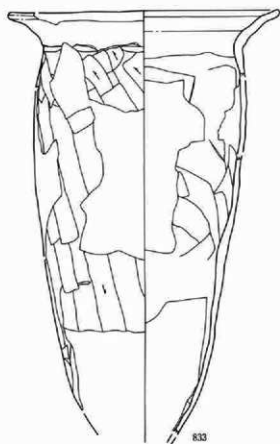
コの字状に幅10~14cmの周溝が検出された。

柱穴 4本の主柱穴が検出された。各主柱穴の規模(短径×長径×深さ)は、P1:32×36×39cm、P2:24×25×38cm、P3:38×41×29cm、P4:30×37×38cmである。主柱穴のうちP2・P3・P4は対角線上の位置に掘られているが、P1はやや南にずれている。各主柱穴を結んだ形は平行四辺形を呈する。

貯蔵穴 竈の右脇、住居南東隅に長径0.89m、短径0.65m、深さ0.33mの楕円形の貯蔵穴が検出された。断面形は碗形をしている。壁との間に壺形土器(832)が出土したが、床面から15cm浮いている。内部には出土遺物はない。また、主柱穴P3の東南側に隣接して、長径0.65m、短径0.47m、深さ0.32mの楕円形の土坑が検出された。この土坑も貯蔵穴も磨石・敲石・土師器壺形土器を中心とした遺物集中区を挟んで位置しており、作業空間を想起させる。土坑には底面から1~2cm浮いて鉄片が出土している。

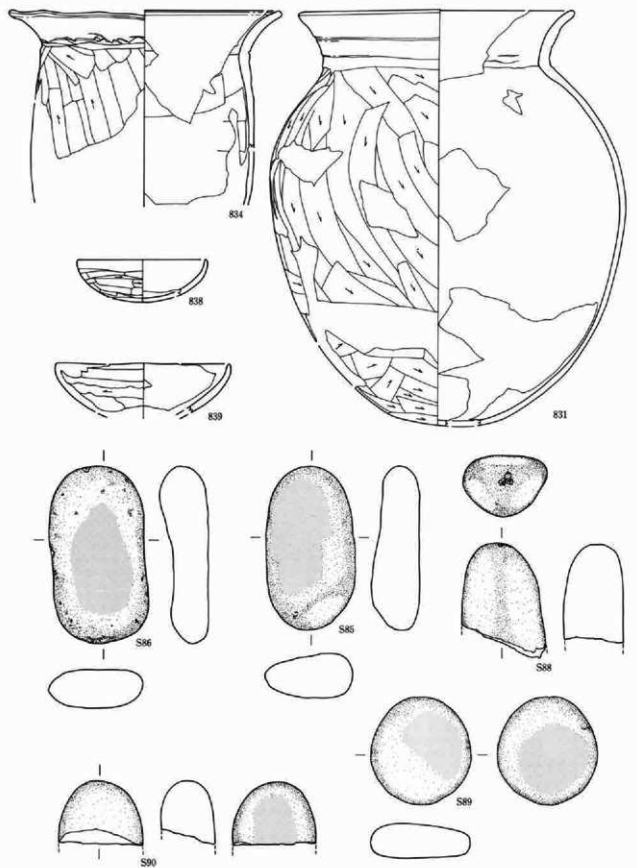


第117図 Ⅰ区68号住居



第118図 1区68号住居出土遺物(1)

0 1:3 10cm



第119図 I区68号住居出土遺物(2)

遺物 310点余りの遺物が出土している。床面近くから出土した遺物は住居南東部に集中しており、前述したように土師器壺形土器(831・833~837)と敲石・磨石が集中して出土している。石器は使用痕のあるものは図示したが、出土地点を特定できない。鉄片は図示できなかった。なお、土師器杯形土器(838・839)は埋没土中の出土である。

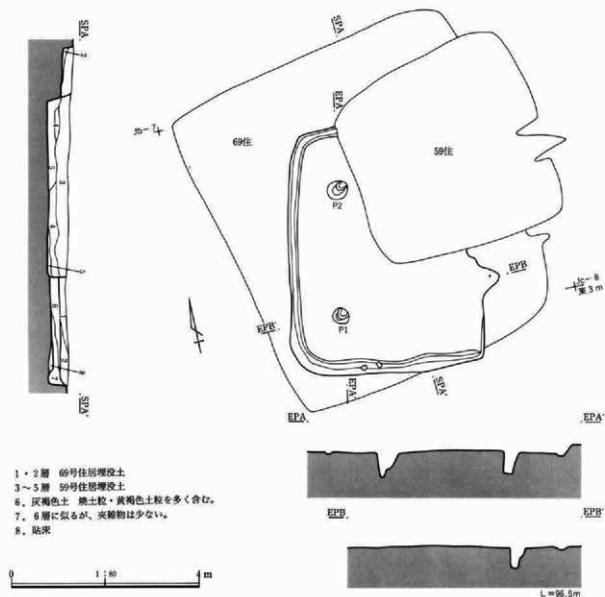
(遺物観察表：32・33頁)

所見 出土遺物から、7世紀後半の住居と考えられる。

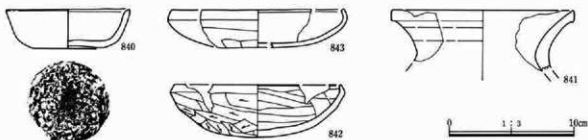
1区70号住居

位置 Jb-7グリッド 写真 PL46・47
重複 本住居の埋没土上に後出する69号住居がつけられている。さらに北西部が59号住居に切られている。

形状 長軸を南北方向にする隅丸長方形を呈すると推定される。周壁はほぼ直線的に掘られており、隅も比較的丸い。北西隅が切られているので規模は推定値であるが、長軸5.25m、短軸4.20mであった。面積 計測不可 方位 N-100°-E



第120図 1区70号住居



第121図 1区70号住居出土遺物

床 面 遺構確認面から13cm掘り込んで床面となる。先行する69号住居埋没土中に床面が作られており、あまり明瞭な硬化面は認められなかった。

埋没土 焼土粒・黄褐色土粒を含む灰褐色土で埋まっている。

竈 東壁中央よりやや南寄りに竈が検出された。後出する69号住居に竈の上半部は壊されており、焼土や灰の残存面の範囲で、竈がとらえられたのみである。したがって袖や煙道部の形態や規模は不明である。

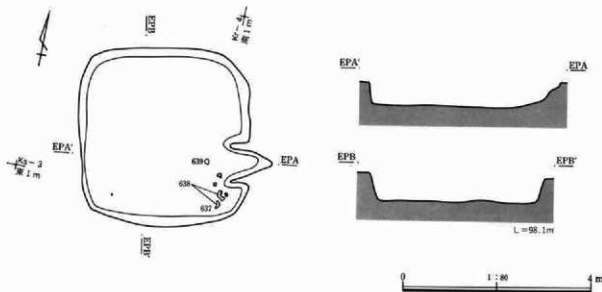
周溝 残存している範囲のうち、東壁を除いた壁に、幅14～20cmの周溝が検出された。

柱穴 2本の主柱穴が検出された。各主柱穴の規模(短径×長径×深さ)は、P1:33×34×45cm、

P2:39×42×53cmである。P1・P2ともに住居の対角線上に位置し、それぞれを結んだ線は西壁と平行する。4本柱穴とした場合に北東部・南東部に想定される柱穴2本は検出されなかった。

遺物 70点余りの遺物が出土している。床面近くから出土したものはほとんど無い。南壁ほぼ中央の壁際に出土した須恵器杯形土器(840)は11cm床面から浮いていた。図示した他の出土遺物は埋没土中のものである。(遺物観察表:33頁)

所見 出土遺物から、7世紀後半の住居と考えられる。



第122図 2区36号住居

2区36号住居

位置 Kr-3グリッド 写真 PL47

形状 長軸を南北方向にする隅丸長方形を呈する。周壁のうち南壁はやや膨らんでいるが、他は直線的に掘られている。四隅は大きく丸くなっている。規模は長軸3.76m、短軸3.66mである。

面積 10.4㎡ 方位 N-78°-E

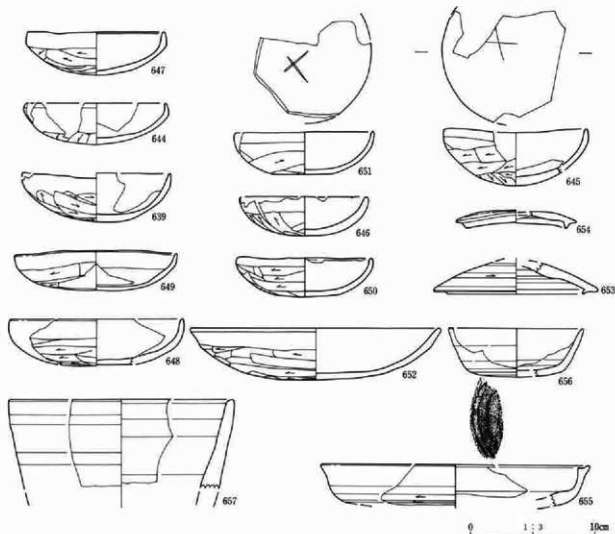
床面 遺構確認面から53cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平らで、やや硬化している。竈前面の焼土や灰の分布はない。

竈 東壁中央よりやや南寄りに竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、向かって右側は36cm、左側は40cm、袖の基部が残存していた。袖の内面はそれほど焼土化していない。

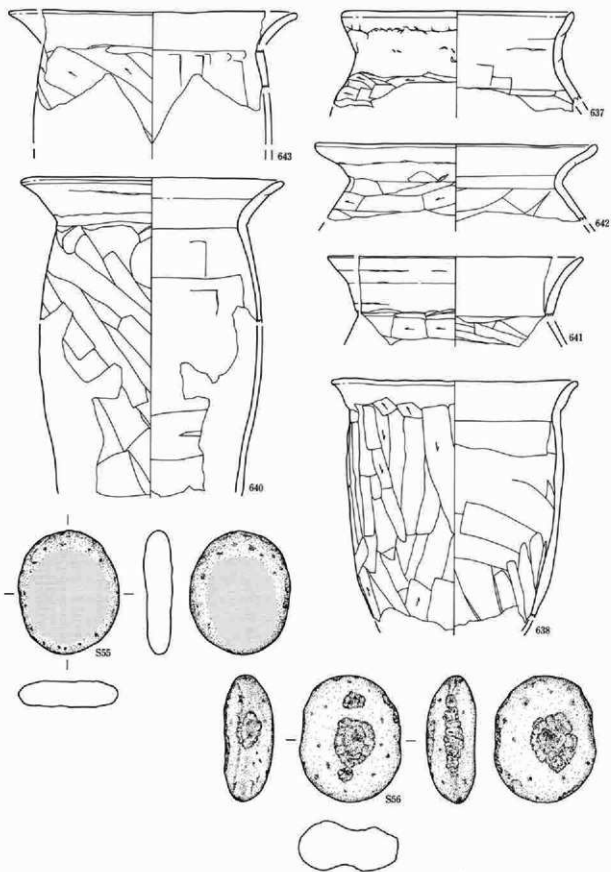
煙道部は壁から49cm外へ突出していた。燃焼部は焼土がやや厚く残っており、緩やかに傾斜しているが、壁から外へ19cmのところ段をつけて煙道部が続いている。竈の構造に関係するような出土遺物はなかった。

柱穴 検出されなかった。

遺物 370点余りの遺物が出土している。竈の右脇に床面近くの遺物が集中している。土師器変形土器(637・638)は竈右の床面上1~6cmのところ出出した。杯形土器(639)は竈前面で出土したが、床面から30cmほど浮いている。(遺物観察表:33・34頁) 所見 出土遺物から、7世紀後半の住居と考えられる。



第123図 2区36号住居出土遺物(1)



第124図 2区36号住居出土遺物(2)

2区50号住居

位置 Ho-15グリッド 写真 PL48・49

形状 対角線をほぼ南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られている。四隅はやや丸い。規模は長軸5.19m、短軸4.98mである。

面積 20.1㎡ 方位 N-67°-E

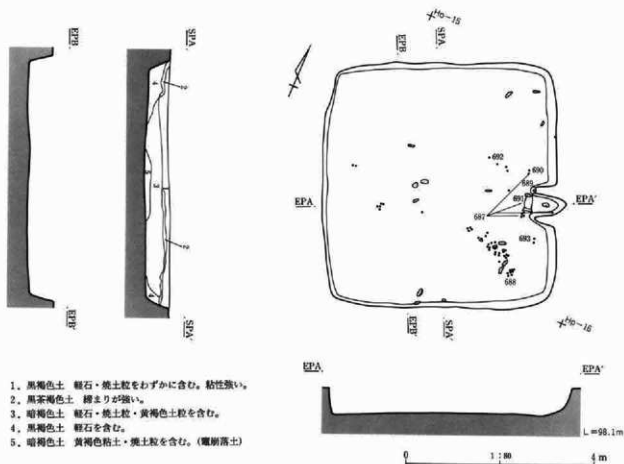
床面 遺構確認面から46cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平らで、中央部や竈周辺は硬化している。また、竈前面には焼土粒や灰が散布している。埋没土 軽石・焼土粒・黄褐色土粒を含む黒褐色土・暗褐色土で埋まっていた。

竈 北東壁中央よりわずかに南寄りに竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が掘り出す形態の竈で、向かって右側は38cm、左側は37cm、袖の基部が残存していた。竈の燃焼部壁は良く焼けて焼土化している。煙道部は壁から外へ20cm突出していた。燃焼部の断面形は、ほぼ平らで、ちょうど住居壁の

あたりから急に燃焼部へと立ち上がる。左側の袖の先端には土師器変形土器(689)が倒立して出土している。袖芯材として使われたものと考えられる。右袖先端は土器の出土はなかったが、灰黄褐色の粘土塊が大きく崩れていた。また焚き口部には変形土器(687)が横位に倒れて出土した。竈焚き口の構造材と考えられる。燃焼部中央にはやや大きめの棒状跡が、支脚として立てられていた。

柱穴 検出されなかった。

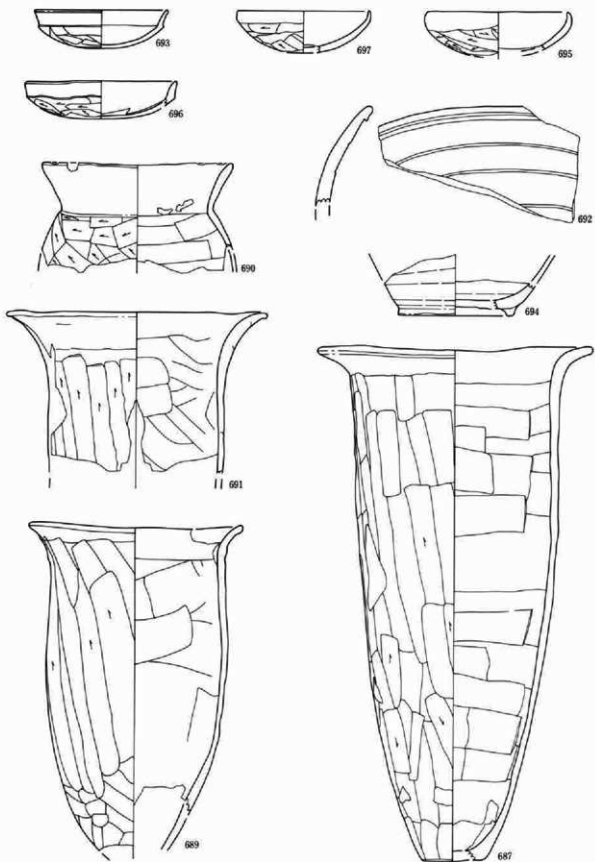
遺物 260点余りの遺物が出土している。竈周辺に床面近くの遺物が多く出土している。竈の右脇で土師器杯形土器(693)が床面から9cm浮いて出土しており、住居南隅では変形土器(688)、竈左前では須恵器変形土器破片(692)が床面直上で出土した。また、本住居では19点の棒状跡が住居東半部を中心に出土している。これらのうち使用痕があるものを図示した。なお、これらの跡は記録が不十分で、出土位置



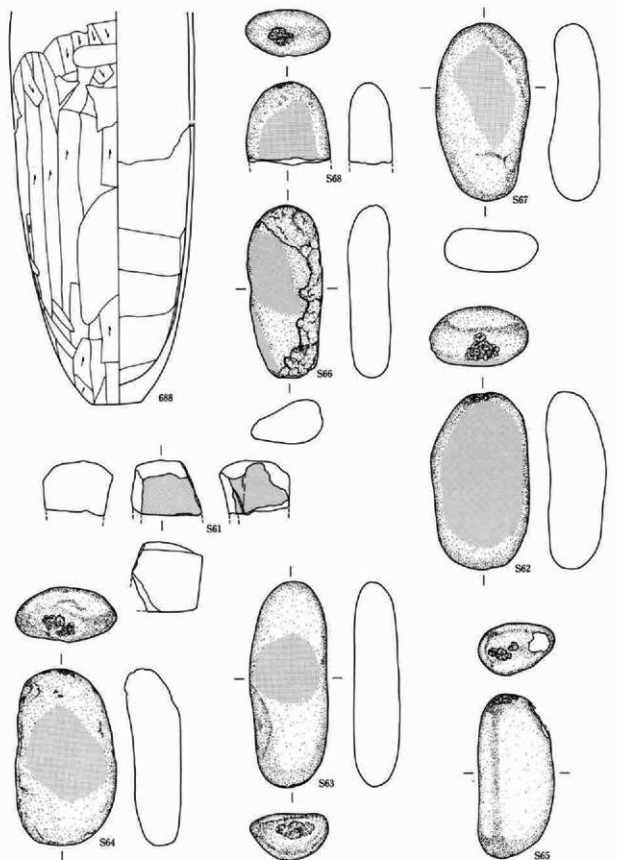
1. 黒褐色土 軽石・焼土粒をわずかに含む。粘性強い。
2. 黒茶褐色土 粘まりが強い。
3. 暗褐色土 軽石・焼土粒・黄褐色土粒を含む。
4. 黒褐色土 軽石を含む。
5. 暗褐色土 黄褐色粘土・焼土粒を含む。(竈前落土)

新125図 2区50号住居

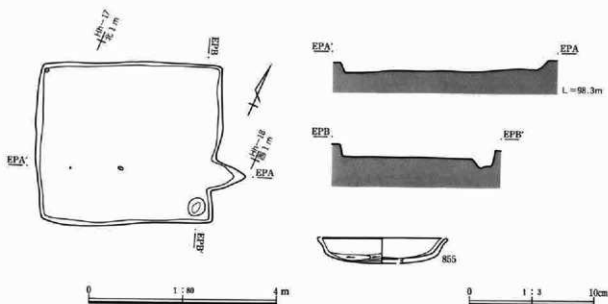
第6章 古墳時代中期・後期の遺構と遺物



第126図 2区50号住居出土遺物(1)



第127図 2区50号住居出土遺物(2)



第128図 2区94号住居と出土遺物

の特定ができない。磁石は埋没土中からの出土である。(遺物観察表：34・35頁)

所見 出土遺物から、7世紀後半の住居と考えられる。

2区94号住居

位置 Hh-17グリッド 写真 PL49

形状 対角線を南北方向にする長方形を呈する。周壁は直線的に掘られており、四隅は角張っている。規模は長軸3.99m、短軸3.40mである。

面積 11.6㎡ 方位 N-66°-E

床面 遺構確認面から25cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平らで、住居中央から電前面にかけて硬化していた。電前面の床面はやや高くなっている。

竈 北東壁中央よりやや東寄りに竈が付設されていた。竈は袖が住居内部にほとんど張り出さない形態の竈で、煙道部は壁から外へ62cm突出していた。焚き口部から煙道部へは緩やかに傾斜していた。燃焼部の内壁はよく焼けて、厚く焼土化していた。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 電右脇、住居東隅に貯蔵穴が検出された。長径0.40m、短径0.35m、深さ0.12mで断面形は箱形を呈している。出土遺物は無い。

遺物 30点余りの遺物が出土している。床面近くの遺物は小破片で図化はできなかった。図示した土器器杯形土器(855)は埋没土中の出土である。

(遺物観察表：35頁)

所見 出土遺物および住居形態から7世紀後半の住居と考えられる。

2区95号住居

位置 Hi-h-17グリッド 写真 PL50

重複 北西隅を新しい方形土坑に切られているが、本住居の方が深いので、壁・床面ともに残存していた。

形状 短軸をほぼ南北方向にする隅丸長方形を呈する。周壁は直線的に掘られており、四隅は比較的丸い。規模は長軸3.66m、短軸3.14mである。

面積 9.5㎡ 方位 N-74.5°-E

床面 遺構確認面から46cm掘り込んで床面となる。床面はやや中央部が高くなっている他はほとんど

ど平らで、中央部は硬化していた。

埋没土 焼土粒・炭化物粒・黄褐色土粒を含む暗褐色土で埋まっていた。最上層には白色軽石も含まれていた。

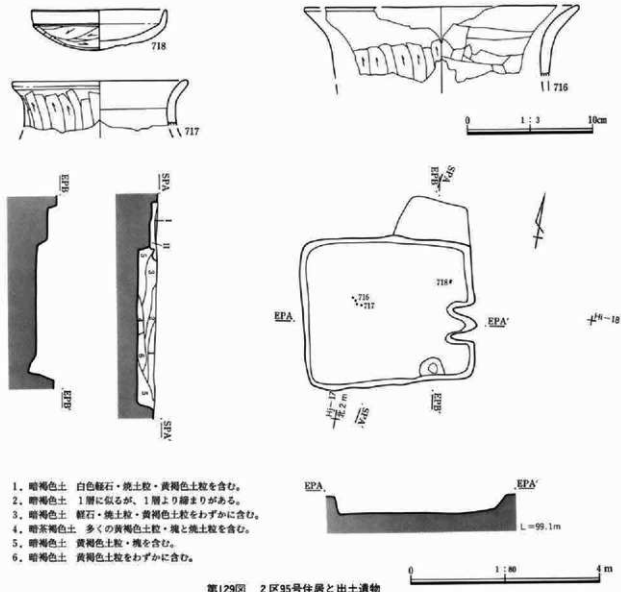
竈 東壁中央やや南寄りに竈が付設されていた。竈袖が住居内部に張り出す形態の竈で、向かって右側は50cm、左側は44cm、袖の基部が残存していた。煙道部は壁から外へ現状で6cm突出していた。燃焼部内壁は良く焼けて焼土化していた。燃焼部はほぼ平らで、住居壁より内側で立ち上がり煙道部へつながっている。

柱 穴 検出されなかった。

貯蔵穴 電石脇、南東壁の東隅から南へ0.6mの位置に貯蔵穴様のピットが検出された。規模は長径0.48m、短径0.45m、深さ0.11mのほぼ楕円形で、壁に接して掘られていた。出土遺物はない。壁柱穴の可能性もあるが、検出されたのは1基のみである。

遺物 10点余りの遺物が出土している。床面直上の出土遺物はない。図示した遺物も床面から10～30cm浮いていた。(遺物観察表：35頁)

所見 出土遺物や住居形態から、7世紀後半の住居と考えられる。



第129図 2区95号住居と出土遺物

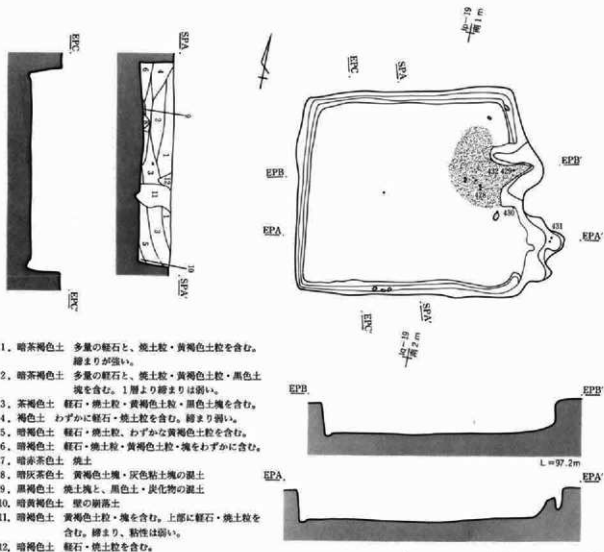
Ⅰ区22号住居

位置 Ip・q-18・19グリッド 写真 PL50
形状 短軸をほぼ南北方向にする隅丸長方形を呈する。周壁は東壁を除いてほぼ直線的に掘られている。東壁は竈が隣接して作り替えられているので、凹凸が著しい。四隅はやや丸く掘られている。規模は長軸4.80m、短軸4.30mである。

面積 16.4㎡ 方位 N-75°E
床面 遺構確認面から75cm掘り込んで床面となる。床面はやや南半部が低くなっているが、ほぼ平らで、全体的に硬化していた。竈焚き口部はやや高くなっており、前面の床面には焼土や炭が散っていた。

埋没土 上層は軽石・焼土粒・黄褐色土粒を含む黒褐色土で埋まっているが、中層には黄褐色土塊や黒色土塊が混じる土層がある。下層には焼土や炭化物を多く含んでいる。

竈 新旧2基の竈が検出された。旧竈は北東壁南端に付設されていた。袖部は除去されて残っていない。煙道部は壁の外へ24cm突出していた。新しい竈は、住居廃絶時に竈として機能していた方向のものである。竈袖が住居内部に張り出す形態で、向かって右側は34cm、左側は42cm、袖部の基部が残存していた。燃焼部は良く焼けて竈内面は固く焼土化し、燃焼面には灰が厚く残っていた。焚き口から燃焼面は緩やかに傾斜しているが、住居壁の辺りでは



第130図 Ⅰ区22号住居

0 1:80 4 m

は直に立ち上がり、煙道へと続いていた。出土遺物は無い。

周溝 新日竈の前を除いて、幅15~20cmの周溝が各壁沿いに検出された。

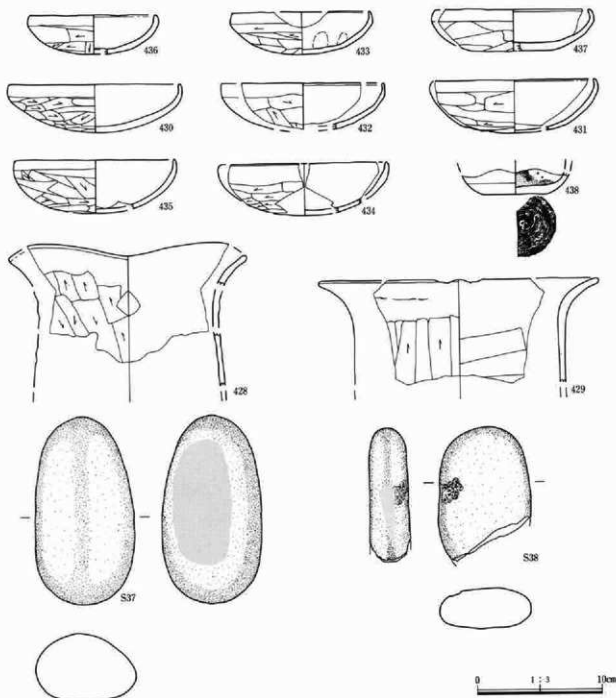
柱穴 検出されなかった。

遺物 330点余りの遺物が出土している。床面に近

い遺物は竈周辺に集中していた。土師器甕形土器(428・429)、杯形土器(432)がほぼ床面直上で出土した。他の図示した遺物は埋没土中の出土である。

(遺物観察表：35・36頁)

所見 出土遺物から、7世紀末の住居と考えられる。



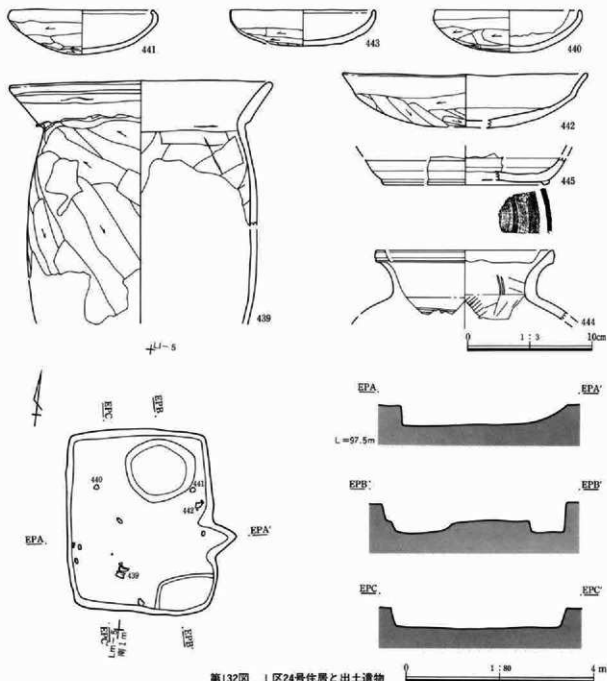
第131図 1区22号住居出土遺物

Ⅰ区 24号住居

位置 LI-4・5グリッド 写真 PL50・51
 形状 長軸をほぼ南北方向にする長方形を呈する。南東隅はやや膨らむ。周壁は直線的に掘られている。規模は長軸3.90m、短軸3.11mである。
 面積 10.1㎡ 方位 N-81°-E
 床面 遺構確認面から41cm掘り込んで床面となる。住居北東部に床面を掘り込んだ円形の土坑が検

出されたが、住居に伴うかどうかは断定できなかった。他の床面は竈前面を中心に硬化していた。また竈前面は灰や焼土が分布していた。

竈 東壁中央やや南寄りに竈が付設されていた。竈袖が住居内部に張り出す形態の竈であるが、袖の残存状態は良くない。向かって右側は11cm、左側は21cm、袖の基部が張り出していた。煙道部は42cm壁の外側に突出していた。燃焼部は比較的良く焼



第132図 Ⅰ区24号住居と出土遺物

けていて、燃焼面には灰が残っていた。燃焼部から煙道部へは緩やかに傾斜していた。

柱 穴 検出されなかった。

貯蔵穴 南東隅に、住居の東壁・南壁に沿って貯蔵穴様の土坑が検出された。長軸1.24m、短軸0.81m、床面からの深さ0.22mの方形を呈する。遺物は無い。

遺 物 210点余りの遺物が出土している。床面近くから出土したのは、図示した土師器壘形土器(439)、杯形土器(441・442)で壘形土器は住居南西部、杯形土器は竈左側で出土した。他は埋没土中の出土である。(遺物観察表：36頁)

所 見 出土遺物から7世紀末の住居と考えられる。

Ⅰ区26号住居

位置 Im-17グリッド 写真 PL51

重複 南東隅を14号土坑に切られている。

形状 対角線をほぼ南北方向にする長方形を呈する。周壁のうち、西壁・東壁は中央がやや膨らむように掘られており、北壁は直線的に掘られている。南壁は直線的であるが、やや東端が外へ開く傾向がある。四隅は比較的角張っている。規模は長軸4.51m、短軸3.99mである。

面積 16.2㎡ 方位 N-68°-E

床面 遺構確認面から46cm掘り込んで床面となる。住居北部に床面を掘り込んだ不定形の土坑がある他は床面は硬化していた。土坑上層の貼り床は明確ではなかったため、この土坑が住居に伴うかどうかは不明である。

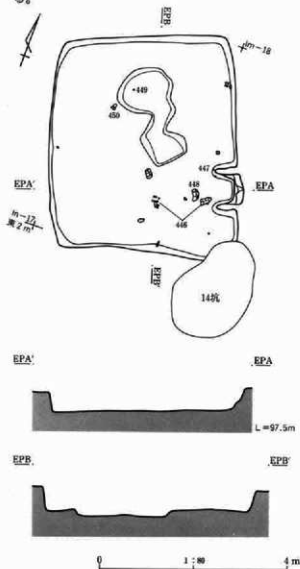
竈 北東壁中央からやや東壁寄りに竈が付設されていた。竈は袖が住居内部に張り出す形態の竈で、向かって右側47cm、左側48cm、住居内部に袖の基部が残存していた。向かって左側の袖の先端には、土師器壘形土器(447)倒立して張りついて出土していた。竈芯材の可能性がある。煙道部は壁から外へ12cmの所まで突出しているのを確認したが、煙道部の先端はもう少し外へ出ていたかもしれない。残存した天井部の焼土を残した所までの記録に止まっている。燃焼面はほぼ緩やかに傾斜し、住居壁の位置で煙道部の方へ斜めに立ち上がる。

柱 穴 検出されなかった。

遺 物 190点余りの遺物が出土している。床面近くの出土遺物はあまり多くない。土師器壘形土器(446・447・448)が竈周辺で、杯形土器(449)が北西部で出土している。また床面近くから8点の石が出土している。磁石や使用痕のある凹み石・敲石は図示したが、他に棒状礫7点がある。

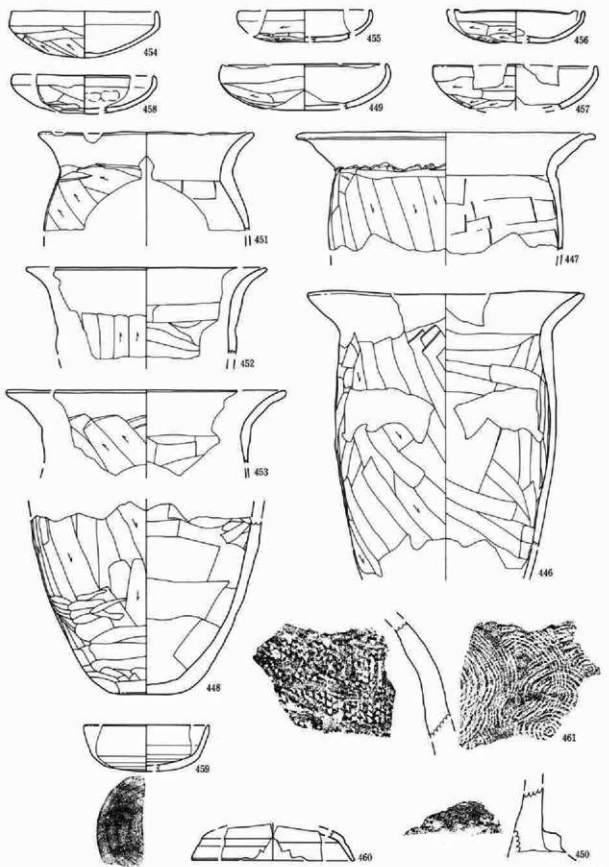
(遺物観察表：36・37頁)

所 見 出土遺物から7世紀末の住居と考えられる。

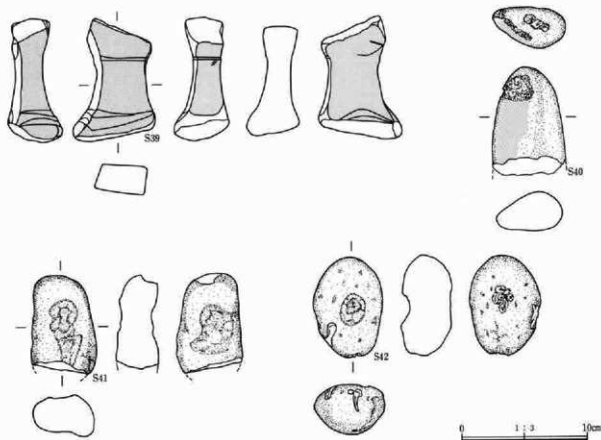


第133図 Ⅰ区26号住居

第6章 古墳時代中期・後期の遺構と遺物



第134図 Ⅰ区26号住層出土遺物(Ⅰ)



第135図 1区26号住居出土遺物(2)

2区85号住居

位置 Hk-13・14グリッド 写真 PL51
 形状 長軸をほぼ南北方向にする長方形を呈する。周壁は直線的に掘られ、四隅は比較的角張っている。規模は長軸4.63m、短軸3.63mである。

面積 12.6㎡ 方位 N-68.5°-E
 床面 遺構確認面から29cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平らで、竈の前を中心にやや硬化していた。

竈 東壁中央より南寄りに竈が付設されていた。竈は袖が住居内部に張り出す形態の竈で、向かって右側は55cm、左側は51cm住居内部に張り出して、袖の基部が残存していた。左右とも袖の先端に、土師器壘形土器が出土しており、袖芯材として使われたと考えられる。向かって右側の壘形土器(854)は図示したが、左側は体部のみであり、図示しなかった。

煙道部は住居壁から外へ23cm突出していた。壁の回りには竈天井部が残存しているようにも見たが、断面では焼けていない。燃焼部はほぼ平らで煙道部方向に緩やかに傾斜していた。燃焼面には灰が残っていたが、出土遺物はない。

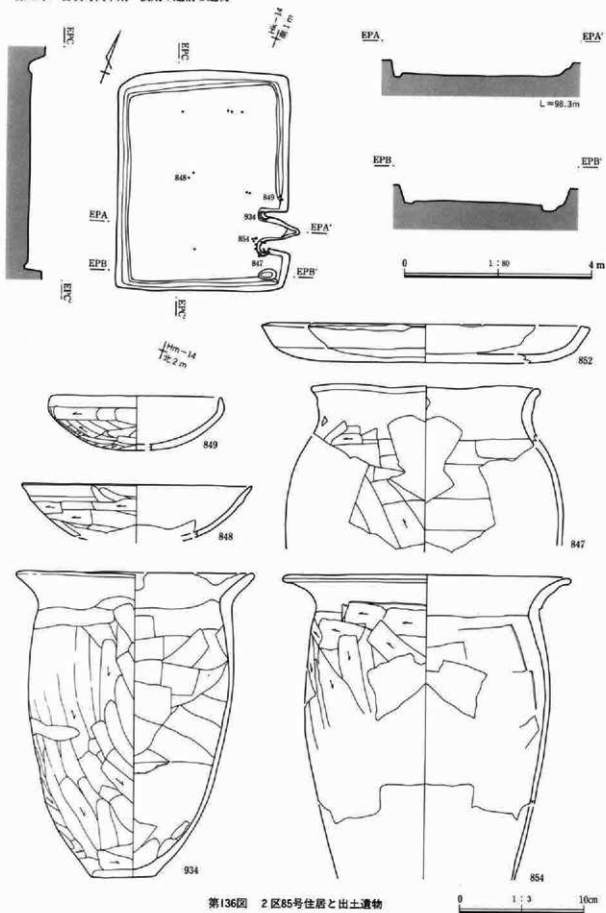
周溝 竈と竈右側の壁沿いを除いて、幅14~18cmの周溝が検出された。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 竈右側の南東隅に、長径0.39m、短径0.20m、深さ0.11mの楕円形のビットが検出された。これは周溝の延長にある。小形であるので、一般的な貯蔵穴と同様なものであるかどうかは即断できない。

遺物 120点余りの遺物が出土している。土師器壘形土器は竈袖周辺に出土していた。また、土師器杯形土器の848が住居中央部で、849が竈左側壁沿いの

第6章 古墳時代中期・後期の遺構と遺物



第136図 2区85号住居と出土遺物

床面近くで出土した。他は埋没土中の出土である。
(遺物観察表：37頁)

所見 出土遺物から、7世紀末の住居と考えられる。

2 区 102 号 住居

位置 Kc-16グリッド 写真 PL52・53
形状 長軸を南北方向にする隅丸正方形を呈する。周壁は直線的に掘られており、隅はやや丸くなっていた。規模は長軸4.95m、短軸4.88mである。
面積 19.9m² 方位 N-83°-E
床面 遺構確認面から57cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平らで、全体が硬化している。電前面には焼土や灰が散布していた。

竈 東壁中央わずかに南寄りに竈が付設されていた。電袖が住居内部に張り出す形態の竈で、向かって右側は75cm、左側は60cm、電袖の基部が残存していた。左右の袖とも先端には土師器変形土器(722・721)が倒立して出土していて、電芯材として使われていたと考えられる。また、その間にも土師器変形土器(720)が横位で出土しており、焚き口部の上部を形成していたと考えられる。燃焼面は、焚き口部から支脚までは平らで、支脚の奥から煙道部にかけてはほぼ直線的に傾斜していた。煙道部は住居壁から外へ36cm突出していた。

周溝 主柱穴P2・P3を結んだ線と西壁の交点から北側の西壁沿い、主柱穴P1・P2を結んだ線と北壁の交点から西側の北壁沿いにLの字状に周溝が検出された。周溝の幅は13～20cmである。

柱穴 4本の主柱穴と、6本のピットが床面で検出された。各主柱穴の規模(短径×長径×深さ)は、P1：31×32×48cm、P2：31×42×37cm、P3：32×45×19cm、P4：46×56×56cmである。主柱穴のうち、P1・P3は対角線にのった位置にあるが、P2・P4は南西側にずれている。各主柱穴を結んだ形は長方形を呈する。主柱穴以外のピットは、P5・P6が東壁沿いに、P7～P10は住居南西部に

集中していた。P5は主柱穴P1・P4を結んだ線と東壁の交点の壁際にあり、P8はP1・P3が通る対角線上にのっている。それぞれの規模はP5：14×20×16cm、P6：21×24×19cm、P7：38×50×13cm、P8：35×57×26cm、P9：29×31×11cm、P10：37×42×17cmである。

貯蔵穴 電右側の、住居南東隅に長径0.83m、短径0.62m、深さ0.31mの楕円形の貯蔵穴が検出された。やや南壁部分が不定形である。内部から遺物は出土していない。

遺物 540点余りの遺物が出土している。土師器杯形土器は、726が住居南西部、727・728・730・731が電周辺のそれぞれ床面近くで、また729が南壁中央壁際に出土している。変形土器は前述した電施設の他、719が貯蔵穴脇、南壁沿いに床面直上で出土した。
(遺物観察表：38頁)

所見 出土遺物から、7世紀末の住居と考えられる。

1 区 10 号 住居

位置 Md-1グリッド 写真 PL54
重複 北部が9号住居に切られている。

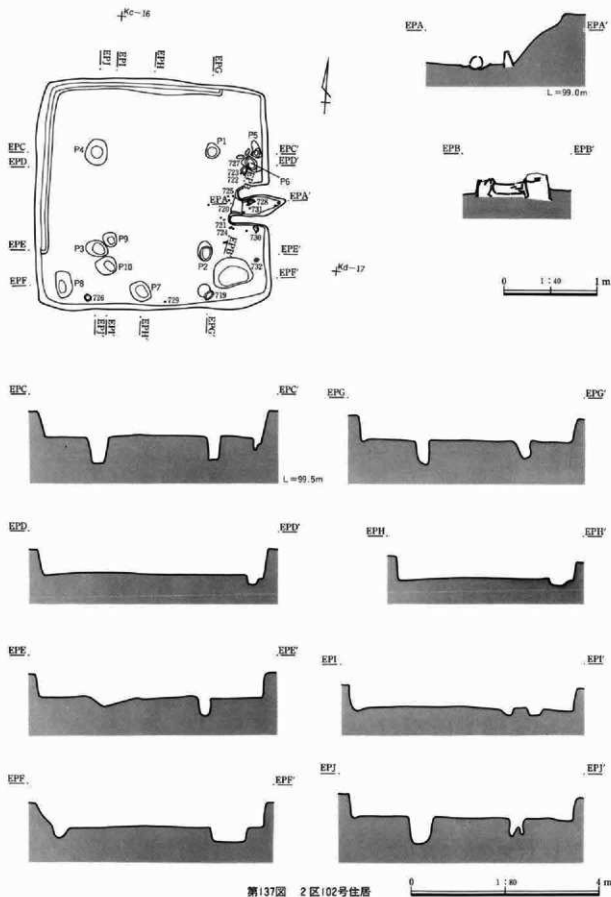
形状 南壁を東西方向にする方形を呈すると考えられるが、北壁が確認できなかったので全体の規模は不明である。計測できる東西長は3.78mである。確認された西壁と南壁はほぼ直線的に掘られており、南西隅および南東隅は比較的角張っている。

面積 計測不可 方位 N-99°-E
床面 遺構確認面から31cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平らで、硬化している。電前面には灰や焼土が散布していた。

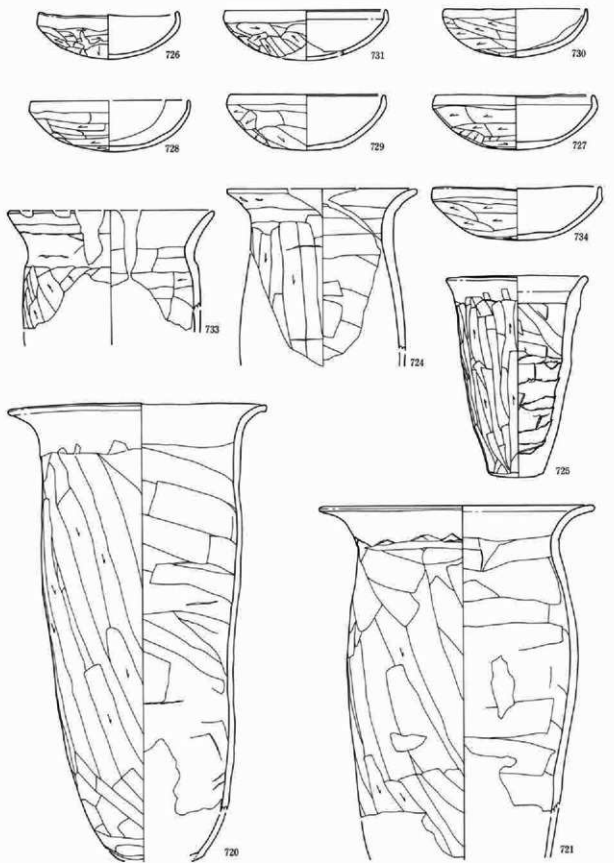
埋没土 黄褐色土塊・黒色土塊を含む暗褐色土で埋まっていた。

竈 東壁の南隅から北へ1.1mのところを中心に、電が付設されていた。竈は袖が住居内部にハの字に張り出す形態のもので、向かって右側は56cm、左側は80cm、袖の基部が残存していた。

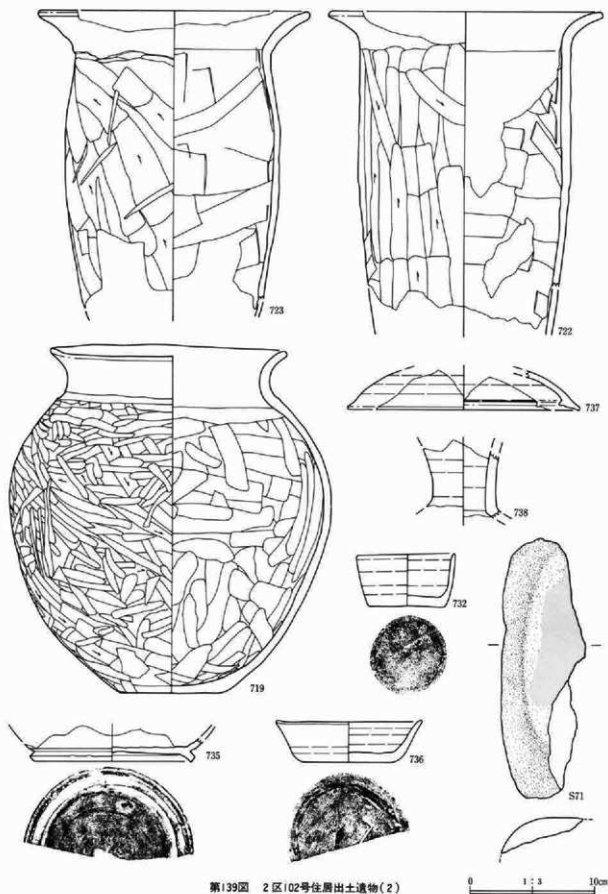
第6章 古墳時代中期・後期の遺構と遺物



第137図 2区102号住居



第138図 2区102号住居出土遺物(1)



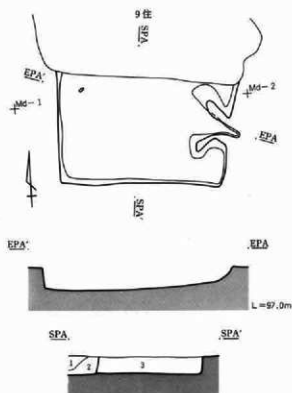
第139図 2区102号住居出土遺物(2)

煙道部は19cm住居の外側へ突出していた。燃焼部は緩やかに傾斜して住居壁付近で斜めに立ち上がり煙道部になる。

柱 穴 検出されなかった。

遺物 ほとんど出土遺物が無い。

所見 出土遺物がなく、年代を考える資料に乏しいが、住居形態から古墳時代の住居と考えたい。



1・2層 9号住居埋没土

3. 暗褐色土 1~3cm大の黄褐色土塊・黒色土塊を含む。



第140図 1区10号住居

2区32号住居

位置 Ia-14グリッド 写真 PL54

重複 西隅を14号住居に切られている。

形状 対角線を南北方向にする正方形を呈する。周壁は直線的に掘られており、四隅は比較的角張っている。南東壁はやや東に向かって開き気味である。規模は長軸2.96m、短軸2.81mである。

面積 7.0㎡ 方位 N-25°-W

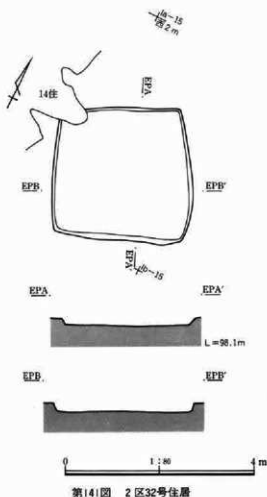
床面 遺構確認面から13cm掘り込んで床面となる。床面は平坦で、中央部はやや硬化していた。

竈 どの壁にも付設されていない。また、炉と断定できる施設も検出されなかった。

柱 穴 検出されなかった。

遺物 遺物はほとんど出土しなかった。

所見 わずかに埋没土中から出土した土器破片から、古墳時代の住居と考えられる。



第141図 2区32号住居

2区73号住居

位置 Hn-6グリッド 写真 PL54

重複 西壁が79号住居に切られている。

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁は直線的に掘られている。隅は79号住居に切られた北西隅を除き、角張っている。規模は長軸4.02m、短軸3.28mである。

面積 計測不可 方位 N-81°-E

床面 遺構確認面から44cm掘り込んで床面となる。床面は竈前面がやや低くなっている。全体に硬化していた。

埋没土 白色軽石・焼土粒・黄褐色土粒を含む黒色土・黒褐色土で埋まっていた。

竈 東壁中央よりわずかに南寄りに竈が付設さ

れていた。竈は袖が住居内部に張り出す形態の竈で、向かって右側では48cm、左側では36cm、袖の基部が残存していた。焚き口から燃焼部は若干くぼみ、緩やかに傾斜して煙道部に続く。煙道部は若干壁から58cm突出していた。竈内面の壁は良く焼けて、焼土化している。

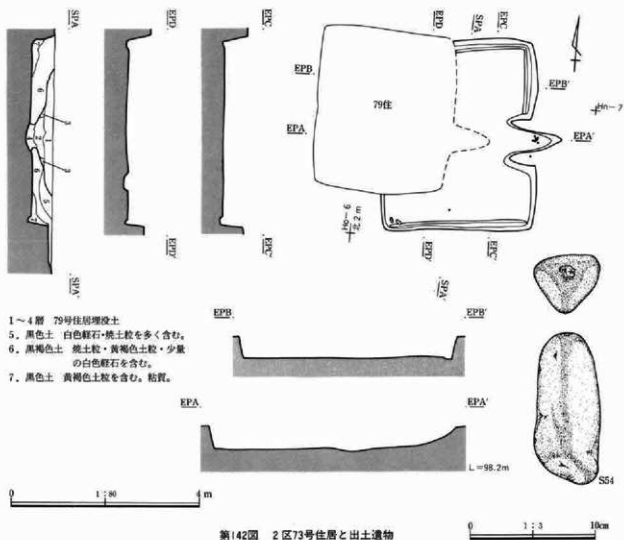
周溝 南壁と、竈より北の東壁から北壁にかけて幅13~17cmの周溝が検出された。

柱穴 検出されなかった。

遺物 10点余りの遺物が出土したのみで、図示し得たのは埋没土中の敲石のみである。

(遺物観察表: 39頁)

所見 出土遺物の小破片から、古墳時代後期の住居と考えられる。



3. 3区の遺構

3区9号住居

位置 b-1グリッド 写真 PL54

形状 残存する一辺をほぼ南北方向にする方形を呈すると考えられるが、西側の半分以上が発掘調査区域外で未調査であり、全体の形状・規模は不明である。東壁はほぼ直線的に掘られ、隅は比較的角張っている。南北長は4.65mである。

面積 計測不可 方位 N-73°-E

床面 遺構確認面から29cm掘り込んで床面とな

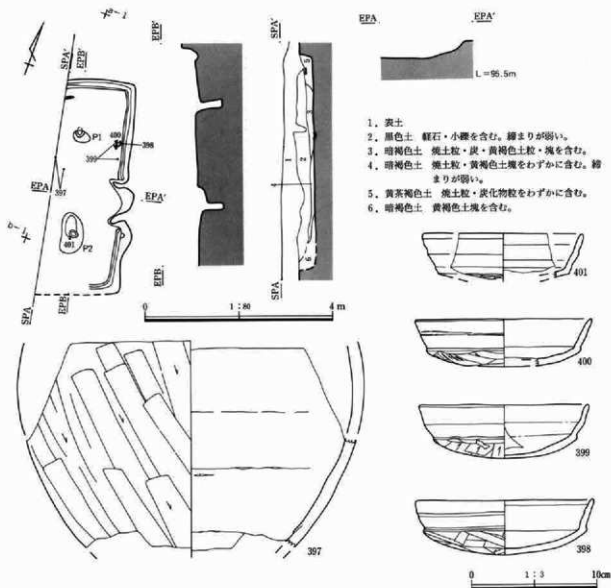
る。床面は柱穴周辺を中心に凹凸がある。

埋没土 焼土粒・炭化物粒・黄褐色土塊を含む暗褐色土で埋まっていた。

竈 東壁中央よりやや南寄りに竈が付設されていた。竈は袖が住居内部に張り出す形態の竈で、向かって右側は17cm、左側は20cm、壁から内側へ袖の基部が残存していた。竈前面から焚き口・燃烧部・煙道部へと緩やかに傾斜していた。

周溝 検出された壁にはすべて、幅10cmの周溝が検出された。

柱穴 調査した範囲内に2本の主柱穴が検出され



第143図 3区9号住居と出土遺物

た。各支柱穴の規模(短径×長径×深さ)は、P1: 25×36×54cm、P2: 47×86×53cmである。2本の支柱穴を結んだ線は東壁と平行する。

遺物 20点余りの遺物が出土している。図示した遺物は、みな床面直上の出土で、401の土師器杯形土器はP2の中位で出土した。

(遺物観察表: 39頁)

所見 出土遺物から、6世紀後半の住居と考えられる。

3区2号住居

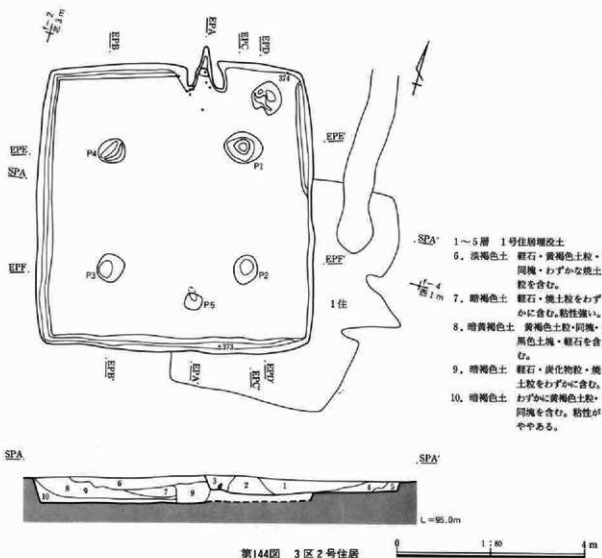
位置 e・f-2グリッド 写真 PL55
重複 南東隅を1号住居に切られているが、2号住居の方が深いので、2号住居の壁および床面は残っていた。

形状 長軸をほぼ南北方向にする正方形に近い長方形を呈する。周壁は直線的に掘られ、隅は比較的角張っている。規模は長軸6.07m、短軸5.85mである。

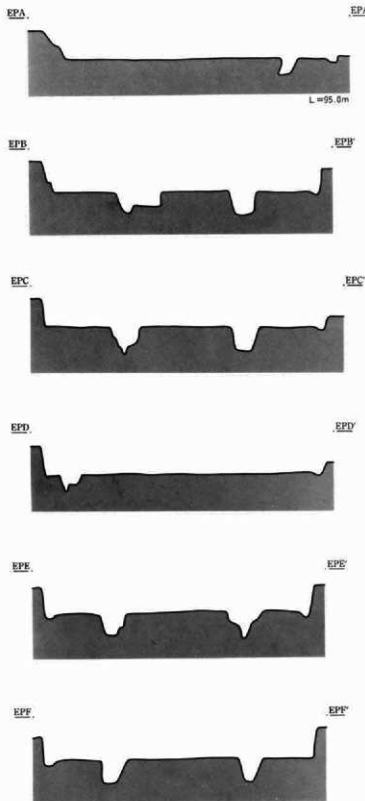
面積 26.3㎡ 方位 N-15°-W

床面 遺構確認面から65cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平らで、硬化している。電前面はやや高まっている。

埋没土 軽石・焼土粒・炭化物粒を含む暗褐色土、



第144図 3区2号住居



第145図 3区2号住居断面

EPA' 黄褐色土で埋まっていた。

竈 北壁中央よりやや東側に竈が付設されていた。竈は袖が住居内部に張り出す形跡の竈で、向かって右は48cm、左は46cm、袖の基部が残存していた。煙道部は現状で壁から外へ32cm突出していた。焚き口部から燃焼部はほぼ平らで、住居壁位置くらいで急に立ち上がり、傾斜して煙道部となる。周溝 竈より左側の北壁、西壁、南壁、東壁の北半部に周溝が検出された。幅は16~20cmである。

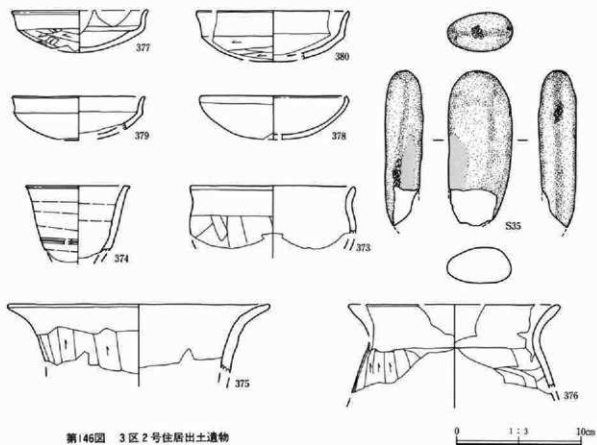
柱穴 4本の主柱穴と1本のピットが検出された。各主柱穴の規模(短径×長径×深さ)は、P1:66×80×57cm、P2:51×60×47cm、P3:58×60×50cm、P4:49×55×43cmである。主柱穴はほぼ住居対角線にのる位置に掘られているが、P1・P2・P4の柱穴の下場の位置はややずれている。各主柱穴を結んだ形は長方形を呈する。P2とP3の間に検出されたP5は、中央よりやや東の、竈に相対する位置にある。規模(短径×長径×深さ)は36×36×31cmで、住居の内側に傾斜しているのが特徴である。

貯蔵穴 竈右側、住居北東隅に不定形ではあるが、貯蔵穴様のピットが検出された。長径0.7m、短径0.63m、深さ0.29mのほぼ円形で、底面は凹凸がある。遺物は出土していない。

遺物 250点余りの遺物が出土している。床面近くの出土遺物は竈周辺に集中しているが、破片のみで、図示し得るものはなかった。図示した土器のうち、土師罎形土器(373)は南壁沿い周溝内底面直上で出土している。須恵器鉢形土器(374)は、北壁沿いで床面から22cm浮いて出土した。他は埋没土中の出土遺物である。

(遺物観察表:39頁)

第6章 古墳時代中期・後期の遺構と遺物



第146図 3区2号住居出土遺物

所見 出土遺物および住居形態から、7世紀前半の住居と考えられる。

3区4号住居

位置 g-2グリッド 写真 PL56

重複 南西部の大半を、3号住居・5号住居に切られている。

形状 対角線を南北方向にする方形を呈すると考えられるが、大半が切られているので、全体の規模・形状は不明である。調査できた範囲では、周壁は直線的に掘られ、北隅は丸い。

面積 計測不可 方位 N-71'-E

床面 遺構確認面から39cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平らであるが、あまり硬化していなかった。

埋没土 黄褐色土を含む暗褐色土で埋まっていた。

竈 北東壁に竈が付設されていたが、南部の壁が壊されているので、北東壁のどの位置に竈があったのかは不明である。竈は袖が住居内部に張り出す形態の竈で、向かって右側は32cm、左側は50cm、袖

の基部が残存していた。煙道部は壁から外へ20cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで、壁のところで斜めに立ち上がる。内面の壁は良く焼けていて、焼土化している。

周溝 残存していた北東壁と北西壁沿いに、幅13~16cmの周溝が検出された。

柱穴 検出されなかった。

遺物 遺物は少なく、5点の遺物が出土したのみである。図示したのは須恵器高杯形土器(382)で、住居北隅の床面直上で出土した。

(遺物観察表: 39頁)

所見 出土遺物から、7世紀後半の住居と考えられる。

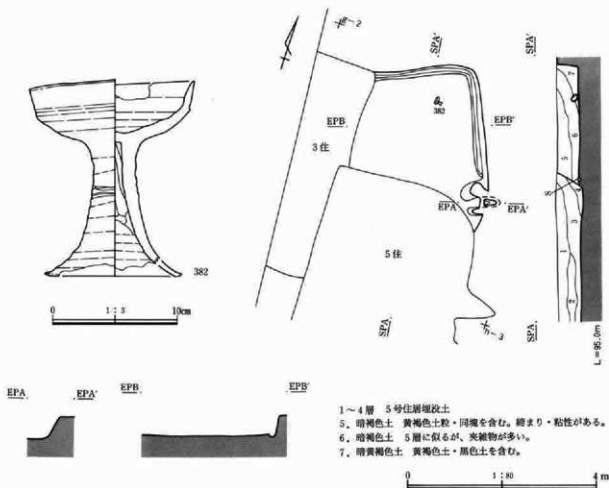
4. 5区の遺構

5区7号住居

位置 k-3グリッド 写真 PL56
重複 北側が後出する11号住居と重複するが、7号住居の方がやや深いので、7号住居の床面は何とか残っていたが、北壁は不明確である。

形状 長軸を南北方向にする方形を呈するが、北壁が不明確であるので、記録できた形状はやや台形になっているが、南壁はやや湾曲している。隅は、北西隅が角張っている他は、丸い。規模は、長軸4.0m、短軸4.05mである。

面積 14.3m² 方位 N-80°-E



第147図 3区4号住居と出土遺物

第6章 古墳時代中期・後期の遺構と遺物

床面 遺構確認面から28cm掘り込んで床面となる。床面は平らで、やや硬化していた。

埋没土 軽石・焼土粒・黄褐色土粒を含む褐色土で埋まっていた。

竈 東壁の南半分に竈が付設されていた。竈は袖が住居内部に張り出す形態の竈で、向かって右側は16cm、左側は42cm、住居内部に袖基部が張り出して残存していた。燃烧部は緩やかに傾斜しており、煙道部東端で立ち上がる。煙道部は壁から外へ52cm突出していたが、東端は1号溝に切られている。竈崩落土や燃焼面上から、遺物が多く出土しているが、竈の構造や使用状態を直接示すような出土状態ではなかった。

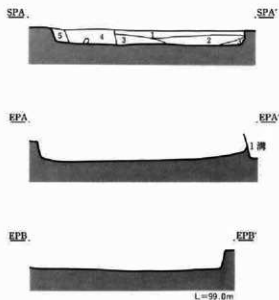
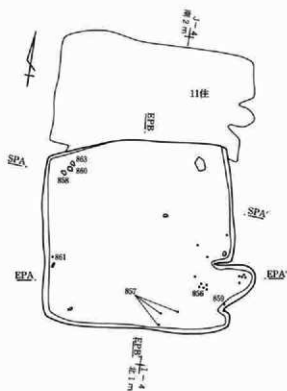
柱 穴 検出されなかった。

遺物 180点余りの遺物が出土している。図示した

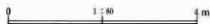
土師器杯形土器(860・861・863)や、壺形土器底部(858)は、西壁沿いで床面近くで出土した。壺形土器(856・859)は竈周辺で出土したが、床面から10数cm浮いた状態で出土した。856の口縁部と体部は接合できないが、胎土や器面の状態から、同一個体と考えられる。体部の遺存状態は極めて悪い。壺形土器(859)は竈右袖内部から出土しており、竈袖芯材として使われていた可能性も考えられる。また、須恵器碗形土器(864)は竈埋没土から出土した。他は埋没土中の出土遺物である。

(遺物観察表：39・40頁)

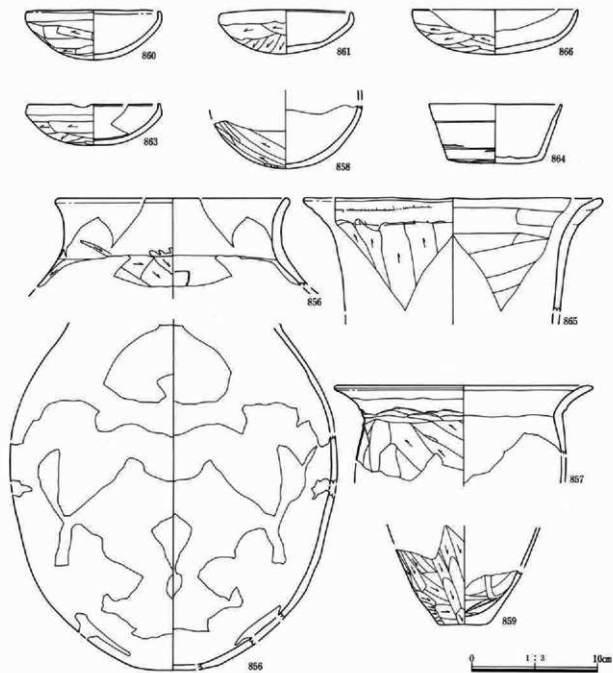
所見 出土遺物から、7世紀後半の住居と考えられる。



1. 茶褐色土 白色軽石とわずかな焼土粒を含む。
2. 褐色土 白色軽石・小礫とわずかな焼土粒・黄褐色土粒を含む。
3. 褐色土 白色軽石とわずかな焼土粒・黄褐色土粒を含む。
4. 褐色土 黄褐色土粒・小礫・白色軽石を含む。
5. 黒褐色土 浅間C軽石を含む。粘性がある。



第148図 5区7号住居



第149図 5区7号住居出土遺物

5. 7区の遺構

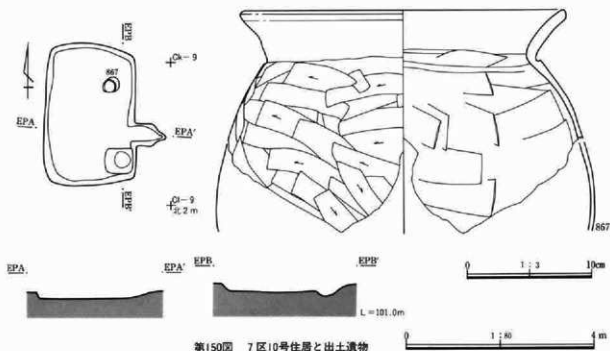
7区10号住居

位置 Ck-8グリッド 写真 PL57
 形状 長軸を南北方向にする隅丸長方形を呈する。周壁は北壁のみ彫らんでいるが、他は直線的に掘られている。隅は大きく丸い。規模は長軸3.0m、

短軸1.91mである。

面積 4.5㎡ 方位 N-89°-E
 床面 遺構確認面から12cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平らであるが、竈の前面がやや低くなって、焚き口部になっている。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。竈は、袖が住居内部に張り出さない形態の竈で



第150図 7区10号住居と出土遺物

あり、燃焼部・煙道部が壁から外へ64cm突出している。燃焼部は良く焼けていた。

柱 穴 検出されなかった。

貯蔵穴 電右側住居南東隅に、長軸60cm、短軸53cm、深さ15cmの隅丸方形の貯蔵穴が検出された。

遺物 15点の遺物が出土したのみである。床面近くの遺物は、図化した土師器甕形土器(867)で、電左側、住居北東部に床面直上に出土した。

(遺物観察表：40頁)

所見 出土遺物から、7世紀の住居と考えられる。

よって西部の床面が陥没している。その影響と思われるが、西隅がやや広がっており、形状はやや台形となる。他の周壁は直線的に掘られ、隅はやや丸い。また、南東壁のほぼ中央に、幅0.9m、長さ2.3mの張り出し部が検出された。これが本住居に伴うものかどうかは不明である。規模は、張り出し部を除いて、長軸6.17m、短軸4.85mである。

面積 28.0㎡ 方位 N-54.5°-E
床面 遺構確認面から41cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平らであるが、西部の地割れ部分では帯状に20~30cmほど陥没している。

埋没土 白色軽石・焼土粒・黄褐色土粒を含む暗褐色土・灰褐色土で埋まっていた。

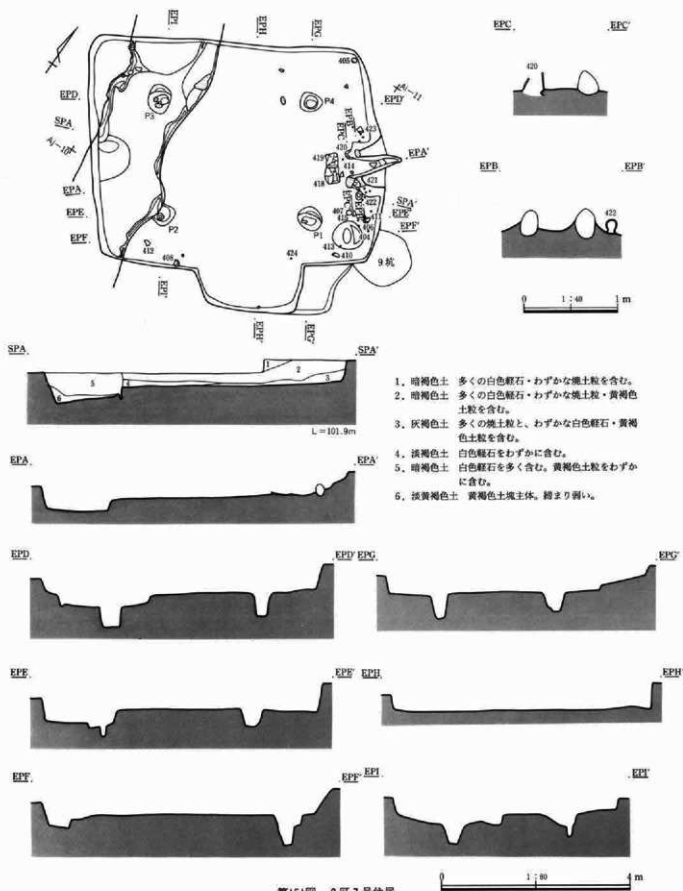
電 北東壁ほぼ中央に電が付設されていた。電は袖が住居内部に張り出す形態の電で、向かって右側は67cm、左側は58cm、袖の基部が残存していた。電の両袖は礎と、一部土器を芯材として構築されており、向かって右側の袖には礎が3個と土師器甕形土器(421)、左側の袖には礎が1個と土師器甕形土器(420)が遺存していた。また、焚き口部には甕形土器2個体が(418・419)が縦列に横たわって出土しており、焚き口の上部を形成していたものと考えられる。

6. 8 区 の 遺 構

8 区 7 号 住 居

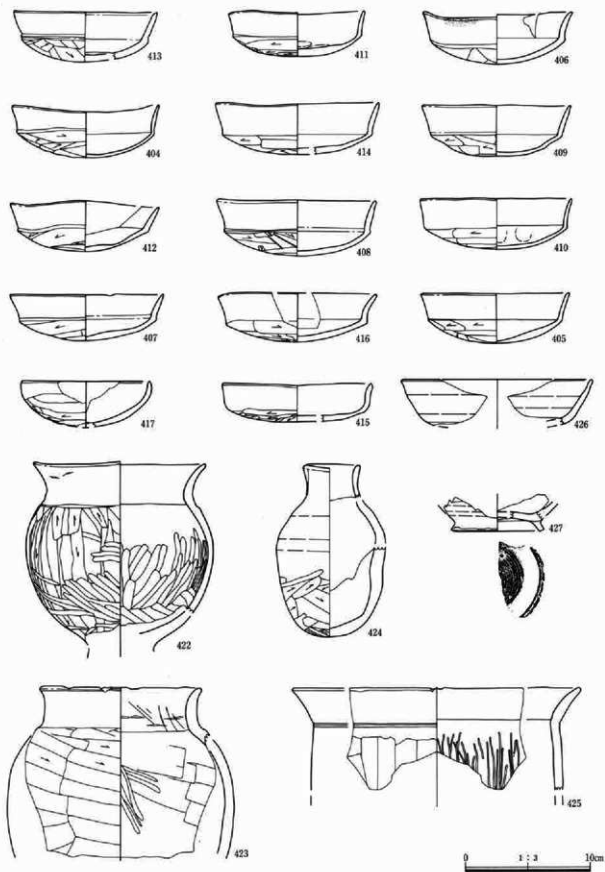
位置 i-10グリッド 写真 PL57・58
重複 東隅に後出する9号土坑が重複しているが、7号住居の方が深いので、7号住居の壁・床面は残っていた。

形状 対角線を南北方向にする方形を呈する。本住居は、後世の地震によると考えられる地割れに

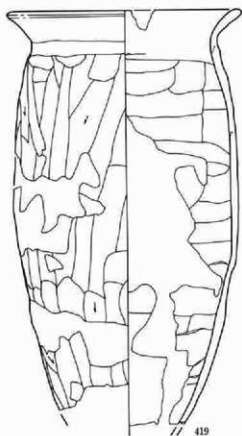


第151図 8区7号住居

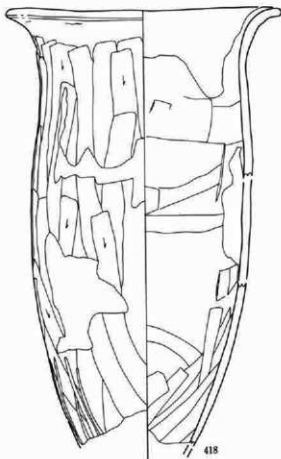
第6章 古墳時代中期・後期の遺構と遺物



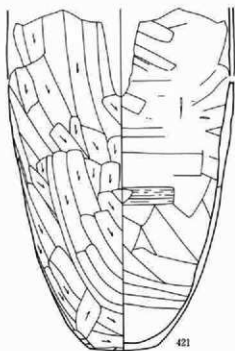
第152図 8区7号住居出土遺物(1)



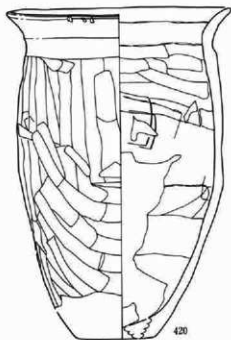
419



418



421



420

第153図 8区7号住居出土遺物(2)



燃焼部は緩やかに傾斜して、ほぼ中央に支脚の棒状障が立っていた。支脚の奥は一段、段があって煙道部へと緩やかに傾斜していた。煙道部は住居壁から外へ49cm突出していた。焚き口部・燃焼部には灰が厚く残っていた。

柱 穴 4本の主柱穴が検出された。各主柱穴の規模(短径×長径×深さ)は、P1:48×50×39cm、P2:45×45×42cm、P3:49×59×40cm、P4:40×46×51cmである。主柱穴のうちP1・P3は対角線上にのる位置に掘られているが、P2・P4はやや東にずれている。各主柱穴を結んだ形は長方形を呈する。

貯蔵穴 竈右側、住居東隅に長径0.65m、短径0.60m、深さ0.62mのやや深い貯蔵穴様のピットが検出された。貯蔵穴と竈の間の空間には、土器が多く出土している。特に土師器杯形土器2個体(406・411)が割れた状態で重ねられていた。

遺 物 260点余りの遺物が出土している。土器が竈周辺を中心に床面近くから出土している。土師器杯形土器は、404・406・407・410・411・413・415の7個体が竈右側の貯蔵穴周辺の床面近くで出土した。また、405が住居北隅で、408・412が南隅で出土している。台付甕形土器(422)は竈右脇で、須恵器甕形土器(424)が南東壁沿いに床面近くで出土している。甕形土器は竈の構築材として出土した。

(遺物観察表:40・41頁)

所 見 出土遺物から、6世紀後半の住居と考えられる。

る。床面は平らで、あまり硬化していない。

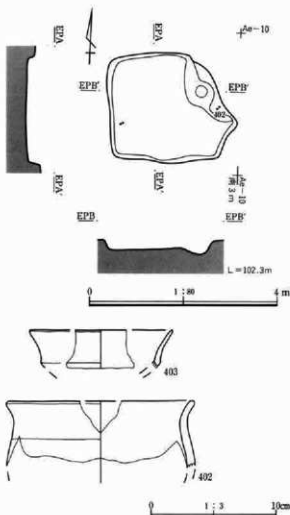
竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。竈は袖が住居内部に張り出さない形態の竈で、床面から緩やかに傾斜して、壁から外へ34cm突出している。燃焼面はあまり焼けていない。

柱 穴 検出されなかった。

貯蔵穴 竈左側、住居北東隅に長径59cm、短径50cm、深さ15cmの楕円形の貯蔵穴が検出された。

遺 物 20点余りの遺物が出土している。図示した遺物のうち、土師器甕形土器(402)が竈左側と西壁沿いの破片が接合した。いずれも床面から数cm浮いて出土した遺物である。杯形土器(403)は埋没土中の出土遺物である。(遺物観察表:41頁)

所 見 出土遺物から、6世紀後半の住居と考えられる。



第154図 8区11号住居と出土遺物

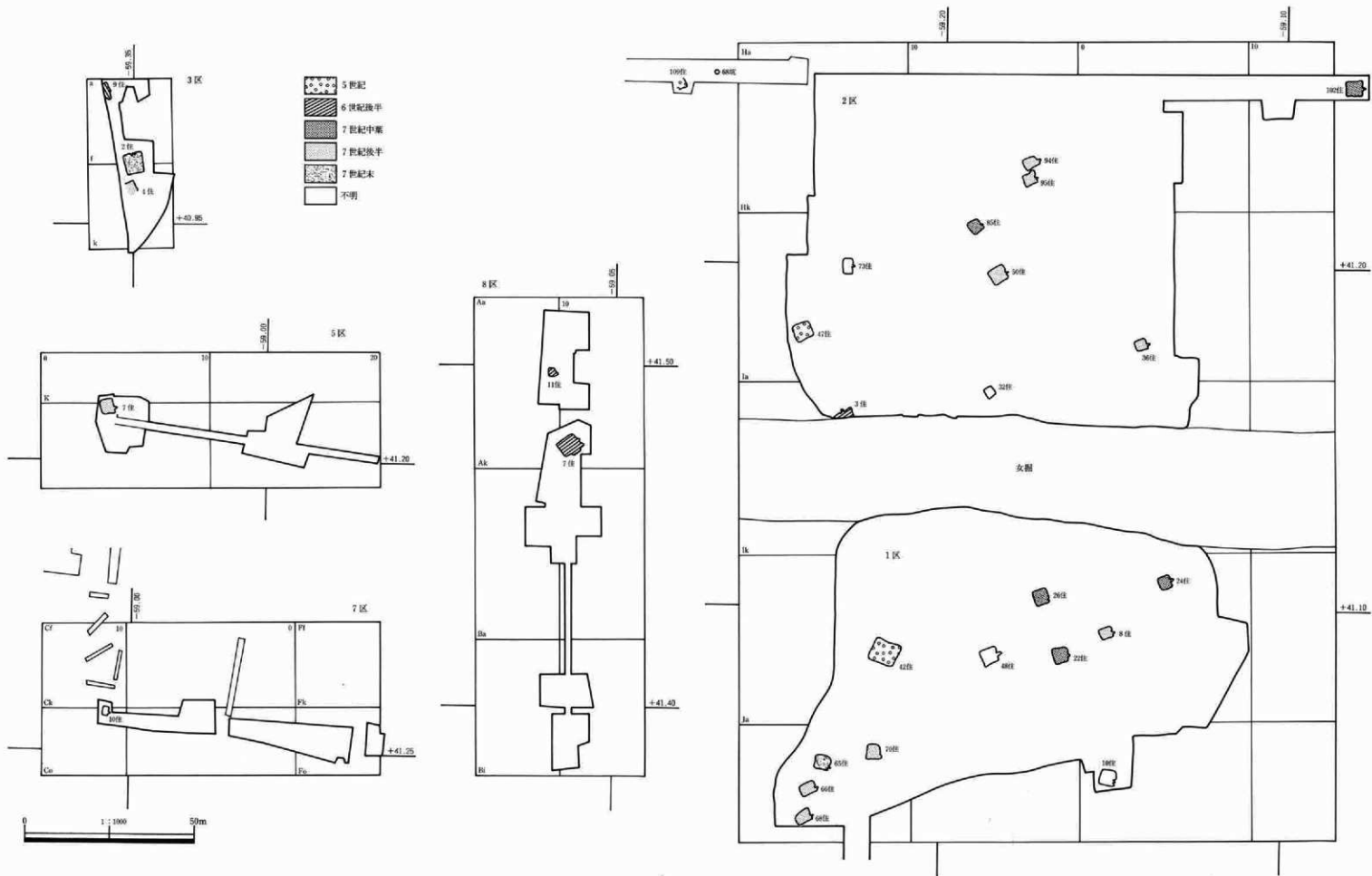
8区11号住居

位置 e-9グリッド 写真 PL57

形状 短軸を南北方向にする方形を呈する。周壁はやや湾曲して掘られており、四隅も丸い。特に北東隅は丸くなっている。規模は長軸2.41m、短軸2.32mである。

面積 4.4m² 方位 N-86.5°-E

床面 遺構確認面から14cm掘り込んで床面とな



第155図 古墳時代中・後期の遺構の位置

第7章 調査の成果と課題

荒砥上ノ坊遺跡は、赤城山南麓の低台地に営まれた縄文時代前期から中世にわたる複合集落遺跡であることが発掘調査によって判明した。縄文時代の遺構は前期の住居3軒のみで、検出された遺構は古墳時代初頭まで途絶えるが、古墳時代初頭から平安時代の住居が断続的に検出された。本年度の整理作業は、このうち縄文時代・古墳時代の遺構を対象に実施した。本章では、縄文時代および古墳時代の調査の成果をまとめ、それぞれの個別の課題として、縄文時代前期の石棒および古墳時代初頭の出土土器について述べる。

縄文時代 荒砥上ノ坊遺跡では、諸磯b式期の住居3軒が50～100m離れた状態で検出された。このような少数の住居が散在する在り方は、縄文時代前期において一般的なもので、赤城山南麓の分布調査や発掘調査からも丘陵性地域に卓越する「散居的」な縄文時代前期居住形態が明らかにされている。荒砥上ノ坊遺跡の例も、このような赤城山南麓の縄文時代前期の居住形態を追認したことになろう。

一方、このような居住形態から頻繁な移動を提起する見方もある。縄文時代の人々が定住していたか移動して生活していたかは、人間の生活様式にかかわる重要な課題として今後も注目される。

出土物は一般的な諸磯b式のあり方を示していた。その中で、1区72号住居出土の小形石棒は、中期に盛行する石棒の原形として重要である。これに

ついては後述する。

古墳時代 荒砥上ノ坊遺跡では、第3表のように各區に古墳時代の遺構が検出された。住居群は1・2區を中心に、各発掘区で合計61軒の住居を調査した。生産域の検出は、1・2・9區の浅間C軽石下の畠だけであったが、遺跡周辺の沖積地は水田可耕地である。これまでの荒砥地域の他遺跡の発掘調査の成果から考えると、古墳時代初頭に農耕集落がこの地点に営まれ始めたことは、確実であろう。

これらの住居の時期を細かく見れば、遺構の検出が欠落する時期がある。しかし、限られた発掘区の調査であるので、これを集落の断絶とは即断できない。一度開発された水田や畠は保持されるものと考えられるので、大規模な地形改変等の影響がなければ、それを放棄して集落が「移動」することはないと考えられる。発掘区には、奈良時代以降の住居群が検出されており、荒砥上ノ坊遺跡は古墳時代初頭以降継続した農耕集落といえよう。

古墳時代初頭の住居は中央低地の西縁辺に集中して32軒が検出され、その住居群の周縁部には浅間C軽石埋没の畠跡が検出された。また住居群と小谷を隔てた西側台地縁辺には周溝墓が5基検出された。これらの住居からは、在地の土器である赤井戸式土器とともに外来系土器が多数出土した。特に2区33号住居・2区89号住居のような北陸系土器が集中して出土する住居があることが注目される。

第3表 荒砥上ノ坊遺跡の古墳時代の遺構

地形単位	発掘区	3世紀		4世紀		5世紀		6世紀		7世紀	
		前半	後半	前半	後半	前半	後半	前半	後半	前半	後半
中央低台地	8区									1軒	1軒
	9区			As-C埋没畠							
	10区			住居29軒 # 3軒		3軒			1軒	1軒	17軒
	1・2区 6区			周溝墓6基							
西台地	4区										
	3区							1軒			2軒
	11区										
東台地	7区										1軒
	5区										1軒

赤城山南麓地域では以前から「古墳時代の赤井戸式土器」や「弥生土器をともなう住居」と表現される弥生時代末から古墳時代初頭にかけての土器群が出土し、報告されている。今回の荒砥上ノ坊遺跡の調査においても、この弥生時代から古墳時代への転換期を解明するための資料を得ることができた。

この土器群の時期をいつにするかは、古墳時代はいつからかという問題と関連して、重要である。現在全国的な資料の分析・編年が整備されつつあり、畿内第五様式から続く庄内式に併行する東日本の土器も明らかになってきている。しかし、この時期を弥生時代終末とするか、古墳時代早期とするか、研究者によって意見は分かれているのが現状である。荒砥上ノ坊遺跡の出土土器も、小形器台形土器を含み、これらの研究成果に照らせば庄内式後半期に併行すると考えられる。しかし、荒砥上ノ坊遺跡の土器も含め、赤井戸式土器が明確に残存しているのがこの時期・この地域の特徴といえる。赤井戸式土器の編年は小島分類以降進んでいない。現状では、弥生時代後期の赤井戸式土器を明らかにするのは困難である。今後、赤井戸式土器の再検討を通して、赤井戸式土器の実態解明が必要と考えられる。なお、現状の理解での本遺跡出土土器の資料の分析は後述したが、庄内式後半期に併行する土器群の細分の可能性を示したにとどまった。荒砥地域では、現状では弥生時代後期の遺跡が少なく、前期古墳が発見されていない。このような中で、荒砥上ノ坊遺跡のような弥生時代末から古墳時代初頭の遺跡は重要である。周辺の同時期の遺跡と比較検討する中で、荒砥地域の古墳時代社会の始まりの実態を今後も解明していきたい。

一方、中・後期の遺構は、住居29軒と3基の土坑が検出された。これらのうち24軒の住居は、初頭の住居と同じ中央の低台地にほぼ集中して分布し、他の5軒は、西台地・東台地で検出された。この東西台地の発掘区内では古墳時代前期の住居は検出されていない。

このような古墳時代後期以降からの遺構の分布

は、荒砥地域の他の遺跡でも検出されており、農耕地拡大を背景とする「第一次新開集落」と考えられる。荒砥上ノ坊遺跡でも、古墳時代の初頭に中央低台地に居住を始めた人々が、低地で水田耕作と居住域の外縁での農作を開始し、6世紀ころには周辺の低地に耕地を拡大して、居住域も広げていったと考えられよう。周辺の地点でも発掘区以外の地点で前期の居住域が検出されることは否定できないが、群馬県内の古墳時代前期の遺跡分布が水系に沿って500～1,000mの間隔をもっていることを考えると、その可能性は少ないであろう。

このような、古墳時代の耕地拡大を背景にした集落動向は、群馬県内各地の遺跡分布調査や発掘調査で明らかになってきている。荒砥上ノ坊遺跡の発掘調査成果も、それを検証するものと考えられる。発掘調査の進む本地域にあって、それぞれの遺跡及びそれを取り巻く遺跡群の分析は、古墳時代社会を明らかにするという歴史的視点をもって、今後も進められるべきであろう。なお、荒砥上ノ坊遺跡における古墳時代の住居形態や集落変遷については、奈良・平安時代の集落の分析とあわせて続刊に記述することにしたい。

- 註1 能登健 1986「遺跡分布調査による縄文集落変遷の分析」
「柏川村の遺跡」柏川村教育委員会
註2 木村収 1992「群馬県地域における縄文時代前期後半の居住形態」『研究紀要10』
註3 能登健 1989「農耕集落論研究の現段階」『歴史評論』466号
註4 小島純一1983「赤井戸式土器について」『人間・遺跡・遺物1』
前橋市教育委員会1981『西大室遺跡群II56年度』
註5 日本考古学協会新編大会実行委員会 1993『シンポジウム2 東日本における古墳出現過程の再検討』
小島純一 1983前掲書(註4)
註6 能登健 1986「里継み集落の研究—集落変遷からみた農耕地の拡大過程とその背景—」『内務の生活と文化』
註8 小島敦子 1985「初期農耕集落の立地条件とその背景—地形復元を前提にした遺跡分布の分析—」『群馬県史研究』24号

1. 縄文時代前期の石棒について

能登 健

瓦甍上ノ坊遺跡の1区72号住居から出土した石棒は、縄文時代前期の諸磯b式期のものであった。

従来、石棒は中期になって出土することが、おおよその定説になっていた。しかし、昭和51年に前中原遺跡(月夜野町)で前期と考えられる小型の石棒が出土したことを契機として、前期の石棒に注目された。群馬県では、ここ十年の間にわたって前期の石棒の出土例が漸次増加している(第4表)。その結果、群馬県下では明らかに前期に属する石棒が分布することが確定的になっている。以下、管見に触れたものについての主な形態的特徴を述べる。

前中原遺跡例(第156図-1) 長さ10.7cmの黒色頁岩の細長い自然石裂である。丸みを帯びた一端を頭部にみだてて刻線を巡らして小型の石棒をつくりだしている。もう一方の端部には、原石採取以前の剝離痕跡があるが、石棒製作時に敲打による調整を加えていることから、完形であると考えられよう。

遺物包含層からの出土であり、花壇下層式土器や黒浜式土器を中心とする前期前半の土器群と共伴した。

荒砥上ノ坊遺跡例(第156図-2) 頭部は二本の刻線で表現されている。住居址内から出土している。体部にある剝離痕は自然のものではなく、人為的な敲打によるものである。この敲打痕は、陣場遺跡の凹み穴や行田1遺跡のうっすらとした凹みとあわせて、意識的な造作と思われる。

陣場遺跡例(第156図-3) 頭部は二本の刻線で表現されているが、刻線部分を削り込むことによって突帯をつくりだしている。上端面はやや平らになっている。下端部に縦の浅い刻線があるが、人為的であるかは確証が得られない。体部には、明らかに人為的にあけられた二つの凹み穴がある。

註1 『日本原始美術』1(講談社:1964)の「先史時代概説付表」、大矢昌彦「石棒の基礎的研究」(長野県考古学会誌)28(1977)、山本厚久「石棒」(『縄文文化の研究』9)1983)などがある。

註2 群馬県埋蔵文化財調査事業団「十二原遺跡・大原遺跡・前中原遺跡」1982

註3 本報告書掲載。

註4 羽島政彦・藤巻幸男「新発見の縄文時代前期の呪術具二例」(群馬文化)1220号 1989

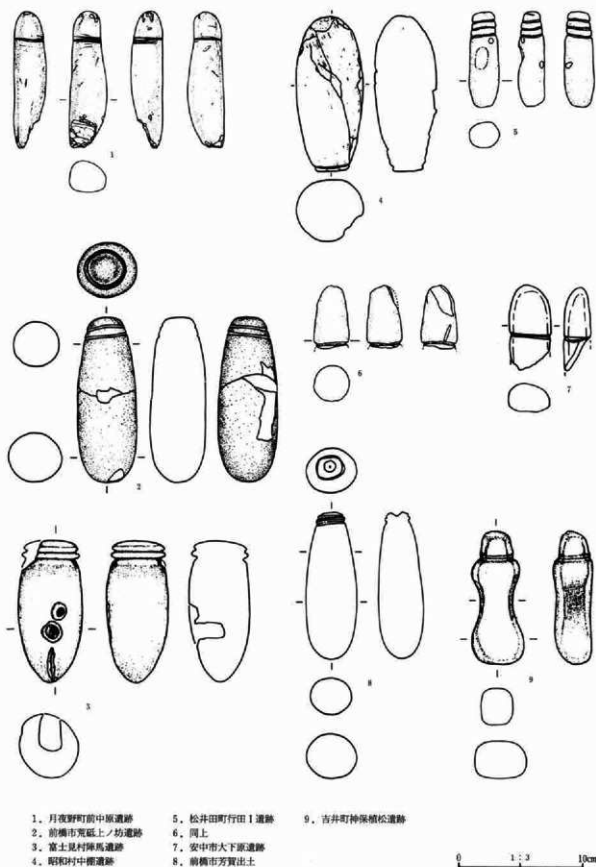
第4表 群馬県出土の縄文時代前期の石棒一覧

番号	出土遺跡	時期	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
1	月夜野町前中原遺跡	前期	黒色頁岩	10.7	2.7		125
2	前橋市荒砥上ノ坊遺跡	諸磯b	流紋岩質凝灰岩	13.2	4.7	4.4	173
3	富士見村陣場遺跡	諸磯c	灰白色凝灰岩	11.2	5.2		
4	昭和村中塚遺跡	早~前期	緑色凝灰岩	12.6	5.4		241
5	松井田町行田1遺跡	諸磯b	珪藻土	7.4	2.4		18.1
6	松井田町行田1遺跡	諸磯b	珪藻土	(欠損)	2.8		22.2
7	安中市大原遺跡	前期	結晶片岩	(欠損)	3.5	2.2	
8	前橋市瑞気町芳賀地区	?	流紋岩	11.5	4.5		
9	吉井町神保根松遺跡	諸磯b	牛伏砂岩	11.5			

第5表 群馬県出土の石冠状石製品一覧

番号	出土遺跡	時期	石材	高さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
10	新堀村城遺跡	諸磯b	軽石	3.3	5.7	4.8	
11	粕川村長田D遺跡	諸磯b	安山岩	8.2	4.7	3.85	127.9

第7章 調査の成果と課題



1. 月夜野町前中原遺跡
2. 前橋市荒砥上ノ坊遺跡
3. 富士見村陣馬遺跡
4. 昭和村中郷遺跡

5. 松井田町行田1遺跡
6. 同上
7. 安中市大下原遺跡
8. 前橋市芳賀出土

9. 吉井町神保楨松遺跡

第156図 群馬県出土の縄文時代前期の石棒

中瀬遺跡例(第156図-4) 頭部は一本の刻線を巡らせている。上端面は平らになっているために、報告者はこの部分を下端として図化している。体部の凹みは人為的であるとの確証は得られない。^{註5}

註5 昭和村教育委員会 他
「中瀬遺跡」1985

行田1遺跡例(第156図-5・6) 2例の出土である。ひとつは完形で、3本の刻線で頭部を表現している。ほかの例にくらべてやや小ぶりでは推測なつくりになっているが、荒砥上ノ坊遺跡例と同型であろうと思われる。体部には楕円形のうっすらとした凹みがみられる。もうひとつは、頭部のみの欠損品であり残存長4.9cm、全体像は不明であるが、やはり刻線で頭部を表現している。^{註6}

註6 長井正幸「行田1遺跡出土の遺物について」『群馬文化』220号 1989

大下原遺跡例(第156図-7) 明確な小型の石棒が一点のみ出土している。頭部端のみの欠損品で、残存長は6.6cmである。石材が結晶片岩の自然礫であり、その特性から偏平なものになっている。1本の刻線を巡らせて頭部を表現している。なお、本遺跡からは、長さ18.1cm・最大幅5.9cm・最大厚4.7cm・重さ814.6gと、長さ63.9cm・最大幅16.4cm・最大厚15.8cm・重さ28.5gの結晶片岩製の石棒状の石製品が2点ほど出土している。前者は敲打、後者は研磨による調整が加えられているほかに石棒特有の表現はないが、報告者は石棒として記載している。前者は住居の覆土から土器片などとともに廃棄された状態で出土し、後者は土坑墓の墓標と思われる出土状態を示している。どちらも前期だとするが、ここでは前期の石棒として採録しなかった。このほかに、「棒状礫」と称される結晶片岩の自然礫19点が報告されている。^{註7}

註7 安中市教育委員会「大下原遺跡・吉田原遺跡」1993

前橋市芳賀出土例(第156図-8) 頭部は2本の刻線を巡らせている。体部には打ち欠きによって付けられた剝離状の凹みがある。個人の表採品で、未報告資料である。芳賀一帯は前期の集落遺跡であることから、帰属時期はおそらく前期であろう。現在、本資料は前橋市教育委員会が保管している。

神保植松遺跡例(第156図-9) 長さ11.5cmの棒状の砂岩を加工したもので、報告者は岩偶としつつも石棒に類似していると記載している。断面が偏平で、体部にくびれがみられることから、ほかの石棒とは明らかに形態が異なっている。しかし、報告者の注視とともに一応石棒の可能性も含めて採録しておく。^{註8}

註8 註4に同じ

前期石棒の特徴

前期石棒には、形態上でいくつかのパラエティアーがみられる。このうち、もっともポピュラーな形態は荒砥上ノ坊例や陣場例に代表される形態であろう。いわゆる泥岩系の柔らかい石を好んで選んでおり、一端に刻線を加えることによって頭部を意識させる造形意識も共通している。あきらかに、すでに型式を意識したものになっている。

これらの石棒は、円礫を削り出して造形されているが、前中原例は自然礫の一端を刻線によって頭部としている。この形態は、群馬県下の出土例の中では特異例となっている。しかし、東京都田中谷戸遺跡で早期糸痕文土器に伴出した石棒例とは形態的に近似していることから、類例をまけてひとつの型式として認知できる可能性もある。^{註9}

註9 町田市田中谷戸遺跡調査会「町田市田中谷戸遺跡」1976

なお、神保植松例は、岩偶の可能性を考慮しつつも、ここでは石棒の一形態として

認識しておいた。

凹み穴について

註10 他登 健「信仰儀礼にかかわる遺物(1)」『神道考古学講座』第1巻 1981

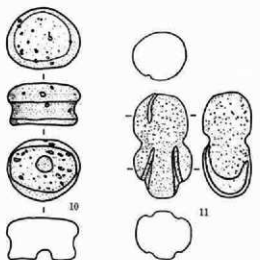
筆者は、かつて石棒に付いている凹み穴について、女性原理を表現したものであるとの見解を示したことがある。この見解は、中期の石棒についてのものであったが、今回集成した前期の石棒のなかにも、同様な「凹み穴」例がある。おそらく、これらの「凹み穴」や、それに類する「凹み穴状の表現」も、女性原理を表したものであろう。

註11 新里村教育委員会「武井・城遺跡」1981

註12 船川村教育委員会「船川村の遺跡」1985

ところで、赤城山南麓にある2遺跡から、興味ある石製品が出土している。ひとつは、城遺跡から出土した軽石製品で、上半部が石棒の頭部で、下半に凹み穴が付いている。ともに、諸磯^{註10}式土器の包含層から出土している。また、もうひとつは、月田・室沢遺跡群長田D遺跡から出土したもので、安山岩製である。これも上半が石棒の頭部^{註11}になっている。下半については、見解の相違もあろうが、筆者は女性性器と考えたい。諸磯^{註12}式の住居址内の出土である。

どちらも、その造形構造は石冠と同じで、男性原理と女性原理の結合した呪術具と思われる。これらの遺物の出土例からも、前期の石棒に付けられた凹み穴が女性原理である蓋然性は高いものと考えたい。



10. 新里村城遺跡

11. 船川村長田D遺跡

第157図 群馬県の縄文時代前期の石冠状石製品

2. 古墳時代初頭の出土土器について

小島敦子

1. はじめに

弥生時代終末から古墳時代初頭にかけて、全国的に土器が動くことは、古墳時代の開始という政治的・社会的変化に伴う現象として、近年研究が盛んである。群馬県では、古墳時代前期の土器の組成に外来系特に東海系土器の比率が高い。このことから弥生時代後期の土器は、古墳時代に新しい土器—土師器—へ大きく変換すると考えられてきた。特に、東海西部地域のS字状口縁台付甕形土器の定着を示す多量の出土例からは、古墳時代前期における東海西部地域からの集団入植説が提起されている。そして、このような土器群の変遷観のなかでは、在地の弥生土器からの系譜をたどることは困難であった。

しかし、近年弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器資料の増加にともなって、弥生時代終末から古墳時代前期の土器の変遷を整理する研究が相次いだ。これらの成果によって、古墳時代初頭に残存する在地土器の組列が明らかになるとともに、S字状口縁台付甕形土器が群馬県で定着・普及する以前に他地域からの外来系土器があることが判明した。ここでは、これらの成果に基づき、荒砥上ノ坊遺跡の古墳時代初頭の土器群を位置付けておきたい。方法は、出土土器を在地の土器である赤井戸式土器と外来系土器に分け、赤井戸式土器の変遷を基軸として、伴出する外来系土器との検証から、土器群の時期を確認することとする。

2. 古墳時代の赤井戸式土器

荒砥地域の弥生時代後期の土器は、縄文を施文する赤井戸式土器と考えられている。赤井戸式土器は1975年、藪田芳雄氏によって弥生時代後期後半の土器群として設定された。この時すでに赤井戸式土器が古式土師器と一部共伴することは確認されており、「旧式・新式とそれらの中間型式」の三細分を行っている。

1983年には、その後の赤井戸式土器の新資料を加えて、小島純一氏が3期に区分し、I期を弥生時代後期後半、II期を古墳時代前期初頭、III期を古墳時代前期中葉にあてた。II期から樽式土器が、II期後半から小形器台形土器が、III期からS字状口縁台付甕形土器が伴出するとしている。樽式土器は群馬県西部に分布する弥生時代後期の櫛描文の土器である。群馬県西部でも樽式土器が古墳時代初頭の土器と共伴する例が指摘されていたが、赤城山南麓および荒砥地域でも赤井戸式土器・古式土師器とともに樽式土器が出土することが明らかにされた。

その後、樽式土器・赤井戸式土器が古墳時代初頭の遺構から出土する例は増加し、

註1. 尾崎吉彦・今井新次・松島宗治 1988『石田川』石田川刊行会

田口一郎 1981『元島名特軍塚古墳』高崎市教育委員会
梅沢重昭 1994『毛野。形成期の地域相—前方後墳及び周溝墓の分布を中心に—』『畿台史学』第91号

註2. 若狭敬 1990『群馬県における弥生土器の崩壊過程』『群馬考古学手帳』Vol. 1
註3. 友廣哲也 1994『北関東の古墳時代文化の受容』『古代』第98号

註4. 藪田芳雄 1975『群馬県新里村事山遺跡発掘調査報告(第1次)』『同(第2次)』新里村教育委員会

註5. 小島純一 1983『赤井戸式土器について』『人間・遺跡・遺物』1

註6. 三宅敏久・相草建史 1982『樽式土器の分類—熊山東南麓を中心として—』『第3回三県シンポジウム資料 弥生終末期の土器 西世紀の土器』群馬県考古学談話会

それらを整理した幾つかの成果が提出されている。弥生土器の崩壊過程を追った若狭徹氏は、「外来系器種が組成の一部を構成する場合、在来の系譜を残すもの」を「樽式系土器」とした。若狭氏は赤井戸式土器についても分析し、小島氏がⅡ・Ⅲ期とした赤井戸式土器を外來系土器と伴出することから「赤井戸式系土器」とし、有文をA類、無文をB類とした。また、樽式系土器の残存状況が地域毎に異なることを示した。一方、群馬県における古墳時代前期の土器を3期区分した友廣哲也氏は、「古墳時代に残存する」「文様のない樽式土器」を「樽式土器Ⅳ類」とし、古墳時代前期を通じて組成するとした。

註7. 若狭徹氏書2。

註8. 友廣哲也 1991「群馬県における古墳時代前期の土器様相」『群馬考古学手帳』Vol. 2

これらの編年からは、概ね有文から無文へという型式変遷を経て、弥生土器の系譜を引く土器が古墳時代初頭に残存して、組成するということが確認できる。しかし、土器に対する名称が異なるように、「古墳時代に残存する弥生土器の系譜をもつ土器」に対する両者の考え方は異なっている。若狭氏は外來系土器の伴出をもって樽式土器の組成は崩壊するとし、友廣氏は無文の「樽式土器Ⅳ類」伴出をもって土器とする。いずれにせよ、群馬県西部の樽式土器は、弥生時代後期の3期区分がほぼ確定し、その系譜上に古墳時代の「樽式系土器」あるいは「樽式土器Ⅳ類」が位置づけられている。

しかし、赤井戸式土器は、かつて圃田が「旧式」、小島が「赤井戸式Ⅰ期」とした弥生時代後期後半の資料が少なく、弥生時代後期を通した赤井戸式土器の型式変遷は未説明といわざるを得ない。それに先行する後期前半の土器の実態も不明な点が多い。

註9. 中期後半の赤井戸式土器の形は下記の記事で指摘され、赤井戸式土器追究は行われている。小島純一 1990「西遊遺跡」船山村教育委員会 大木脚一郎 1991「荒砥北三木堂遺跡の弥生式土器について」『荒砥北三木堂遺跡Ⅰ』(財)群馬県縄文文化財調査事業団

筆者はこれまで小形器台形土器の伴出を古墳時代土器の指標と考えてきた。註9、本遺跡の出土土器の中では、土器文化の波及段階として当然のことながら、弥生土器としての赤井戸式土器の組成のなかに小形器台形土器が加わっている。小形器台形土器伴出という組成の変化と、赤井戸式土器の無文文化の型式変化は同時ではなく、伴出の有無のみで時期区分は困難である。したがって、赤井戸式土器の型式変化のなかに、小形器台形土器伴出の時期の面期を確認する必要がある。今後、古墳時代初頭に残存する赤井戸式土器の分類も含めて、土器の型式変化を整理するかが今後の課題であろう。

ここでは、①型式設定時から赤井戸式土器には無文土器を含んでいたこと、②前述のように小形器台形土器伴出前後の赤井戸式土器の型式変化が不明であり、古墳時代の赤井戸式土器を適確に評価できない等の理由から、現状では小形器台形土器伴出以降、古墳時代初頭に残存する土器についても「赤井戸式土器」としておく。また、樽式土器の系譜の土器については、異なる分布圏からの流入を重視し、有文の土器も含めて「樽式系土器」とする。

3. 荒砥上ノ坊遺跡の赤井戸式土器

荒砥上ノ坊遺跡の出土遺物を見ると、赤井戸式土器、樽式系土器、外來系土器の三種の土器からなっている。前項のような制約があるが、土器群の位置付けについては

在地の土器である赤井戸式土器を基軸に分析したい。

前項でみたように、古墳時代に残存する弥生土器の系譜を引く土器は、有文から無文へ型式変化する。荒砥上ノ坊遺跡出土の赤井戸式土器も、壺形土器に有文から無文への型式変化を看取することができる。壺形土器には、頸部が緩やかな「く」の字に屈曲するものと、緩やかな曲線的な頸部を呈するものの二種があり、それぞれに単純に縄文を施文するものと残した粘土帯の上に縄文を施文するものがある。

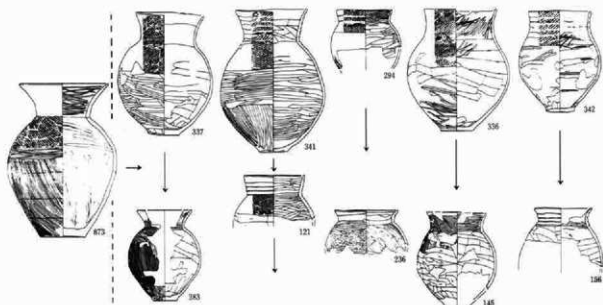
6区14号住居337は、2区67号住居283のように頸部がくの字に変化し、口縁部から胴部上半の縄文施文はなくなっている。この器形の変化にはくの字の口縁で、肩の張る壺形土器(2区89号住居873)等の影響も考えられる。この壺形土器は赤井戸式土器の中ではあまり例がないが胴部上半にのみ縄文施文があり、新しい様相である。6区14号住居341は、口縁部の縄文施文はなくなり、短くなる1区50号住居121のような型式を経て、胴部上半の縄文施文が消失すると考えられる。2区77号住居294のような口縁部の短い壺形土器も、縄文を失ない、2区52号住居236に変化する。緩やかな頸部の6区14号住居336・342は、それぞれ縄文施文が消失した2区4号住居145や2区11号住居156に変化すると考えられる。

壺形土器の資料は断片的で、壺形土器と同様な変化を荒砥上ノ坊遺跡でとらえることはできなかった。他遺跡の資料からは、壺形土器も壺形土器と同様に有文から無文への型式変化をたどることができる。他の器種では、高杯形土器が縄文施文する壺形土器註10とともに出土しているが、無文の壺形土器とはほとんど伴っていない。

註10. 小島前掲書註5

以上のように、荒砥上ノ坊遺跡の赤井戸式土器も、有文から無文への型式変化をしている。その多くが縄文施文を急激に消失すると見られるが、1区50号住居121のような一部の縄文施文を残して、器形が変化するものもあり、中間形態と考えられる。したがって、型式学的には3型式を抽出することが可能である。

この型式組列の層位的な検証は遺跡内の資料ではできなかった。2区49号住居と52



第158図 荒砥上ノ坊遺跡出土の赤井戸式壺形土器の型式組列

4. 荒砥上ノ坊遺跡の外來系土器

荒砥上ノ坊遺跡で出土した外來系土器は、概ね北陸系・東海系(西部・東部)・畿内系と、故地が不明であるが、在地の系譜の土器でないものに分けられる。いずれも模倣品で、搬入品はいまのところ特定できない。模倣が忠実に行われているものは少なく、また在地の器形や整形方法が混在するものが多く、折衷的である。

北陸系土器 外來系土器のなかで最も多く出土しているのは、北陸系土器である。検出された古墳時代初頭の住居29軒のうち、10軒の住居で図示し得る北陸系土器が出土している。このうち、2区89号住居出土の甕形土器と一部の伴出土器は、既に公表されている。川村浩司氏はこの甕形土器を「新潟シンボ編年」の5期とした。また、2区33号住居から出土した多くの北陸系土器について、川村氏には、透孔のある器台形土器や有段の鉢形土器等の一部の器種を除く、北陸北東部のほとんどの器種が出土していると脚指摘を受けた。

小形台付裝飾変形土器・小形鉢形土器・有孔鉢形土器・高杯形土器・広口小形変形土器等の小形土器群は、2区33号住居にほとんど集中して出土した。これらは故地の形態を模倣しているが、少なからず変容がみられる。2区33号住居202は口縁部を欠損した小形台付裝飾変形土器であるが、胴部は凸帯等の特徴を備えているにもかかわらず、台部は在地の高杯形土器の脚部に似ており、本来の器形とは異なる。細口変形土器(2区33号住居175)も口縁部と胴部のバランスが変化している。高杯形土器には三種があり、117(1区43号住居)・195・197(2区33号住居)のような杯部が有段鉢状のもの、98(1区41号住居)のような杯部有段の深いもの、199(2区33号住居)のような大形で浅いものが見られる。

甕形土器は、「能登形甕形土器」あるいは「千種甕」と呼ばれる「コ」字あるいは「く」字口縁の甕形土器が主体で、口縁外面端部が幅広く縁が垂下するもの(a)、外面端部に面とりをするもの(b)、端部が丸いもの(c)の3種がある。北陸南西部に分布の中心があるという擬凹縁のある有段口縁の甕形土器は1区43号住居に破片が1片出土しているのみである。「千種甕」の胴部はやや肩が張り、底部がごく小さい形態が特徴であるが、荒砥上ノ坊遺跡では、これと同様な口縁形態をもち、球形の胴部をもつものも出土している。これらの底部は欠損しており不明であるが、本書では口縁部形態の共通性から北陸系とした。また、179のように台がつくもの、178・181・187のようなケズリ整形のもの、101・241・183等のように胴部外面の整形が横方向のハケム整形になっているもの等があり、台付甕形土器分布地域の影響や、整形方法の異なる他地域の影響が混在して受容されている可能性を示している。

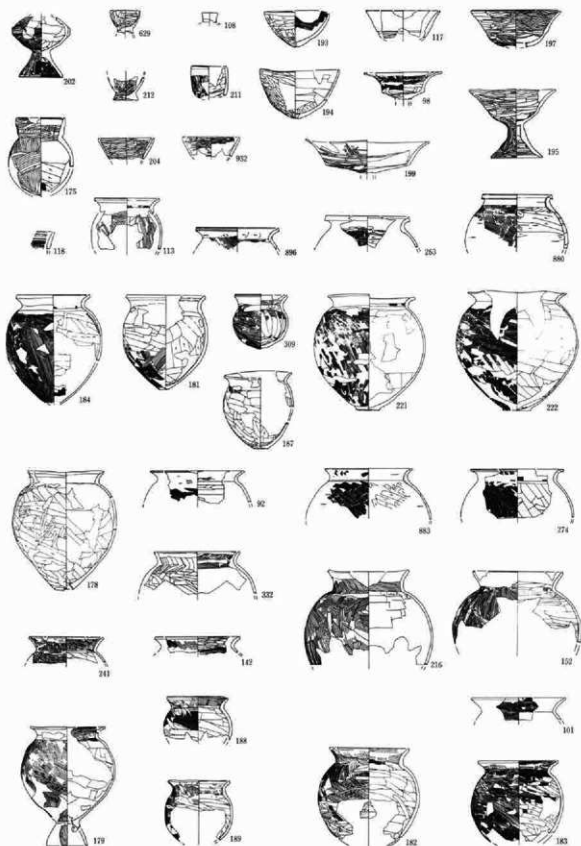
東海系土器 東海系土器は数量的には、北陸系土器と比較して少ないが、小形器台形土器・高杯形土器・S字状口縁台付甕形土器・甕形土器等が出土している。小形器台形土器のなかで東海系と考えられるのは、207・208(3区22号住居)である。これらは脚部が内湾しており、東海西部の要素と見られるが、208の口縁端部の形態は北陸系の甕形土器に似ており、折衷的である。また、高杯形土器には、欠山系の高杯形土器(1

註12. 第5回三原シンポジウム資料「出現期古墳の地域性」

註13. 川村浩司 1993「北陸北東部の古墳出現前後の様相」シンポジウム2東日本における古墳出現過程の再検討

註14. 田嶋明人 1986「IV考察一漆町遺跡出土土器の編年の考察」『漆町遺跡1』石川県歴史文化財センター
註15. 川村浩司 1993「古墳出現前後における北陸北東部の土器組成」『日本海地域比較史研究』2

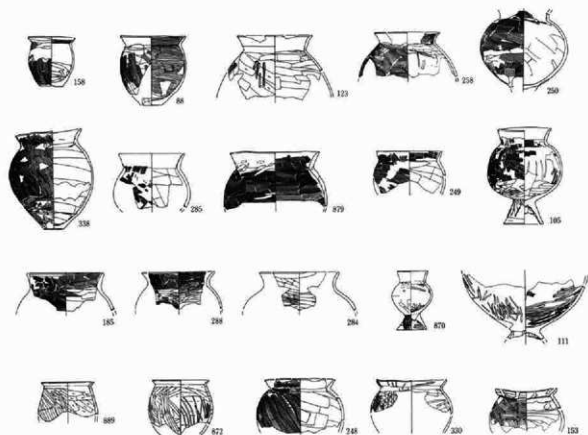
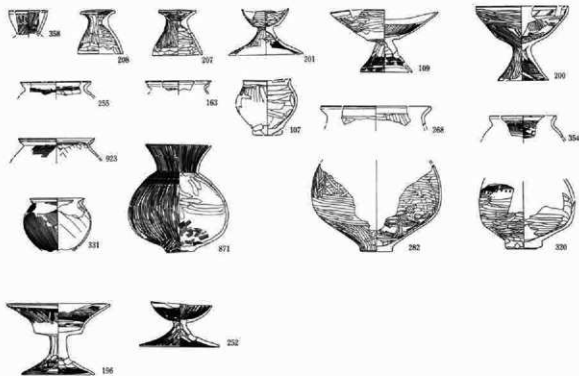
第7章 調査の成果と課題



第159図 荒砥上ノ坊遺跡出土の外來系土器(1)

0 1 : 8 20cm

2. 古墳時代初頭の出土土器について



第160図 荒砥上ノ坊遺跡出土の外系系の土器(2)



区43号住居109)の他、200(2区33号住居)のように深い杯部が東海西部系と考えられるが、杯部の稜が明確でなく、在地の高杯形土器のような印象をもつものもある。ここでも折衷的な様相がみられる。S字状口縁台付壺形土器は少なく、胴部の判明したのは381(6区12号住居)のみで、口縁部破片3片と少量の底部破片が確認されただけである。図示した4点のうち、255・923は頸部内面ハケメがある。他の2点はそれが省略されている。331は肩が張り球形を呈し、163は口縁端部内面の面とりがされている。他に受け口状口縁の壺形土器(268・354)、小形内湾壺形土器(358)が出土している。壺形土器胴部下半が細くなる器形で、871はやや高い直口縁である。282・320は全体の器形は不明であるが、320は胴部中位の平行線文・列点文・赤色塗彩等からパレス式壺形土器であろう。

畿内系土器 畿内系の土器は少なく、タキ整形等の壺形土器は出土していない。畿内系と考えられるものには高杯形土器がある。196(2区33号住居)は大形の有稜高杯形土器で、脚部は柱状である。252(2区59号住居)は杯部碗形の高杯形土器で、脚部は低いが、杯部は浅くなっている。

その他の外来系土器 荒砥上ノ坊遺跡では、明らかに北陸系と特定できるハケメ整形の壺形土器の他に、胴部外面がハケメ整形されている壺形土器が多く出土している。底部のわかる158(2区11号住居)・88(1区41号住居)・338(6区14号住居)は、底径が大きいことや口縁部の形態や整形技法が違うこと等、北陸系の壺形土器とは異なっている。他の口縁部から胴部にかけて残存する壺形土器も北陸系壺形土器の器形の変容とは言いがたい。123(1区50号住居)、258(2区60号住居)、285(2区67号住居)、879(2区89号住居)、249(2区59号住居)、239(2区55号住居)等は、くの字の頸部や広い口径等、南関東の壺形土器の器形に共通性が見られる。また、整形技法の特徴や器形から185(1区70号住居)等は近江系の壺形土器の可能性も考えられる。

このように群馬県古墳時代初頭の壺形土器のなかには、S字状口縁台付壺形土器だけではなく、「く」字口縁の壺形土器あるいは台付壺形土器がある。これらの土器については、以前から南関東あるいは東海の影響と漠然と考えられてきた。これらの壺形土器の動きについても、北陸系・東海系土器と同様に、群馬県古墳時代の始まりに関わっている可能性があり、今後ハケメ整形の壺形土器の型式学的分析が不可欠であろう。これについては今後さらに検討したい。

次にこれらの外来系土器が、在地系土器のどの段階に出土するのか確認し、荒砥上ノ坊遺跡出土土器の位置付けをしておきたい。

5. 荒砥上ノ坊遺跡出土土器の段階設定

荒砥上ノ坊遺跡出土の赤井戸式土器は、概ね2型式に分けられた。これらと外来系土器の共存関係から、荒砥上ノ坊遺跡出土の古墳時代初頭の土器を、次の3段階に分けておこうと考える。

荒砥上ノ坊Ⅰa段階 有文の赤井戸式土器と樽式土器が出土し、外来系土器がごく

2. 古墳時代初頭の出土土器について

少量伴う段階。赤井戸式土器が主体の土器群であるが、小形器台形土器が6区14号住居・4区5号周溝墓で出土し、2区60号住居や2区91号住居で赤井戸式と考えられる高杯形土器の脚部に穿孔が見られることから、古墳時代初頭の様相を見せ始められていると考えられる。そのほかの外來系土器には、2区91号住居の胴部の丸い北陸系甕形土器と6区2号住居の畿内系の裾の大きく広がる小形高杯形土器がある。この小形器台形土器は、器受部と脚部の高さがほぼ等しく、器受部の口縁部はやや内湾し、脚部はハの字に開く。南関東でより古いと言われている脚高の形態とは異なっており、別の系譜を考えなくてはならないだろう。北陸系の甕形土器は内面もハケメ・ナデ整形されている。他にハケメ整形の甕形土器・台付甕形土器(6区14号住居338・2区77号住居等)が出土しているが、どこからの影響かは今は特定できない。なお、この段階の住居からは土製紡錘車の共伴例が多いのも特徴である。

荒塚上ノ坊1b段階 有文の赤井戸式土器・樽式系土器に外來系土器が多量に共伴する段階。1a段階と同様に有文の赤井戸式・樽式系土器が出土するが、その数は少なく、組成の大部分は多くの外來系の土器が占める。外來系土器は北陸系・東海系・畿内系・その他と多様である。1b段階の小形器台形土器は2区89号住居874の文様や、2区33号住居の207・208の脚部内湾傾向等に東海系の影響を看取できる。207・208は口縁部外面に面とりが顕著で、東海系とすれば廻間Ⅱ式に比定できようか。これらは1a段階に共伴する器台形土器とは系譜が異なると考えられ、1a・1b段階の時期差を器台形土器型式組列によって検証することは難しい。小形有段高杯形土器(2区33号住居201)も東海系であるが、杯部が浅くなり、やや脚高が高くなっている。比田井氏の分類では1段階(新)のものにあたるであろう。欠山系の有段高杯形土器(109)が1区43号住居に出土している。杯部はやや浅いが、脚部は内湾している。この住居は赤井戸式土器の共伴はないが、この1b段階と考えられる。S字状口縁台付甕形土器は赤塚B類が2区89号住居埋没土中からの破片資料(923)で出土している。北陸系土器は千種壺註19の口縁部外面端部が幅広・垂下する形態(2区89号住居880)と、外面端部に面とりをする形態(2区33号住居184)がある。他に口縁端部が丸い形態の甕形土器も出土している。2区33号住居や2区89号住居で出土した北陸系土器については、田嶋明人氏から、漆町5・6群(白江式段階)に併行するとの御教授を受けた。

荒塚上ノ坊2段階 無文の赤井戸式土器・樽式系土器と外來系土器が共伴する段階。1区50号住居・2区4号住居・2区11号住居では有文の赤井戸式土器も出土しており、在地系土器の残存はなお認められる。外來系土器は北陸系の甕形土器や東海系のS字状口縁台付甕形土器、畿内系の小形高杯形土器、小形器台形土器、系譜が不明のハケメ整形甕形土器等が多数共伴している。この段階では、東海系小形器台形土器(1区50号住居136)の脚部内湾傾向は若干残るが、口縁端部の面とりはなく丸くなっている。北陸系の千種壺(2区49号住居221)も口縁端部が丸くなり、胴部が球形のものが多い。また、荒塚上ノ坊遺跡では、小形丸底土器の明確な共伴はない。2区60号住居の浅間C経石上の埋没土中から1点と、図示した2区52号住居238が埋没土中から出土しているのみである。

註16. 比田井克仁 1993「東国における外來土海の展開」『考古学論叢』久保三先生追悼論文集

註17. 赤塚次郎 1990「V考第1期埋没土器」『瀬田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター

註18. 比田井前掲書註16

註19. 赤塚前掲書註17

1 a 段階



2 区 91E305



2 区 91E306



6 区 14E337



6 区 14E341

赤井戸式土器



6 区 14E336



6 区 14E342



6 区 14E340



2 区 91E311

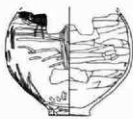


2 区 91E373

1 b 段階



2 区 90E372



4 区 3 集 318

2 段階



2 区 67E283



1 区 50E121



2 区 4 集 145



1 区 50E128



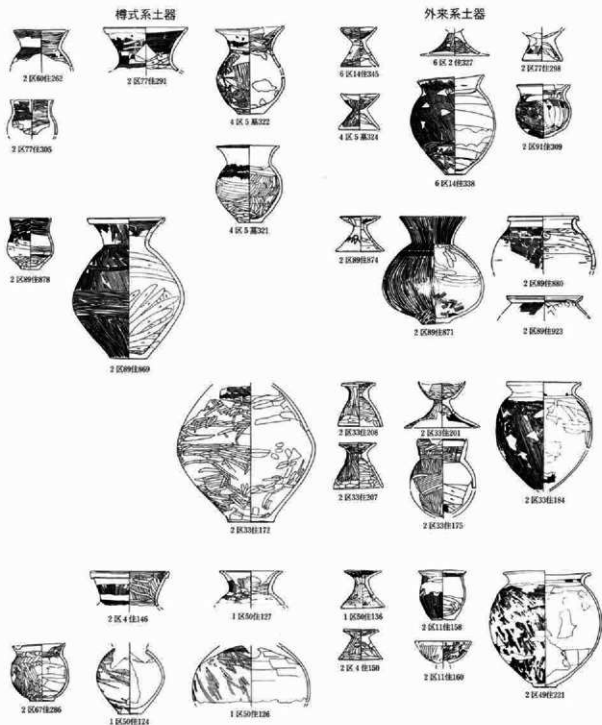
2 区 52E236



2 区 11E136

第161図 荒砥上ノ坊遺跡の古墳時代初頭土器の変化

2. 古墳時代初頭の出土土器について



荒砥上ノ坊遺跡の出土土器は、以上のような3段階を設定できた。これらは伴出する外来系土器の様相から、次のような併行関係を想定できよう。荒砥上ノ坊1b段階は、新潟シンボ編年5・6期、比田井I新段階、廻間II式段階に概ね対応すると考えられることから、庄内式新段階に併行することになる。1a段階は赤井戸式土器を主とする段階であるが、共伴する小形高杯形土器(6区2号住居327)の形態から、その前段階(庄内式古段階)にさかのぼることは考えられない。また、荒砥上ノ坊2段階も小形丸底土器が伴わないことから、小形丸底土器の普及をメルクマールにする時期までは下らないと考えられる。したがって、これらの編年の位置は、県内の先学の成果を援用すれば、小島II期後半^{註23}~III期、若狭I~II段階^{註24}および友廣I期^{註25}にあたることになる。

註20, 日本考古学協会新潟大会実行委員会 1993『シンボジウム2 東日本における古墳出現過程の再検討』
註21, 比田井前掲書註16
註22, 赤塚前掲書註17

註23, 小島前掲書註5
註24, 若狭前掲書註2
註25, 友廣前掲書註8

6. おわりに

荒砥上ノ坊遺跡出土の土器群は弥生時代最終末から古墳時代初頭の限られた時期のものと考えられる。そして、これらの土器群の分析によって、古墳時代初頭の土器群が2~3期に細分が可能であることが確認できた。しかし、今後の課題として、いくつかの点が残されている。それらをあげてまとめたい。

1b段階は、在地系土器が有文であることは1a段階と共通するが、外来系土器の多量な出土が特徴である。しかし、同時期において外来系の要素の強い住居とそうでない住居がある可能性はないとはいえない。共伴している文様のある赤井戸式・樽式系土器が型的に同じならば、同時期と考えるべきであろう。今回の分析からは、1a段階と1b段階の赤井戸式土器の明確な型式差は、2区89号住居873以外に認められなかった。したがって1a段階と1b段階の赤井戸式土器の型式差が時期区分の画期になるかどうか、今後赤井戸式土器の再検討を通して明らかにする必要がある。

また、2段階は、赤井戸式土器が有文から無文へ大きく変化するが、外来系土器にあらわれる型式差から明確に1b段階と時期を区分できる資料は荒砥上ノ坊遺跡では少ない。他遺跡での外来系土器の出土状況を合わせて今後検討する必要がある。

本稿では、分析対象を荒砥上ノ坊遺跡出土土器に限って、一遺跡内での型式変化を明確にしようとした。その結果、2~3の段階を確認し、残された課題も明確になったと考えられる。今後は、荒砥地域での赤井戸式土器の実態を明らかにして、この時期の遺跡の動態の分析を通して古墳出現期の社会を解明することにつなげていきたい。

報告書抄録

ふりがな	あらとかみのぼういせき
書名	荒砥上ノ坊遺跡Ⅰ
副書名	縄文時代から古墳時代の調査
巻次	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第193集
シリーズ名	県営は場整備事業荒砥北部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	(第2集)
編著者名	小島敦子・能登健
編集機関	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒377 群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784-2 ☎0279-52-2511
発行年月日	1995年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡					
荒砥上ノ坊	群馬県前橋市二之宮町・荒子町	10201		36度 22分 10秒	139度 10分 20秒	19820701～ 19830125	42000	県営は場整備事業荒砥北部地区にともなう事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
荒砥上ノ坊遺跡	集落遺跡	縄文時代 前期	竪穴住居 3軒	縄文土器(器種B式) 石棒・石斧・石匙	赤城山南麓地域の複合集落遺跡。縄文時代には前期の住居が3軒散在していた。 古墳時代初頭には農耕集落が定着し、開析谷の水田耕作が始まると考えられる。古墳時代中期以降に居住域の位置が変化し、農耕地の拡大が図られている。 今後奈良時代以降の報告予定。
		古墳時代初頭	竪穴住居 31軒 土坑 4基 周溝墓 6基 サク溝群 2カ所	弥生土器・土師器 紡錘車・削片石器	
		古墳時代中・後期	竪穴住居 29軒 土坑 1基	土師器・須恵器 棒状礫・燧石	

写 真 图 版



1. 調査前の1区 (東から)



2. 発掘区周辺の谷地 (南から)



3. 調査前の2区 (南から)



4. 調査前の4区の台地 (東から)



5. 調査中の1区と南東の台地 (北西から)



1. 1区72号住居全景（西から）



2. 同 遺物出土状態全景（西から）



1. 1区72号住居土層断面A-A' (南から)



2. 同 遺物出土状態 (1)



3. 同 遺物出土状態 (S 8)



4. 同 遺物出土状態 (2)



5. 同 遺物出土状態 (S 1)



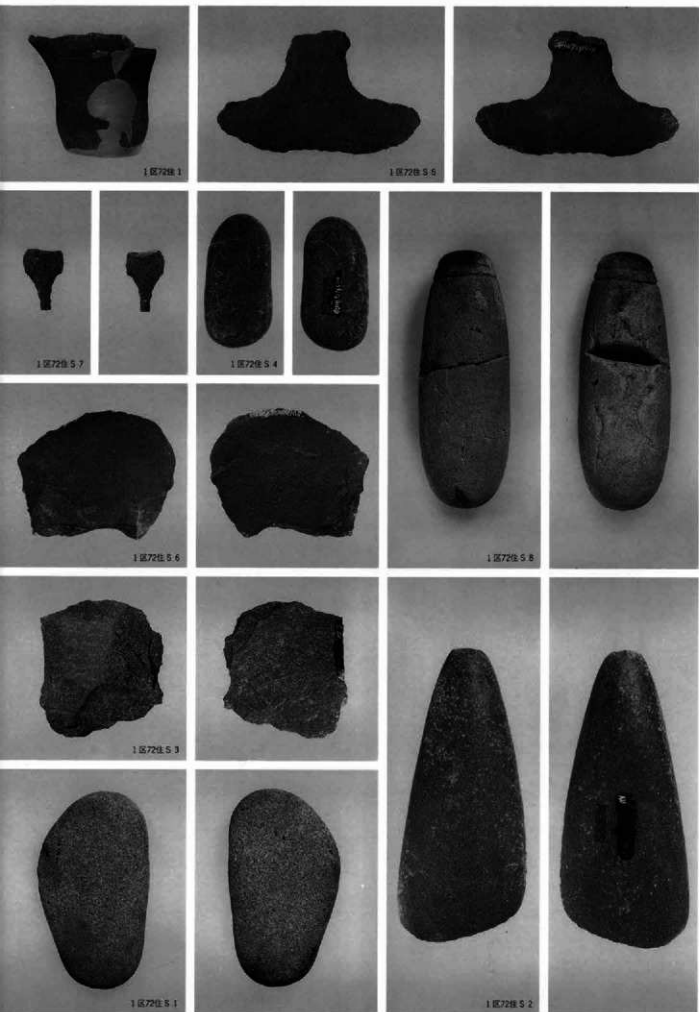
6. 同 遺物出土状態 (S 2)



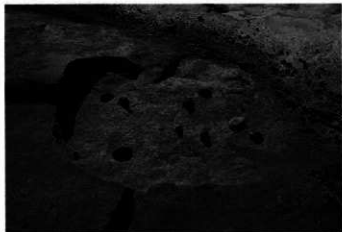
7. 同 遺物出土状態 (S 5)



8. 同 遺物出土状態 (S 4・6)



1. 1区72号住居出土遗物



1. 2区1号住居全景（北西から）



2. 同 遺物出土状態（4）



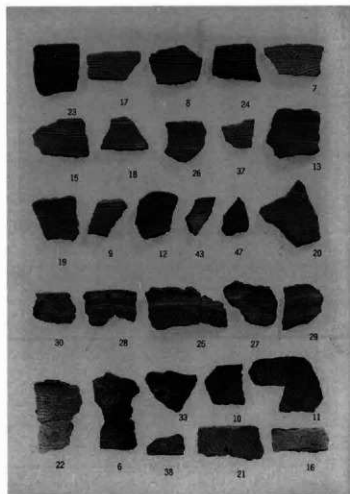
3. 同 遺物出土状態（3・S9）

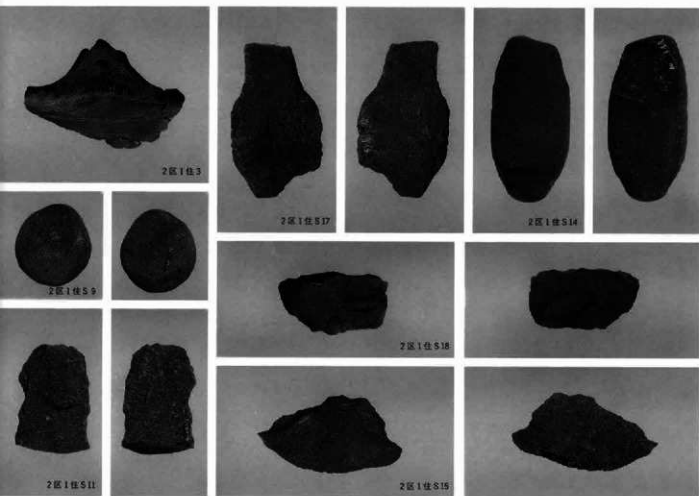


4. 2区1号住居から1区を望む。



5. 同 出土遺物





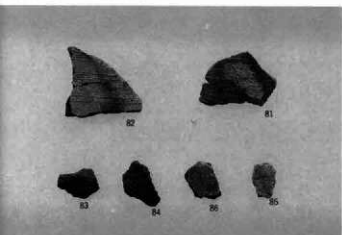
1. 2区1号住居出土遺物



2. 6区16号住居全景（東から）



3. 同 遺物出土状態（82）



4. 同 出土遺物



5. 6区1号土坑全景（北から）



1. 1区41号住居全景（南東から）



2. 同 土層断面A-A'（南東から）



3. 同 貯蔵穴土層断面B-B'（南西から）



4. 同 土層断面A-A'（南から）



5. 同 遺物出土状態（東から）



1. 1区41号住居遺物出土状態 (87)



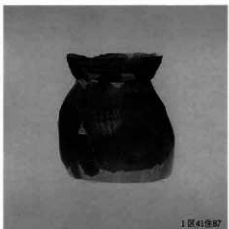
2. 同 遺物出土状態 (北から)



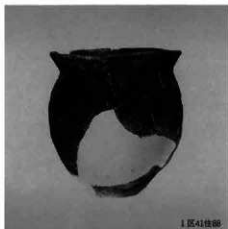
1区41位98



1区41位99



1区41位87



1区41位88



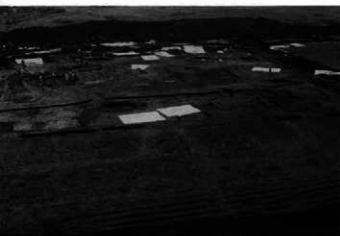
1区41位519



3. 同 出土遺物



1区41位532



4. 1区調査状況 (北から)



5. 1区43号住居北西隅の浅間C 礎石



1. 1区43号住居全景（東から）



2. 同 遺物出土状態（南から）



1区43住114



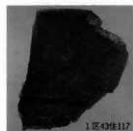
1区43住106



1区43住105



1区43住107



1区43住117



1区43住110



1区43住118



1区43住109



1区43住120

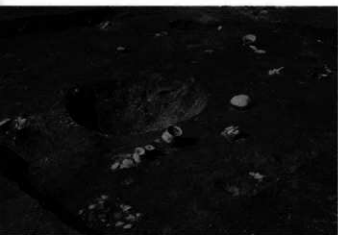


1区43住111

3. 同 出土遺物



1. 1区50号・51号住居全景（西から）



2. 同 遺物出土状態（南東から）



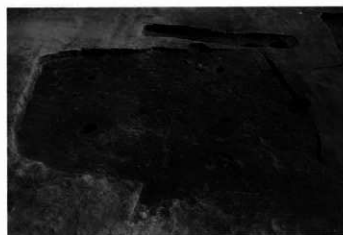
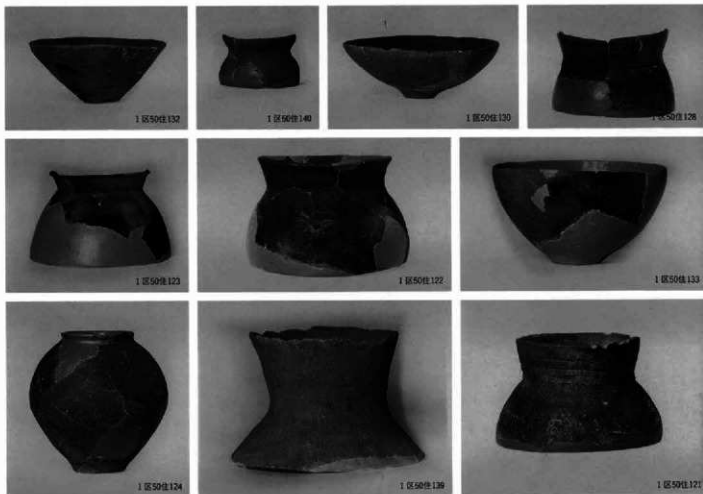
3. 同 遺物出土状態（西から）



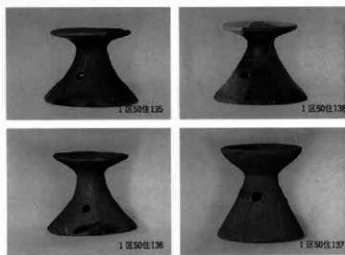
4. 同 遺物出土状態（南から）



5. 同 貯蔵穴遺物出土状態



2. 1区60号住居全景 (西から)



1. 1区50号住居出土遺物



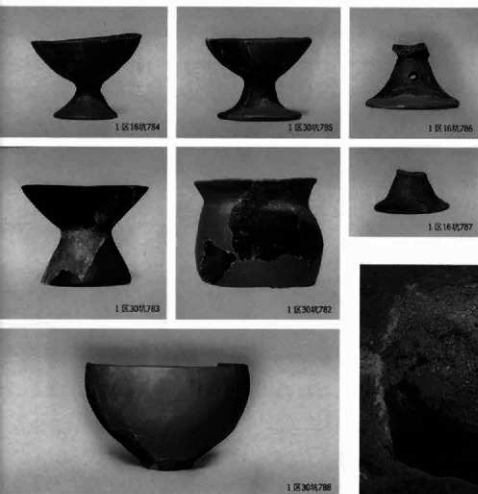
3. 同 土層断面A-A' (南から)



4. 同 遺物出土状態 (西から)



1. 1区16号・30号土坑全景 (南から)



2. 同 出土遺物



3. 1区59号土坑土層断面 (南から)



1. 2区4号住居全景（北西から）



2. 同 遺物出土状態（145・東から）



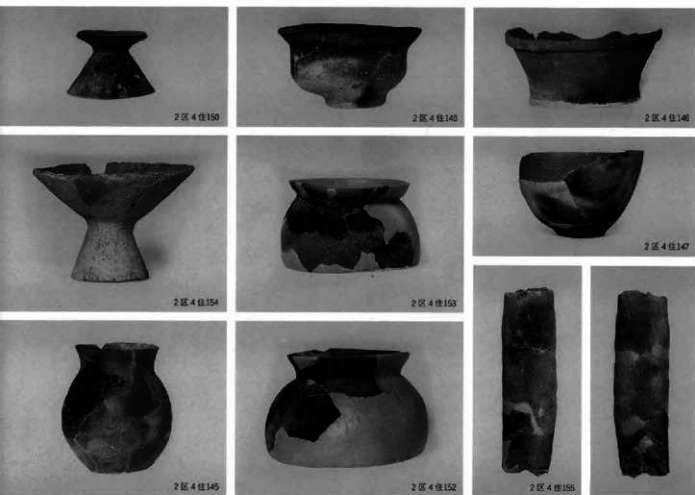
3. 同 遺物出土状態（150・南から）



4. 同 遺物出土状態（152）



5. 同 遺物出土状態（146・西から）



1. 2区4号住居出土遺物



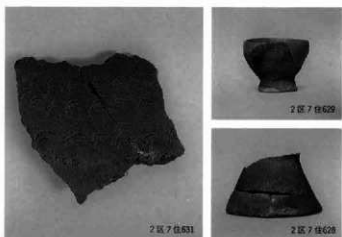
2. 2区7号住居全景 (南西から)



3. 同 土層断面A-A' (南西から)



4. 同 土層断面A-A' (南から)



5. 同 出土遺物



1. 2区11号住居全景 (北東から)



2. 同 土層断面A-A' (南西から)



3. 同 土層断面A-A' (南東から)



4. 同 遺物出土状態 (西から)



2区11住164



2区11住156



2区11住150



2区19住166



2区11住157



6. 2区19号住居全景 (東から)

5. 2区11号・19号住居出土遺物



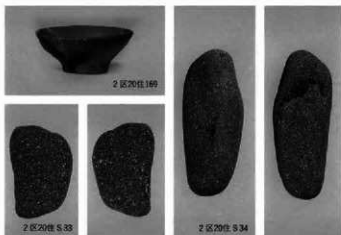
1. 2区12号住居全景(西から)



2. 2区20号住居全景(北東から)



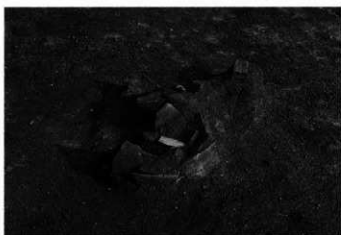
3. 同 遺物出土状態(169・東から)



4. 同 出土遺物



5. 2区37号住居全景(東から)



6. 同 遺物出土状態



2区37住216

7. 同 出土遺物



2区37住S20





1. 2区33号住居全景（南西から）



2. 同 遺物出土状態（南から）



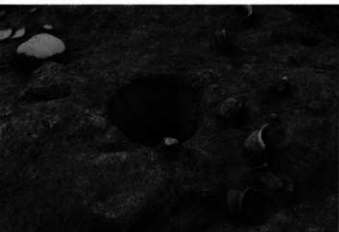
3. 同 遺物出土状態



4. 同 遺物出土状態



5. 同 遺物出土状態



1. 2区33号住居遺物出土状態



2. 同 遺物出土状態



3. 同 遺物出土状態



4. 同 遺物出土状態



5. 同 遺物出土状態



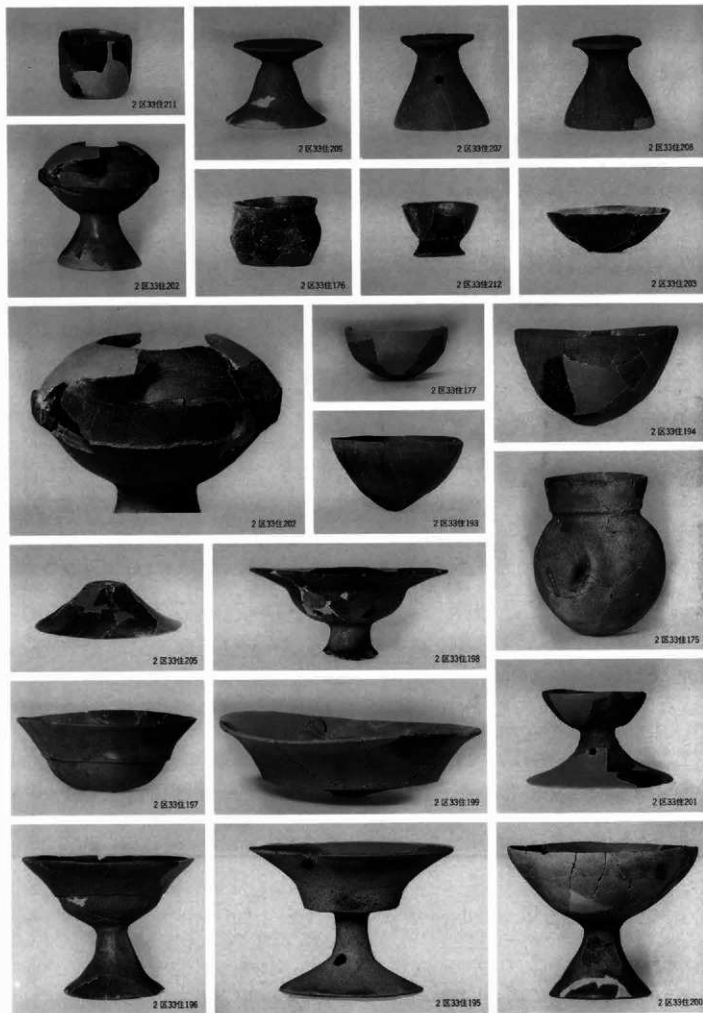
6. 同 遺物出土状態 (171)



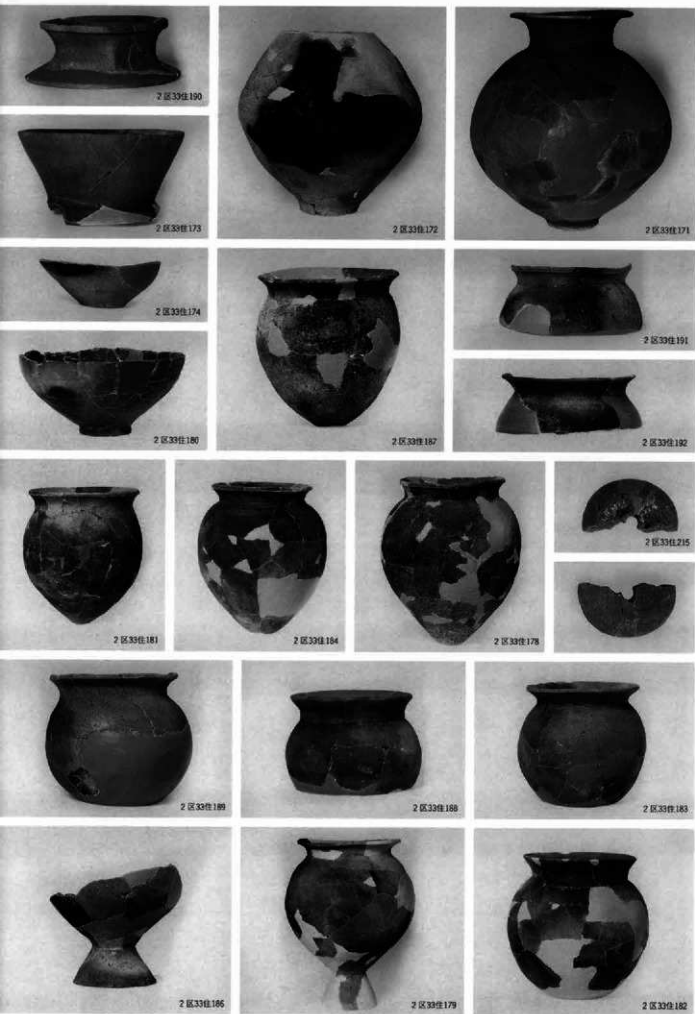
7. 同 遺物出土状態 (195)



8. 同 遺物出土状態



1. 2 区33号住居出土遺物



1. 2区33号住居出土遺物



1. 2区48号住居全景 (東から)



2. 2区49号住居全景 (南西から)



3. 同 遺物出土状態



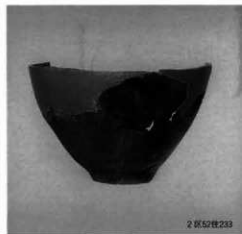
4. 同 遺物出土状態 (南西から)



2区49住222



2区49住221



2区52住233

5. 2区49号・52号住居出土遺物



6. 2区52号住居全景 (南西から)



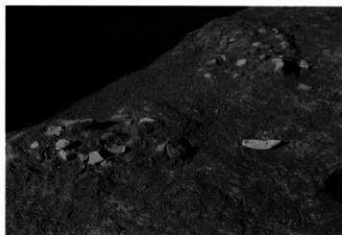
7. 同 遺物出土状態 (西から)



1. 2区55号住居全景（北西から）



2. 同 土層断面A-A'（北西から）



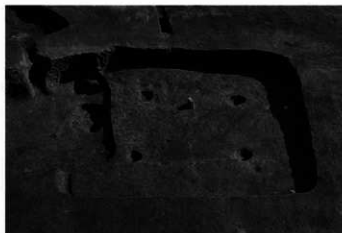
3. 同 遺物出土状態（東から）



4. 同 土層断面A-A'（北東から）



5. 同 出土遺物



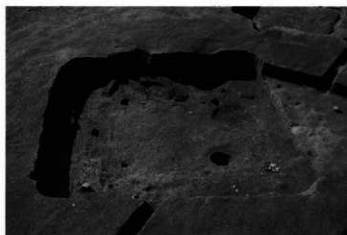
1. 2区57号住居全景(北西から)



2. 同 土層断面A-A'(北西から)



3. 同 土層断面A-A'(西から)



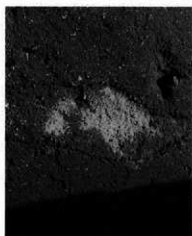
4. 2区60号住居全景(北東から)



5. 同 土層断面A-A'(北西から)



6. 同 遺物出土状態



7. 同 土層断面A-A'(西から)



2区57住247



2区60住272



2区57住246



2区60住250



2区60住257

8. 2区57号・60号住居出土遺物



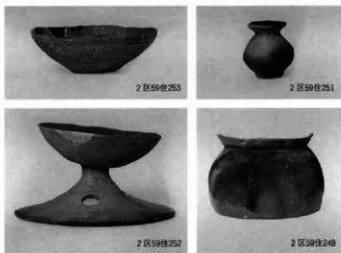
1. 2区59号住居全景 (北西から)

2. 同 遺物出土状態 (西から)

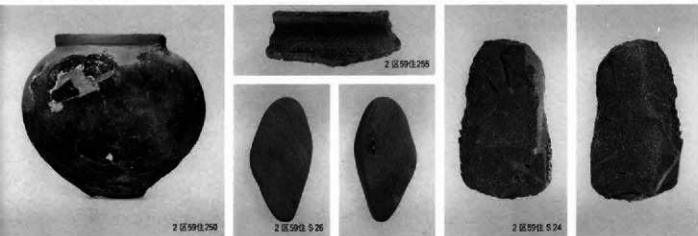


3. 同 遺物出土状態 (251・北東から)

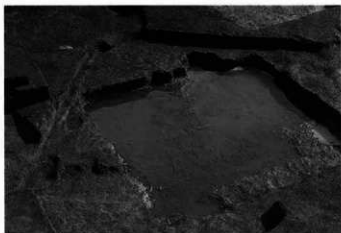
4. 同 遺物出土状態 (252・253・西から)



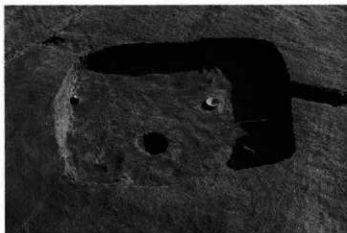
5. 同 遺物出土状態 (252)



6. 同 出土遺物



1. 2区64号住居全景（北西から）



2. 2区65号住居全景（北から）



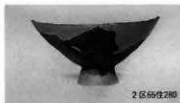
2区65住277



2区65住S25



2区65住278



2区65住280



2区65住S31



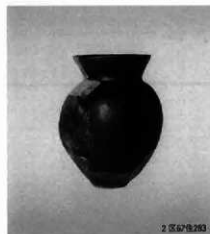
3. 同 出土遺物



4. 2区67号住居全景（東から）



5. 同 遺物出土状態（286・南から）



2区67住283



2区67住285



2区67住281

6. 同 出土遺物



1. 2区77号住居全景 (西から)



2. 同 遺物出土状態



3. 同 遺物出土状態 (299)



5. 2区83号住居遺物出土状態 (300)



2区77号294



2区77号290



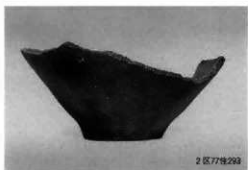
2区77号291



2区77号298



4. 同 出土遺物



2区77号293



6. 同 全景 (西から)



7. 2区84号住居全景 (西から)



1. 2区89号住居全景（西から）



2. 同 土層断面A-A'（南西から）



3. 同 遺物出土状態



4. 同 遺物出土状態（北から）



5. 同 遺物出土状態



1. 2区89号住居遺物出土状態 (869)



2. 同 遺物出土状態 (873・東から)



3. 同 遺物出土状態 (870・874・南西から)



4. 同 遺物出土状態 (東から)



2区89住874



2区89住870



2区89住872



2区89住880



2区89住875



2区89住871



2区89住873



2区89住869

5. 同 出土遺物



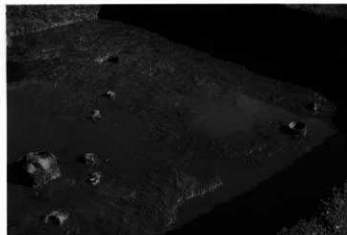
1. 2区90号住居全景 (北東から)



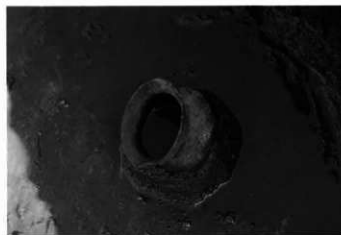
2. 同 出土遺物



3. 2区91号住居全景 (南西から)



4. 同 遺物出土状態 (南西から)



5. 同 遺物出土状態 (309)



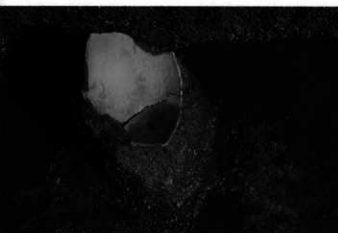
6. 同 遺物出土状態 (306)



7. 同 遺物出土状態 (305)



8. 同 遺物出土状態 (304)



1. 2区91号住居遺物出土状態 (312)



3. 2区26号土坑土層断面A-A'(西から)



4. 2区HJ-12~15G畠跡全景(北西から)



5. 同 土層断面A-A'(東から)



2区91住309



2区91住305



2区91住312



2区91住306



2区91住307



2区91住304

2. 同 出土遺物



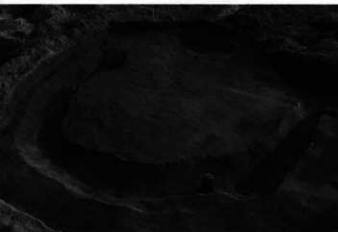
6. 同 土層断面A-A'(南東から)



1. 4区北西半周溝墓群全景（北から）



2. 同 南東半周溝墓群全景（東から）



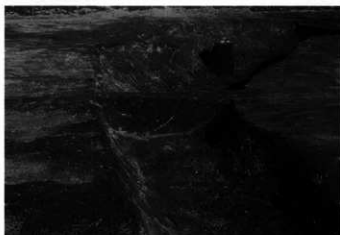
1. 4区1号周溝墓全景(北西から)



2. 同 主体部全景(東から)



3. 同 遺物出土状態(316)



4. 同 土層断面B-B'(南から)



4区1墓316

5. 同 出土遺物



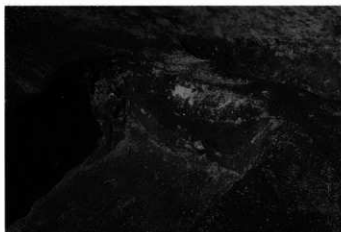
6. 4区2号周溝墓全景(北西から)



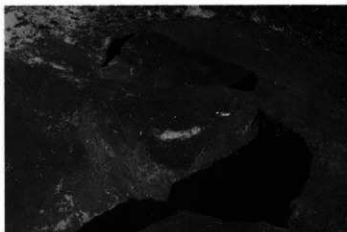
7. 同 土層断面D-D'(南東から)



8. 4区3号周溝墓全景(北西から)



1. 4区3 a号周溝墓土层断面A-A'



2. 4区3 b·4号周溝墓土层断面C-C'



4区3 a墓318

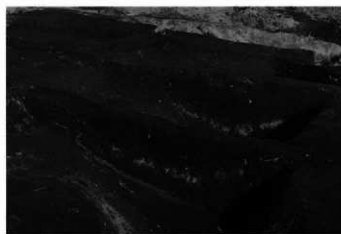


4区3 a墓319



4. 同 遺物出土狀態

3. 同 出土遺物

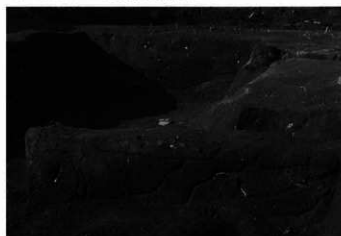


5. 4区5号·4号周溝墓土层断面E-E'



4区4墓323

6. 同 出土遺物



7. 4区6号·4号周溝墓土层断面F-F'



4区6墓325

8. 同 出土遺物



1. 4区5号周溝墓全景(北から)



2. 4区3号・5号周溝墓全景(北から)



3. 4区5号周溝墓土層断面D-D'



4. 同 土層断面G-G'(東から)



5. 同 遺物出土状態(321・324・北東から)



6. 同 遺物出土状態(323)



4区5墓324



4区5墓322

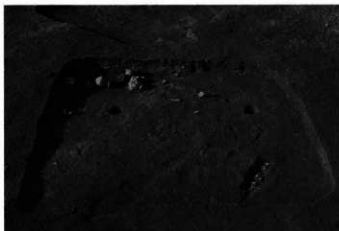


4区5墓323



4区5墓321

7. 同 出土遺物



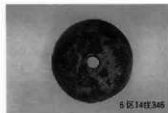
1. 6区14号住居全景 (南東から)



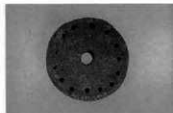
2. 同 全景 (南東から)



3. 同 遺物出土状態 (339・336・344・341)



6区14位345



6区14位345



6区14位340



6区14位344



6区14位342



6区14位331



6区14位338



6区14位343



6区14位341



6区14位336

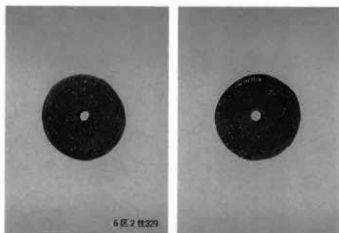


6区14位337

4. 同 出土遺物



1. 6区2号住居全景(北東から)



2. 同 出土遺物



3. 6区12号住居全景(西から)



4. 同 土層断面A-A'(西から)



5. 同 出土遺物



6. 9区畠跡サク溝(東から)



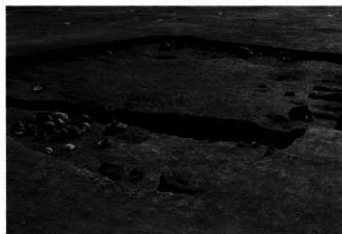
7. 同 横出状況(北から)



8. 同 全景(北から)



1. 1区42号住居全景（東から）



2. 同 遺物出土状態（北から）



3. 同 遺物出土状態（北から）



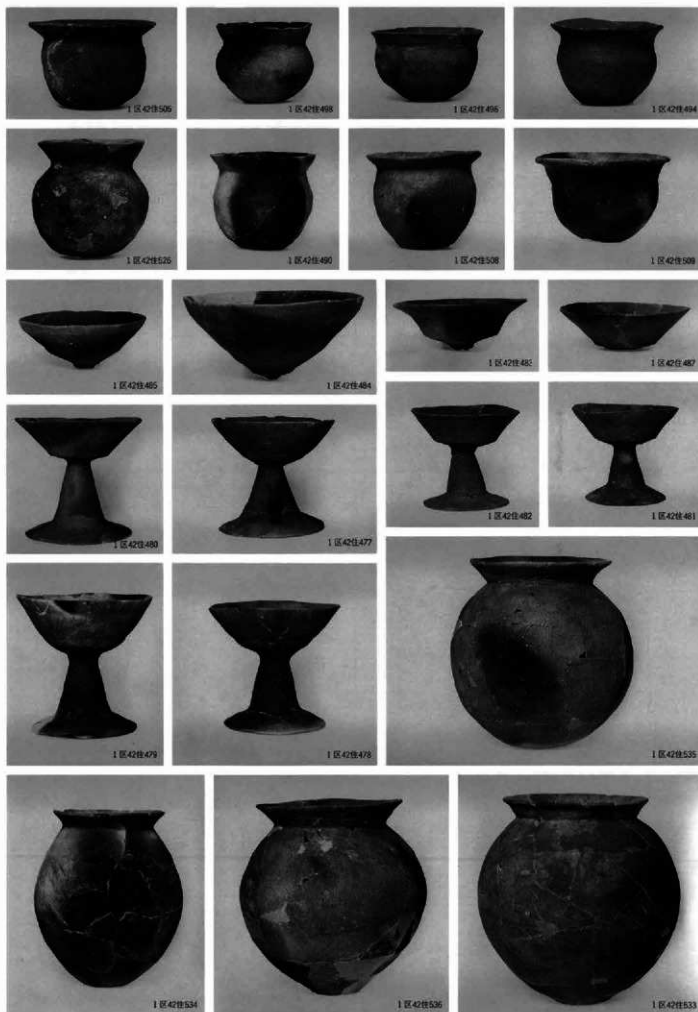
4. 同 遺物出土状態（南西から）



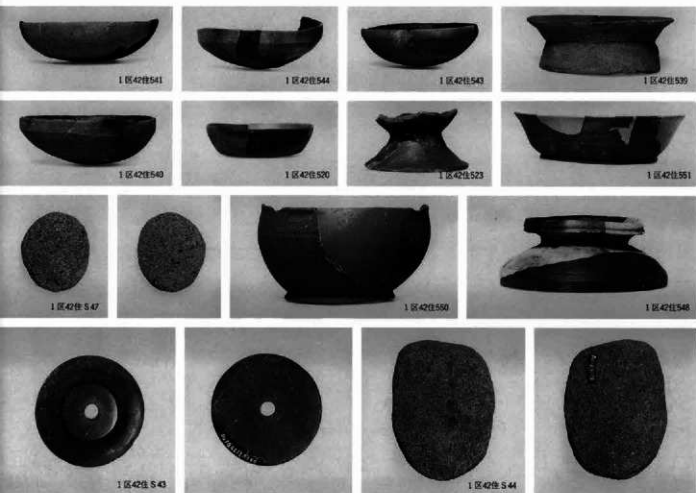
5. 同 遺物出土状態（南西から）



1. 1 区42号住居出土遺物



1. 1区42号住居出土遺物



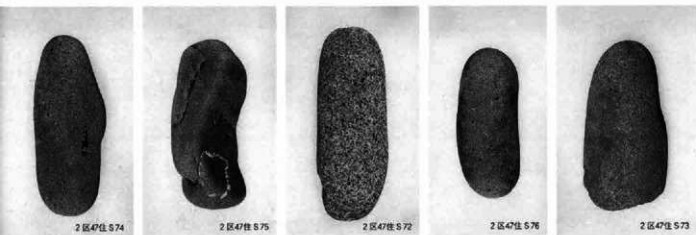
1. 1区42号住居出土遺物



2. 2区47号住居全景（東から）



3. 同 土層断面A-A'（南から）



4. 同 出土遺物



1. 2区109号住居全景(東から)



2. 同 遺物出土状態(746・749・751)



2区109出751



2区109出752



2区109出746



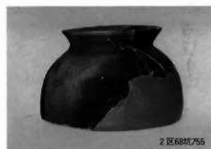
4. 2区68号土坑全景(東から)



2区109出749



2区109出744



2区68出755



2区109出745



2区3出625



2区109出747



2区109出743



6. 2区3号住居全景(南東から)

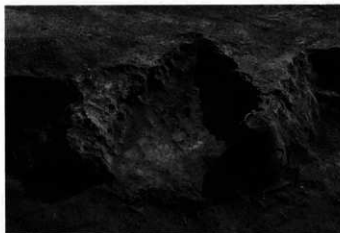
3. 同 出土遺物



1. 1区65号住居全景（西から）



2. 同 庭周辺遺物出土状態（南から）



1. 1区65号住居竪全景 (西から)



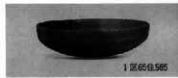
2. 同 遺物出土状態 (575・584・586)



3. 同 遺物出土状態 (585・西から)



1区65住586



1区65住585



1区66住587



1区66住589



1区65住586



1区65住591



1区66住584



1区66住576



1区66住9-53



1区65住577



1区65住578



1区65住579



1区65住573



1区65住575

4. 同 出土遺物



1. 1区8号住居全景 (西から)



1区8住798



1区8住799

2. 同 出土遺物



3. 1区48号住居全景 (西から)



4. 同 竈全景 (西から)



1区48住560



1区48住561



1区48住559



1区48住551



1区48住548



1区48住552



1区48住548



1区48住550



1区48住566



1区48住562



1区48住557



1区48住556

5. 同 出土遺物



1. 1区66号住居全景 (西から)



2. 1区66号・67号・73号住居重複状況



1区66住595



1区66住598



1区66住596



1区66住583



1区66住592

3. 1区66号住居出土遺物



4. 1区68号住居全景 (南西から)



1. 1区68号住居遺物出土状態



2. 同 遺物出土状態 (東から)



1区68住833



1区68住832



1区68住835



1区68住831



1区68住S88



1区68住834



1区68住S89



1区68住S86



1区68住S85



1区68住S90



1区70住840

3. 1区68号・70号住居出土遺物



1. 1区70号住居全景 (西から)



2. 同 遺物出土状態 (840・北西から)



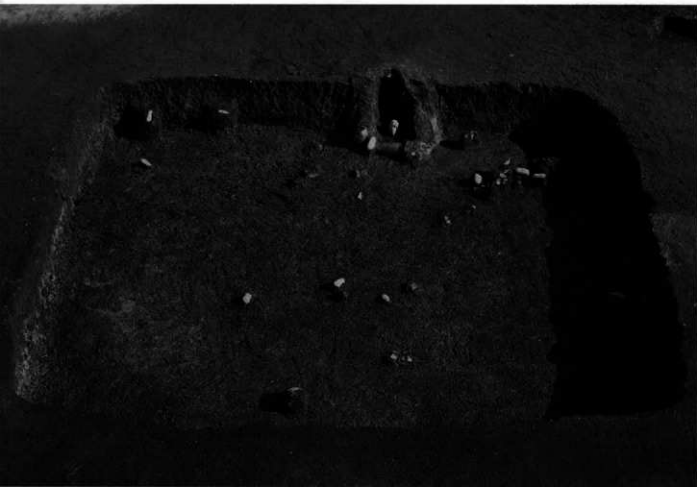
3. 2区36号住居全景 (西から)



4. 同 遺物出土状態 (637・638・西から)



5. 同 出土遺物



1. 2区50号住居全景 (南西から)



2. 同 土層断面 A-A' (南西から)



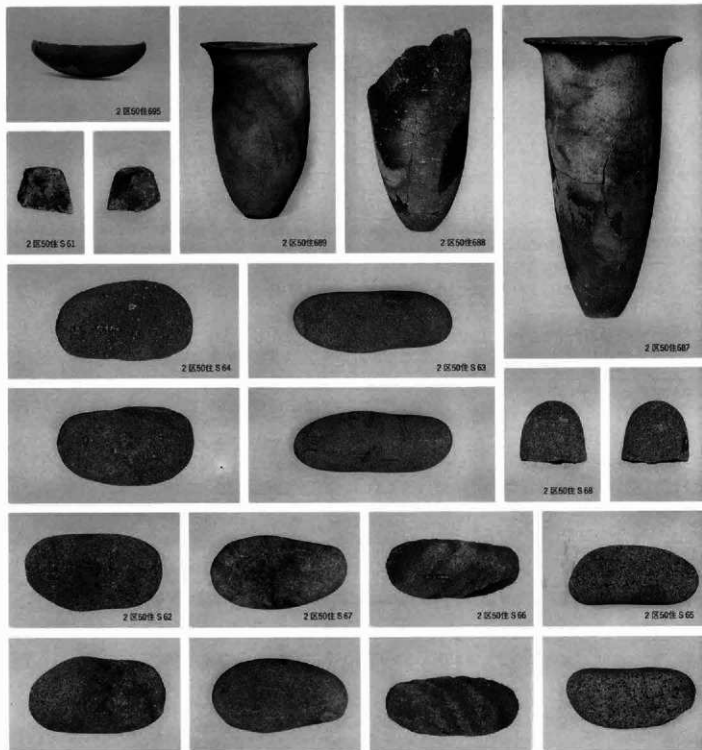
3. 同 竈全景 (南西から)



4. 同 遺物出土状態 (西から)



5. 2区調査風景 (東から・左方は女堀)



1. 2区50号住居出土遺物



2. 2区94号住居全景 (南西から)



3. 同 壺全景 (南西から)



1. 2区95号住居全景 (西から)



2. 同 土層断面A-A' (西から)



3. 1区22号住居全景 (西から)



4. 同 土層断面A-A' (西から)



2区95住718



1区22住436



1区22住436



1区22住638



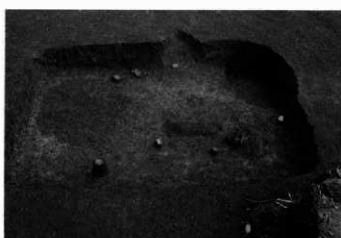
1区22住637



5. 2区95号・1区22号住居出土遺物



6. 1区22号住居全景 (西から)



7. 1区24号住居全景 (西から)



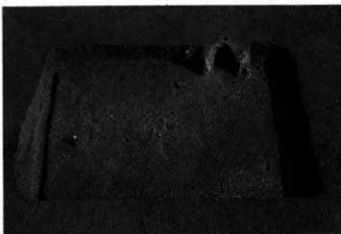
1. 1区24号住居出土遺物



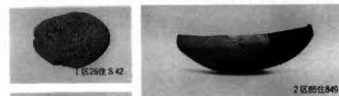
2. 1区26号住居全景 (南西から)



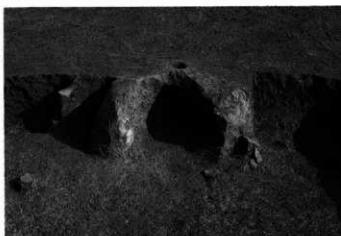
3. 同 竈全景 (南西から)



5. 2区85号住居全景 (南西から)



4. 1区26号・2区85号住居出土遺物



6. 同 竈全景 (南西から)



1. 2区102号住居全景 (西から)



2. 同 竈全景 (西から)



3. 同 竈遺物出土状態 (720・西から)



4. 同 遺物出土状態 (732・南西から)



5. 同 竈遺物出土状態 (728・731・西から)



1. 2区102号住居遺物出土状態 (719)



2. 同 遺物出土状態



2区102住732



2区102住727



2区102住726



2区102住729



2区102住730



2区102住728



2区102住734



2区102住736



2区102住733



2区102住725



2区102住722



2区102住723



2区102住571



2区102住724



2区102住719



2区102住721



2区102住720



3. 同 出土遺物



1. 1区10号住居全景(西から)



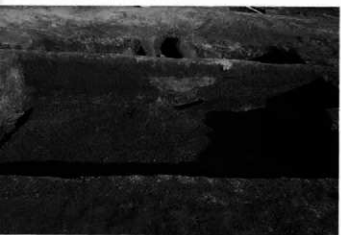
2. 同 竈全景(西から)



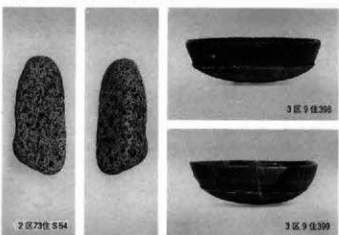
3. 2区32号住居全景(南西から)



4. 2区73号住居全景(西から)



5. 同 土層断面A-A'(西から)



6. 2区73号住居・3区9号住居出土遺物



7. 3区9号住居全景(西から)



8. 同 竈全景(西から)



1. 3区2号住居全景 (南から)



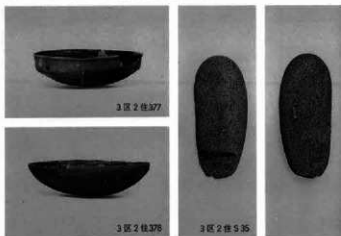
2. 同 竈全景 (南から)



3. 3区1号・2号住居土層断面A-A'



4. 3区2号住居貯藏穴 (南から)



5. 同 出土遺物



1. 3区4号住居全景（西から）



2. 同 竈全景（西から）



3. 同 遺物出土状態（382・南西から）



3区4住382



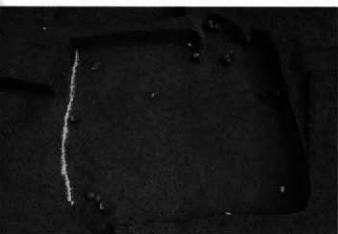
5区7住854



5区7住863



5区7住860



4. 5区7号住居全景（西から）



5区7住861



5区7住857



5. 同 竈全景（西から）

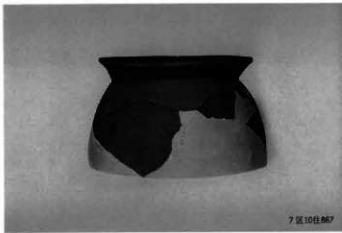


5区7住856

6. 3区4号住居・5区7号住居出土遺物

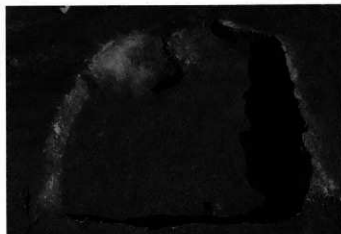


1. 7区10号住居全景(西から)

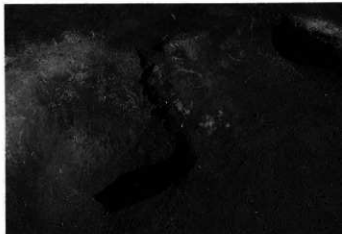


2. 同 出土遺物

7区10住867



3. 8区11号住居全景(西から)



4. 同 竪全景(西から)



5. 8区7号住居全景(南西から)



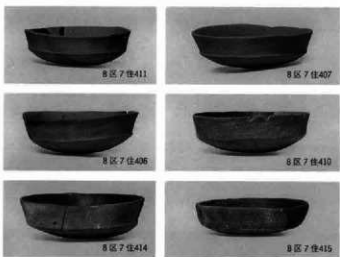
1. 8区7号住居全景 (南西から)



2. 同 遺物出土状態 (南西から)



3. 同 遺物出土状態 (406・409・411)



4. 同 出土遺物

群馬県埋蔵文化財調査事業団
発掘調査報告第193集
荒砥上ノ坊遺跡Ⅰ
縄文時代～古墳時代の調査
《本文・図版編》

昭和57年度県営圃場整備事業荒砥北部
地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

平成7年3月20日 印刷
平成7年3月25日 発行

編集／群馬県教育委員会
〒371 前橋市大手町1丁目1番1号
電話 (0272) 23-1111(代表)

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
〒377 勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2
電話 (0279) 52-2511(代表)

発行／群馬県考古資料普及会
〒377 勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2
電話 (0279) 52-2511(代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社